

奇譚クラブ

1959年 8月号

創作 「続・運命の少女」 嵯峨紀世
KKスクラブ 馬化白書 鞍良人



8月号

昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号) 八月号 (第十三号) 昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号) 昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号)

奇譚クラブ

昭和三十一年八月号

8

奇譚クラブ

昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号) 昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号) 昭和三十一年四月二十日発行 (第十三号)

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用（八円切手にて一割増）等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

臨時増刊号 『サド特集号 第二集』

定価 三百五十円 (送共) 略号 (S 特第二)

『麗美巻頭口絵、四馬孝傑作画集』

(二十四点)

- ☆密質倉庫
- ☆悪魔のような女
- 「春美の受難記」
- シリーズ四点
- ☆新品第一号
- ☆嫉妬の鬼
- ☆地下室の苦行
- ☆苦悶
- ☆吊し責め
- ☆乳房責め
- ☆人間フープ
- ☆檻 禁
- ☆奴隷船
- ☆妙な吊責
- ☆雨中の引廻し
- ☆奈落のリハーサル
- ☆鼻責めテスト
- ☆黒目鏡の女
- ☆アクロの訓練
- ☆捕われた商品
- ☆犬の訓練
- ☆女体鞍馬
- ☆筏ながし

『被縛女体特選集、グラビヤ写真』

(百九葉)

- 絹布と絹肌……………田中芳代
- 飾り人形……………大塚啓子
- 台上の賛……………絹川文代
- 若妻の秘美……………花坂道子
- 白い若鮎……………田中芳代
- 麗囚……………絹川文代
- 三面鏡……………愛川悦子
- 仇姿黄八丈……………絹川文代
- 縄さばき……………浜本喜美
- 挑発の笑み……………絹川文代
- 被襲……………花坂道子
- 深海魚……………田中芳代
- 哀れなる賓客……………絹川文代
- 豊胸……………愛川悦子

『興趣尽きぬS的読物』 書下し読物二篇

- 私の責面 責めの美人と皮革について……………四馬孝
- 緊縛フオトと緊縛モデル夜話……………覆面子白頭巾
- 南村俊平戯画 △猪大人の御乱行△ △強制女体浣腸機△

『悦虐小説と緊縛写真』 特集号

定価 三百円 (送共) 略号 (悦特)

△悦虐小説傑作集△ S的作品のエッセンス

- 雌獣の手記……………(近見 啓)
- 妻は縛らず……………(岡田 圭介)
- 夕の朝顔……………(那須不二雄)
- 続・囚衣……………(古川 裕子)
- 私の主題……………(岡田 咲子)
- 色 狼……………(児島 光)
- 女奴隷の手記……………(北山カオル)
- 受難記……………(岡田 咲子)
- 怪奇曼陀羅教……………(緑 猛比古)
- 呪縛……………(辻村 隆)
- 悦虐の旅役者……………(青山三枝吉)
- 長期刑……………(古川 裕子)
- 私の思い出……………(岡田 咲子)
- 片耳伝奇……………(窪村 弘)
- 縛られた妻以前……………(早川新二郎)
- 燭 光……………(久留木 栄)
- 地獄絵行脚……………(長岡愛一郎)
- 鉄格子の中に……………(小坂多美枝)

△グラビヤ緊縛写真△ 百十四葉の傑作

- 妖 精 (ニソフ)……………木 洩 れ 陽
- 三ツ葉葵のプロファイル……………夢 路
- 誘 拐……………競 花
- ブ レ イ 致……………首 縄
- シ ユ ミ ーズ……………観 黒 タ イ 念
- 放 間 謀 成 心
- 三 処 責 め
- 縄 花

△四馬孝画責面集口絵△

- 白魚の悶え……………(憐 光)
- 苦悶の前奏……………(女奴隷の手記)
- 鉄鎖のきしみ……………(続・囚衣)
- 籠の白鳥……………(縛られた妻)
- 宙に踊る……………(妻は縛らず)
- アクロバット……………(色 狼)
- 濡れる朱唇……………(長期刑)
- 土蔵の花……………(夕の朝顔)



奇譚クラブ

復刊第四十七号
八月 月号

目次

繪 落城後日譚……………滝 れい子・画
特写真 細と紐のくもし出す或るシーン
「紐と縄・縄と紐」……………朝川 文代 嬢

口 緊縛フオート「蝦夷菊」……………花板 道子 嬢
賣め画 烙印の部屋……………北原 純子・画

頭 劇映画に現れた緊縛シーン
大映「大江戸七人衆」……………松竹「花嫁小判」
松竹「女狐 麗羅」……………東映「鬼面竜奇譚」
四馬孝傑作集「ビル街夜景」……………四馬 孝・画

お仕置をめぐる一考察「痛覺と女性について」……………近藤 一……………18
緊縛映画スナップ・シリーズさよなら編

松竹映画紹介「大盗小盗」……………牧 高志……………23
探刑事捜査ノート「殺人再現」……………植村 泰……………30

創作 黒井チエの青春①……………近藤 一……………40
告白 男装女腹切と私……………藤山 秀緒……………51
レーゼ・シナリオ 朱天重次郎無稽控第一話

「地獄の美女」……………海野 葵朗……………56
忘れ得ぬ被縛女優達……………銀幕 良夫……………68

新稿 ある夢想家の手帖から……………沼 正三……………70

告白的隨筆 切腹の幻想……………須藤 律夫……………78
愛好家の記録……………三條 卓史……………80

創作「嫁供養」……………三條 卓史……………82

創作 謎の緊縛フオート(その二)……………久留木 栄……………90

乙女の浪曲に想う……………藤川 力行……………98

マゾヒズム百景……………馬場 好男……………100

告白 自分をハダカにする四……………松井 頼子……………102

縛りの美感……………正木 真竜……………111

創作「続・運命の少女」(その一)……………嵯峨 紀世……………112

女装願望告白……………桜 恵之助……………122

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

「羞恥の罫」乳房に火をつけるな第五回……………藤木 仙治……………124

「悦・特第二集」を手にして……………牧 高志……………134

創作「王宮の浣腸室」(第二回)……………柴崎 黎子……………138

スクラップ・レボ「新聞切抜通信」……………須藤・藤木……………148

K・Kスクラップ「馬化白書」(その三)……………飯 良人……………150

K誌の在り方について(編集部に望む)……………東 一郎……………158

読者通信……………163

縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!!

限定版 『緊縛フोट・アラベスク』

各冊、限定番号押捺▽ 特価 五百円 (送共)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルによる各種緊縛ポーズの中から選集いたしました。題して「緊縛フोट・アラベスク」。文字通り表紙から巻末に至るまで若き美人モデルの緊縛写真ばかりを網羅いたしました。可憐愛すべき緊縛フोट・アラベスクとして、どうか一冊を貴様の座右にお備え下さい。

△収載内容▽ 二十六項目、写真七十七葉

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 一、縛……………愛川 悦子 | 十五、顔台と腰巻……………花坂 道子 |
| 二、器花二輪……………花坂 道子 | 十六、腰巻と顔台……………花坂 道子 |
| 三、鉄鎖……………大塚 啓子 | 十七、奇妙な体懸……………絹川 文代 |
| 四、蹄鞴……………大塚 啓子 | 十八、田代悠子表情集(その二) |
| 五、庭園にて……………絹川 文代 | 十九、説がされた高き小手…………… |
| 六、謎の微笑……………田中 芳代 | 二十、幽中縛り……………愛川 悦子 |
| 七、田代悠子表情集(その一) | 二十一、吊責折檻……………村井知可子 |
| 八、誇る脚線美……………田代 悠子 | 二十二、立木縛り……………村井知可子 |
| 九、この足どうかしら…………… | 二十三、體 酌……………愛川 悦子 |
| 十、裏と表と……………愛川 悦子 | 二十四、乱れ髪三巻……………大塚 啓子 |
| 十一、落陽の丘……………愛川 悦子 | 二十五、椅子と鎖……………愛川 悦子 |
| 十二、ボリウムの花園…………… | 二十六、組上の笑顔……………絹川 文代 |
| 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子 | |
| 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子 | |

△本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申し込み願います。▽

限定版特別号の第二弾 愈々刊行!

限定版 『緊縛写真と緊縛画集』

略号 (緊縛) 特価 五百円 (送共)

△収載内容▽ 九十葉のフोट二十数種の画集

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 一、四馬孝緊縛画集…………… | 十三、回転する女体 |
| 二、女体耐久テスト | 十四、浴室の悦楽 |
| 三、素晴しき会食 | 十五、女の掟(華やかなリンチ) |
| 四、人間燭台の実験 | 十六、鞭の御馳走 |
| 五、オシメカバーと大きな赤ン坊 | 十七、三醜女の逆恨み |
| 六、物置小屋の淫 | 十八、淫虐な美容師 |
| 七、白いいけにえ | 十九、遠慮はいらねえぜ |
| 八、生理めの私刑 | 二十、狂気の復讐 |
| 九、アクロバットの訓練 | 二十一、女体の荷物 |
| 十、奴隷という責 | 二十二、ヤキを入れてやる |
| 十一、女学生の嫉妬 | 二十三、トランク詰の裸女 |
| 十二、水責にあう美女 | 二十四、電気責めテスト |
| | 二十五、吊し責めにあう美女 |

素晴しき写真

- | | |
|------------|----------|
| ○裸りのポーズ | ○囁い込むロープ |
| ○もういや!やめて | ○縛り人形の哀歌 |
| ○腕がしびれちゃった | ○股間縛り健闘 |
| ○逆手吊りの苦痛 | ○美しき淫虐の室 |
| ○股間吊りのアイデア | ○晒し者なんだワ |
| ○逆さ吊りの前奏曲 | ○腰巻の乱舞曲 |
| ○息づまる一瞬 | ○逞ましき倒錯美 |
| | ○狂った果実 |

外多数

落城後日譚

激しい攻防戦の末、城方は枕を並べて華々しく討死を遂げた。然し捕われの身となった城主の娘は、痛々しい縛しめの身体を寄手の荒くれ男たちの中に委ねられるのであった。今しも姫は尿意を催し、後手に縛しめられたままの姿で急造の野戦便所へ曳かれてゆくのであった。落城にまつれるS的シーンの一駒である。



滝
れい子・画

縄 と 紐



し出す或るシーン



モデル——絹川文代——

縄 と 紐



縄と紐のかも



蝦夷菊

(えぞぎく)

菊科の一年草、盛夏に紫、白、紅の花を持つ。あずまぎくともいう。



モデル……花坂道子……

烙印の部屋

阿呆宮の奥深く一つの密室が『烙印の部屋』と呼ばれている。今宵宮殿に上った無垢の乙女が、その柔肌に永遠に消ゆることのない烙印を押されようとしている。香の匂いの満ちたこの部屋には妖しい虹が漂っている。



北原純子・画

＜提供＞ 藤木仙次、梶孫一、田辺啓二、増田義彦



東映 「大江戸七人衆」 花柳小菊



松竹 「花嫁小判」 伊吹友木子

劇映画に現れた緊縛シーン



松竹 「女狐駕籠」 草笛光子



東映 「鬼面竜奇隊」 円山栄子

ビル街夜景

ビルの屋上には白く浮び上る裸身が匂うように夜の静寂の中に息づいている。
夜風は意外に肌冷たく素膚をなぶって夢幻的な雰囲気彩ってゆく。



四馬

孝・画

新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 8 月 号

(第十三卷 第十一号 通刊第百二十七号)





お仕置きをめぐる一考察

痛覚と女性に就いて

近 藤 一

柔よく剛を制す。

柔軟な抵抗は加えられる力の効果をかなり減殺させるものです。軟式野球のバットイングでは手の痺れるようなことがあります。

人の躰も同じです。感覚が健全であれば、物の衝撃を「痛い」と感じます。然し、その痛みが躰のどの部分でも同じということは決してありません。同程度の衝撃の強さでは、概して肉の厚い部分に受ける影響の方が軽いようです。それは神経繊維の周囲にあって、これを包み込んでいるものが多量だからだと思えます。肉の薄い部分でも神経が固く覆われている処（衝撃を受けることが比較的多い部位）では、痛みがそれ程強くない筈です。額や腕などは平手で叩かれた場合、お尻を叩かれる位のものです。

痛みにも、いろいろあります。摩擦の痛み、斬裂かれる痛み、圧迫される痛み、捻じ曲げられる痛み等々。しかし著しい傷害を起したり、感覚器官を破壊したり、更には一命を断つような物理力は、おしおき^①の範囲を超えたものですから今は考える必要がないと思えます。

おしおき^②で、普通になされる物理的加撃は叩くことです。殴打は瞬間的に圧迫を加えることであると思えます。瞬間的圧迫という点からすれば、足蹴にすることや突くことも同類ですが、物の先端の広さに限定される処が違ふようです。

驚愕とか、屈辱とか、羞恥とかの感情を除けば、叩かれる痛みは瞬時のものです。ですから幾回も繰返して叩かねばな



らないのです。衝撃が広く浅いものでありがちなので、時の経過と共に薄れ、消滅していく痛みなのです。これに対して蹴ることや突くことは、比較的狭く深い衝撃なので、叩くことを横の加撃とたとえば、これは縦の加撃ということができるでしょうし、それだけに痛覚への作用も持続しますが、やはり圧迫である以上、時の経過に従って微弱化するもので、繰返すことが必要となります。

瞬時でない圧迫は抑えつけることです。組み伏せて馬乗りになることもそうですし、踏みつけたり棒で押しつけるのはこれです。同じ大きさの力が加えられていると、人間の感覚の馴れによって苦痛は薄らぎますから、更に力を加えなければなりません。加える力には限度がありますから常に刺戟を与え続けるために、馬乗りのまま、どしんどしんと暴れたり軀の上で足踏みをしたり、こじったり、揉み込んだりする必要がでてきます。

私が小学生の頃、同級の悪童連が人の背後から、そっと近寄って、揃えた手指の爪で肉の柔らかい部分を体側に沿ってピシッと叩くのが流行しました。よくお尻が狙われるのですが、熱いように痛いもので、これは叩くとはいっても、圧迫でなく摩擦でしょう。

「おしおき」から直ちに連想される「縛り」の苦痛も圧迫だと思えます。手首のように肌へ直接縛しめが当たる処には摩擦もあるでしょうが、着衣の縛りや当りの柔らかな束縛は圧迫の筈です。

摩擦の苦痛にも、いろいろあります。擦りはソフトな摩擦

ですし、痛い摩擦は引つ掻くことです。それも人により鋭鈍の差異がありますし、軀の部位により特に敏感な箇所と、そうでない箇所とがありますから、同じ刺戟に擦りとなったり痛みになったりします。女性の軀は息が触れても擦りたいと感じる箇所もあれば、指先で揉んだり、拳でグリグリするところが痛みでなく非常に擦りたいところがあります。

擦りのような軽い摩擦は神経を騒がせるものです。生理の構造は生物学に任せるとして、神経繊維の先端は皮膚の表面に点状に分布していますから、温感、冷感、痛感が、それぞれの神経作用に従って感受されます。

普通、人間の皮膚は摩擦に弱いもので、容易に剝がれてしまいます。所謂琉球責めという拷問は、この特徴を利用したものだと思われませんが、かなり鍛えられた男性でさえ皮膚がすぐ破れてしまうのですから、柔肌と呼ばれる女性の肌が耐えられぬのも当然でしょう。

素肌をじかに縛る時、棕櫚縄や荒縄（新縄？）ですと、短かいトゲが刺さってブツブツします。そうでない縄でも、綿ロープや使い馴れた細引のようなものでも、肉がくびれる程にきつく縛りつけると、跡が赤く脹れてきて痒いような痛みを感じます。これはズロースのゴムがきつい時とか、バンドを強く締め過ぎた時とかに、お腹や腿のような柔らかい部分に起こる現象で理解できることです。環状に圧迫された皮膚が、運動につれて縛しめと摺れ合う結果だと思えます。俗にいう血が死んだ程の括れとか、神経麻痺を起す程の緊縛は圧迫かもしれませんが、そのような時でも摩擦による表皮剝



離は生じます。

よく縄と縄の間に肉が挟まって痛い思いをすることがあります。これも圧迫には違いありませんが、唯押しつけられるだけでなく、引っぱられる点で、区別して考えたいと思います。肉を、普通には極めて表面に近い部分だけを、挟んで引っぱるものがこの典型で、抓るのが中心になります。指の腹や爪で挟んで引っぱるのは、突いたり押しつけたりするのと違い、力の強さと効果は概ね比例します。処が抓る身にとつては被圧迫となりますし、力を指先に集中している関係上、疲労が現われます。そして相手が充分な苦痛を感じていないのではないか、という危惧が手伝って、捻りが加わるようになります。処によっては抓ることをねじくると表現する地方があることから窺知されますし、また抓るという文字からも爪で挟むことがより多いことをしり得ます。これにはクリップなどが利用されるようで、以前、川辺砂登子さんのグラビアにもあったと記憶しますが、普通の洗濯挟みをそのまま肌につけたりすると、とても我慢できません。(尤も我慢の必要がなかったからかもしれません……) 大分以前の映画「若草物語」でエリザベス・テラーが鼻を高くしようと長い洗濯挟みをつけて寝るシーンをみました。それ以来、彼女の美しい鼻が大好きになりました。

旧号にあった「白面鬼」の乳房責めには驚いたものです。や、つとこのような道具で、力一杯挟んで引き千切るようにしたら、間違いなく乳房の形は崩れるでしょうが、いくら木製だからといっても、そのようなことに女性が耐えられるでし

ようか。その上、鉄のブラシで叩かれて悲鳴も上げないなんて、只の我慢強さや一通りや二通りの愛情でできる仕業ではなさそうです。

捻じ曲げられる痛みも縛りに随伴します。普通おしおきとしてみよい形にするためにはまず両腕を背後に捻じ曲げなければなりません。素直に後手に縛られる場合は自分に具合の良い組み方をするのが普通ですから、抵抗を抑えられて無理強いに縛られる時の痛みには比較はできません。縛りは捻じ曲げられる痛みを固定させるものですが、もし素直に自分から両手を背に廻したとしても、二の腕を締めつけられて手首を吊られたり、首縄をかけられて手首を吊り上げられたりすれば、やはり烈しい捻じ曲げられる苦痛を味あわねばなりません。

鉄砲という縛り方はこの典型でしょうし、駿河問いの際の両脚を背中に曲げて縛り合わせるのには脚に対する苛責ですし指と指の間に物を挟んで握り締めるのは、指に対する苛責です。全身に対しては海老責めや逆海老責めが考えられ、一般に身体的構造の上からみて順的な屈曲よりは、逆的な屈曲に近づく程痛みは激化しますが、どちらかといえば順的に近い責め方のほうが味が深いようです。でも、これは人によって色々と好みが違うかもしれません。筋を違えることくらいならやむをえませんが、現代のおしおきに骨折は避けなければいけません。

斬り裂く痛みは殆んど考慮の余地がないでしょう。傷害は現代生活にあつては極めて忌避すべき事柄ですし、第一、愛



する者の肉体的機能を毀損する愛し方などは、最も劣悪な古い形のサディズムだからです。機能障害の惧れの比較的少ない部位、例えば臀部などは、嚴重な消毒の考慮の下に、おしおきの一種の彩りとして斬る真似事は許されるかもしれません。

例外的に許容すべき現象は切腹でしょう。腹部には生理的必要からも脂肪の沈滞が起って層が厚くなり、重要な生理機能を保護しますし、観るサディズムとしても、自虐としても、立派に一家をなす嗜虐の部門です。(屠腹については、また機会をえて綴ってみたいと思っています。)切腹は稀に女性が膝や腿を縛り合わせることを除けば、肉体的に全く自由なものです。然し、それだけに自ら課せられる死への旅路に精神的な拘束を強く感じている筈です。些かの真実味を創造するために、実際に薄く腹部を切り裂くことは、行為者がそれを容認する限り、(例えば切腹マニア、自虐愛好者、行動的処刑ファン)充分な消毒の配慮の裡に実行することは容易です。唯、出血した場合、治療しかけると類りに痒みを覚えますし、種々の関係で盛夏は避けた方が賢明と思います。

切り裂くのではなく引き裂くことは、割合に手近です。まず股裂きがあります。完全に分離するまで引裂くのは、骨格や筋肉の組成からかなりの力を要しますが、手指の根元の接着力を亀裂させることは容易です。鼻や耳の附根、唇の端なども裂け易い処で、先頃、某映画女優が無理に液体を口に注ぎ込まれるシーンで裂傷を負い幾針か縫ったそうですし、私の友人の先輩は硬式野球でライナーを発止と受けて、右手の指の附根を裂いたことがありました。

引き裂かれることに似ているのが、引き抜かれる痛みです。普通には、やはり毛髪が狙われますが、大体、毛が濃い箇所は神経の分布も密な部分ですから、痛みも激烈です。一本々々抜かれることは精神的にはともかく、肉体的にはそれ程酷い障害を起しません。逆さ、睫毛などは抜くと却って快いものです。然し一度に多量の毛を抜くことはいけません。毛を抜くというより省る訳ですが、これは皮膚の剝離を惹起しますから、それ故に毛、吊り、というのは恐怖の拷問として戦慄の的になっていたのです。

吊りといえば、吊りの支柱はこの引き抜かれる痛みです。手首や足首だけに縄をかけて吊られると、平生は考えてみたこともない自分の軀の重みが、いやという程度思いらされて泣きたくなります。ぶら下がった不様な恰好でワアワア哭くこともできませんから、グラマーなんて自分自身には何の魅力もない想いがします。私のお友達は三十七キロ(十貫足らずです)を欠いています。それだって同じことです。

最後に右述の幾つかの複合として、締め上げる痛みを考えてみます。早い話が絞首です。ぎゅっと締め上げて、呼吸・血行を停止させてしまします。瓢箪責めというのは長い縄を胴に一巻きした上で両端を曳いて、責められる者の腹を千切れる程度に締め上げます。いずれも肉体の深奥まで圧迫して生理の機能を阻止するためなので、なるべく肌に喰い込み易い細いものが好まれる訳です。巾広のものはそれ程喰い入りませんから、その場合には腹部が狙われます。旧号の投稿者であった、一柳真佐子様とお姉様のトシ様の文章に在っ



だコルセットの責めは愉しいものでした。腹部なら腹腔内部のものを上下に押しやって面白味のある肉体の線を創り出しますし、心臓部にかけて弁膜症を惹き起す惧れのある搾衣より、遙かに安全で楽しいものです。強く締め上げると手足は自由でも身動きもできず呻いているばかりですし、適当に締め上げて内側のイボイボの刺戟を楽しむのもよいでしょうから、多少の下痢や吐気くらいには代えられません。

まだまだ苦痛を生み出す方法は数が多いのですが、今はこの程度にしておいて、考察を先へ進めたいと思います。

女性の躰は、これらの肉体的苦痛に対する忍耐力が男性以上に強いものです。苦痛も忍耐も多分に心理的なものがありますから、女性心理は見逃せない要素ですが、女性は生理的に苦痛に耐え得るようになっていくのです。

肉の層が厚く、神経を包んでしまうために、肥っている女性ほど躰にしまりがなく、何となく頼りない感じがするものです。何かに、ぎゅっと抱き締めて貰いたいような物憂い感情に屢々襲われます。幾重にも紐を巻きつけ締め上げる和装にしろ、洋装の下着の構造にしろ、きっちりするもの程歓迎されますし、世の革新的な女性は常に体を締めつけるスタイルを誇示してきたものです。

骨の細い女体はそれだけ柔軟で、外界の物理力を、男性よりは柔らかく受け留めることができます。

女体は肩やお尻を烈しく叩かれることが快いものとなり、更には腿やお腹やお乳にも及びます。肉の括れる程度に縛り上げられて、「何だか、体が、きゅうっと緊っていい気持。」

とうっとり眼を細めるのもこれなのです。所謂女盛りに精神的なものが加味されると往々にしてマゾヒズムが誕生するものです。

女性の肩や腿やお尻は烈しい打撃、例えば鞭打ちに適しています。乳房の形は貴重なもので、崩れたそれは見るに耐えませんから、枷をつけて締めるとか擦りたいと思うのです。お腹はいろいろです。撻つても抓っても締めつけても切裂いても、それ程、害のない楽しい存在ですが、お腹に落書を愉しむなどは傑れたアイディアでしょう。

敬愛する羽村京子様（私が初めて購入した号に「狂い咲くカンナ」が掲載されていたのです。）の告白にこういうのがありました。裸で後手に縛られた彼女が仰向けに台上へ縛りつけられ、お腹のくびれを縄で千切れるばかりに括られます。下腹部がぶっくりと膨れますが、その上に大きな重石が乗り更に御主人が全体重を容赦なくかけてのしかかるに至って、彼女の全身に背汗が湧き、顔面は蒼白、息も絶え絶えに呻いて無意識の内に粗相をしてしまうのだそうです。そのようなことを拷問の真似事として敢行される女体の忍耐力に驚異を感じたのですが、私だったら、——もし私が女性であつたら訓練次第で、そういう体になれるだろうと思うのです。

女性の体は磨けば幾らでも輝きを増す玉です。噛みしめる程に味のでる存在です。お互いに心ゆくまで愛してみたいものだ、私は思っているのです。

（註、お灸や浣腸の面白味は、まだ理解できませんので、今回は故意に触れませんでした。）



緊縛映画スナップ・シリーズ

さよなら娼婦

松竹作品 大盗小盗

撮影・構成

牧高志

——ファイナーレの
御挨拶——

何処かで、誰かが必ず御支持下さっているものと信じて、とも角続けてきたこのシリーズも、早いもので、もう一周年を迎えようとしています。映画は、文字通り映して即刻消えるもの。夜明けの星の如く、また春雪の如し。同じ終止符を打つなら後味のよろしい内に殻を閉じようとした私の心、誰にも邪魔されない深い海の貝に……そうです、貝になりたいという事の次第を——先ず御賢察下さらば幸甚。ところで、これからの筆者はどうする？かは、持って生れた緊縛愛好心。月が曇らぬ限り、そしてお宮の

松が枯れぬ限り、*「牧」*なる貫一は麻縄ならぬカメラを片手に、縛しめの海岸を独りさすらい続けることでしょう。マントを脱いで寒々と立停っていましたら、声の一つも掛けてやって下さいますように……。

牧 高志 ……………というような訳で佐藤さ



ん。とうとうこのスナップ・シリーズとも、しばしお別れすることになりました。長い間ガムシヤラに談じ込んできた迷論の数々、誠に恥しい次第でした。実は閉幕式は私なりに盛大にとも思ったのですが、その半面、貴女と二人差向いで、しんみり回顧話に耽けるの



も一興かと思えます。という訳は、この一年このかたを通じ、大なり小なり無差別に映画を盗んだ、つまり無断スナップの罪を懺悔する意味も多分にあるのです。貴女と二人だけなら、別に改ったよそ行きのゼスチュアも要らず、心底から神仏の前に悔い謝ることが出来そうですから……。これは本当の話なんです。人間は矢張り時々心の洗濯をして、清楚な真人間になる必要がありますね。どうも少し言葉尻が寂しくなったかな。森繁久弥の浪花ドンファンじゃないが、景気よく吉原に繰り込んで華やかに、このスナップ・シリ

ーズの尻ぬぐいをやった方がよかったかもしれませんね。まあ、ザック・バランに話し合っ
て、大いに前科？を悔むとしましょう。

佐藤妙子 まあ……私も妙な巡り合せで緊縛映画の批評に引出されて、女だてらに大変失礼を申上げてきましたわね。折角御丹精のスナップに恥さらしのみ申上げて……。

牧 で……先ず「大盗小盗」の方から話を進めましょうや。私はこれを観て、泉京子や富士真奈美という連中から、見事ウッチャリを喰った感じがしましたネ。悪くいうとなめられた、つまり馬鹿にされた感じなんだ。後手に縛られて、磔柱に登らされて

も平気、哀愁感かてんで縄目を意識してない。これは製作担当者が余程注意しなくちやあならないことだと思う。笑い乍ら磔柱に架かる囚人は古今東西、おそろしいないだらうし、たとえ喜劇であつても、縛られることや処刑される男女、殊に女性では万事が深刻で哀れさがでていなくては駄目だ。それが一切吹飛んでいるからホトホト嫌になる。こんな映画は二度と観るかいって気にもなる。その意

味では、この「大盗小盗」は零価値ですネ。

佐藤 映画館にいらっしやる方が、みんな緊縛シーンばかりに注目するということはないでしょうが、当然あるべき深刻さが欠けていてはネエ……。お正月の東映「捕物道中」でもピリッとした処がありませんでしたし、最近でも新東宝の「姫妃のお百」で、吊り責めに遭う北沢典子の糸路は平然と吊るされて梁の上の蛇を眺めてましたわ。観ている方で怖いぞって教えて上げたいくらい。尤も、公衆の前で折檻をリアルに演出すること自体、大変むづかしいことでしょうけれど……。





牧 まあ、一言に言って娯楽映画、講談映画?……を観るんだと思えば腹もたたない。スチールや看板につられて這入ってから、馬鹿にしやがるという気持ち起す方が無理だという気にもなる。

佐藤 最初から「縛り映画である」と銘打って上映されるものがあれば話は別ですが、普通の劇映画にホンの少し女が縛られた場面があるからって、すぐ眼の色変えて騒ぐ方がおかしいといえば、おかしいでしょうネ。

牧 然し、いくら狙いが違うからといっても、「サア、今度は君が縛られるんだよ。その輪になった縄を頭からスッポリ冠って、後手で持っていたまえ」では話にならない。ど

うせ画面にでないのだから……という調子の縛りは、不思議に観ればすぐ判るものだね。東映の「新吾十番勝負」の長谷川裕見子の縛られ姿など、ベテランだけに、くさい。

佐藤 それと、一般に映画の縛りは緊縛とはほど遠いもので、一寸踏張ればすぐ解けそうなのばかりネ。そうしないと娯楽性の上で都合が悪いとか、筋の説明上の縛りだからそれでいいとか、理由は色々お有りでしょうけど、縛る以上はしっかり括る方がいいと思うのですけど……。

牧 最近では私は映画のスナップに、いい意味でマスターしたの

かしれないが、以前程慌てなくなりました。

僅か一年足らずの修業ですが、場面を程よく文献的にキャッチする。勿論、一枚や二枚のスナップでなしに、場合によっては百枚近くもスナップしますけどネ。しかし今迄の処、満足するものなしという有様。いささか失望中なんですよ、正直に言って……。



佐藤 私ネ、時々空想してみたことを考えてみますのよ。つまり縛られるスターが、監督やカメラマンと話し合って、御都合主義ではなく、スターの意見を尊重して、緊縛シーンや折檻シーンを考えれば、それ自体がスターにとっても楽しいことになるんじゃないかと

思うんです。そんな事ってあるものでしょうかしら?

牧 フム、その逆はありそうだ。つまり監督が、大道具、小道具をならべて、あのスターをここでこう縛って、あそこでこう責める。苦悶のアップは相当長くクランクして……なんて考える。私が監督だったら恐らくこの辺

りが一番楽しいだろうと思う。これは雑誌の口絵写真の場合にも通じるでしょうがネ。勿論「大盗小盗」の処刑場の大シーンを、とも角クランクアップすることは労働的にも大変だろうから、ハイお次、その次のシーンも序でに撮っちゃえナンテことになり兼ねない。しかしこうなっちゃあ、もう駄目だと思っんです。少くとも映画は、特に時代劇映画は連続夢の再現なんだから、縛りシーンも心して撮って欲しいものです。

佐藤 けれど振返ってみますと、長い間よくも縛りシーンが続いたと思うくらいですが特に印象的なのはどれでしょうか。



牧 その時は凄く印象的だったものが、日が経てば通り一遍なシーンで、なんでもなくなる。これは遂にだす機会を失って、今でも惜しいと思う作品のなかに新東宝の「朱桜判官」があるんです。その中の若杉嘉津子の吊りは天下一品、という裏付けは彼女の瞳にあるんですが、これは「大盗小盗」の泉京子にも共通する。恐らく、本当に縛られて苦悶する女を描くとしたら、若杉あたりが第一級でしょうね。また凄味が効く点では

泉京子もいいライバルだ。女優は誰でも縛っていいとは限らない。観念して縛られる役になり切るのが、点数を稼げぐ元になるとしてもよさそう。まあ今後そうしたシーンを是非、拔出してみたいとも思っているんです。

佐藤 テレビでも最近「大盗小盗」にあるような、磔シーンが観られる



ようになりましたわね。東映のテレビ映画で「風小僧」なんか、一寸縛るには可哀想な位の小娘がふんだんに縛られたり、風小僧の若

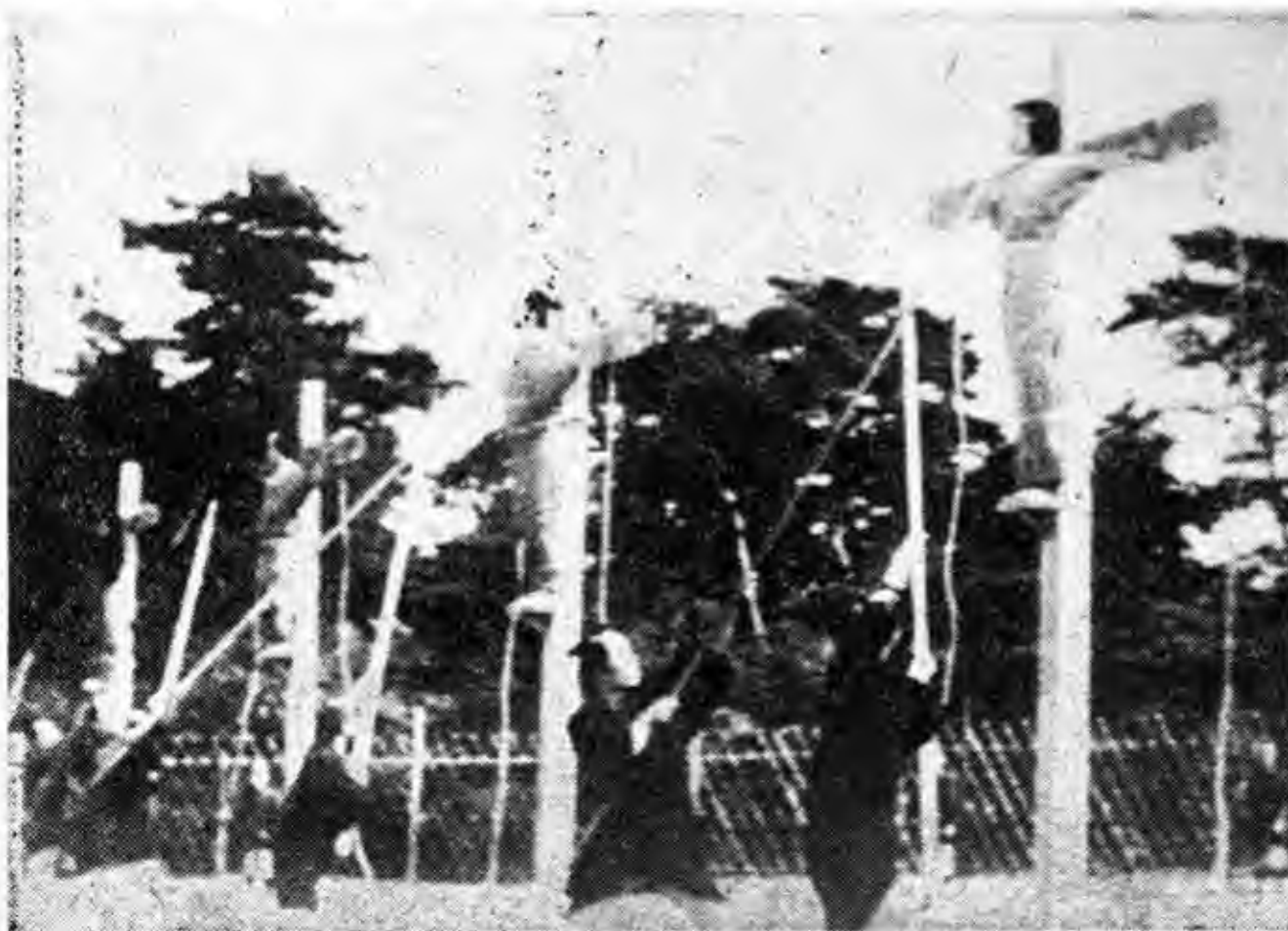


い母親が磔になったりして……。

牧 筋を追う余りそういった折檻場や磔シーンを粗雑に描写するのも困りますが、最近

テレビで観た舞台中継「恋娘昔八丈、鈴ヶ森の場」(中村歌右衛門演)のように、テンポは遅くとも処刑場の雰囲気をつまみとだす気構えが欲しい。陰惨で映倫あたりから文句がでるようだったら、喜劇として脚色されても、縛り

——折檻——処刑(磔など)を綿密に描写したドラマがあれば……なんて、つくづく思いますね。思い切って乗りだせば出来ないことはない筈ですがネエ……。結局縛り映画を観て失望するという原因は、どうも通りいっぺんで生暖い。その生暖さ加減がどうにも鼻持ちならない。あれで女を縛り上げて折檻したのかい。あんなことで女が口説かれると思うのか。……といった具合。それから縛られる女の方も、易々諾々として縛られている。少くとも縛りは親善的スポーツじゃあないんだから、いっ



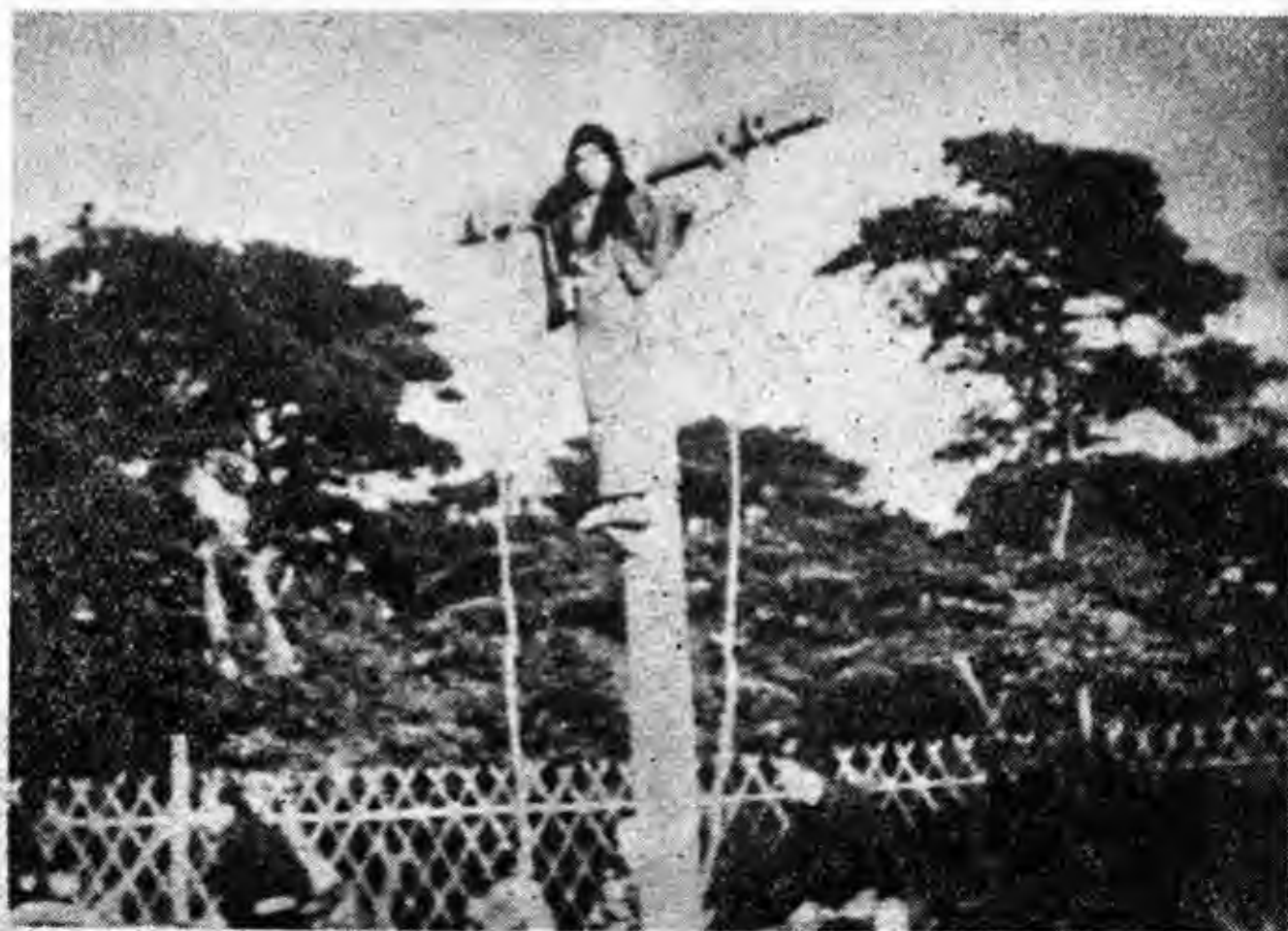
も悲痛な情景が盛られてなければいけない。にも拘らず、これが多くの映画で大巾に略されているから、拝見する方で嫌になってしま



うんです。

佐藤 女の方で縛られたかたが拙いんじゃないんでしょうか。真から後手に縛られる呼吸がどうしても呑み込めない。それだからズリ落ちそうな縄の中で、平気でアクションをしているというような……。

牧 まあ日進月歩のテレビドラマが、僅か十四時の舞台であろうと、本格的な縛りを演ずるようになったら、我々は映画館へ出掛けなくなりますよ。然し女はそれぞれの身分を表わす綺麗な衣裳で、そのままの姿で碌になる。しかも総天然色である。——なんて宣伝文句にうたわれると、また逆戻りして封切館通いをせざるをえないつまり今の処、テレビに対抗して攻勢的にする映画はカラーしかないでしょうな。それに近い将来には紙の雑誌は発展的に解消して、何フィートかのトッキ8ミリ映画フィルム一本に纏められ、口絵写真から動き出して、読者通信まで声が聴かれるという画期的なもの



に変身して発売されるかもしれない。……ハハ……夢かな。

佐藤 不可能とはいいい切れませんわネ。で



もそろそろ、お別れの言葉のお時間です。

牧 感傷的な言葉ですか？スクリーン盗画の懺悔というやつですな。真人間に還って神仏に悔い改めるって誰かが仰言いましたっけネ。……然しまあ私達には、少なくとも勉強にはなりましたネ。カメラの強味じやあないが、映画の縛りシーンを観ながら肉眼で批判する。夢中でシャッターを切った当初に較べて、数段の落着き、気構え、心境が養われた。これは結論からいえば、スクリーンの正邪を正直にカメラレンズが描く、つまり判別してくれるからなんです。逆にいえば、それ程沢山のいい加減な縛りシーンがあるという意味にもなりますね。ところで、お別れの時間とあらば……こうつと、

涙の真砂はよし尽くるとも

世に盗人の……否、スナッパーの

胤は尽きまじ……とはどうです？

では、この辺でポチポチ、釜の中へ這入ることに致しましょう。

どうも読者の皆様、長い間御声援頂きまして有難うございました。又、お目もじその日まで、お元気で……さよなら。

緊縛映画スナップシリーズ

全巻——完——



禪刑事捜査ノート

殺人再現

榎村 奏

青木 審・画

殺人再現

(一)

風間健太郎という名前を、読者の中には、まだ御記憶の方もあらうと思うが、あのS市を異様な恐怖におとし込んだ、禪殺人事件、が解決したあと、署員の移動のあった際に、彼は外勤係から刑事係へ配置替えになった。いわば新米刑事で、刑事室では、もっぱらお茶扱みの身分にあまんじていたが、誰云うとなく、彼には「禪刑事」という異名が奉られていた。その由来は、彼が署内でただ一人の六尺禪愛用者であることから勿論だが、例の事件の功績が、実に彼の禪にあったとい

う、賞讃と揶揄も確かに含まれていた。

友人というより、風間を弟のように愛している峰村は、

「おめでとうという言葉が適切かどうかは判らないが、とにかく、しっかりやりたまえ。しかし、君の制服姿が見られなくなるのは一寸淋しいナ……」

と、冗談とも本気ともつかずに云った。

「刑事だからって制服を着ないわけじゃありません。お望みなら、いつでも制服で遊びに来ますよ」

そう、いささかムキになって云う風間刑事の顔を、峰村は妙に卑猥な笑いを浮かべて眺

めながら、

「もつともネ。俺には、眼の毒かもしれないよ。君の制服姿を見ていると、俺は、どうも理性を失いそうになるんだ。つまり、危険な魅力だナ。フッフ……」

「……………」

何と答えていいか判らない風間は、眼のやりばに困ったように、周章てて残っていた紅茶を飲みほした。

風間が刑事になって最初の事件は、五月のはじめに起った。場所は、市の北方に在る丘陵地帯の雑木林の中。発見された変死体は、

推定年齢二十七、八才の、一見勤め人風の男である。

警察医の検診を待つまでもなく、死因が絞殺であることは、誰の眼にも明らかだった。生々しく索溝のついた頸部には、真新しい手拭が巻きついたままになっている。

着衣は、紺の背広の上下に、同色系統のネクタイ、ワイシャツは白で、靴は黒。下着は丸首シャツにメリヤスのズボンで、何のへんてつもないが、その下から現れた晒の六尺褌には、誰もが一寸意外の感をもった。被害者の神経質そうな容貌や、瘦せぎすの体格、また、実直なサラリーマンらしい服装などが、如何にも六尺褌に相応しくなかった。

同僚の谷口刑事に背中をつかれて、風間はしかたなく苦笑したが、正直云って、（また褌か）と、少々ウンザリした。

所持品は、現金千三百円に、カメラ雑誌三冊。しかも、それは三冊とも同じ、××カメラの五月号だった。そして、当然のことながら、そのことは係官達に疑問を抱かせ論議の的となったが、三冊のうち一冊だけが四頁分、切り取られているのが発見されただけで、それ以上のことは何も判らなかった。

もう一つ問題になる特異現象は、被害者の

着衣の着かただった。その他の情況から推して、抵抗の痕跡の全くないところから、どうみても裸であったのを、死後何者かの手によって着せられたとしか思えなかった。

死体解剖の結果、頸部の索溝以外には外傷を認められず、毒物は検出されなかった。死後推定時間は十五時間で、兇行は前日の夕方ということになる。

抵抗のあとがないことと、死顔に苦痛の色がなく、みようによっては、恍惚とした表情にさえみえることから、情死の片割れだとする意見がかなり有力だった。

ともあれ、当局の捜査方針は、まず被害者の身元確認に向けられ、活動を開始した。

しかし、すぐにも割れると思われた身許が、何の手がかりもないままに、一週間、二週間と経過すると、捜査員の面には、次第に焦慮と憂鬱が蔭を作りはじめた。

もっとも、被害者がS市居住の者でないことだけは判明した。当然、指紋照会は全国的にわたったが、予想どおり前科者でないことが確認されただけである。

現場付近の聞き込み捜査に、連日足を棒にしている風間刑事は、収穫の得られないみじめな気持がやりきれない思いで、その日も、殆

んど当てもなしに歩き回っているうちに、フともう半月近くも峰村に逢っていないことを思いだすと、や、また、もたまらないくらいに逢いたくなってきた。

「やア。とうとうやって来たナ」

峰村は、原稿を書いていた机から、とびあがるように立つと、手を取らんばかりにして風間を迎え入れた。

「すみません。ごぶさたで……」

「疲れてるな。顔色がよくない——」

「ええ……どうもうまくないんです。このぶんでいくと、あるいは迷宮入りかもしれない——」

風間刑事は、額に垂れた髪を掻きあげるとドサンと椅子に落ち込んだ。

「コーヒーを入れよう。濃いやつを一杯やる——」

峰村は、コーヒーだけは女中の手をわずらわさず、必ず自分で入れることにしていた。

サイフォンが豊醇な香りをたてはじめると風間は、ゴソゴソとポケットを探ぐって、

「いこい」の袋を取り出した。一本抜いて口に咥えながら、何気なくやった視線がマガジン・ラックのほうにいったとき、彼は我し



らず「アッ」と小さな声をあげた。

「何ンだい?——」

峰村が、風間の顔を見る。

「イヤ、あのカメラ雑誌が同じやつだったんで、つい——」

「メ×カメラ、かい」

「ええ」

「同じっていうと——?」

「え、ええ。実は、今度の被害者がその雑誌を持ってたんですよ。しかも三冊」

「ほう。この本を三冊もね……」

「ものずきな奴もあるもんですよ。」

同じ本を三冊も買うなんて——」

「フウン——まてよ。それには理由がありそうだな……。ところで君、この本に面白い写真が載ってるの知ってるかい?」

「面白って、何です?」

「ウン、ホラ、裸祭りの組写真だ。これサ。どうだい……」

「ああ、それなら見ました」

「あんまり興味がないらしいネ。まあいいさ。しかし、仲々いいところを狙ってる。これなんか傑作だと思わない

かね。もっとも、この場合はモデルのほうを褒めるべきかな。駄もいいし、第一禪の締めかたが気に入ったね。六尺はこういうふうに締めなくちやいけない。そういえば、これ、君に似てるじやないか——」

峰村の饒舌につられて雑誌を覗き込んでいた風間は、そのとき、フトあることを思い出した。

「あ、そう云えば——」

「何ンだい?」

「その頁だけ切り取られていたんです。もつとも一冊だけだけど……」

「ホウ。そいつは、興味あることだね」

峰村の眼がキラリと光った。

「それから——」

「まだ何かあるのか?」

「ええ——偶然の一致かもしれない。被害者が六尺禪をしてたんです」

「ホホウ、またかい。そいつは、ますます興味があるね。フウン——そうか……」

峰村は、考え深そうに眼を、しばたたくと何か頷くようにしていたが、

「あ、もういいだろう。サ、飲みたまえ。麻薬は入っていないから大丈夫。俺も一杯飲んで、もう少し考えよう」

「何か——？」

「ん？うん……判りかけてきたことがあるんだ」

「どういうことですか？それは——」

風間刑事は、思わずカップを置くと身をのりだす。

「さてさて、そう急ぎなさんな」

峰村は、ゆっくりとコーヒーを飲みおわると、置時計を見てから、

「君。俺の云うことは何でもきくね」

「そりやア、いままでだって——」

「よし！じゃア、いまから一時間後に兇行現場で逢おう。俺は、この原稿をかたずけてしまっていく。いいね。ああ、それから、これを持っていきたまえ」

「××カメラですか？——」

風間は不審そうに眉をよせたが、云われるとおり、それを持つと立ち上った。

(二)

まだ暮れるには間のある時刻だが、雑木林の中は、ウッスラと夕靄が漂っているようで不気味なほどに静まりかえっている。

風間刑事は、さっきから何度も腕時計を覗きながら、不安な気持を制えて峰村の来るのを

を待っていた。

約束の時間を十分も過ぎた頃、やっと峰村の長身を見つけると、風間はホッとして笑いかけながら近寄っていったが、峰村は、妙に硬ばった表情をしてニコリともせず、

「本は持ってきたな」と云った。

「ええ、このとおり——」

「よし。俺も持ってきた」

「あなたもですって——？」

「うん」

「どうしてまた……」

「そんなことはどうでもいい。すぐに始めようか」

「始めようって、何をですか？」

「俺の云うとおりにすればいいんだ」

「それは判っています」

「では、裸になりましたまえ」

「裸に？　しかし——」

「躊躇する場合じゃない。早くしろ」

「え、ええ、しかし、人は来ないでしようね」

「殺人のあった場所だぜ。心配いらない」

「じゃア、裸になればいいんですね……」

何が何やらわけの判らないまま、風間刑事は、しかたなく服を脱ぎ始めた。

峰村は、上衣のポケットに両手をつっ込んでいたが、禪一本になった風間が、気になるように四辺を見回すと、その隙に、いきなり躍りかかっていった。

虚を突かれた風間刑事は、草の中へ仰向けに倒れ、その頸に峰村の長い指が絡んできても、まだ冗談だと思ふ余裕はあった。

しかし、頸部の圧迫が次第に強くなり、反射的に抵抗しながら、眼の前に迫った峰村の顔を見たとき、不意に疑問が起こった。そして、次の瞬間には、冷い恐怖が背筋を走ったが、同時に、また、名状しがたい恍惚感が、意識を重たく攪乱しはじめた。

「峰村さん……！」　そう叫ぼうとしたが、声にはならなかった。急速に脱落していく知覚の中で、異様な感覚が凝結するのを感じたときは、もう風間は失神状態に入っていた。

どのくらい時間が経ったかは判らない。フト気がつくと、風間刑事は、先刻と同じ場所に転がされていた。いつのまにか、衣服は元通り着せられている。

峰村は、立ちあがって、煙草に火を点けようとしているところだった。風間は、何か云おうとしたがやめると、ソロソロと起きて、ベルトを締めなおし、はずれている釦をあら

ためた。

峰村が黙って差しだす煙草を抜きとって深く吸うと、風間の脳はクラクラとした。

「大丈夫か……？」

峰村が、やっと口をきいた。

（大丈夫かもしれないものだ——）と思ったが、風間は、「ええ」と答えた。

「すまない。ツイ身が入り過ぎたんだ。許してくれ」

「すんでのことは、あなたに殺されるところでした——」

「イヤ、いくら夢中になったからって、まさか殺しやしないさ。それにしても、はじめは、失神するまでやる気はなかったんだ」

「イヤ、冗談です。あなたが僕を殺す筈はありませんからね」

「さア、そいつは判らないぞ。君が裏切ったりしようものなら、俺は、ただではおかないつもりだからナ」

「そんな？ ひどいなア。僕があなたを裏切るなんて……」

二人は雑木林を抜けて、バス通りのほうへ歩いていった。空には、まだ明るさが残っていたが、街にはもう燈がつきはじめている。

「しかし、さっきは自分が恐くなったね。グ

ッタリと意識を失っている君を見ていると、いまわしい気持がムラムラと湧いてくるんだ。いまならどんなことでもできると思うと、脂汗がプツプツと噴きだして、咽喉が渴いてくる——俺は、やっと自分を抑制できたが、君を生きかえらせるのは、やっぱり少し惜しかった。君は、何でも俺の云うことはきいてくれるが、でも、本当に君を自由にすることは、俺にはできないんだから……」

風間刑事には、峰村の云っていることの意味が充分には呑みこめなかったが、そして、先刻の奇態な行動について追及されないためのごまかしに、そんなことを云っているのだという気もしたが、何か妙に反撥を感じた。「僕は、峰村さんのためなら何だってする気持でいるんです！ 水火も辞さないつもりですよ」

「たとえ火の中、水の底か。イヤ、君の気持は判ってるんだ。俺の要求の最大のもので、火や水よりは楽なものさ。しかしね、あゝ、君にとっては、火や水よりも苦痛かもしれない。君は、全く純情だからナ……」

「からかわんでください。僕だって男だ。やるといったら何だってやりますよ！」

「だから純情だってんだ。君は何もしらない

からそんなことが云えるんだよ」

「……？！」

峰村の脳裡には、風間の逞しい裸身が妖しい構図を描いたが、それを打ち消すように話題を転じた。

「——今度の事件だがね。解決は、そう遅くないと思う。俺の推理が間違っていないければだよ。この事件は一見、複雑のようであるが、実は単純なんだ。動機のない殺人とも云える」

「じやア、過失致死だとしても云うんですか？」

「まア、そうだな——」

「しかし、どうして、そんなことが？」

「うん。それは、まだ云う時期じやアない。もう少し待ってくれたまえ」

「そうですか——」

「君は署へ帰るんだろ。ここで別れよう。何か変わったことがあったら報らせてくれるとありがたいナ」

「ええ。それは、勿論——」

「公表してさしつかえない程度でいいんだよ。俺は部外者だから」

「判っています」

「じやア……」

戻って来た風間刑事を見るなり、谷口刑事が待ちかまえていたように声をかけた。

「オイ、被害者の身元が割れたぞ！」

「そうかッ！」

まるで犯人^{ホシ}があがったかのように風間が面を輝かしたのも、駆けだし刑事としては無理もない。いや、捜査陣全体が俄かに色めきったのも事実である。

判明したところによると、被害者の氏名は山田清次。年令は二十六才。会社員で下宿住い。住所は兵庫県のA市だった。温和な性格らしいが、会社での勤務成績はあまり良いとはいえず、欠勤が多くて、よくフラリと旅行に出る癖があったという。両親は亡く、兄弟は遠隔の地にいて、下宿先でも日頃の山田の素行から気にもとめずにしたため搜索願いが遅れたのだった。もとより、山田の友人、知人、女性関係は徹底的に洗われたが、何も得るところがないまま、兵庫県の人間が何故、静岡県まで来て殺されたかという謎を残して再び事件は難航の兆をみせてきた。

「被害者の身元は判りました。でも、駄目なんです——」

風間刑事の、ガッカリした様子を労るよう

に眺めながら、峰村は何か成算のあるように

「しかし、それは俺の想像通りだ。もう一つ

云おうか。被疑者は、この市にいるよ」

「えッ？」

風間は思わず椅子から躍り上った。

「そ、そんなことが——！」

「勿論、まだ推理上でだがね。——ホラ、これをみたまえ」

峰村が差し出したのは、実話を主にした大衆雑誌で、示された箇所は巻末にある、いわゆる「読者交歓欄」である。赤鉛筆で傍線を入れてあるところを読むと、次のように書かれていた。

日本古来の男性風俗に興味をもつものです。小生自身も六尺襦を常用しています。

同好の方との文通を希望します。（静岡県

S市G町黒柳敏夫）

「それから、これを見たまえ」

次に峰村が出したのは、開封された一通の封書だった。不審に思いながら読んでいくと

前略。小生は今、歓喜で胸が一杯です。

こんな近くにあなたのような方がいられるとは夢にも思いませんでした。ご指定の日時に間違いなく参上します。多くを書きたいのですが、ペンが頓えて思うようにいき

ません。すべては、お逢いした上で。

黒 柳

峰 村 様。

とあり、文面の通り、かなり乱れた走り書きである。

「いいかい。これから先は君の仕事だよ」

「はア？……」

「明日の午後一時、駅前のポストのところで待つんだ。初対面なんだから、俺になりすますのはわけはない。襦は地でいけるんだから好都合だ。いいかね。君は峰村で、襦マニヤのマゾヒストだよ。それから、注意しとくが相手に要求されても決して襦を脱っちやいけないぜ。それを守らないと看破られる危険がある」

「判りました」

風間刑事は、脳の整理がまだ充分には出来かねていたし、いくら信頼する友人でも、峰村の指示で動くのには不安もあった。しかしまた、確信ありげな峰村の言葉には、かなりの価値も認めないわけにはいかなかった。

そのあと、細部にわたるうちあわせをする

風間刑事は、駅の大時計を見上げた。一時十分前——。果して、黒柳と名のる男は現れるだろうか？ 事実、彼が犯人だとしたら、のこのこと誘いに応じてくるのを期待するほうが、むしろ非常識だと思われる。異常性格者は、精神の均衡が破れた状態では一層欲望が亢進するものであるという峰村の見解も、風間には解しかねた。

「失礼ですが、峰村さんでしょうか——？」
不急に声をかけられて、風間刑事は我にもなく狼狽し、

「え、ええ、そうです。アア、黒柳さんですね。お待ちしていました——」

と吃りながら云ったが、さすが職掌柄だけあって、すかさず相手を観察することを忘れなかった。

年令は三十才前後、眉が太く髪も濃いが、兇悪な感じの貌ではない。ただ眼の光りが普通より鋭いのが気にかかった。肩巾が広く上背もあり、相当にいい体格である。これなら六尺揮もさぞ似合うだろうと思われた。

駅の裏通りにある「ホテル」の看板を出した貸席にあがると、黒柳は年長者の意識した気安さで、無遠慮なほどジロジロと舐め回すように風間を眺めながら、

「僕はね、君を見たときスゴク嬉しかった。マゾヒストってえと、体格も貧弱で、どこか女性的な感じのするのが、とかく多いんだ。それでも贅沢はいってられないから我慢しちゃうがね。僕の理想は、見るからに男性的な逞しいマゾ男なんだ。君は、それにピッタリだ！ しかも揮マニヤときては、僕は、夢をみているんじゃないかと思うくらいだ………！ サア。君はマゾ。僕はサド。多言の必要はない——」

黒柳は、やおら立ち上ると、風間の上衣を乱暴に剥いだ。いよいよ始まると思うと、風間は、さすがに異様な緊迫感に襲われた。

忽ち風間の上半身は、むきだしにされ、後手にとられると、ギリギリと縄が巻かれる。

黒柳の荒い息使いを耳許に聞きながら、風間は屈辱にジッと耐えていた。

それは、いわば遊びであり、就中、彼にとっては芝居に過ぎないのだが、いや、それだからこそ、現実を受ける加虐には、消しようのない屈辱感が伴うのだった。

覚悟はしていたつもりでも、裸にされると風間の不安は急に増大した。特別に六尺を固く締めてあったが、脚まで縛られてしまうと全く無防備同様の頼りなさだった。

風間は、相手をも自分をも見ないことで、少しでも凌辱感から逃れようとして眼を閉じていた。荷物のようにゴロゴロと転がされるたびに、縄は執拗に巻きつき、強く締めつけられる。遂には軀中が縄の緊縛で窄衣を嵌められたようになった。しかし、まだ疼痛を感じるほどではない。風間には、まるで見当もつかなかったが、相手がサディストである以上、これだけで終るとは考えられなかった。縄の間に棒のようなものを挿し込まれるのが判った。（こいつは相当痛められるぞ）そう思った途端、激痛が襲って、風間はもう少しで声をあげそうになった。痛みは益々加わり、風間は遂に耐えかねて低い呻きをたてると、軀を海老のように曲げた。いや、曲げようとしたと云ったほうが正しい。がんじがらめにされた軀は、僅かに蠢いたに過ぎなかったのだ。

苦悶の中から薄目を開けて見ると、黒柳もいつのまにか揮一本の姿になっている。逞しい胸板が近々と迫っていた。

たとえ過失致死であるにせよ、殺人を犯した犯人が、こんなに夢中になってプレイを悦しむことができるだろうか？ それとも、彼は恐るべき殺人淫樂症で、山田を計画的に

殺害し、いままた、峰村の替え玉である風間をも餌食にしようとしているのではあるまいか？ もしそうだとしたら、完全に自由を奪われてしまった風間には、もはや逃れる術はなかった。風間の脳裡に峰村の貌が浮かんだ。恨む気持は少しもない。ただ云いような悲愁が胸に流れ込んだ。

気がつく、さっきまでの激しい痛みはなくなっていた。ホットするよりも、訝かる気持で眼を開けると、黒柳は、脱いである衣類をゴソゴソやって煙草をとりだそうとしている。

「いっぶくだ。君にもやろう——」

そう云うと、黒柳は優越に充ちた微笑を漂わせながら、吸いさしを風間の口に咥えさせた。縄は解かれなかった。仰向けに転がされたまま、風間は一息深く吸い込んだ。うまさはなく、しみるような刺戟を気管の粘膜に与えただけである。

「さア、いままでは小手しらべだ。これからが本格的なんだから、覚悟するがいいぜ」

舌舐めずりをするような表情で、再び黒柳が虐待を加えようとすると、風間は慌てて、

「ちよ、ちよと待ってくれ！……」

「どうした。怖気がついたのかね？」

「いや。そうじゃない。僕は、室内のプレイでは本当に満足はできないんだ。あんなたさえよ。かったら、オープンでやりたいと思……」

「でも、厭ならいいんだ——」

「そうか。道理で——そうならそうと早く云やアいいんだよ。よし。じゃア、どこかへいこう」

「そうですか。ありがたい！ そのかわり、そうになったら、あんたの思う通り存分にしてください……」

こうして風間刑事は、ひとまず危機を脱することができた。舐の節々はまだ疼いていたが、現金なもので、洋服を着おわると、職業意識が旺盛に湧き上ってきた。



「場所はいいところを知ってるんです。そこへいきましよう」

まだ何も感づいていないらしい黒柳は、期待に眼を輝かせて従いて来る。

バスを下りると、黒柳は、何かを思いだそうとするように、しきりに四辺を見回していたが、その表情が急に硬ばったのを、風間は見逃さなかった。

「ここを入ると雑木林があるんです。僕はよ

くそこで自虐を悦しむんですよ。いわば秘密の場所ですね」

風間刑事は小声で云って、反応を見るように、さりげなく黒柳の様子に注意する。

「しかし、こんなところじゃ危くないかな。」

一人ならともかく、二人じゃ人目にもつきやすいし……もっと、郊外のほうへいったほうがいいよ」

「大丈夫ですって。そこへいってみれば、あんただってキット安心しますよ。さア、いきましよう——それとも、何か具合の悪いことでもあるんですか？」

「いや、そんなことはない！いいよ、じゃ、いこう——」

黒柳は不自然なほど強く否定すると、先にたって歩きはじめたが、その挙動は、何かあると思わせるに充分だった。

雑木林の入口まで来たとき、黒柳は、また躊躇うように足を止めたが、風間に促されると、慌てて歩きだした。

黒柳が雑木林を嫌う理由が、第三者として単に殺人のあった場所を忌むというのなら、当然そのことを口にしていい筈だ。それをしないというのは、彼を犯人だとする見込を相当有力にする。だが、さてよ。彼は事件には、

全く関係のない人物で、殺人のことは新聞で知ってはいても、地理不案内から、この林を現場だとは気づかない場合だってありうるじやアないか。とすれば、彼が惧れているのは単に人目だけなのか。

風間刑事は、フトまた弱気になったが、追い込みをかけるように云った。

「黒柳さん。実はまだ云ってなかったけど、一つだけあんたに要求があるんだ。僕の頸を絞めてくれないか。頸を絞められると、僕はとても良い気持になるんでね。勿論、死なない程度にです——」

結果は、その言葉が終るか終らぬうちに現れた。みるみる顔を蒼白に変えた黒柳が、不意に躰の安定を失って倒れかかってきたのだ。

「どうしたんです？　しっかりなさい」

黒柳を抱きとめながら、風間は会心の微笑を制えることができなかった。

「黒柳さん。落着いてくださいよ。僕には、

もう、見当がついてるんだ。その前に、一言謝らなければならぬことがある。僕は、本当は峰村じやアない。風間健太郎という者だ。またの名を揮刑事。おわかりですか。あんたには大変お気の毒だが、僕は刑事なんだ

よ。この通り警察手帳もある。黒柳さん。こうなったら、もう観念したほうがいい。あのときのことを詳しく話してくれませんか」

黒柳は、風間の腕から躰を離すと、辛うじて立ちながら、

「恐れ入りました。私は確かに山田を殺した犯人です。でも、これだけは信じてください。私には決して殺意はなかった！彼が頸を絞めてくれと云うので、プレイのつもりで云う通りにすると、ものすごく悦ぶんです。それでツイ此方も夢中になっちまって……気がついてみたら死んでるんです。すぐに自首しようと思いましたが、恐ろしくてそれもできません。私の煩悶がどんなものだったかお察しいただけると幸いです。あなたのお手紙にとびついたのも、いつときでも苦しみから逃れたい気持と、それに、逮捕されるのも時間の問題だと思っていましたので、お恥かしい話ですが、そうなれば、もうサドを楽しむこともできないと思っただけです………。我ながら、自分の性癖がつくづく呪わしくなります」

「あんたの言葉を信じましょう。運が悪かったんだ。しかし、ヘンな云いかただが、山田は随喜して死んでいったに違いない。それ

を思って、あんたも彼の菩提を葬ってやることだ。そうだ。何ンなら、自首の手続きをとってやってもいい」

「ありがとうございます。では、手錠を……」

……

「イヤ、そのままでもいい。じゃア——」

「お伴します」

悄然と肩を落した黒柳に、劣るるように歩を合わせながら、峰村が俺の立場だったらキツとこうしたに違いないと思ひ、満足感が胸にたぎるのを覚えた。

黒柳は、項垂れたままの顔を上げないで、

「風間さんといわれましたね。私は、あなたのことを死ぬまで忘れないでしょう。失礼だが、あなたは私のはじめてめぐりあった理想の方だ。そのあなたを責めることができたんだから、私には、もう思い残すことはありません……」

と云うと、深い溜息をつき、それきり黙り込んだ。

「とにかくよかった。禪刑事、一番手柄か。ハッハハハ」

「イヤ。こんどのは、すべて峰村さんのおかげです」

窓を開け放った書斎には、初夏の外光が流れ込み、久しぶりに制服を着けた風間の階級章が、ときどきキラリと光った。

「でも、一体どこから黒柳の線がでたんですか？」

「うん。第一の鍵は、遺留された三冊のカメラ雑誌さ。その中の一冊は裸祭りの頁が切りとられていた。裸祭りとは。そして被害者も禪を締めていた。彼が禪愛好者だとすれば、当然裸祭りの写真に興味を持つ。切りとって保存するには、裏表に印刷されているから二冊必要なわけだ。僕は、もう一冊の既に切りとってある雑誌を、加害者のものと想定してみたんだ。とすると、犯人もまた禪に特別の興味を持つ人間だと考えるのは容易だ。

初対面の人がおちあう場合、雑誌を目印にするのはよくあることだよ。第二の鍵は、被害者の表情に苦悶の痕のないことと、交友関係がゼロということだ。そこには確かに秘密の臭いがする。サド・マゾのプレイの結果、不測の事態として起った過失致死とは、あまりに小説的な設定だが、僕にはかなり確信があった。黒柳と犯人を結びつけたのは、いわば第六感だが、本当は君の報告のあるまでは大分不安だったよ。こういう推理も、僕がア

ブに関心があったから生れたんだ。君達もその方面を研究しておく必要があるね」

「はア……」

「及ばず乍ら僕が教導してやってもいいよ」

「はア、お願いします——」

「手始めとして、いつか君を縛ってみよう」

「……縛られるんですか？」

「ハハハ、そんな顔をして。よほど懲りたのみえるナ」

風間刑事は、曖昧に笑ってみせたが、それは、峰村に縛られる自分を想像して、妙に探った気持になり、そのてれかくしのためかもしれない。 (完)

絹川文代緊縛姿態新作集

大手札判 (9×13) 印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手 略号(きた)

三枚四組 二五〇円

○緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

創

作

黒井チエの青春

(一)

近藤

一

黒井チエは顔も上げずにいた。殺風景な部屋の隅っこに小さくなっているが、全員の無情な視線の晒物にされている自分を痛い程に感じ取っていて、キッと唇を噛んだまま眼を伏せていた。

皆の顔色には緊張が漲っていた。或者は上気して頬を染めていたし、或者は蒼白な面上に眸ばかり光らせていた。

扉が開いた。三人の女性の後から、陽焼した精悍な風貌の青年が入って来た。

青年の隣の席に着いた女性が立上った。

「今シーズンの役員を発表します。」

続いて青年が立って、一同をグルッと見廻した。

「卒業生の意思を充分に考慮した結果、新キャプテン以下三役を決定したので発表する。キャプテンには宮部睦子。」

「ハ、ハイ。」

「ヴァイス・キャプテン、小川美代。」

「ハイッ。」

「マネージャー、竹内淑子。」

「ハイ。」

「以上。丁度今までの三役も来ていることだから、よく打合せをしておくように。」

起立した三人は青年の言葉に頷き、青年の脇に着席している三人の先輩に頭を下げる。青年が続いて云った。

「今日は新しく入部した顔ぶれも幾人かいるからお互いに名前だけでも憶えるように自己紹介をしよう。まず僕だ。」

彼は一渡り見廻してからチエの方へ向いた。チエは俯向いたまま

躰を固くした。

「姓は山崎、名は時彦。社会科に籍があつて、現在当バスケット部の部長をしています。」

「部長の癖に点は辛いです。」

脇から声がとんだ。

こいつ！ と山崎先生の指が隣の娘の頭を突いた慌て方に、カン高い笑いが起こる。

「だけどいい男です。色が真黒で。」

首をすくめながら附加えた言葉に山崎先生も苦笑した。

自己紹介もかなり進んだ。新主将の宮部睦子は1メートル60、他校に比べて決して大きくないセンターだが強いリストと柔軟な肢体を充分に活かした敏捷な動きは羚羊を思わせ、大黒柱のポイント・ゲッターである。副将の小川美代は睦子と違って快活そのものであった。いつもよく笑う。ゲームの最中、一番声を出しているし、ペナルティを恐れぬ動きはフォーワードとして立派なものだった。1メートル58というのに睦子より大きく見える程均斉の取れた良い躰をしている。竹内淑子は一番大きかった。1メートル65でガード、睦子とのコンビが巧みで、上背を利用してパスを送りマン・ツー・マンを破るのは平気だったし、堅いゾーン・ディフェンスには綺麗なロング・シュートを見せてくれる。無口で、几帳面で、頭の良さそうなお娘だった。

最後に新入部員の番になり、端に居たチエが指された。立上って顔を起したら、上級生達の視線にぶつかって、喉が詰まった。

「わたし、黒井チエです。」

それだけ云って俯向いた。

「せいはい？」

「姓は黒井、名はおチエ。」

間髪を入れぬ合の手に幾人かの笑いが起った。チエはカーツとなつた。だが何か云わずにはいられなかった。ごくり！ と唾をのんで、顔を上げた。

「わたし、1メートル69センチです。」

びよこんとお辞儀をして、下を向いたまま腰を下ろしたチエには驚きの吐息の他、もう何を云われたのやら、後のことは耳に入らなかった。

帰りに仕度を済ませた処へ、上級生が呼んでいるから地下室へ来るようにとチエに呼出しがあった。同じ方向へ帰るクラスの友達に鞆を預けて、チエは放課後の地下室へ降りて行った。

上級生は四人、チエのまわりを取囲んで、人眼につきにくい地下の物蔭へ連込んだ。

「あんた、随分大きいのね。」

背が高いということはチエの急所である。小学校、中学校を通じて一番高かった。とにかく高すぎるのだ。生徒は勿論のこと、女の先生の誰よりも高かったし、男の先生でも中にはチエより小さい人がいた。痛い所を衝かれて、チエは四人の真中で真赫になって項垂れた。

「あたしに、用って何ですか。」

「別に無いのよ。人並の用はね。」

意地の悪い云い方だった。

「あんた、何処の人？」



「……」
「随分失礼な口のきき方をするわね。上級生を一体何だと思ってるの？」

「済みません。」

「ほんとに済みませんよ。」

「悪かったと思うの？」

「思います。」

「そうオ、じゃ上級生に対する態度を改めなさいね。」

「言葉使いを直さないよ。」

「教えて上げるから、しっかり憶えるのよ。いい。」

「はっきりしなさいよッ！」

烈しい叱声と共にチエの頬がパシッと鳴った。あッ！ 頬を抑える途端、背を突かれ、前にのめった所を拳が襲った。ボックス型の制服の襟を曳かれ、反対から髪の毛を鷲掴みにされて振廻された。がつっ！ と向う脛が蹴られ蹲った時、肩口を突飛ばされて、チエは床に手をついた。八本の足が靴のまま飛交い、交互にチエの牀の上で躍る。チエは這った。恐怖に声も出ず、蹂躪に身を委ね、必死に俯伏せになっていた。口の中がカラカラになっているのが分った。頸筋をギリギリ踏付けた踵には金が打ってあった。脇腹を蹴上げた爪先は堅くて息が詰まる程だった。

——わたし、殺されるかも知れない。——
ふっとチエは思った。

新入部員は下積である。掃除やボール拾いや使い走りをさせられ厭な顔は許されない。コートの傍にベンチを持ち出したり、上級生にタオルを運んだりした。人一倍背の高いチエは酷使の的になった。早速にノッポとかデカという綽名をつけられ、少し思いやりのある者からは黒ちゃんとかお黒とか呼ばれた。目立つ存在だけに、

チエは無断欠席は勿論、練習時間中には少しの休憩も許されなかった。すぐに上級生の叱声や罵声が飛ぶ。殊に此の間チエを痛めつけた上級生は、チエを眼の仇にした。彼女達が役員の椅子を狙っていて、それを睦子に奪われた不満が理不尽と分っているだけにチエ達に当り散らすのだと識ってから、チエは内心で彼女達を軽蔑しきっていた。表面では恭順を見せながら、烈しいファイトを内に秘めてチエはトレーニングに励み、クルクルと立働いた。

お黒というニックネームは、単に黒井の姓からのみのものではなく、その陽焼けした肌の色を指していた。

山崎先生も睦子達もチエをセンターに予定していた。それだけに練習も厳格そのものだった。新入部員は暇さえあればランニングを強いられる。腕のバネやリストを強くするためにエキスパンダーを何十回となく引っ張らせたり、懸垂を少なくとも十回以上課した。

「このボール、膨らましたの、誰？」

「ハイ、わたしです。」

「こんなボールが使える？」

「え？」

「ペコンペコンじゃないのサ。何よ、その顔。あんたネ、いい加減にわだ、っての止めたらどうオ？」

「誰か水汲んで来て！あんた、30分だけバケツ持ってなさいヨ。」チエを罵りものにしたがる上級生から、罰を加えられた彼女は、雨天体操場の片隅の壁に向って、水を入れたバケツを持って立たされていた。

「おいキミ、一個のバケツを両手で持つ奴があるか。両手を使うならバケツは二個だ。」

山崎先生はチエに二個のバケツを持たせた。両手が抜けそうに痛んだ。

「水、水。あんた、それ一つ頂戴。」

「お黒、あんた物を持つのに右手使っちゃだめじゃないの。」

「ハイ。」

睦子が右手のバケツを持って行ったので、左手ばかりが凝ったように痛んだ。30分たって涙をシャツの袖にこすりつけ、ボールを持つと厭に軽くなっていた。

新入部員はロクにボールも持てないのに、一年生のチエはよくボールを扱わされる。主将の睦子が眼をかけて、センターはボールに馴れなければいけないからと引廻してくれたからだ、それだけに風当りも強い。他の一年生はチエの抜群の長身に敬意を表しているが二年生でも登録されない人や、三年の補欠組は必死に蹴落すチャンスを狙っている。

パスの練習では上級生数人がチエに対して悪送球を繰返すし、ランニングシュートの練習ではタイミングを狂わしておいてガミガミ怒鳴りつけた。そんな時、いつも睦子はチエを呼びつけて縄とびを命じたりする。

「練習は年季だけじゃないわよ。考えない人は上達しないわ。お黒は今の内、黙って見て覚えてるのよ。」

睦子はそう云っているいろいろ教えてくれる。フリースローは淑子の型が最もオーソドックスで模範になると教えてくれた。淑子のシュートは一旦ボールを胸でとめ、全身の反動を活かして綺麗に廻転させながらボールに弧を描かせる。長身が屈伸したと見るまに、ロングシュートが抛られるのは快かった。

だが、ランニングシュートや、ゴール下からのショットやフオロは、やはり睦子が一番だった。タイミングの良さ、ジャンピングの佳さは誰も及ばなかった。脚が空中で速く振られ、バスケットシューズの爪先までがピンと下を向く。廻転を与えられた黒光りのボールが、睦子の長い指先にくっついたように一瞬停止するように見えたりする。美代のシングルハンドのシュートが、当る時は五割近いが、そのこぼれ球は殆ど睦子がフオローした。

新入部員歓迎のゲームが五月の中頃の或日に行われた。山崎先生以下22名が参加したので、先生が審判になって、三組に分れた。チエは淑子の組のセンターになった。初めに美代の組と当たった。

デイヴィジョン・ラインにボールが上がり、上背に優った淑子はすぐにボールをチエに送った。チエはよく動いた。フオワードを充分に走らせたし、自分でも睦子を真似たシュートを放った。しかしなかなか思うように入らなかった。美代の動きが激しくて思い切ったプレイはできなかったから、ついうっかりとダブルドリブルをしてしまう。

ピリピリッ！

チエに送られるパスに、美代がカットしてすぐにヘルドボールを取られると、10センチも上背が違うのにチエは殆どボールがとれなかった。淑子が美代を問題にしないのに、淑子より背の高いチエが美代に敵わないのだ。

動きに詰まるとチエは背後にいる淑子にボールを廻す。淑子がさっと遠投に極める。だがこれも余り良くなかった。淑子が美代に備えていると、すぐにヴァイオレーションになってしまう。

「ガードを当てにしちや駄目よ。センターは自分で攻め込むのよ。」淑子が恐い顔で云った。

15分ハーフで第一試合が終り、第二試合は美代の組と睦子の組が当たった。どちらも速攻だったけれど、睦子の方が緩急を心得たパスを保っていた。流石に睦子の活躍は光っていた。細いが鋼鉄のパネを思わせる軀で、トリックプレーは逸品だった。パスと見せて一転してシュートしたり、ジャンプしており際にパスを送ったり、最も感嘆したのはキャリイイングになる瞬間に相手のプッシュを誘う身のこなしだった。ドリブルが身についているのでどうしても奪えないのは、足腰の強さが抜群なのだろう。

第三試合は、淑子の組と睦子の組だった。皆が睦子をマークしたし、65センチの淑子と69センチのチエが、インターセプトしたのでは、睦子のパスは殆ど用をなさなかった。と思ったのは早計だった。チエの注意を高いパスに集めておいて、睦子はバウンドのパスで攻め込んだ。こうなると腰高のチエは背が高いだけにどうしようもなかった。淑子とでさえ六分四分にボールを取る睦子は、チエを問題にできなかった。前半僅かにリードした淑子達も、後半は一方的に押しまくられた。

「ジャンプは腰が高くちやできないわよ。もっとぐっと腰を落とさなきゃ。あんたはあたしと違ってふとる性質かも知れないから、そうなたらおしまいよ。」

試合後、睦子がそう云った。

バスケットのメインイベントは秋に集まる。他の競技と異なり、バスケットには雨天が無かった。梅雨の期間も屋内の設備があるし



晴れていたって同じだった。男子の学校と違ってロードワークには出なかったが、山崎先生の指揮で、縄跳びや実戦的なドリブルの練習は欠かさずやった。縄とびのリレーや、耐久競争や、椅子をジグザグに並べたり、コート周囲を廻って来るドリブル競走を屢々やった。敗けた組は運動場10周の後に跡片付をしなければならなかった。

練習後の部員達は誰彼なしに、娘達特有の健康な汗の香りが立籠めて、ムンムンする程だった。美代を始め横着な上級生は部室で肌を拭いて着換をする。高校生ともなると胸や腰はかなりの豊かに成熟した者もいるから、チエには眩しいものを見るように恥ずかしい。

「睦ちゃん、こっちで着れば早いのに。」

「お合憎さま、私、スマート過ぎて、お見せするような肉体じやございませんのよ。」

「残念でした。フラれちゃったア。」

わアッという哄笑に微笑みながら、睦子は更衣室へ行く。タオルを首からかけた後姿は、すらっとしていたが、然し、緊った肉付の見事な肢体であることをチエは知っている。更衣室へタオルを届けに行った時、びくっとして肌を覆った睦子、そしてチエと識ると安心して肌を拭っていた睦子は、全く無駄のない鍛え上げられた魅をしていた。

「小学校の時からスポーツやってると、ふとる暇もないのよ。やんなっちゃう。」

チエは睦子を素敵だナと思った。

荷物は部室へ置いておくから、わざわざ更衣室へ行くのは余計な手間のようでもあったが、睦子や淑子や下級生の大部分は凡帳面に

更衣室で着換をした。チエは少し練習をして行きたかったのでタオルで汗を拭いただけで着換えずにいた。先に着換えた美代達が、ミーティングまでの時間にスタイルの自慢を始めた。美代はグラマーぶりを誇って一寸気取ったポーズを作ったが、他の三年生からひやかされた。居合せたチエは誰が一番綺麗かと訊ねられて、思い切って云った。

「わたし、宮部さんが一番いいと思います。」

「駄目よ。やせっぽちじや。」

「いいえ、宮部さんてやせっぽちじやありません。この辺なんかモリモリしてます。」

「アア、あんた、睦ちゃんの裸、見たの？ふうん。」

チエはお熱だとかSだとかいう言葉を初めて聞かされて面喰らった。睦子にそっと尋ねたら、「馬鹿ねエ、そんなこと知らなくてもいいの。」と優しく睨まれた。

一学期の学年試験が終って強化合宿の予定が組まれる頃になるとチエの動きはかなり睦子に似た処がふえて来た。合宿の中心メンバーは15名で、それに洩れた部員は自由参加として2週間のトレーニングを積むのだ。一年生でもチエが選ばれるのは、決定的と思われる。だが発表されたメンバーにはチエの名が無かった。チエは睦子の前に立った時、口惜し涙が不覚にもポロポロとあふれた。

「どうしたの？」

「わたし、どうして駄目だったんですか。」

「あ、合宿のこと。ね、あんた、今度の試験、悪かったのね。」

睦子はズバリと云った。

「成績の悪い人は部の活動よりまず勉強よ。本来なら活動停止だけど、まあ一年生だし、夏休みだから大目に見とくのよ、それに一年生じや一人も入っていないんだから文句ないでしよ？」

「そんな、酷い……」

「うるさいっ！」

リストの利いた凄腕の平手打だった。忽ち両の頬がカーッと熱くなった。

「ブウブウ云うんじゃないの！」

だが、三年生は睦子、美代、淑子のほかは大学受験や就職準備に追われ二人しか参加しなかった。二年生が八人だったから13人しかない。それに自由参加が10人程の予定だった。結局山崎先生の指令で二年生一人とチエが追加され、合宿に出発した。

「勉強道具忘れるんじゃないのよ。何の為の部？水臭いマネすると抛り出すわよ。」

睦子にいわれて、スーツケースに教科書を詰めてチエは下宿を出た。

合宿は内房の海岸にある女子高校を借りた。卒業生の前田和子と鈴木利子がコーチに来ていた。山崎先生以下総勢30名近い合宿は、実に賑やかだった。

起床後、山崎先生を先頭に海岸を走り、体操をして帰ると朝食。午前はトレーニング、午後は四組に分れての実戦的練習である。

睦子以下三年生5人に一年生2人を混ぜたチームを山崎先生が指揮した。前田組は二年生4人とチエ、鈴木組は二年生5人、そして山崎先生自身も残りの一年生のチームに入ってゲームを楽しんだ。夕食後一時間位ミーティング。

チエはランニングシュートの要領を覚えかけて来た。小さなドリブルからパスと見せかけてのシュートも入るようになった。ノッポだけにシングルハンドのシュートはかなりの威力を見せて来た。前田コーチはチエにつきっきりで怒鳴っていたし事実、鈴木組や山崎組に対してはなかなかの活躍を見せていた。だが流石にレギュラー組は強かった。淑子はチエの右から右からと攻めて来てシュートをさせなかったし、睦子はかぶさるように腕を拡げて巧みにチエックする。少しボールを持ちすぎると美代達に烈しく叩き落とされてしまふ。

「横へ走るのよ、横へ！」

鈴木コーチも怒鳴る。チエは左へ走りながら躰を捻ってのシュートを憶えた。

学校の中に特設された据風呂を当番を決めて毎日立てる。

山崎先生が入ったあと鈴木コーチが入った。鈴木コーチはチエを呼んだ。

「黒ちゃん、妾の背中流してよ。」

大学三年の利子は立派な躰をしていた。レギュラー時代はフオワードで鳴らしたもののだが、キビキビした動きは一向に衰えなない。

「手を出して御覧。」

利子はチエに握手を求める。

「痛ア！」

凄い力で握られて、チエは悲鳴を上げた。

「あんた握力が弱いねエ。駄目よ、それじゃ。今度は腕をのばして。」

利子はチエの手首を掴み、外側へギリギリと絞り上げた。チエは

ぎゅっと歯を喰縛る。

「さ、ふりほどいて御覧なさい。」

だが駄目だった。捻切れそうになるし、第一力を入れようにも干切れそうに痛かった。チエはそれでも5分程頑張ったが、腕が真白になって来て、とうとう泣声で許しを乞うた。

「あんた、やせてもいないのね。」

チエ自身も胸やお腹に肉がついて来たのを意識していた。もう少し肉附が緊ってもいいナとは思うが、然し、何となく嬉しかった。「それに凄く色が白いじゃない。綺麗な肌、手足が黒いから何だかおかしいわね。」

利子と一緒に浴槽に沈んで、チエは恥ずかしくなって、ニコツと笑った。湯上りに淑子を呼んでチエと握手をさせた。チエはまた悲鳴を上げさせられた。次に利子が淑子の腕を捻ったが、淑子は一瞬にふりほどいて、擦れた手首を撫でていた。一見弱々しそうな淑子の腕にビーンと精気が漲って鋼のパネのように利子の力を弾き返すのを見て、チエは驚嘆した。

「肘を張ってちや、シュートはできないのよ。腕の返しと手首の力が第一なのよ。」

チエは凄いと思うばかりだった。

先輩の人達と起居するうちに、学科や日常生活についても得る処は多かったが、それ以上に、その人達の総てがバスケットに結びついていることは驚くばかりだった。コーチの利子は流し場に決して膝をつかずにいたし、山崎先生はお酒も煙草も近づけなかった。美代はいつも爪先に体重をかけて歩いていて。或日の夕暮、海岸の砂

の上に四、五人で並んで坐っていた時、淑子が頼りに砂を掴んでいた。握力を強くするのだと前田コーチが教えてくれた。

それぞれに個性に富んだ人達の中で、チエはやり睦子が一番尊敬していた。立居振舞が余裕綽々で而もダイナミックなのだ。声は静かなアルトで、ヘヤー・スタイルは無雑作なうちに清潔なものだった。セシル・カットが流行する以前からのボーイッシュなファッションがぴったりの人だった。チエは真似しようと努力していたが睦子の言動の特徴を掴むことは容易でなく、歩き方すら似て来なかった。

コートの中でレギュラー組と鈴木組の動きをコーチの和子が批評してくれる。

「キャプテンの動きはいつも半歩早いでしょう？ 右へ行く時は右足から、左へは左足からってというのが基本でしょう？ 基本に忠実だとあれだけ違うのよ。二年生と比べて御覧なさい。」

右へは右から、左へは左からと、反芻しながら、チエははっとした。自分と睦子の歩き方の違いが分ったように思った。睦子が脚を交叉させるのを見たことはない。淑やかに見えるのはいつも左足を半歩引いているからか、爪先をびったり揃えているためと思い至って、チエはやはり睦子を偉いナと思った。

睦子の優れた点は、左手が殆ど右手同様に利くことだった。だからかなり無理な崩れた姿勢からもシュートやパスが適確にできる。「当り前じやないの、馬鹿ねエ。センターが左手使えなかったら、初めっから負けたようなもんじやないサ。」

睦子はチエの讃辞に呆れ顔で応えた。

合宿のトレーニングはきつかったが、しかし楽しい日々だった。

海岸へ来て海水浴を禁じられているのは辛かったが、それ以外は申し分なかった。コーチの和子や利子までを含めて四人ずつの食事当番があったし、勉強を見て貰ったり、トランプをしたり、歌を唱ったり、散歩をしたり、洗濯や掃除やお喋りをしたりして、チエは部員の誰彼とも親しみを増した。最後の日は皆で鋸山へ登って来た。九月早々に各ポジションの登録がある。これは対抗試合のメンバー十名の選定で、余程の事故が無い限り変更はされない。勿論学校の内部的問題だが、これに入らなければ結局対外試合は新人戦のほかに小さな行事に限定される訳だ。競争は激烈で、全国制覇を狙うチームとしても帰京後の一カ月余を無為にはできず、毎日登校して練習を積むのだ。チエは十人の内に入りたかったし、センターは睦子だけだったからかなりの希望を抱き始めた。

「わたし、センターに登録されるでしょうか。」

帰りの汽車の中で、チエは睦子と陽焼けした顔を向き合せて訊ねたが、睦子の返事は素気なく、チエの希望を粉碎した。

「さあどうかな。妾が健在でしよ？ それにヨッちゃんもセンターへ廻れるし、今ん処困らないものネ。足りないのはフォワードなよネ。」

「一生懸命やって左が使えらようになって駄目でしょう。」

「誰？ あんたが？ うーん、ま、いいでしょう。左が使えればネ。」

チエは何でもいうことをきくからといって、左手が利くようになるコーチを頼んだが、睦子は気の無い返事をしていた。

チエは膝がガクガクしていた。呼吸が苦しくなって咳込みながらヨロヨロ走った。睦子がスピーディなドリブルで追いかけて来て、

すぐ背後から力一杯ボールをぶっつける。

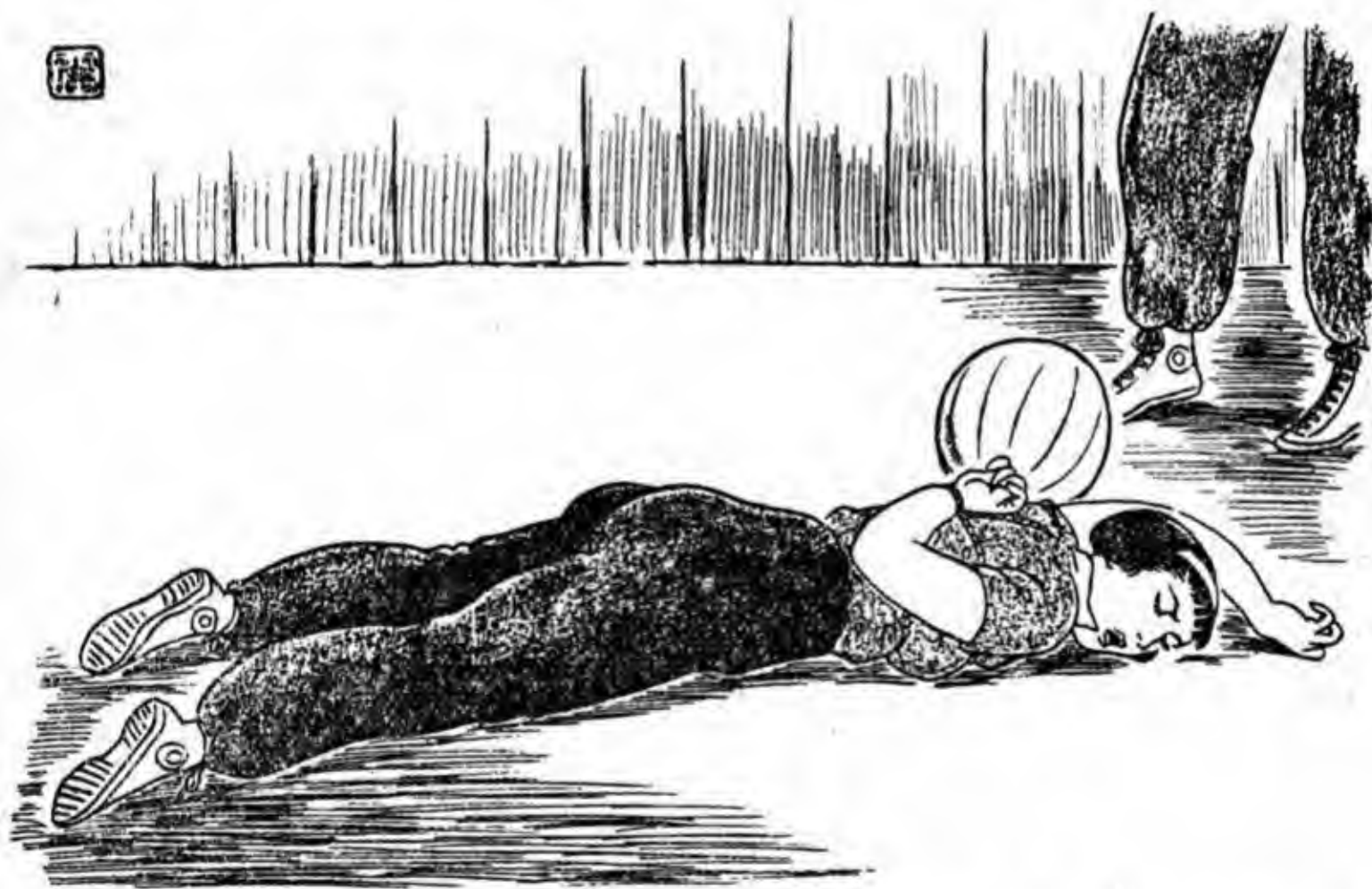
びいん！ ああう！

チエの長身が重い衝撃にのめる。左手を支えて蹲り、また立上って走り出す。自由なのは左手だけで、右は背中に高々と留められていた。ブルーの半袖シャツに紺のトレーニングパンツのチエは縄跳の縄で縛られているのだ。

両手を万歳型に上げさせて、チエの胸乳の上下を縄で巻いた睦子は、チエの右手首を高く吊上げて背中に固定した。

「こんな色の物を着て縛られると、お黒、何だか囚人みたいじゃない？」

睦子にいわれてチエは恥ずかしく悲しかった。体育館の真中に、チエは無力感を轟々と味わいながら立った。睦子はそんなチエに容赦なく力一杯のパスを送る。それは送球というよりボールをぶつけるという方がよかった。胸を使って抱えるようにしなくては、チエは左手でボールを捕れなかった。睦子のボールは重かったから、胸の芯まで響いたし、そういう捕球は肋膜に危険だった。勢いチエは逃腰になり、後からボールに追われる。ヒップに当てられるのはとても恥ずかしかった。背中を狙われると肋膜が恐ろしいが、そ



れは捻上げられた右腕で防いでも、指を握っていないと突指の心配があった。

面と向うと割に離れて投げてくれるが、背を見せて逃げるとすぐ近くまで、睦子は追って来て叩きつける。もう何十回ぶつけられたろうか。前からも後からも数え切れない打撃に遭ってチエはフラフラだった。ハアハアという呼吸がフッフウとなり、ゼーゼーに変わった。

びしん！う——。

チエは両膝をついて坐り込み、次の瞬間、前のめりに背を丸めて倒れ伏してしまった。後姿が躰全体で荒く呼吸しており、傍に立った睦子も前髪が額に貼付く程の汗だった。

シュートやパスをするのに両肘が突っ張るからと睦

子は厳しく叱った。チエの肘の上を30糎程の間隔にしっかりと繋ぎ留めて、睦子は激しくチエを走らせ、ボールを追わせた。腕の強い屈伸と軀全体の反動を使わなければ、この拘束ではシュートができなかった。手首の強さや一本々々の指の強さが、必要に迫られて増して行くようだった。

練習が始まる時、チエは睦子の前に立つことが何か気恥かしく、心が重かった。いくら厳しい訓練を望んだとはいえ、妙令の乙女が罪を犯した人のように縄を受けることはたまらない気持だった。まともに睦子が見られず、いつも顔をそむけたり、眼を閉じたりしていた。反面、それは忘れ難い強烈な刺激だった。独りである時にはともすればボールを手にした睦子に、追い立てられるように歩く長身の被縛の姿を思い浮かべてみたりする。

本当は、自分ももっと酷い目に遭わされたいと思ってるんじゃないだろうか？ そんな疑問も起って来る。現実にはトレーニングだから腕の屈伸は勿論許されるけれど、頭の中の自分の姿は大体両腕を背中に捻上げられて、ギューギュー締つけられている。そして衆人環視のコートの真中へ曳出されるのだ。

「済みませんじゃないわよ！」

「あんたの為に負けたのよ。」

「それだけの軀して情なくないの。」

「バカ！ 間抜け！ ウドの太木！」

口々に罵る声がチームの全員から起る。パシッ！ パシッ！

憎悪が一杯に籠った力任せの平手打がチエの両頬に往復し、眼もあかぬ程にカッ／＼と熱く脹れた。哀願など及びもつかなかった。

学校中の視線の指弾を受け、チームの全員が校庭に土下座していた。ミスばかり続けて直接の敗因となったチエは、額を地面に摺りつけたまま大勢の嘲罵を受けて真蒼になっていた。当然と予想された優勝を逸しただけに、チエに対する学校中の憎しみは消えず、群衆によってたか／＼縛り上げられ、パレードの先頭に立って引廻された。興奮した群衆は怒りが鎮まる処か、愈々激昂して、パレードを相手校の校門にまで進め、チエの体を戦利品として与えてしまった。勝利に酔いしれる相手校は大喜びで敵方の長身のセンターを校庭に曳きずり出し、真中にボールを立ててギチ／＼と縛りつけた。それから毎日毎夜、チエは引出されては捕虜として奴隷として、凡ゆる恥ずかしめを受けた。

「何ぼんやりしてんの？ お黒は妾の囚人なんだから、サボると酷いヨ。」

睦子の声にチエは幻想を破られた。睦子は縄をグイッと引っぱった。

「ああっ！」

「練習々々、あんたには手加減しないんだから。早く歩くのヨ。」

意地悪く縄尻を曳かれながら、チエはコートまで首を垂れて、トボ／＼と歩いた。現実と幻想が再び混和して、チエは頭がボーッと立った。立っているのが苦痛で、もし睦子が背を小突いて歩かせなければ、ヘタ／＼坐り込んでしまいうさだった。ジンと疼くようなものが身内を襲ったからだ。

—— 国体もうじきだワ——

そんな突拍子もないことがフツと思ひ浮かんで、チエは右手を縛られたまま、睦子と向い合って立った。

(未完)

藤山秀緒

男装女腹切と私

中康先生へのお答を中心にして

告白

地方のお仕事を終って、待ちに待った奇く
を手にした私は、自分の作品に附いている挿
絵を先ず見ます。五月号の雪子の絵は、眼を
見開いた苦悶の様子、乗馬ズボンの太股へ流
れる血汐の色など、とてもよい出来だと思ひ
ました。でも飛行服の方に挿絵がなかったの
は一寸寂しかった。

また、中康先生の「切腹研究夜話」で私の
事にふれていらっしやいますのを拝見して、
複雑な気持ちになりました。

それというのも、私が特異な、本当に特異
な性格の持主だからです。日常の生活は、明
るい、むしろ、いつまでも娘のような立居振
舞なのですが、一日のうちに、何度か、云い
ようもないめまいと、発作のようにおこつて
くる激情のために、その時は人が変わったよう
に凍々しく、また時にはあさましく、はした
ない態度をとったりするのです。

中康先生は、「強度の欲求不満が一つの精
神葛藤となつて、あのような描写を生み出す
のではないか、」と仰言いましたが、私が男
ではないかというお説と共に、私にとっては
いろいろ考えさせられるお言葉でした。

私の欲望に悶える姿を、ここに詳しく発表
する事は差控えなければならぬでしょう。

でも、男仕立ではあつても、ササールコー
トを着、前ボタンのつかない乗馬ズボンを穿
いている私が、「男性です」と再び皆様を欺
くことは不可能でしょう。

そこで私は、中康先生の御質問を機会に、
私の、この世界への開花の動機を素直に申上
げて、皆様の御理解と、先生の御教示をいた
だきたいと思ひます。

私は、いまでは、こんなお仕事をやるよう
になりましたが、戦争中は青山に住んでいて
本当のかたぎの家庭に育ちました。

母は、その頃から、ズボンをはいて居るよ
うな女性でしたが、丁度、司葉子さんと高倉
みゆきさんを寄せあわせたような顔だちで、
ごくおとなしい性格でした。

そんな、おとなしい性格の母が、いつも、
ズボンをきき、レインコートも男仕立てのキ
リッとしたものをがばつと着こなして、口数
もすくなく雨の街へ消えて行くのを、憧れの
ようなものを感じながら見送っていた私。

母が、どのような秘密を持っていたのか、
私には、いまになつてわかるような気がする
のです。

母は、乗馬もしないのに、乗馬ズボンを持

っていて、戦争が激しくなり、空襲警報が、頻りに発令されるようになる。と好んで穿き、編上げの革長靴に身を固めるのでした。

青山に昔お住いの方があれば、何かの時に母の男装を見かけられた方がおいでになるかもしれません。とても凛々しく、美しい姿でした。軍需工場に関係していた父は、殆ど、東京を離れていましたし、やがて私も挺身隊に入って神奈川県へ行ったので、母は、祖母と二人、留守宅を守ることになりました。から御近所の方も、男まさりの健気な奥さんという事で、母の男装も変な目では見られずすんだようです。

やがて空襲が激しくなり、そして私の留守宅も全焼してしまいました。

母は、自宅の防空壕の中で、祖母を抱いて死んでいました。火傷はなく、熱風で窒息死したのか、いつものように男仕立の作業服に乗馬ズボン、編上ブーツ、鉄兜、防空頭巾など、完全武装の姿で、歯をくいしばっていました。

私は此の時の母の苦悶の姿が、焼きついたように脳裡から去りませんでした。

家が焼けたので、何一つ、母の倒錯的な性

格を裏付ける品物は残りませんでした。

……でも、こう云う事は云えるように思います。

父は正常な性格の持主だった。

だから母は、私を産む頃、もうすでに強度の欲求不満に喘いでいたのではないかと云うことです。見合い結婚ならば、あり得る悲劇ですが、のちに、私自身が、恋愛の末の結婚に破れた時の、私の夫を思い出すと、「因果はめぐる」と云う諺を思い出します。私の夫は、私の性格を、深く理解して結婚したのではなく、「女」としての私にプロポーズしただけであつたので、ここにも私の強度の欲求不満が、男装マニアとして、私をその虜にしてしまう必然性がしのんでいたと申せましょう。

私は、正直に申し上げると、本誌のために私が切腹マニアであることを知らされてしまったのです。感謝しています。本誌がなかったら、私は、自分の、人並はずれて激しい欲求の嵐を一体どうして切抜けることが出来たでしょう。

私が読みはじめたのは「女腹切八景」からでした。中康先生の切腹史談も、胸をときめかせて読みました。或る雑誌の「女ハラキリ

特集」というものも買いました。

そして、これが、母の断末魔の苦悶の姿と結びつき、私の親ゆずりの倒錯的な男装癖が加わり、私を創作へと駆りたてて行ったのです。

私の本誌へのデビューは、「飛行服姿の女腹切」と、「乗馬ズボンの女腹切」ですが、この二つは、まだ文章としての形もなして居らず、また、女の身で、このような事を書くことが、もしわかつた時の恥かしさを思つて「秀緒」と、男名前にしてみました。

男名前の原稿を前にして、何度も読み返しているうちに、私は次第に本当の男になったような錯覚をおこしました。

その後、一時本誌が書店から姿を消したので、わざとズベ公のような服装をして古本屋をあさり旧号をみつけては僅かに自分を慰めていましたが、それでは足りず、大学ソートにぎっしり、物狂わしい文字が、書きつらねられるようになって行つたのです。

この期間には、絵もかきました。写真も蒐めました。そして、亡くなった父の遺産を、兄と処分して、私の分は自分で運用することにして、兄の家を出たのを幸に、先輩の家や知人の家を泊り歩きながら、自分の妖しい激

情を発散させるのにふさわしい住居を探し歩いたのです。

恋愛し、夫に夢中だった一年間を除いて私

は、ずっと孤独でした。私は劇団に籍をおいて、モデルやダンサーにもなりましたが、結局、男性に興味を持つことができませんでし



た。私は、充たされぬ想いを、女腹切りのイメージにもとめ、物狂わしく筆をとりました。テーマがきまれば、何十枚でも一晩で書きました。

本誌が復刊され、個人の秘密が保障されることがわかると、私は、矢も楯もたまらなくなりしました。原稿用紙に書かれたものは、私だけの楽しみです。きっと、この広い世界のどこかに、同じ悩みを持った方が居られるにちがいない、その方に見ていただきたい。そして、これが、美しい挿絵と一緒に活字になったら、どんなにすばらしいことだろう！「続乗馬ズボンの女腹切」は、こうして、私の沢山の作品の中から、いわば本格的な自虐の記録として送り出された、最初のものなのです。

そして、「女武者自刃」「続々乗馬ズボンの女腹切」「オートスタイルの女腹切」「燃ゆる男装」「探険服姿の女腹切」と、矢継早の送稿に、編集部もヘキエキなさったのか、私の燃えるような想いにもかかわらず、次第に取扱いはお粗末になり、漫画同様のさしえが、申わけのように附いて片隅に息をつくだけの有様となってしまいました。

私は、がっかりして、もう止めよう、と思

いました。——でも、その傷心の私を救って下さったのは「読者通信」の寄稿家の方々でした。

近藤一様、法谷四郎様、東一郎様、山形の高橋様、藤山党様、等々の方々。御本名ではないにしても、まさしくそのような方々が、私の作品を喜んで下さっている。

私は、それをたよりに、灼熱の乗馬ズボンを選び、深夜ペンを走らせつつづけました。

激情をたたきつける荒々しい文章、それを公開できる範囲に清書して送稿する労力は、本当に皆様の御想像もつかないほどに苦しいものです。でも、私は、自分に鞭打ってがんばりました。この苦しみが、刃物を用いぬ切腹の感覚を呼び起してくれました。

私は、どんな長いものでも、一晩で書きあげます。夫が申しました「女なればこそ、書きつつけられるのだ」と。

私は、情感のスピードが私の描写では男性にはついて行けぬという事だと思いました。事実、私の切腹描写は、うねうねと粘りつく、これでもか、これでもかとのたうちつづけるので、到底男性のお気には入らぬものと思います。

それなのに、男性の方からはばかり激励のお

たよりをいただくのは、女性の方には、いまの本誌は手に入りにくいからではないかと思えます。かつてのように、賤機様、瀬川様など、立派な作品をお寄せになった方々が、私の作品を批評して下さいたら。と、そんなことを希っているのです。

中康先生も仰言るように、私は特殊なマニアです。先生は、「いたましい」と仰言いましたが、このお言葉に私は全身をしびれさせ、何度も読み返したことでした。

「いたましい」

これこそ、衆人環視の中で、切腹する者の心に通じる言葉ではないでしょうか。

私は、こんな恥しいことを書きつつけていますが、中康先生のお作の中で、「いたましい」を云つていただいた事に満足しました。

あわれな倒錯者、男装マニア、切腹マニアそして乗馬ズボン、フェティスティン、サドでありマゾでもある女……、このような複雑な性格が、あの切腹描写を絞り出すのだと申上げたら、私の稚拙な文章も、きつとおゆるしいただけるではないでしょうか。

私の作品が、男性の作品のように思えるのは、私の中にひそむ母の遺伝子が、男性化願望の悲願を呻きつつづけているからだと思いま

す。今も目にのこる母の男装は、私に乗馬ズボンのセクシイな魅力を教え、そして、灼熱の防空壕に女ざかりを散らして行ったその瞬間の妖しい歓びを、私に暗示しているようです。

乗馬ズボンが、決してサディズムだけの象徴ではない、ということとは、度々私が申上げて参りました、好んで穿く乗馬ズボンには、もちろんサドへの連想が、脈打っています。でも、あの乗馬ズボンと長靴の拘束感は、サドへの連想を断切っても、立派に生きています。手段としての乗馬服姿ではなくて、目的としての乗馬服スタイルです。

あのごわごわとした生地感触、きっちりとした胸をしめつける細身の仕立て、重い長靴、どれをとってみても、足カセにひとしい緊縛感です。馬に乗らぬ母の乗馬服への執着は、娘の私に、その秘密を、血液の中で教えてくれるのです。

しかも、乗馬服を着る女性が、何かの事情で、やむなく雄々しい決意のもとに身を固めるとしたら、あられもない男装の恥しさ、目的をとげるための要求の厳しさが、私に妖しい感情を催させずにはおかないでしょう。

猛獣使いの女性の乗馬ズボン姿、オートバ

イ曲乗りやオートレースに欣然とスタートする女性の乗馬ズボン姿は、乗馬クラブで趣味のために馬を駆る女性の乗馬服姿とは、比較にならない迫力をもっております。これをしなければ生きられない、ぎりぎりの枠の中で乗馬ズボンを穿いているからです。

新東宝の高倉みゆきさんが、「戦雲アジアの女王」や、「女間諜曉の挑戦」で、乗馬ズボンを穿いた時も、スターダムに、はい上ろうとあかく高倉さんの悲壮な決意が、その乗馬ズボン姿を一層あわれに、美しいものに見せています。

私は、はじめ母に似ているので、高倉さんに興味を持ちましたが、いまでは、あの方のぎりぎりの線を意識させる、マゾ的な演技にしばれを感じるようになりました。そして、その「いたましき」こそ、切腹を傍観する者の心理と通じるのではないのでしょうか。

スーザン・ヘイワードの「私は死にたくない」を見て、あの残忍なガス死刑の描写が、私の女腹切りの描写と、少しもちがわぬ粘っこさであったと思い、あそこまでの、筋は兎も角、公開の場所で、一人の女が、衆目の中で、のたうち、あえいで悶死するあのような残酷なテーマが、堂々と通用していることに驚

きの目を見張りました。

死刑についての是非を考えさせられる。というところで、社会悪を検討する資料として、あの映画を推せんした方も多いようですが、描かれているところは、長々としたヘイワードの悶死です。そして、そのためにあの映画が作られたことは明白なのに、なぜ死刑の是非論と結びつけねばならないのか、私には分りませんでした。なぜなら、ガス死刑の是非と死刑そのものの是非は混同されるべきではなく、また観客も、美しいヘイワードの、のたうつ姿を鑑賞するために集まっているように思えたからです。

あのような映画が白昼公然と上映される以上は、本誌の切腹物の残酷さ、凄惨さなど、ものの数ではないに違いありません。本誌はもっと大胆に、大衆によびかけるべきではないのでしょうか。そして女性が買いにくいような販路を改め、拡げる御計画はないのでしょうか。タータンチェックのストラックスに、カーコートでも引掛けて行かなければ、恥しくて買うこともできない今の販売方法は、何とか改めて下さいませ。そして、復刊当時の本は、仲々手に入りにくいものですから、せめて、その頃記事だけで、のせなかった挿絵

などを、口絵の中にませて、旧号への索引になさっては如何ですか。再録についても、同好の方々の為に、秀緒は喜んで御協力いたします。

そして、挿絵ももっと、いたましく、そしてセクシイなものにして下さいませ。私の創作欲は、挿絵への期待にかかっていると云ってもよいはずです。

私は悪い女です。中康先生が畢生のお仕事としていらっしゃる切腹を、自分の欲望を充たすための卑しい道具に使っています。何と叱られても返す言葉はございません。でも、先生おゆるし下さい。秀緒は、この若さが、つづくかぎり、乗馬ズボン姿で腹を切りつづけることでしよう。男装マニアの母の血をうけ、人一倍多感な私の倒錯癖は、所詮先生とは平行線を辿ることでしょう。でも私は尊敬しています。そして、私の母が、乗馬ズボン姿で、立派に切腹してくれていたなら、私の人生観も先生のそれと同じであったかもしれない事と思ひ先生の御健康をおいのりせずにはいられません。

x

x

(終)

レーゼ・シナリオ

朱天童次郎無頼控・第一話

地獄の美女

明 築 野 海

○ 水面

しずかに、よどんでいる水面に蒼くふりそそぐ月光。

その水面に橋の欄干と、それにもたれてゐる人の影が写っている。

○ 橋の上

寂として静まりかえった橋上。その欄干にとりついて動かない武家娘の姿——。美代である。

○ 橋の袂

あるかなきかの風にゆれる柳の葉を通し

て、佇んでいる黒羽二重着流しの浪人者、朱天童次郎。腰に一升徳利を下けている。

童次郎は、むしろ興味深い見世物として、武家娘の自殺するのを見物しようとしているらしい。……やがて……千鳥足で静かに歩きます。

○ 橋の上

近寄ってくる人の気配に美代が、ハッと瞳をむける。

童次郎 おい、いつ飛び込む。

美代 ……。

童次郎 死ぬのは、そんなに怖いか。

美代 ……。

童次郎 (微笑して) 怖くなければ、やってみる……何なら、拙者が教えて仕わそうか……。

美代 怖くなんかございません。

童次郎 ……然し、あなたは先刻から、二度も三度も飛び込みそうな様子をしていながら思い止まっているが……。

美代 私が、ここで、何をしようと、貴方

様には、何の関わり合いのない事で

ございます。

童次郎

そうは参らぬ。真夜中に、若い美しい娘が橋の上から身を投げる……やがて土佐衛門となつてポツカリと水面に浮ぶ。髪も、裾も乱れて、白い両足が……まあ、この味は、浅草や両国の見世物では見られぬ味だからなあ。（と、微笑する）

美代

貴方様は、本当に、私が此処で死ぬのを見たいと思つていらつしやるのでございますか？

童次郎

武士に二言はない。

美代

まあ……。

童次郎

とも角、するなら早くして貰いたい。でないと見物している拙者は、風邪をひく恐れがある。

美代

普通のお方なら……誰かが死のうとしていれば、とに角、一応は止める筈でございます。

童次郎

ほう……止めて貰いたいのか。

美代

……。（唇をかむ）

童次郎

何だ、つまらぬのう。

美代

（口惜しげに）いいえ、今、見せて上げます。

と、欄干に手をかけて、水面を見る。

童次郎

（かぶせる様に）では、頼む。早くしてくれ。死にたい奴を、止めても致し方がないからのう。

だが、美代は、凝と、水面を覗めて立ちすくんでいる。

童次郎

——（やがて）成程のう。勇ましいもんだ。

美代

……。

——急に袂で顔を掩うて走り去る。

童次郎

（見送つて）あの娘も、う、そつき野郎の一人か……死ぬ気なぞ……始めからない。

浪人姿の渡辺綱九郎、源氏頼光がくる。

綱九郎

おい童次、何を見ている？

童次郎

いや、別に……。

頼光

（疑い深く）おい童次……貴様一人だけで、商売する様な事は、止めて貰いたいな。

童次郎

……何の話だ？

綱九郎

やぶから棒にいつでも判らねえだろうが……いつもお前は俺達二人をほうずき長屋へ置いたまま、何処かへ行って仕舞うのな……この頼光の奴が、こういうんだ……殊によつたら童次の奴、俺達二人に何か隠し事

でもしているんじゃないかと……。

童次郎

それで……。

綱九郎

それで……まあ童次、別に悪い気があつていった訳じゃねえ……。三人組でゆすり商売を始めて、そのうちに何かいい儲け口が見つかる。他の二人に分け前を払うのが嫌になる。出来れば一人で甘い汁を吸いたい、なんてのは良くある事だからなあ……。

と、けらけらと笑う。

童次郎

身投げを見ていたんだ。

綱九郎

身投げ？どこで？

童次郎

そこだ。

綱九郎

死んだか？

童次郎

やめて仕舞ったよ。

頼光

女か……。

童次郎

ああ……。

綱九郎

美人か……。

童次郎

まあ……な。

綱九郎

身投げを救けるには、いい月夜だなあ……こんなきれいなお月様の下で何だって死のうとしたりするんだ。お前が死んだって誰が喜ぶものか、死んで花実が咲くものか……なんて



ね……そう
いわれて見
ろ、大てい
の女は死ぬ
のが厭にな
るだろう……

頼光

(疑い深く)

童次、お
前、そんな
事をいった
のか？……

童次郎

いわないね
え……

綱九郎

何故、やめ
たんだろう

童次郎

死にたくな
いから……
唯それだけ
の事よ。

と、吐きすて

る様にいう。

○ 路

美代が、そろそろと歩いていく。

人家が途切れて、野中になる。

と、チャラチャラと雪駄の裏金が追ってく
る様で、美代が思わず立止る。

「お待ちなされ、これ、美代殿、お待ちな
されと！」と迫った調子で、喘ぐ。

美代は、ハッと思った風で、かまわず走ろ
うとしたが、時遅く男の腕が美代の肩を押え
る。

甚佐 美代殿！拙者だ！用人の横川甚佐で
ござる。

と、美代を睨み据えるように見る。

甚佐 父上の御高恩を忘れ、何でお屋敷を
お逃げなさる。その為の父上の御迷
惑が判かり申さぬか……

美代

……

月の光にうなだれた、白い、萎れしおかかった
花の様な立姿。衿あしの――。横顔の――。
その、悩ましき、艶めかしさに――甚佐の目
が急に情念を帯びてくる。

甚佐 (唾がたまった、もつれ舌で) 美代

殿！

美代

えッ？

と、何か異常なものを感じて、つと、肩から甚佐の手をはなす。

甚佐 そなたの気持が、まん更判らぬ拙者でもござりませぬぞ。それにしても

日頃、何くれと面倒を見て差上げる用人の拙者に、何故、一言相談して下さらなんだ——残念でござるぞ、美代殿。

美代

(屹と) 何を仰有います?……。貴方こそ、父上にすすめて、自分の栄華を遂げる為に、私を柳沢美濃守様へ、人身御供に上げさせ様としたのではありませんか!

一瞬、甚佐の顔が、痙攣したたが、すぐふてぶてしい表情になる。

甚佐

それも皆、美代殿の栄達を思えばこそのこと。恐れ多くも將軍家には、柳沢様の御屋敷へ御成りの数は、表向きの他にお微行しゆぎを入れたら数知れず。されば美濃守様の御下屋敷に入つて、上様御成りの其時に、御目に留まれば一足飛びに御部屋様にもなれるのでございますぞ。その暁には美代殿の栄耀栄華はもとよりの事、お父上の青地三太夫様の出世のいと

口とも、なるのでございますぞ。さつ美代殿、悪い様には致しませぬ。

と、つと近寄つて美代の手を握る。

美代

おはなし、お、は、なし!

甚佐

騒がれるな。そなたを、どういたそう? まま美代殿、落ちつきなさい。

美代

お、は、な、し——。

美代は夢中で、身をもがく。

美代

お、は、な、し——。

甚佐

これほど申すに——。

と、甚佐の声も荒ッぱくなる。

甚佐

何も、その様に、怖ろしがるには及ばぬ……。何で拙者、そなたに危害を加えよう……。それよりも……。

と、ぐいと握つた手を引く。

美代

あつ!

と、もたれる美代の体。それを、そのままぐいと両手で抱き擁めるとグーと力が入る。

美代

は、はなし——!

美代は激しい嫌悪に、腕の圧迫の中で、悶える。

甚佐

な、美代殿。この甚佐、是非とも、そなたと、たった二人、人知れず、相談する事があるのじや……。

と、乾ひついた様な声。

甚佐の顎ひげが、美代の頬に触れる。

美代

あッ、あれ!

と、叫ぶ口を、甚佐の片一方の手が、ガバと塞ぐ。

甚佐

ええ、おしずまりなされ!、どうしても拙者の望みを、叶えてもらわねばならぬ!

美代

う、う、う!

と、でぬ声をだそうと、あせり、身をもむ

美代

美代殿! 拙者、洒落しやれに、物をいうて

美代

いるのではござらぬぞ!

美代

う、う、う!

と、なおも身をもんで、やっと、口を押えた手から自由になると

美代

う!、おはなし!、なさらぬと……

と、いつか、帯の間を、ワナワナとふるえる美代の手がまさぐって、懐剣にいく。

甚佐

いや、悪しうはせぬ……悪しゆうはせぬによって……。

と、甚佐はしつ、ように毒血を沸き立たせて

いる。

美代

では、どうあつても、おはなしなされませぬな!

甚佐は、せせら笑つて

甚佐

放さぬ、放さぬとも。だが、ちと、声が高い。さ、こう、ちと、我慢されい！

と、いきなり、美代の柔かい、身体を押しつけると、肩を膝で押え、懷中より手拭をだすと、ピリピリと二つに引さいて、その一つをくるくると丸めた。

美代

何をなさいます！

甚佐

ちつとの、我慢でござる……さつ、口をあかれい！

美代

あつ！あつ、あれ！

と、かぶりを振って逃げようとするが、遂に手拭を口につめられる。

美代

う、う！

と、必死に悶くのを、情け容赦なく、更にその上から、今一本の手拭で犂々と嵌める猿轡。

甚佐

さ、いい子になった。立って、立って、こう参られい！

と、美代を引きずって行こうとした。

その刹那。甚佐に猿轡を嵌められる間、懷

劍の紐を解いていた美代の片手が、さつと動いて、七首の鐙まで甚佐の胸元を突き刺す。

甚佐

わあ！

と、喚いて美代を突き放し、よろよろ、よ

ろめいて、しばし休えたが、やがてがっくりと膝を突く。

猿轡のまま、血に染みた懷劍を握りしめて

棒立ちに、見下している美代。

甚佐 おのれ——ようも——。

どうにかして、立ち上らんとするが、出来ない。片手を土に、もがき苦しんで、遂にぐったりと、のめって仕舞う。

——ウ、ウ、ワン、ワン——

早くも、野良犬の遠吠えがし始める。

すると

うむ。面白いな、こいつは面白いな

という呑気な声がして、一人の若者が姿を月の光りに見せる。

職人とも、遊び人ともつかぬ風体の、縞物の素袷の片褌をぐつと引き上げて、左手を弥蔵にした、業平小僧である。

業平

とうとうおやんなすったね。だが、お嬢さん、血の匂いに犬が跟きます

ぜ……犬だって美しい娘は大好きでござんすからね。

美代は、今は鬚の根も抜けた——後れ毛はほつれかかって、裾も乱れて、穿いているものも失くして、茫然としている。

犬ならずとも、行き合うほどのもの、怪し

みの目を見張らずにいられないであろう。

業平

さつ、そのなりで、夜道を歩いたら犬でなくとも寄って参りますぜ。ま

あ、あつしと一緒に来なせい。

と、気さくに近寄り、美代の猿轡をはずしてやる。

美代は、なすがままである。

○ 浅草八幡の境内

夕焼けに、大銀杏がすっかり黄金色に染つて、夕風にチラチラと散る。

祠前にぬかずいて、祈っていた町娘二人が礼拝終つて戻ろうとすると、大銀杏の下御水下で、手水を使っている娘がいる。

近頃流行の、黄八丈、黒縹子に緋鹿の子と麻の葉の帯と服装だけは、この二人の町娘と似ているが——。

町娘一

御覧よ、どこの人だろうね。あの恰好のいい、鬚のあがり具合たらさ。

と、

一人が慌てて連れの袖を引く。

町娘二

何て綺麗な襟足なんだろうね。あたしも、あんな髪に結って見ようかしら……。

町娘一

あの横顔……。憎いような器量だねえ……。

と、

囁き合っていたが、突然

町娘二 あっ！柳沢の……。

と、何を見たのか、悲鳴を上げて逃げだした。

羽織袴の深編笠の武士が、三人、美しい娘の背後に近寄っていくからだ。

○ 茶店（昼）

床几に腰かけて、若者が二人何か話し合っている。

若者一 昨日も、八幡様の境内で、美しい町娘が、二本差に拐かされたというじやねーか。

若者二 どうせ碌な事のねえ御時勢とはいえよ、美しい娘の消えたり、拐かされたのは俺のしっているだけでも、確か十一人……江戸にや、町奉行、寺社奉行、その下には与力同心、有象無象が沢山いて、どうにも出来ねーとは情けねえ。天下の御政道も大曲りだ。

若者一 おい、そ、そんなに大きな声を……
若者二 だって、そうじやねーか。犬で、さんざん苦勞させられた上に、今度は嫁入り前の娘の拐しだ！然も、御老中の柳沢美濃守様……。

といい掛けて、プンと口を噤んだ。

三人の深編笠の武士がやってくるからだ。

深編笠 許せよ。

と、空いた床几に腰を掛けた。

入らっしゃいまし、と奥暖簾を掻き分けて、でてきたのは茶店の看板娘お雪。

赤前垂が燃える様。綿付島田の髪黒さと顔の色の白さが、対照的に引立って見える。深編笠は、笠の中から、鋭い視線を、お雪に注いだ。

若者二人は、意久地なくこそそとでていく。

○ 茶店

中秋の月が空に懸っている。

板戸を下した茶店の前に、一挺の駕籠を連れて、三人の深編笠がくる。

四辺をうかがって、板戸をこじ開ける。

○ 茶店の中

親父が、白刃でおどかされて震えている。

お雪の部屋の中では、緋の長襦袢一枚のま、腰紐で後手に縛られたお雪が、布団の上に横たえられている。

深編笠 静かにしろ！今良い所へ連れていて仕わす。

と、懷中から二本の手拭を出す。

お雪 何処へ、何処へ連れていくんです？

深編笠 行けば判る。

と、ふるえるお雪に猿轡を嵌める。

一人が、もがく白い足を縛る。

親父をおどかしていたのが

深編笠 良いか、いくら奉行所に届けた所で

無駄だぞ。娘は、一月もすれば、必ず無事に戻ってくる。重ねて申すが届けても無駄だぞ！

○ 夜路

駕籠の垂の外から、ぐるぐる縄をかけて、深編笠達が行く。

と、行手から、頬冠りの業平が駆けてきて駕籠に突き当って、屹と、様子を見る。

深編笠 どけ！下郎！

業平 へい……。

と、去る。

目明し伝吉が追ってくる。

伝吉 （立止って）お武家様一寸おたずね

申しますが若しや、今、ここを、頬冠りの男が？

深編笠 行った。彼奴は、何奴だ？

伝吉 へい……。今、お膝元を荒す業平小僧とかいう、大泥棒でございます。

深編笠 何、業平小僧……きやつが……。

と、去った方を見送る。

○ 柳沢美濃守の屋敷

その裏門に、深編笠と駕籠が消える。

○ 一室

遠山霞の絹行灯。極彩色の塀風。あられない、男女の姿絵が描かれていて其の他なまめいた調度品がある。

その塀風の囲みの中に、白綸子の夜具。

そして、その上に寝かされて身を跪いている緋の大輪の花。後手、猿轡のお雪である。

片側の襖の外に、人の気配。ミシツと鳴る音に、はじかれた様に不自由な身を、夜具の隅へ寄せるお雪。——襖を開けて入ってきたのは、柳沢美濃守である。

砕けた変り色羽二重の着流し、茶献上の帯脂切った赤ら顔。凄艶な、お雪の姿態を、ジツと射練める様な目。

お雪 う、う、うッ！

と絶え入る様に呻きを上げ、身体を固くする。美濃守は、夜具の上に、ニジリ寄る。

腰紐が、はだけた襟に喰い入って、半球の様な乳房が、更に、ぶつくらとふくらんでいる。いきなり、美濃守の手が、お雪の柔かい身体を抱き上げた。

お雪 ウッ！、う、う

お雪は、猿轡と男の腕の中で悶絶せんばかりに喘いでいる。

長襦袢の裾はすっかりはだけて、真紅の湯文字と雪より白い脚が波を打って、くねくねと、くねっている。

美濃守 うふふ、誰でも最初は、この様に暴れるものじゃ。それが又、ワシにと

っては思う壺じゃ、暴れるだけ、暴れるうちに、不浄を払い落して、人身御供の本体に仕上げられる。だがな、後ではきつと喜ばれる。礼を云われる。ハッハッハッ……それも皆お前の身の為じゃ、出世になる事じゃでう……。

と、淫らな笑みを浮かべたまま

美濃守 どれ、お清めに掛ろうか……。

と、お雪を仰向けに仆すと、尚も、足掻く足の縛めを解いた。

お雪 う！うッ！

喉も裂よとばかりに、猿轡の下で呻いたお雪は、膝を固くしたまま、ごろり、ごろりと必死に身体を転がした。

パツ、パツと華麗な花模様が描かれ、乙女の肌の匂いが、部屋一パイに立ち籠める様。

美濃守は、また、部屋の隅に転がったお雪ににじり寄った。

其時、ガラリと襖が開いて打掛けの裾を曳きずって姿を現したのは、おさめである。おさめ 殿。お戯れが過ぎましうぞと、柳眉を逆立てて睨み付けた。

○ 上野寛永寺の境内

夕暮である。

威厳のある打掛け姿に、椎茸の雷をゆった柳沢美濃守保明の妻おさめ、腰元数人を着飾らしてくる。

突如、非人の形、頬冠りの業平が、大手を開けて、道の邪魔をする。

腰元一 (進み出て) 見苦しい形をして、狼藉をやるか！

業平 いいや、狼藉じゃござりませぬ、どうぞ取らして下さりませ。

腰元一 さては、物乞いか、物乞いなら、何故額を地にすりつけてせぬ。女子ばかりとて、無態すると許しませぬぞ！

と、柳眉を逆立てて、懐剣に手をやる。おさめ これ、勝野。(と、制して) これを遣ろうぞ。

と、懐の袱紗包みより、金をとり出して非人に抛る。

業平 これを取って

業平

こりや、何じや。此のような目くされ金、貰おうと思って、附けては来ぬぞ。馬鹿にするなッて事よ！

おさめ

はて、おかしな事を申す。乞食が金を嫌うて良いものか。

勝野

ほんに変わった物貰い。金がいやなら何が欲しくて、お方様の道の邪魔をするのじや？

業平

俺の欲しいのはな……。

と、おさめをジロリと見て

非人

情が欲しいのよ！

勝野

な、何と云やる？

業平

いやさ、お方様の色良い返事、どうぞ聞かせて下さりませ。

勝野

慮外者奴が！ 色良い返事の、情のと、むさい形をして穢らわしい。お方様を、どなた様と云うて云やるか。

業平

いや、今、飛ぶ鳥落す勢の、御老中三万三千石の柳沢美濃守保明様の、御妻女と知ってこの願い……。

勝野

やや、何と……。

業平

どうぞ色良い返事、聞かせて下さりませ。

と、頬冠りを取る。腰元達、皆見て皆々あ——。

と、驚嘆の
声。

それも、そ

の筈、煮染めた様な、手拭

の下から現わ

れたのは、眉

目秀麗眼もと

涼しく、色の

あく迄白い、

美男子だから

である。

勝野

其方は、何

者じや？

業平

御覽の通り

袖乞い乞食

だが乞食で

も恋に上下

の差別はな

い筈。ささ

おさめ様、

どうぞ、御

返事を。



と、勝野を突き退け、にじり寄る。

おさめ 無礼者！、退がりや！、

烈帛の声と共に、腰元共、口々に喚き乍ら懐剣を抜き放って非人を取り囲んだ。

業平 ぎやアぎやア云うねえ！、小ざかし

い忠義面しやがると、どいつもこいつも、地獄へ投げこんでくれるぞ！

おーい、鬼達迎えに來い！、

と、一方に叫ぶと、それを合図に十数人の黒装束、いずれも鬼の面を冠って、バラバラと駈け寄って來た。

○ 両国の盛り場（昼）

軒並みの見世物である。

輕業、手品、生人形、娘芝居、ろくろ首、蛇娘など、あらゆる興業者が軒を並べて、大江戸の賑いを一手に此処に集めた有様。

その雑踏の中を、粹な芸者の神詣りと云った姿のお蓮が、泳ぐ様に人を分けて行く。

浪人姿の渡辺綱九郎くるが、お蓮の美しさにハッと立止る。と、お蓮が、人混みに押されて、ドンと綱九郎に突き当たった。

お蓮 あら、すみません

と、艶然として、足早に去る。

綱九郎 わーッ、ニッコリしやがったぞ。

と、後を追おうとする。

源氏頼光が、つと現れて、綱九郎の袖をつかむ。

頼光 追っても無黙だ。

綱九郎 何だ頼光か、何故止める？

頼光 あの女は、ニッコリお蓮と云って此

の両国では腕利きの巾着切りだ。すられた紙入れは、もう仲間の手に渡っている。

綱九郎 えっ！、

と、慌てて懐中へ手を入れて、

綱九郎 あっ！、紙入れがない！

頼光 貴様は、女を見ると、すぐやに下る

から、そんな目に遭うのだ。所で朱天童次郎の奴は何処へ行つた？

○ 人混み

お蓮、鴨を物色し乍らくる。

ふと、前方に、目明し伝言の姿を見る。

慌てて、横に切れて、或る見世物小屋の裏に出る。

と、何か、女の呻き声らしい声がする。

小屋の中らしい。

お蓮、一寸ためらったが、小屋の掛け簾をくぐって中に入る。

○ 小屋の中

薄暗い、小道具置場である。

鬼の面や、鉄棒、針の山の模型や、亡者の人形、虎の縫いぐるみ、葛籠等が入り乱れて置いてある。

お蓮は、ふと、立止った。

女の呻きは、幾つも置かれた葛籠の中から聞こえてくるのだ。

恐る恐る葛籠の蓋をとるお蓮。

お蓮 あっ！

と驚く。中から、紫矢絰、腰元姿の勝野がぐるぐる巻の嚴重な猿轡で、喘いでいる。

急いで勝野の猿轡をはずそうとすると、もし、と云う女の声。

思わず、手をすくめて、声の方を見ると、何時の間に来たのか、美しい娘が、お蓮の傍に立っている。

水も垂れんばかりの島田。

黒地の大振袖に、燭光錦の肩衣。

黒耀石の様な目が、外部からの侵入者を明らかにとがめている。

美代の変わった姿である。

美代 貴女様は、誰に断って、此処にお入

りになりました？

お蓮 誰に断ったって……それよりここ

に、このお女中さんが何故閉じこめられているのです？

美代 それは、私共の見世物の一つでござ

います。

お蓮 見世物だって？

美代 左様でございます。貴女様は、未だ

私共の見世物を御覧になってないのでございますか？

お蓮 残念乍らね……。

美代 では、お見せ致しましょう。こちら

へどうぞ。

と、お蓮を奥へ誘う様子。

お蓮 (慌てて) 結構ですよ。どうせ見る

なら表から、十二文の木戸銭を払って、堂々と見るよ。

美代 それが、出来ないのでございます。

何故さ？

美代 一度、この地獄小屋の舞台裏に入っ

た外部の人間は、永久に生きて、出られないのでございます。

お蓮 何だって？

美代 お気の毒でございますが、貴女様も

この葛籠の中へ、押し込めねば、ありません。

と、少し微笑を含むと、二つの花卉の様な

唇がホノカに開いて白い歯並びが、チロリと見える。

お蓮 嫌なこったよ、誰が、こんな葛籠の

中へ……お断りだよ！

と、パツと裾をひるがえして、出口へ逃げ

様として、お蓮は、あっ！と立ちすくむ。

美男子の業平小僧が、大手を拡げて立っているからだ。

○ 楽屋

おさめが顔に猿轡を巻かれ、緋絹の長襦袢一枚に剥かれ、両手を男達に押さえられている。

傍に、金糸銀糸の帯、打掛け、衣類が散っている。

男 流石は柳沢の女房だ。肌着にまで香

を焚き込んでいやがる。おっと、暴れるね。この顔で、この姿で、犬公

方綱吉を薄かしやがって、享主の柳沢を出世させやがったのか……さ

っ早えとこ、この椎茸まげを、島田に結び直すんだ。

すると、髪結いが、おさめのうしろから、

銀の平打、簪などを抜き、髪の新締めをといで、器用な手着きで髪を、とかし始める。

おさめ う！ う！ う！

何をされるのか、無気味な恐怖に馳られておさめは、必死に身をもむ。

所へ、お蓮を高手小手に縛り上げ、猿轡迄嵌めたのを、小突く様に連れて入って来た業平と肩衣の娘美代。

男 おや、業平の親分。その阿魔は？

と、一斉に、男達の目がお蓮にそそぐ。

業平 地獄へ舞い込んで来た巾着切だ。油

断は出来ねーぞ。誰かに、裏口を見張らして置け。

と、邪慳にお蓮を一隅へ突き飛ばす。

業平 さあ、美代、出番が近い、仕度をして置けよ。

美代 はい。

と、鏡台に向う。

業平 どれ俺も……。

と、非人のボロを脱ぎ捨てて、衣裳をつけ始める。間魔大王の衣裳である。

その間に、おさめは、髪を島田に結われている。

業平 美代、柳沢は来ているか。

美代 はい。二階の座敷を買い切って……

……

それを聞くと、おさめは、猿轡の奥で呻き声を上げた。

業平 悪人、柳沢の犬奴！ 今迄にどれだけ、江戸の娘達が、酷い目に遭わさ

れたか……。ふふふ、思い知るが良い。今、少したつと、貴様の目の前で女房が、ブスブスと身体に槍で穴をあけられるのだ。この業平小僧は、無残な目に遭わされた人達の仇を討ってやるのだ。さつ、その女の長襦袢も、美代と同じものにとり替えるのだ。

男
合点でさ。

と、緋絹の長襦袢の襟に手をかけ、パツと引剥ぐと、真白な肌。

おさめ う、う！ う！

と、湯文字一枚の才色兼備の女房は、必死にもがくが、その甲斐なく、緋鹿の子の長襦袢を着せられ、荒縄でその上から、轟々と後手に縛り上げられ、狼轡も固く締め直される。

○ 舞台

泥絵の具で描いた地獄の絵が、正面に装置されている。

赤鬼と青鬼が荒縄と手拭を持って立っている。程よい所に控えている美代。

閻魔大王の業平が、葛籠の傍に槍を手にして立っている。



○ 客席

前座の終わった後で、観客は、一種、不思議な興奮に包まれている。

やがて、口上云いが幕の前に出る。

口上云 東西！ 東西！ いよいよこれから一座の呼物、地獄の美女の葛籠抜けと御座い——。玉も恥らう美女をがんじがらめに縛り上げ、葛籠の中に押し込め、その上から、地獄の閻魔大王が、手練の手槍で一突き、二突き、哀れ、美女の運命や如何に？ …… 扱前口上はお退屈のもと、されば、いよいよ地獄の美女に扮する太夫をお目通り迄、控えさせます。

チヨンチヨン——。

と、木が入ると、さっと浅黄の幕を切って落す。

黒地大振袖、蜀江錦の肩衣の美代は、もう物馴れた調子で、土間一ぱいの観客に微笑を送ると

「わーッ！」

と煮えこぼれる様な歓声が上って

「いよう！ 夫夫！」

「確り頼むぞ！」

「殺してくれ！」

などと、調子の良い声が飛び出す有様である。

○ 二階後敷

柳沢美濃守が身を乗り出す様にして、舞台を見ている。傍に居並ぶ家来達の中に、青地三太夫がいる。

舞台の楓に、ジッと視線を投げ

て

三太夫 はて？ 娘の美代に生き写し？ ……

○ 舞台

美代が、鬼達の為に肩衣をはねられ、帯を解かれ、大振袖を脱がされている。

やがて、パツと燃える様な緋鹿の子の長襦袢になる。

ムッチリとした両の乳が透いて蜀江錦よりは数倍もの魅惑的な姿態に、ドツと観客が沸く。

口上云 お次、がんにがらめの高小手と御座——い。

美代の身体に、荒縄が、肉を締めつけてぐるぐると巻かれる。

口上云 お次、猿轡。

美代が、唇を開けると、赤鬼が布をぐいぐいとつめる。

青鬼が手拭で顔の半ば以上を掩ってその上を息も絶えよと縛る。

客席は、異様な官能に刺激され妖しげな愉悦と興奮に、すっかり茹でられた様になっている。

扱、縛り上げた美代を、葛籠の中に軽々と結めると、蓋をした。閻魔大王が、りゅうりゅうと槍をしごく。

客席の中には、思わず顔を覆う者もいる。

○ 舞台下

男達が、縛ったおさめを押えてうずくまっ



ている。上の板を、はずすと、美代が落ちてくる。それを受けとめて、代りにおさめを、無理矢理に押し込む。

○ 舞台

一瞬、静り返っている客席。

閻魔大王が、えい！とばかり葛籠に槍を突き刺さんとした。

——其時、客席から一本の手裏剣が飛んで閻魔の右手に刺さった。

あつと槍を落すと、見る見る右手から、飛沫の如く血が迸（は）び出して、舞台を唐紅に染めた。

わーッ

と一瞬、客席は総立ちとなった。

業平 何奴だ！

と、やっとの事で、左手で手裏

剣を抜きとる時、混乱の客席から

ヒラリと舞台の上に踊り上った黒

羽二重、着流しの浪人者。

朱天童次郎その人である。

一文字に結んだ口、色浅黒く、

苦味走った男。腰には、一升徳利

を下げている。

すでに酔顔であるが、両の切れ長の目は屹（い）っと、閻魔を睨みつけ

ている。

業平 手裏剣を投げたのは貴様か！

童次郎 如何にも。

得ぬ 縛女優達

幕 良 夫

業平 何の遺根で、興行の邪魔をする？
童次郎 遺根ではない。

業平 では、何故だ！ 察する所、酒に酔
って、娘が、本当に殺されるとも
思ったか？

童次郎 左様。其方に、殺気があった。
業平 何？

童次郎 論より証拠、それ。

と、葛籠の蓋を開け、中のおさめを抱き上
げ、その猿轡をはずした。

おさめ 助けて！ 助けてたも！

と緋鹿の子の袖が、童次郎にすがりつく。

わー！

楓太夫じゃねーぞ！

人殺しだ！

判った様な、判らぬ様な、兎に角、観客は
蜂の巣を突いた様な大騒ぎである。

○ 二階棧敷

美濃守 あっ！、おさめ！

と、立上る。

美濃守 それ！、何を致しておる。おさめを

救い出せ！

と、家来に下知する。

○ 舞台

童次郎と業平が、槍と刀で相対している。

童次郎の足許に、おさめが、もがいている。

○ 楽屋

男達が右往左往している。

一隅に、お蓮が矢張り、縛られた身を跪い

ている。

○ 客席

修羅場と化した混乱ぶり。

柳沢の家来、混乱を分けて舞台に近ずこう
としている。青地三太夫もいる。

○ 小屋の表

中から観客が、ドッと吐き出されてくる。
綱九郎、頼光、立って顔を見合せる。伝吉
も、立止る。

火事だ！

と、叫ぶ声。

小屋の中から、黒煙がもうもうと上り始め
ている――。

(つづく)

本誌には毎号最近封切の映画の縛りシーン
が紹介されて楽しいのですが、私は昔の映画
中のそれから私の印象に残っている被縛女優
を思い出してみたいと思います。

――〇――〇――

▽高峰三枝子

昭和二十二年の松竹作品「リラの花忘れじ」
で誘拐され、アイヌ小屋の柱に後手に縛り
つけられた。仲々見応えのあった場面だった

▽水戸光子

大映「名月走馬燈」の中で、長襦袢一枚
に剥かれ、キリキリと後手に縛り上げられ
て、猿ぐつわ迄噛まされた。逃れようと必

が、何よりカメラ位置が全カット共高峰の
背後だったのが印象深い。彼女の両手が背
後でアップされ、手首だけだったがかなり
強く縛られたのが忘れられない。もう一
度観たいものだ。演出は原研吉。

忘れ 被 銀

死になって腕き廻り、襦袢の裾から白い脚が露わになるところ等は仲々によかった。水戸の熱演に思わず魅き入れられるよき一駒であった。

▽轟夕起子

「謎の百万両」という映画で縛られたがこれは、詰らない縛り、というので印象に残っている。折角の美女を縛るのに、余りにも縄のかけ方がお粗末すぎる！と内心残念がったので忘れないのかも知れないが有名監督（佐々木康）作品だっただけに、今でも惜しいと思う。

▽花柳小菊

東映作品で、たしか昭和二十九年の映画「新選組・第二部」で凄艶な縛られ姿をみせてくれた。胸に二巻き、後手で曳き出されてくる姿は実によかったと思う。髪が乱れ、拷問を受けた直後の感じを出していたが、縛られたまま頭上にリングを乗せられ

鉄砲の標的台にさせられる。さすが大女優とほれぼれさせられたものだった。もう一つ「変化大名」でも、倉の中で柱に後手にして縛りつけられる場面があったが、左右に身をよじらせて悶える姿。共に素晴らしいものであった。

▽千原しのぶ

「快傑幻頭布」中、彼女としては珍らしく長襦袢だけでの責め場があった。前手縛りにされ、鎖で吊られるが、滑車の回転と共に徐々に両手が吊り上げられ、千原の美貌が苦痛に歪んでゆく態は、伸々リアルで迫力があつたと覚えている。床より引離されて宙に浮いた白足袋も、想ましい苦悶の情が現れていて今でも私の目にチラツクようだ。往年の宮城野の「振袖狂女」に於ける吊り責めの拷問場面と好一對の貴重な責め場面と思う。尚この映画には前記シーン以外にも、千原の艶な縛られ姿がみられたが、悪人に捕えられて後手縛りで突きとばされるところや、同じく後手で猿ぐつわでツツラに押し込められ、恐怖に脅えるアップ等は、真迫感溢れるものだった。

▽清川虹子

これは、少し変っているというだけだが「弥次喜多金比羅道中」で、多勢の悪人共に寄ってたかって縛り上げられる。何分にも喜劇なので、狙いは全然的外れだが、吊り上げられて、宙に浮きながら腰掛けて悠然と縛られているという珍型、お愛嬌の名？被縛場面であった。

▽南田洋子

大映作品「落花の門」で初めて縛られたが、この縛られ方に、大変魅せられたものだった。柱に直立して縛りつけられている全身正面の姿があつたが、縄が胸、腰、足首の三段に分れて巻きつけられ、見事な美態を見せてくれた。大胆な縄の掛けかたで彼女の美が一段とさえた好場面であった。

▽原駒子

これは古すぎるかも知れないが、日活映画「荒獅子」にて、後手縛りで引き立てられる彼女の姿が、強く印象に残っている。当時のヴァンプ役として鳴らした原が、突きとばされてよろけながら、振り向いて睨む美しい黒眼。演技とは思えぬ、憎悪と哀がこもっていて素晴らしかった。

新稿

ある夢想家の手帖から

イデオロギー
理想と行為とは性の分野においては等質である

——キント——



第二二章 象徴としての皮膚の色

あの白い肌の中にある白い心は、此の褐色な肌の中にある褐色な心の恋からは、とても及ばぬ高い所にはあるのでないだろうか？……

——谷崎潤一郎「アヴェ・マリア」

前章で詳述した有色人種の白人に対する劣等感、彼等の歴史的社会的在り方における白人への劣後性——黒人においては奴隷制下の隷属や米国内での被圧迫、植民地人においては数世紀来の社会秩序、そして日本人においては文化的後進等——の個人心理への反射と見るのが正しいが、実感としては、そんな歴史的反省を媒介せず

沼 正 三

直接、皮膚の色の違いとして感じられる。特定の個人との交渉の場面においては、西洋文化の優越が、その対者の白色に象徴されて来るのだ（私が西洋崇拜の語を避けて白人崇拜という表現を選んでいるのも、白人の肉体の象徴性を強調する為である）。

そこで、一つ注目すべき作品を紹介しよう。近時、目覚ましい活躍を始めた芥川賞の中堅作家、遠藤周作氏の初期の作品「アデンマ」である。重要な章句が多いので、長くなるが、できるだけ原文に語らせて見る。

× × ×

（日本留学生が帰国途中、マルセーユからアデンまで、四等船艙で病気の黒人女と同席しつつ、フランス女性との恋愛を回想する。）

——デデとは下宿で隣室だったことから知り合った。フジヤマやサ

クラにあこがれる女子大学生の彼女は「俺」に好意を寄せ、その学生達が「東洋人は気味がわるいよ」というのに対して「人種はみな同じよ」と叫んだ。

そうだ。人種はみな同じだ。そのうち女が俺に惚れ、俺がその愛を拒まなかったのも、この人種はみな同じだという幻影があったからである。女の肉体が白く、俺の肌が黄いろいということはその愛情にも毛頭も計量されなかった。だが、俺と女とがはじめて唇を合した……時、塀に倒れ、眼をとじた彼女に俺は思わず、こう叫んだのだった。

「いいのか、本当に俺でいいのか。」「黙って。だいてほしいの。」人種がみな同じであるならば、なぜ、その時、俺はこのようなみじめな呻きを洩したのだろう。……俺はこの呻きの内側にひそむある真実を本能的に直視しまいた。こわかったからだ。しかし、それを直視せねばならぬ日が、それから二ヶ月もしないうちにやって来た。それは二人して巴里からリヨンに旅行を試みた今年の冬のことだ。俺たちが、はじめて肌と肌とを見せあった夜のことである。

……………

息をつめて、二人は長いこと抱きあっていった。その時ほど金髪がうつくしいと思ったことはない。汚点一つない真白な全裸に金髪がその肩の窪みから滑りながれている。……二人の裸はそのままアルモワールの鏡にうつった。

最初、俺は、鏡の映像が本当に俺の躰とは思えなかった。病氣こそすれ、俺は日本人としては均整のとれた裸体をもっていた。背も毛唐なみに高いが、胸幅、四肢とも恥しくない肉がついてい

る。肉体の形からいえば、俺は白人の女をだいて不調和な姿態をとる筈はなかった。

だが、鏡にうつったのは、それとは別のものであった。部屋の灯に真白に光った女の肩や乳房の輝きの横で、俺の肉体は生気のない暗黄色をおびて沈んでいた。胸から腹にかけては、さほどでもなかったが、首のあたりから、この黄濁した色はますます鈍い光沢をふくんでいた。そして女と俺との躰がもつれ合う二つの色には、一片の美、一つの調和もなかった。むしろそれは醜悪だった。俺はそこに真白な葩にしがみついた黄土色の地虫を連想した。その色自体も胆汁やその他の人間の分泌物（沼註。排泄物と書くのを遠慮したのだろう。）を思いうかべさせた。手で顔も躰も覆いたかった。……

……………

船艙に寝ころがっている時、俺の眼の前の熱くさい、この黒褐色の肉体を凝視めている。その肉体は一個の物体である。俺は真からその肌の色が醜いと思う。黒色は醜い。そして黄濁した色はさらに憐れである。俺もこの黒人女もその醜い人種に永遠に属しているのだ。俺にはなぜ白人の肌だけが美の標準になったか、その経緯は知らぬ。なぜ今日まで彫刻や絵画に描かれた人間美の基本が、すべてギリシヤ人の白い肉体から生れ、それをまもりつづけたのかも知らぬ。だが、確かなこと、それは如何に口惜しくても、肉体という点では永久に俺や黒人は、白い皮膚をもった人間たちのまえでミジメさ劣等感を忘れることはできぬという点だ。

……………

愛慾というものは両者の自尊心が平衡を保つか、あるいは一方

が主人であり他方が奴隷でなければならぬ。俺の肌が女のそれより醜いとわかった今朝、昨日まで無意識に、イヤ恐らく無知のために支えていた俺と女との平衡は昨夜来、崩れおちていた。俺は劣者の立場にたたさされているという気持を拭うことができなかった。

(リヨンで女の幼友達の家に行つて、集っている人々の前にデデの婚約者であると紹介されたときの、一同の困惑を回想する)

「だいて、愛だけで充分じやないの。」かつて二人が暗い街角でくちづけをかわした時、彼女は俺にそういった。しかし愛だけでは充分でなかった。愛だけでは女は黄色人にもなれず、俺は白色人にもなれなかった。愛や理窟や主義だけでは、肌と肌の色の違いは消すことはできなかった。……白人はその自尊心が傷けられない部分で俺が彼等の世界にはいるのを許した。俺が彼等の洋服を着、葡萄酒をのみ、白人の女を愛する時、それを許した。けれども逆に白人の女が俺を愛することは彼等に許せなかった。白人の肌は白く、うつくしいからだ。黄色人の肌は黄いろく、みにくからである。白人の女がこの、生氣のない黄濁した顔色の持主を愛するなんてたまらないことだ。愚かにも俺はそれをこの日まで見抜きもしなかったし、考えてもみなかった。

(船医は診察に来て病気の黒人女を平手打する。船員が厭がるからといって、病室に入れてもやらない。黒人女が、自分は黒人だからという理由でそれをあきらめているのを見て、留学中、友達と一緒に、白人女と黒人女の演ずるシロクロを見たのを回想する。前者が後者に「嘔氣のする様な残忍な」嗜虐行為を加える見世物。そのくせ料金は前者が受け取り、後者には四分の一しか分けてやらぬ)

「なぜ、お前が三枚をとるんだ。」

「知らないね。その子に聞いてごらんよ。」

彼女は赤黒いマニキアの剥けた足指で、まだ氣力なく埋くまっている仲間の背をこづいた。

「ねえ、ギギイ。このわからず屋が、なぜあたいが三枚とるかと聞いているよ。」

「(自分は) 黒人だもん。」

その声は、あまりにかほそい、くたびれた声だったけれども、そこにはなにか、もはや動かすことのできぬ信念の響きさえ、こもっていた。……

あの女たちにとって、皮膚が黒いということは、たんに黒いということではなかった。この黒人の病女も、あの淫売婦たちも、それを本能によって知っていた。黒は罪の色なのである。黒人たちは、白人たちの前で、自分たちが、いかなる境遇、いかなる世界にあって、罰をうけねばならぬ存在であることを知っている。白人たちのすることは、どんなことでも善であり、神聖なのだ。だから、自分たちはくるしみ諦めねばならぬ人種であることを知っている。なぜなら、わが肌は黒く、黒とは罪びとの色だからだ。

へだが黄いろということは黒人と同じ意味をもつ時があるだろうか。V

リヨンから巴里にかえってから、……中略……俺の恥辱を女は知らなかったし(あるいは、見抜いても黙っていたのかも知れぬ)、少くとも、俺は男の位置をとった。女はまだ、悦楽に目覚めていなかったからである。

女の、悦びは薔薇がぬれるようにやって来た。その夜、彼女ははじめて烈しく喘ぎ、身悶えたが、突然、眼を血ばしらせ、おいかぶさるようにして俺の首をしめた。

「貴方は私の奴隷いよ。」と女は呻いた。「奴隷になって……」

その時の感覚の中にはある快感が——決して日本人の女とは味わったことのない——疼いた。単なるマゾシズムの、被虐の快楽ではない。おそらく、その背後には白色の前に黄いろい自分を侮辱しようとする自虐感、その悦びがひそんでいた。

……

三年前、気負うて欧州に渡ってきた時……俺はまだ、自分が黄いろいという事をそれほど思っていたことはなかった。パスポートに俺は日本人と書き込んだが、その日本人は白人と同じ理性と概念とを持つ人間だった。俺はマルキストのように、階級的対立や民族的対立を考えたが、色の対立について想おうともしなかった。階級的対立は消すことができるだろうが、色の対立は永遠に拭うことはできぬ。俺は永遠に黄いろく、あの女は永遠に白いのである。

(黒人女は病室にも入れずに死ぬ。白人ならアデン迄行って検屍を受けるのに、それも面倒臭いとて、水葬されてしまう……)

x x x

この小説は『白い人・黄色い人』(雑報一〇一)と題する新書型単行本に入っているが、同書末尾の山本健吉氏の解説が、これをサディズムを主題とする作品といっているのは、理解に苦しむ。読者には既に説明の要もあるまい。主題は白人への劣等感であり、これは、後章で述べる様に、マゾヒズムに導く性格のものだ——作者

遠藤氏自身は、「月光のドミナ」(雑報一七五)(このドミナが白人であることを注意せよ)「女王」(同一七六)等でマゾヒズムへの並々な理解を示すが、批評家には充分に理解されていないことの一証左である。——

ここでは、日本人の白人への劣等感が、白い肉体への劣等感という形を取ることが、体験(氏には、これについてのエッセイもある。「有色人種の白色人種」雑報一一八参照)に基き、十分な説得力を以て描かれている。

「なぜ白人の肌だけが美の標準になったか……」との感慨は、就中私達の共感を呼ぶ。ギリシャ人を美の理想とする審美感は益々世界中に浸透してゆき、決して後退することはないだろう。白い皮膚、金色の髪、碧い眼、隆い鼻、そして八等身の肢体は今後も人類の肉体美を代表し続け、有色人種を絶望的な劣等感に陥れ続けてゆくに違いないのである。「俺は永遠に黄いろく、あの女は永遠に白い……」

第一三章 ブロンドの優越

ある時私はふと気が附くと、十人ばかりの若々しい金髪碧眼の白哲な婦人の一団に包囲されて、自分がまんなかにはつりとひとり立って居るのを発見した。……丁度一匹の野蠻な獸が人間に取り巻かれた時の様な、又は無智な人間が神々に圍繞された時の様な、恐ろしさと心細さが突然私をとらえたのであった

——谷崎潤一郎「独探」

今まで単に白人種という総称を用いて来ながら、前章末で人類肉体美の代表として白哲金髪といった限定を加えて表現したのは何故

か。この疑問を持たれた方の為に、もう少し詳しいことを書いておこう。

ヨーロッパの白人と一口にいうが、大きく分けて、北欧人種、アルプス人種、地中海人種の三種に分類される（その外、バルカンにデイナー人種というのがあるが、これはアジア人に近い）。プロンドの名で呼ばれる金髪碧眼で純白の肌を持つ八等身の種族は、北欧人種なのである。北部ドイツ（ことにザクセン地方）スカンジナビア、イングランド等比較的純粋な形でこの種族が残っている地方を離れると、純粋の金髪は案外少いのであるが、しかも私達は、白人崇拜的感覚で白人種を眺める時、プロンドの肉体をその代表者として考えずにはられない。何故か？

この北方種族こそ、白人中の白人として、崇拜畏敬の対象たるに価するからだ。

『確実なことは、今日までのところ、最高の文化は、北方人種が……他の人種と混交した地方において、いつももっとも顕著にあらわれたという事実である。それは今日の北方、アルプス両人種系統の文化圏についていえるばかりでなく、古代のギリシャ、インドの文明についてもまたいい得ることである。……異人種の血がまじるということが、ちょうど酵素の様な作用をなし、これによって、初めてある人種独特の才能が正しく引き出されるのだということが出来る……』（クレッチマー「天才の心理学」）

古代文明は被征服種族の奴隷労働の上に花を咲かせた征服者達の所産である。北方種族についていえば、何より先に彼らは世界史における征服者として現れた。彼らは支配者種族として歴史を推進した。（白人を崇拜する奴隷種族の者の目には、この点が大切なので

ある。）

エジプト古王朝の墓壁に、内親王にして女王なる女性像が金髪で描かれていた（一九二七年の発掘）。マハーバラータやラーマヤーナを生んだ古代印度の征服者は白哲長身の種族だった。ペルシャ王大リウスは自らアリアン人と名乗った。ホメーロス詩篇の英雄メネラオスやアキレスは、後代のアレキサンデル大王と同じく金髪である。古代ローマの建設者だったラテン人が北欧系であることは、その相貌からも分る。要するに、金髪の野獣（附記第一）が群畜を征服して国家を建設したのだ（附記第二）。彼らほど隷属を憎んだものはない。国家の独立、国民の自由人権、これらは彼らのみが人類の精神史に持ち込んだものだ。かかる自由の民として彼等は古代文明の創造者となった。

北方種族による支配と文化創造、この図式は、近世においても、繰り返されている。

近代西洋の植民発展はポルトガル、イスパニヤを先達とする。その国土は現今地中海人種に満ちるが、両国が世界史の先端を歩んだ時の指導者たる航海者エンリケ王子もイサベラ女王（コロンブスを後援した）も、プロンドだった。その後の蘭、仏、英、独の争覇はもとよりヴァイキングの子孫達の間の争いに過ぎぬ。米国は混血の国といわれる（純粋のプロンドは人口の八割しかない）が、その人口構成の支柱が英独系の北方種族にあることは明らかだ。——実に彼等は世界を征服すべくして征服した。天才は北方種族のみから生ずるわけではないとするクレッチマーの様な論者でも、政治と軍事の才能が、この人種の独擅場であることは否定していない。白人種は人類中の貴族だが、北方種族はその白人中の貴族（支配階級）な

のだ。——事実、欧州諸国の貴族階級は殆んど北方系の血統である（附記第三）。

そして、近代文明は、この北方種族の国土から起った。その源泉たるルネッサンスの諸天才が北方種族の特徴を示すことは、既に定説である。近代国家成立後の文化活動についてはいうまでもない。あらゆる分野の学問的創造において、北方種族の業績を除いたら、何が残るだろう。彼等は原則を定立した。彼等は応用に邁進した。実に嘗ての金髪野獣の征服欲が、学問的未知の分野への飽くなき探究心と化した観がある。

『ゲルマン的人間……は全地球を廻航し、数百万の世界（星辰）を発見した。彼は熱帯の太陽の炎熱の裡に、太古の永く永く忘られていた都市を発掘した。彼は幾多の文学、伝説的な城塞の方へ探究の眼を光らせた。彼は言語に絶せる労苦を以てパピロスの巻物、象形文字及び楔形文字を読み解いた。彼は何千年の漆喰や岩石やをその要素に分解して見た。彼はアフリカ土人、インディアン、支那人の間に生活し、そして、諸々の民族魂の多様な、画像を形成した。……』（二十世紀の神話）

これはローゼンベルクがドイツ人の歴史的才能について語る一節だ。科学、技術の面での発明発見については絮説にも及ぶまい。

前々章で私は、有色人を支配する白人の文明を讀んで脱帽したが考えて見れば、讀辭と叩頭に値するのは、北方ブロンズの種族なのである。かかる人種優劣観を迷信扱いする人類学者達の言説（例えば、ルス・ベネディクト及びジーン・ウェルトフィッシュ「人種」にも拘らず、私達は事実を直視する。彼等がその体力、智力、意力において、人類中、最も優れていることは世界史的に証明された事実

といて良い。

そのことは私達、有色人をまたず、他種の白人達も認めている。それを物語る一つの証拠が、白人の肉体美の理想はブロンドにあるという事実だろうと思う。

古代ギリシャは西洋の美の故郷だが、そのギリシャ人達は、古典的造型芸術において、北欧人種の肢体を——被征服種族の典型化である「背の低い、ずんぐりした、猪首で鼻の短く唇の膨んだ」シレヌスやサティルとの対比の下に——「丈高く、ほっそりした、首筋鼻筋が通って唇の細い、そして明るく輝かしい眼と波打つ頭髮とを具えた」オリンパスの神々の像として定着させた。ギリシャ語で、*Chrysokomos*（金髪の神）とはアポロのことである。例の三女神（第一章参照）をホメーロスはそれぞれ、「^{かいたましろ}純真白のヘラ」「碧眼のアテネ」「金髪のアフロディテ」と形容し、また白哲長身のノーシカ姫をアルテミスに譬えている。女神は皆、北欧人種的美女なのである。

この万古不易の典型は後世を支配した。右の女神達はルネッサンス美術の指導の星だった。ボチチェリ、ジョルジョーネ、レオナルド、ラファエル、ミケランジェロ、チチアン……これ等イタリアの画家達は、北方的な人種美を、人体の理想として描いたヴィーナス（アフロディテ）は正しくブロンドで表現された。為に当代のブリュネット婦人達は、美しく見せようとして毛髪を金色に染めた。ダントの理想の女性もまたブロンドであった。

フラマン（白蘭地方）の画家となれば一層、北方的なのは当然である。ルーベンスの描いた神話的人物や王侯淑女をブリュッゲルの庶民達と比べれば、当代の理想美が北欧人種像によって表現された

ことは一目瞭然だ。レンブラントの聖書の人物は「気高さ」を現わすのにユダヤ人の体格容貌でなく北欧人のそれを取っている。

十七世紀のイスパニヤにはブロンドは稀だった。しかもペラスケスは、金髪を縮らせた幼い王女を、侏儒の混血少女をその傍に置くことで、対照的に美しく描いたし、セルバンテスの人物の求める理想女性もブロンドであった。……

こんな風に列挙すれば殆んどきりが無い。これは要するに、白人達にも北欧的なブロンドが一番美しく見えるのだ。「殿方は金髪がお好き」という奴である。北欧出身のガルボやバーグマンやブリットの米国における不思議な人気は、生粋のブロンドをアメリカ人がいかに珍重しているかを示すものだ。ローゼンベルクはいう――

『西洋の諸国民は人種の混合と政治的訓練組織の結果である。然しそれは、何れも国家造型力の主要部分を北方種族から受入れ、且つ同時に一切の風習教化の形成力をも取り入れた。この事実と密接に結び附いているのは、決定的な北欧的美的理想であるが、これは往々今日では北欧的血液が完全に殲滅された地方に於いてさえもなお作用し続けている。』(前掲書)と。その通りである。

そこで有色人の劣等感という主題に戻れば、彼等に肉体の違いと絶望的に印象させるのは、白人中の白人たる白哲金髪ブロンドの北欧人種だということになる。生れながら各種の白人の中に有色少数人種としての劣等感に満されて育つアメリカ国内の黒人達などでは、このブロンドへの崇敬の感情は実に強烈らしい。ルネッサンスの歴史は繰り返す。美しいイタリー女もブリュネットでは商売にならないのだ。逆にいえば、ブロンドに対する黒人の劣等感の強さが、一旦、GIの制服下に征服者の側に立った時、ブロンド女の冒瀆へと集中

させるに至ったのだ。黒白混血の多い南米諸国でも、金髪の娼婦は金髪という理由だけで二倍の料金を請求するという。

日本人でも同じことだろう。日常、各種の白人に接することのない国内の者には、それほど実感が湧かぬが、足に西欧の土を踏むと痛感するらしい。南欧の黒眼黒髪ブリュネットの女性には親しみを覚えるが、北欧のブロンドには異人種という感じを持つという。それは前者に対しては肌色からの劣等感が少ないが、後者には強いということの意味する(附記第四)。日本人は白人に劣らぬ優秀民族などと本気で信じている人――そんな人は滑稽にも、黒人のことをクロンボなどいって軽蔑していることが多いが――を金髪美女の一团の中に立たせ、題辭に引いた谷崎の文章における「人間に取り巻かれた野獣神々に圍繞された人間」といった強烈な劣等感を味わって見たいものである。

附記第一 金髪の野獣 (die blonde Bestien)

とはニイチエの用語で、キリスト教による奴隷道徳以前、階級的善悪即ち支配者道徳を樹立した北方からの支配者種族を指す。戦鬨的に編成されたその集団は、数だけ多いが編成されぬ群衆の上に恐ろしい冷酷と残忍とを以て臨み、これを群畜と化して自らは牧者の地位を取った。野獣ベヒーモスというのは、ここでは家畜的な被征服者群に対比して、その野性を強調する為、用いたのであることに注意されたい。(ニイチエ哲学のサド・マゾヒズムに対する意義については、別に一章を予定している。)

附記第二 ハムラピ法典に「黒い頭の民の上に太陽の如く進む……」という表現があり、これをバビロニア古代文明を建設した民族が黒人種だった引証とする学者がある(W・E・B・デュボア

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽	復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円	復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽	復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円	復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽	復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円	復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円	復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円	復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円	復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円	復刊第35号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽	復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円	復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽	復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円	復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円	復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円	復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円	復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切▽	復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年11月号)	定価二百円	復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円	復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和31年12月号)	定価二百円	復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円	復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年1月号)	定価二百円	復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円	復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第13号	(昭和32年2月号)	定価二百円	復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円	復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第14号	(昭和32年3月号)	定価二百円	復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円	復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年4月号)	定価二百円	復刊第29号	(昭和33年7月号)	△売切▽	復刊第45号	(悦特第二集)	定価二百円
			復刊第30号	(サド特集号)	△売切▽	復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円

「アフリカ文化」。古代支那でも被治者階級を、周で黎民、秦で黔首といった（黎も黔も黒色の意）。然し、もし、治者の方も頭が黒かったとすれば、こういう表現は無意味ではないか。印度の四姓は元来、征服者たる白哲の高貴種と被征服者たる黒褐色の土着種との差別から生じたもので、カストの意のヴァルナは、また色を意味するという事実を思うと、黒い頭と被治者階級が呼ばれた裏面には、頭髮の黒くない治者階級の存在が推定できるのである。——日本古代史は学界に定説がないが、大和朝廷に直結した支配階級が北方種（騎馬民族？）で、南方種は被征服者だったらしい。皇族や公卿華族の容貌には今でも北方人種的な要素が認められる。色が白くて鼻が隆いのを美人とする日本古来の美意識は南方系の被治者階級が、昔は、もっと、はっきりしていたのである。

う治者階級の北方系の容貌にあこがれたからだ、と考えることもできよう。

附記第三 フランス全人口中、純粋のブロンドは一五%しかないというが、貴族は皆ブロンドだった。ユグノーの没落と大革命で貴族の数は激減したが、十九世紀の末葉においてもなお、仏国海軍の舞踏会で全ての士官の頭が金髪なのが、客を驚かせたという（シニタッセルベルク「バルト地方の斗争下の生活」）

附記第四 前章の小説の主人公の相手デデも、もしブリュネットだったら、鏡の中に裸像が主人公に、かほどの劣等感を与えなかったかも知れない。第九章の投書者もCを金髪と書いている。次章に列挙した谷崎の諸作品の白人崇拜も厳密にはブロンド崇拜というべき描写ばかりである。



告白的隨筆

切腹の幻想

須藤律夫

週刊誌や新聞の連載ものは勿論、演芸ゴシ

ップ欄や或は、かこいもののトピックなど読んでみると、私は時々切腹を連想させられる事がある。その事自体は「切腹」とは何の關係もないのだが、ふと幻想を描くのは、どうした事だろう。「切腹」が潜在意識となつて四六時中、私の脳裡にあるためなのか、或は人一倍強い関心を持つてゐるためなのだろうか。ともあれ電光の様な迅さで連想が閃めく事は不思議である。以下、私の眼に止った記事をそのまま転載し乍ら、その時々感慨を綴つて見よう。

話は少し旧聞に属するが（昭和三十年秋）

ニューヨークでの話——。

○バナナをお臍に

最近ニューヨークを訪れる旅客は必ずと言っていい位「グリーン・ウィッチ村」に出かけると言う。ここではサヴァアナ・ガールが、ラテン・クォーターやコッパなどは足許にも及ばない様な素晴らしいショウをやっているからだ。サヴァアナと言うのはアメリカ南部の大草原地方の事で、其処の原住民の逞しい女達がニューヨークの舞台に進出、フット・ライトを浴びて物凄い踊りを始めた。——中略——野生的ではち切れるような肉体の露出と、大胆なアクション、それに人の意表を衝く身で

しえ等、刺激に飽きたニューヨーク子のどぎもを抜いて大喝采である。そこで観客と言う観客は草木が佐渡へなびくが如く、サヴァアナ・ガールの出ているグリーン・ウィッチ村へと行く訳。中でもベッティ・プリンスベイン嬢はバナナをお臍に入れて現われ、観客を『ウーン』と唸らせ、今や人気の絶頂にあると言う。（内外タイムス・話題の百華店）挿入の写真はステージに現われた踊り子がスパンコールとキャンティ一枚となり、大きなバナナをお臍に差し込んでゐる。それが踊つても落ちないところを見ると、お臍も大きく奥行も余程深いに違いない。恐らくは一寸近

くも入っているであろう。観客は無心に笑っているが、私は何故か切腹を連想して仕舞うのだった。

○ヌード殺人事件？

今月の日劇ミュージック・ホールは久々にベテラン小浜奈々子が登場、然もただの踊りでは芸が無いとばかりお色気プラス、スリラー。江戸川乱歩原案もの、題して、夜ごと日ごとの唇。誰です、俺も殺して見度いなんて物騒すぎますぞ（アサヒ芸能）

写真はヌードの小浜奈々子が椅子に腰かけ、逞しい男性の腕に右乳房の下を短刀で刺されている。宣伝写真によってはステージに倒れた奈々子が喘ぎ乍ら、刺された短刀の尖先を逆手に握りしめているものもあり一寸、心臓を突いて自決しているような錯覚に捉われる。これも私には切腹を思わずに充分だった。

○お臍で煙草を吸う先生

売れっ子の歴史学者、和歌森太郎先生は講談、座談会、執筆などと忙しく、仕事の合間を見ては新橋、柳橋、吉原にと、その方も仲々の多忙ぶり。この和歌森先生が酔う程に御披露するのはお臍で煙草を吸う珍芸。きれいだころの唄う『わたしのラバさん』に合せて自称奥行数センチ？のお臍にピースを吸いつ

け、踊る程に煙がゆらゆらと言う寸法。これを見たきれいだころ

『お臍の穴の深い人は情も深いんですって』とますますもてると言う。（日本観光新聞 二月八日号）

挿絵は襷一本になった先生がお臍に煙草を差し込み、両手を展げて踊っているのだが、この絵も私には矢張り切腹を連想させるものの一つ。因に文芸資料研究会発行の『変態見世物史』によると、往時両国広小路に於て腹芸と称し同じような趣向の見世物があつた。それは一婦人が腹部を露呈してその臍の穴に煙管を差し込み、スパスパと煙草を吸いつけて口から煙を吐いたと言う。読んで見るとこの方が少し嗜虐感を誘うが、恐らくは煙を充填したカプセルでも呑んでいたであろう。

○臍の花（好色党奮迅録二十八話より）

——前略——『まあ兎に角臍にさして見よう』長磨卿はそう言ったが、遠慮して蕾を男女之助に渡した。男女之助はお玉の臍にそれを当てがった。然し茎そのものに余程吸引力があると見えて、倒れると思いの外案外うまく臍の上に直立した。それは如何にも奇怪な眺めだった。なめらかな玉の肌が、見事な二つの丘を下ると、一望果しない平原、そして

その平原の中央に、ぽっかりと砂漠の中のオアシスのように、窪地をかたちづくっている臍！ その臍に一本の葉のない蕾だけの花が生えたのである。（中略）それにしても枯井戸のように乾いている臍では、花が開くだろうか、萎むしか方法が無いのではなからうかと。その時長磨卿が『おや？』と大きな声を出した。そして何故か慌てて花を臍から引き抜いた。花はすばっと音を立てて抜けた。

（後略）——（週刊大衆一月二十六日号）

挿絵は仰向けに横になった、ふくよかなお玉の腹部、その中央の、ふかふかと窪んだお臍の穴に、名も知れぬ奇怪な花が突き刺してある。その茎はお玉の臍の奥からその血汐を吸い上げ、そして精を得た花瓣は徐々に開いて行くのだ。之も私には何故か女体切腹を想わせるのだった。

○お臍に塗る高貴薬

『オリーブ油』（地中海沿岸の南欧特産の橄欖樹の果実から得られる良質の植物油）が膚の若返りや、美容に用いられた歴史は大変古いものです。古代ギリシャやエジプトでは、奴隷にかしずかれた美妃達が、その全身の素膚にオリーブ油を塗り込ませていた事実が残っています。下ってはフランスのルイ王朝

時代の貴婦人の美容法として、良質のオリブ油を腹部に万遍なく塗り込む習慣が行われていました。(後略) (週刊新潮三月二十五日号)

ここ迄は最近流行の「お臍美容法」に関する平凡な紹介なのだが、挿入の写真はそれも

のずばり、お臍を中心とした腹部(女性かと思ふ)のクローズ・アップで、左手につまんだ耳かきの尖端が、小さな然し奥行の深いお臍の穴に、将に差し込まれようとしている。以上、一連の臍窩に何物かを(有機物、無機物を問わず)挿入する事は、「切腹」とは本

質的に違ふのだが、何時もそれが幻想を呼び連想されて仕舞うのは何故だろう。私は本誌読者の中、切腹に関心を持たれる人達の、忌憚なき御意見も伺いたいと思う。(完)

—五九・四・二〇—

愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

とやま・かづひこ

(96) 佳き日

四月十日。国を挙げての佳き日、世紀のパレードの沿道は身動きも出来ぬ人垣で埋まった。沿道には、要所にヨシズ張りの特設トイレがつくられていたが、利用する人が黒山のように集っていた。かづひこも使用させて貰ったが、急ごしらえの為か、至って簡単なヨシズ張りである。

人に押されて、男女用の境目ギリギリに押しつけられていたかづひこは婦人用のそれから、ヨシズを通してのシブキにズボンを濡らされてしまった。これには、さすがのかづひこもおどろいた。一体どんな女が、こんな行儀の悪いことするのかと、出てくるの待っていたが、そのスラリとした、若く美しい女性を見ると、怒りは一度に喜びに変わってしまった。

知らぬこととはいいいながら、何物にも勝るこの「おくりもの」を得たかづひこは、立ち去り難いものを感じて、心から、この佳き日を祝福したのである。

(97) 馬乗り

サンデー毎日の四月二十六日号のグラビア特集「歓呼にわく50分」の中に、素晴らしい写真がある。

外人の男性の上に肩ぐるまして、カメラをパレード中の皇太子御夫婦に向け、今まさにシャッターを切らんとする婦人。マスクは余り美人とは申し上げられないが、男の肩に乗っている捲れ上ったスカートの下の脚は見事なものである。馬たる男性の表情は、思ひなしか嬉しげに笑っている。

見る人によって種々の感じ方が違ふだろうが、かづひこはかづひこで、この一葉の写真

から、胸のときめきと共に無限の空想を引出して酔いしれたのである。

(98) 御馳走様

同じく週刊誌の雄、週刊朝日四月二十六日号八頁から。——これはある傷害事件で左大腿部と腸を、ピストルで射抜かれた若い婦人の入院の記

——張り込んで三日目に、芳江さんは連続十一発、ガスを放った。

星野巡査部長（つききりで警戒中の人）は「ご馳走様」と笑い、芳江さんも「これでも遠慮しているのよ」と元気に笑った。とある。ガスを放射されて、ごちそうさまというところ等、仲々によい。

かつひこも、憧れのものを載いて、呆れる相手に対し、テレかくしに「どうも、ごちそうさまでした」と、ごく普通にお礼を述べ、その人の気持をやわらげるのに、とても効果的だったことを覚えていいる。

重傷で身動きできない、若く美しき女性。寝たきりともあれば、便器の必要もあろう。何だか、ぞくぞくする話である。

(99) 六月号寸感

本誌六月号では、沼、辻村両氏の玉文と、第一回座談会の中に、とやま・かつひこ氏が登場して嬉しい。嬉しいという意味は、吾々コプロ党の考え方が、漸次認められつつあるということを目指すのです。

但し、百六十四頁の、本当に飲めるのか、毒ではないか、との山田さんへのお答え。

断じて有害ではありません。このかつひこが何よりの証拠。約三十年間、殆んど欠かしたことはありませんが、かつひこは健康そのものです。健康体よりのそれは、有害どころか、むしろホルモン剤ともなると思います。但し、誰のでも良いというワケではなく、若く美しい異性のそれであるべきは、云うまでもないことでしょう。

辻村先生とは住む世界が違うようですが、この、ナイーブなムードを、先生には必ず理解して戴けると信じています。

(100) おでき

落語を立体化して、映画や舞台にコント風に仕組んだ劇がよく演ぜられるが、かつひこ

の観たもので忘れられないものの一つに、浅草のストリップ劇場カジノ座で観た、軽演劇がある。

筋は、落語の一つだが、ある大家のお嬢さんの胸に、悪性のデキモノが出来て、医者もサジを投げるが、その療法として、お馴染の大工のクマさんを色と欲で釣り、毒を吸いとらすという、誠にたわいもないおはなし。

舞台のクマさんのなさは、さうな顔。泣きベソのクマさんを、おっかけ廻す乳母。コミカルな演技で観客を大笑いさせていたが、かつひこを惹きつけたのは、そのお嬢さん役の態度でした。

名前は知らないが、仲々キレイな人で、ストリップだけに、見事に肌ぬぎになり、尻ごみするクマさんの首筋をぐっと握って、否応いわず、毒を吸いとらすのである。更に、恨めしそうに泣き出したクマさんを冷然と見降して、「その毒によって、七日の中には死ぬであろう」という。

その時のお嬢さんの美しい、そして平然と残酷な言葉を口にする姿。かつひこも出来れば、そんなお嬢さまに一度出合して、クマさんの役割を果してみたいものだと思う。

創作

嫁^{よめ} 供^く養^{よう}

三 条 卓 史 作・画

美津子が夫の浩と一緒に、浩の郷里に行ったのは結婚後三年目であった。浩の郷里は下総の因幡沼に沿った不便な田舎で、平素は殆んど往き来はしなかったが、年に一度、旧盆には毎年、墓参りに帰ることになっていた。彼女が結婚した年は、風邪で、また去年は

妊娠中であつたため、夫だけが帰郷したのであつたが、今年は生後八カ月の春夫を抱いて夫に寄り添うようにして田舎の駅に降りた。「どうだ、暑いだろう。春夫は僕が抱いて行くから、お前はバラソルをさしなさい」浩は、そう云って左手に抱えていた白い上

美津子は結婚した時の事を思い出して、浩の顔に笑顔を向けた。「うん、あの時は夢中で、たんぼぼも蝶も眼に入らなかった」浩も、そう云って笑った。春夫は、浩の腕の中で気持良さそうに眠っていた。

衣を粗末な駅のベンチに置くと、ポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭いた。「じゃ、あたしがそれを持ちましょう」美津子は春夫を浩に渡すとバラソルを開き夫の上衣と土産の包みを手に提げた。「よう、浩さんじゃアないか。しばらくでしたナ。達者でしたかね」道々、顔見知りの村の人が懐かしそうに声を掛けていった。炎天の道は丘を下り、櫟林を通り抜けて白く続いていた。「お家で式を済ませて、駅へ歩いて行った時には、この道の両側にたんぼぼが咲いて、きれいな蝶が飛んでいましたね」

○ 二人が浩の実家へ着いたのは、昼少し前であつた。浩の兄の千太郎と、兄嫁の初江が村境まで出迎えに出ていて

「美津子、よく来たね」

「おや、春夫ちゃんも大きくなって」と交々、笑顔で挨拶した。

家へ入ると母のおたきが、

「さあさあ、長い道で疲れたろ。早く裏の井戸へ行つて、身体を流して来なされ。初江はその間、春夫を抱いておやりな」と、愛想よく云つて迎えた。

「ああ、あの冷たい水は何とも云えんなア。

じやア、僕は身体を拭いて来るから、お前も後で来なさい」

浩は美津子にそう云うと、台所のタオルの掛けてある処へ立つて行つた。

「おや、この子は良く眠っているねえ。それじやア春夫は、あそこの縁側の傍の風通しの良い処へ寝かしてお置きよ」

おたきは、遠慮勝な美津子の気持をほぐすように笑いながら云つた。

兄嫁の初江は、この春、千太郎と一緒に東京へ来た時、一緒に泊つて打解けた話をしてりして気兼ねが少なかったが、母のおたきと

は、結婚式の時に逢つただけで、今度が二度目であつたから、何だか怖いような、不安な気が消えなかった。

「義姉さん。お母さまって、やさしい人？」

浩と入れ替りに井戸端へ来て、花模様のワンプイスのホックを外しながら美津子は、ついて来た初江に、そつと訊いた。

「ええ、とても優しいのよ……その服、こちらへお出しなさい。持つてて上げるわ」

「ええ、いいの。この横木へ掛けておきましよう」

「美津子さんは、とても肌が白いのね」

「あら、恥かしいわ。そんなに見ちゃ」

初江に、そう云われると彼女は、顔を真赫にして、うつむいた。

「ねえ、美津子さん」

「え？」

彼女の耳許へ口を寄せて、囁くように云つた初江の声に、驚いて顔を上げると

「今夜のお母さんは別よ」

と言つて、意味あり気な笑を洩らした。

「——今夜のお母さまって、それ、何のことですか？」

と不審そうに聞き返すと初江は、なおも笑いながら一層、声を落した。

「嫁供養と云つてね、今夜はわたし達がお母さまと一緒に仏間でお供養をすることになっているの。お母さまが御先祖の魂代（たましろ）になって、私達を色々にさいますわ。いろいろにネ。……フッフでも今年は美津子さんと二人ですもの。あたし、心丈夫だわ」

「ねえさん。嫁供養って、それは一体、どんな事をするんですの？」

意味あり気な言葉に、美津子が不安そうに尋ねたが、初江は、

「ねえ、美津子さん。夜になれば、すべては判るのよ。さあ、身体を拭いたら家へ入りましよう。お昼御飯を済ませて、お墓まいりをしなくちやア」

と言葉を濁しながら、横木にかけたワンプイスを取つて美津子に渡すのであつた。

○

壇家廻りの坊さんが帰つたあと、早目に夕飯を済ませた千太郎と浩は、藍の香のする新しい浴衣を着て外出の支度をはじめた。

「あなた、何処かへいらっしゃるの？」

春夫のおむつを取替えていた美津子が、不審げに訊くと

「うん、これから兄さんと、潮来に行つて来る。明日の朝、香取、鹿島の両神宮へお詣り

して来るから、帰りは昼過ぎになるだろう。
なアに、これは毎年そうする家のしきたりだ
よ。そう云えばお前、こっちへ来たのは初め
てだったなア」

と、笑いながら

「じゃ、留守と春夫を頼んだよ」

と云いながら、二人は肩を並べて出て行っ
た。

「どう、ひどい夕焼けじゃアないの」

土塀の門の処まで送って出た初江は、美津
子の頼りなげな顔を見ながら、茜色の空を指
さした。

あの二人は、潮来へ行つてどうするのか知
ら……

美津子は浩と離れる事が不安でならなかつ
たが、さればと云つてそうした気持を打明け
ることも出来ず、ぼんやりと二人の小さくな
って行く後姿を見まもっていた。

中天の空に、一番星がチカチカと光ってい
た。

○

日が暮れて――

美津子は仏間の隣りの四畳半の薄暗い部屋
で、しきりに春夫を寝かしつけていた。

「美津子や、春夫はまだ寝ないのかい」

隣りの部屋から、母
のおたきの声が聞えて
きた。

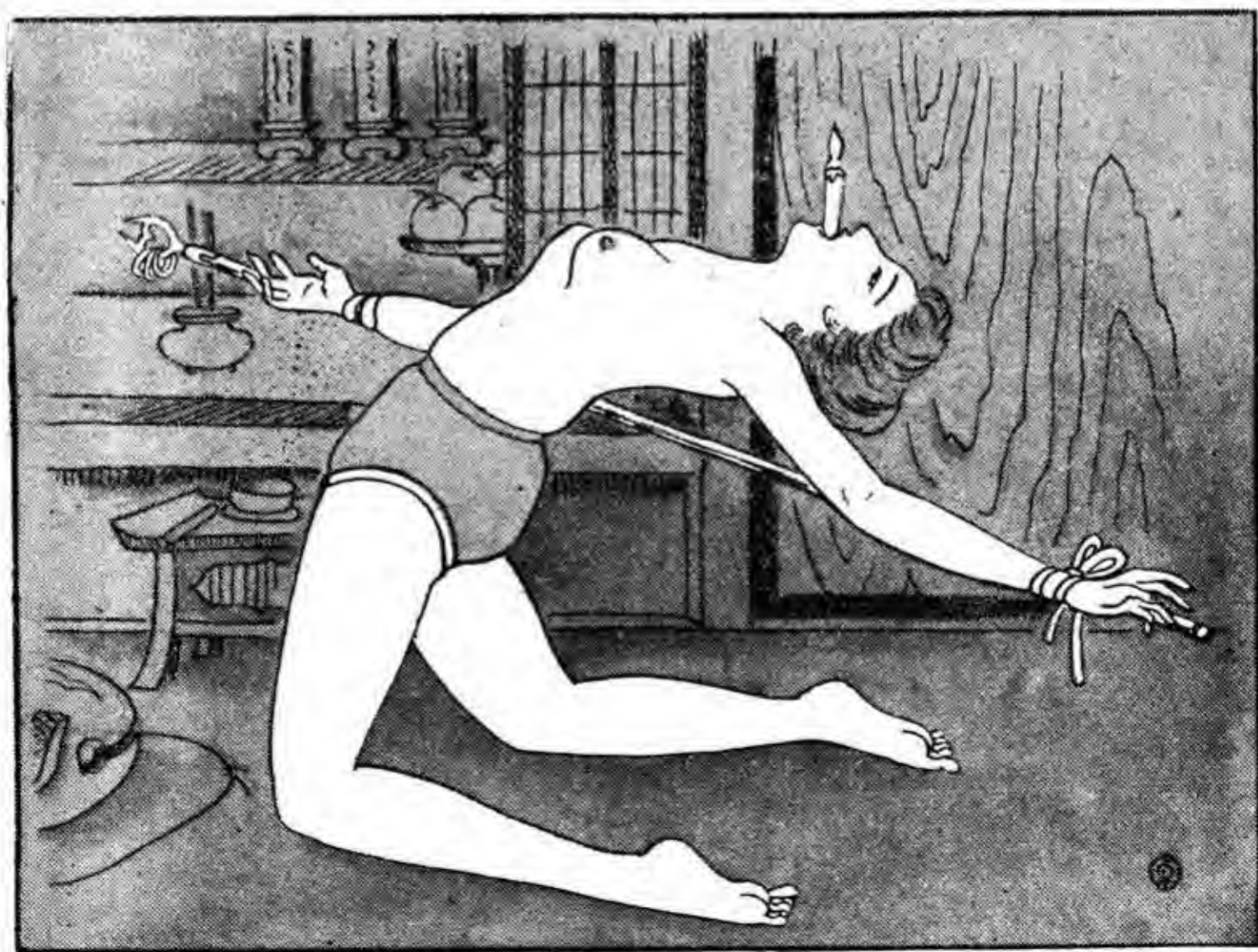
「はい、ただ今」

彼女は慌ててそう返
事をしながら、苛立た
しそうに春夫の背を軽
く叩き続けた。

――早くお母さまの
処へ行かなければ、御
機嫌が悪い――

そう思って、いらい
らするのだが、今夜に
限って春夫の寝付きが
おそく、何時までも乳
房を吸って離さなかつ
た。

兄嫁の初江には子供
がいないので、早や先
刻から仏間へ入ってい
た。おたきの聞きとり
にくほど細々とした読
経の声が襖を通して流
れて来たが、初江の声
は聞えなかった。暫ら



くすると

「初江、もっと、うんと頭を反らさない」と

と云うおたきの言葉に、おびえるように春夫を離れた美津子は、慌てて浴衣の衿を合わせながら仏壇の襖を開いたが、一足入った途端に、彼女は思わず、

「呀ッ」

と叫んで息をのんだ。

「何を驚ろいているのだい。早く浴衣を脱いここへおいで」

おたきの高い声におびえて

「は、はい」

と、身体をふるわせながら、急いで帯に手を掛けた。

「まあ、何とひどいことを……。わたしもきつと、義姉さんと同じようにされるんだわ——」

そう思うと、帯を解く手が細かく震えた。

普通、民家のにしては立派すぎるくらいの大いなる仏壇、柱や壁は金箔でピカピカ光って天蓋の四隅の瓔珞も五彩の色を輝やかせている。正面上壇には金無垢の如来像が安置され一段下の両側には何と云う名の仏神が判然といるが、恐い顔をした仏が獅子を踏んだ獣を

足下に踏まえて立っている不思議な像で、その下の壇に累代の先祖の位牌が十数基並んでいる。膳、菓子、果物等の供物も盛り沢山にしつらえられ、昔ながらの燈芯灯が、ゆらゆらと揺れて仏壇の内陣を照らしている。

初江は、その仏壇の真前に薄いナイロンのパンティ一枚で坐っていた。坐っているのではなくて小さな朱塗りに金縁をとった経机を両膝に挟んで中腰になっているのだった。

彼女の両の腕は水平に伸ばされ、その腕に沿って一本の檜の錫杖が左右の手首を結え真一文字に背を走っている。頭を思いきり後に反らせているので、頸の下に青い静脈が透いて見える。その初江の口に、俗に五十匁蠟燭という、太い蠟燭の四寸位の長さのものが炎を揺らめかせて唾えさせられている。息苦しそうに肩を波打たせ、天井を見凝めている初江の眼が、心なしか潤んでいるようであった。彼女は今、奇妙な人間燭台になって仏の前へ哀れな姿を捧げているのである。

そうした不自然な姿で、いつまでも辛抱しなればならないのか、それだけでさえ相当な苦痛であると思うのに、おたきが誦するお経の切れ間切れ間に、チーンと打ち鳴らす鉦の撥が、初江のふっくらと盛り上った胸を

キューツと突くのだった。その度に彼女は、

「う、うッ」

と、蠟燭を一杯に押し込まれた口から呻きをあげ上体を震わすので、焰の下に溜っていた溶けた蠟がタラ、タラツと頸や胸の上に落ち散って、一きわ、彼女を責め立てた。

「美津子、まだなのかい」

急に、おたきの読経の声が止んだと思うとくるりと後を向いた。美津子には、その顔が昼間の母の容貌とは全然違って、般若の面を思わすような相貌に見えた。

「は、はい」

と美津子は肩から下らせた浴衣を、前へ丸めて抱いていたのを、やむなく後へ押しやっ

た。

「さあ、これを通すのだよ」

おたきは、ジロリと美津子の羞恥に赧らんだ顔を見乍ら手許に置いていた、初江のしているのと同じようなナイロンのパンティを、ひよいと投げた。そして

「早くするんだよ。夏の夜は短かいんだからねえ」

と云いながら、膝をずらして彼女の方へ向いて坐り直した。そして美津子の動作を、じっと見まもっている。手が自分でも判る程震

えていた。

「そんなに怖がることは、ないやね。そうそう、きっちりとお腹を締めて……ええ、そちらへお向き」

美津子が云われたとおり穿き終ると、くると彼女を後向けにして、上部に取付けてある細い皮のベルトを、キリキリと引緊めた。

「ああ、お母さん、そんなに締めないで」

と思わず声をあげるのを

「何をお云いだえ、こんなものが弛んじやア見っともないじやアないか」

と云いながら、更にギュッと一締めして、ピッチリと尾錠で止めた。肌理の細かい美津子の腹の中央が、ベルトで深くくびれて、引き締まった曲線を描いた。

「さ、こちらへ来てお座り、お前さんは香台になるのだよ」

そう云うと、おたきは立ち上って、初江とは反対の側の仏壇のわきへ押しやった。

燈明皿の灯が、部屋の空氣の動きにつれてゆらゆらと揺いだ。

○

「いいかえ、美津子。じっと動かないようにしていないと、この香炉が落っこちるよ」

おたきは、そう云いながら香磁の香炉の中

の灰をならして、先に火のついた長い線香を立てた。その香炉は、盛り上った胸の中央に危うげに置かれている。

美津子は正座した上体を四十五度ぐらい後に反らして、両手を背後の畳についている。

そしてその両手首は、花瓶を置いた花台の脚に固く縛りつけられている。上体を動かせば胸の香炉が、手を動かせば花台の上の花瓶が引っくり返るような姿勢である。彼女は香炉を落すまいとして体を持ち上げ、膝頭で辛うじて均衡を保っていた。

おたきは美津子を、そうした姿勢で自分の左側に据え、今度は初江の膝から経机を抜き取り、蠟燭の火を一たん吹き消して、自分の前へ仰向きに寝かせた。両手は錫杖で水平に伸ばしたまま、蠟燭は矢張り口に咥えさせたままである。

初江は、うすく眼を閉じている。今までの経験で、羞恥も苦痛も避けられないこの夜だと諦らめているようであるが、小麦色の健康そうな彼女の額に、後れ毛が汗に濡れて四、五本ねばりついている。初江を、そうしておいて、次におたきは仏壇の横から一斗樽ほどの大きな木魚を抱えて来て、初江の腹の上に置いた。楮黒く光って、まるで前世紀から生

き残って来た、かぶとがにを連想するようなグロテスクな格好の木魚が、チラと横目で見つめた美津子の眼には、生きて初江に襲いかかってくるように思われた。

「初江、お前も木魚を落すんじやアないよ」と云いながら再び、おたきは初江の咥えている蠟燭にマツチで灯をつけた。

そうした用意が終ると、おたきは右手に木魚の撥を持ち、左手に、朱塗りの柄の先に老人の白髭のような、長い毛を付けたはつす松子を持って、再び経文を誦し出した。

○

暫らくすると、

「ウツ、ククツ」

「ああッ、お母さん。やめてッ……」

と云う堪えがたい呻き声が、初江と美津子の口から断続して洩れた。

木魚を叩く衝撃によって、蠟涙は初江の顔に四散し、それにも増して、おたきの左手で振る松子の毛の先が、そり、さらりと初江と美津子の肌を掠める。初江も美津子も半狂乱に近い声をあげて身悶えした。

殊に美津子は初めての事なので、その焦躁は一層ひどかった。

「ああッ、もうやめてッ」

と、他愛もなく声をあげて上体をよじると細い線香が大きく揺れて、危うく胸の上から転げ落ちそうになった。

「おっと危ない。そんな声を出したりしちや仏様に笑われますよ」

おたきは慌てて香炉を押えながら、美津子の真顔になった顔を覗き込んだ。

「此の家の姑さんが生きておいでの時には、とても、こんな生優しい事じやない。口では云えないような激しい供養をして来たのだよ。この家では、嫁はいつまでも姑に従順に仕えます」と云う意味で毎年、盂蘭盆の夜に仏様の前で、お誓いをするのさ。それが昔からの家風なんだよ。いいかい。わかったらうね」

そう云いながら、木魚の撥を逆さに持って腰のベルトに半分ほど挿し込み、挺子のように



に、ぐいと捻り起した。

美津子は、おたきの言葉にうなずこうとした途端に腹部に強烈な圧迫を覚え、思わず「ああーッ」

と又も、不覚の声を洩らして腰を落した。

丁度その時、隣りの部屋に寝かせていた春夫が眼を覚して泣き出した。

「おや、春夫が起きたようだよ」と、おたきは一寸、耳をすましていたが、

「そうだ、美津子。春夫を此処へ連れて来るがよい」

と云うと、花台の脚へ括っていた彼女の両手を解いて、胸の香炉を仏壇に移した。

夏の夜は次第に更けて、裏の庭で虫の音が聞えて来た。

美津子が春夫を抱いて、乳をふくませながら再び仏間へ入って来た時、おたきは初江の口から蠟燭を抜き取り、両手に結えた錫杖の紐を解いていた。

美津子は、それでもう今夜の嫁供養という行事は済んだのかと、ほっとした思いだったが、それは一寸した中休みに過ぎない事が直ぐに分った。

おたきが部屋を出て行った後、初江は乱れた髪を掻き上げながら、美津子の傍へ寄って来た。

「びっくりしたでしょう。美津子さんは初めてで、さぞ苦しかったでしょうね？」

「ええ、とても驚いたわ。お母さんは、いつもこんな事をするの」

「そう、毎年お盆の夜にはね」

「お母さんは、何処へ行ったの」

「大分、私達を縛る綱でも取りに行ったのでしよう」

「ええッ、まだ縛られるんでしょうか？」

美津子が、先刻の苦悶を思い出して、身をすくめるように云うと

「美津子さん、これからよ。ほんとうに苦しいのは。でもね、これは年に一度のお勤めだから、あなたも頑張つてね」

そう云っている処へ、おたきは行李の荷造りに使う細いが丈夫な麻綱と、木製の洗濯挟みを持って入って来た。そして

「春夫は気持良さそうに飲んでるね」

と云いながら、片方の美津子の乳房を、持って来た洗濯挟みでグイと挟んだ。

「ああ、お母さま」

きゅーッ、と締めつけられる痛みに思わずおたきの顔を仰ぐと

「そうしておいで。お前さんの手で触れるんじゃないよ」

と云って、くると背を向けると、

「さあ、初江。これからいつものように、お

位牌守りをするのだよ」

と云いながら、すると綱を捌いた。

「はい、あのお位牌は」

「それ、あの右から二番目と三番目、それから左端のと三体だよ」

「はい」

初江は云われるままに立って、仏壇へ手を伸ばした。

「ああ春ちゃん、それを引っ張らないで」

美津子は思わず春夫を揺すぶって上体を屈めた。春夫は母親に抱かれながら無心に異様に垂れ下った洗濯挟みを、小さい手で掴んで引っ張るのだった。無心な我が子の手で母親を責めさせる、おたきの奇抜な考えである。

「美津子。そんなに前へ屈まないで、しやんと胸を張っていなさい」

「は、はい」

彼女が、恐る恐る上体を伸ばして初江の方を見ると、初江は早や、おたきの手で完全に後手に縛られていた。

おたきは、初江が仏壇から下して来た位牌の中の一際、大きな金色に輝く位牌を取るとその台座の処を初江の胸の真中に、ぴったりと当て、長い綱を、くると廻して引緊めた。その位牌の先が初江の顎につかえて、彼

女は仰向けを余儀なくされる格好になった。

おたきは、その綱を一旦、後手の綱に結び止めると、更にもう一度初江の腹部に廻し、

臍の左右に一体ずつの位牌を当てて、その先端が胸乳を突き上げる位置に縛り上げた。金色の位牌の台が、初江の柔かい肌に無残に喰い込んで、それだけでも、かなりの苦痛であった。

「美津子、春夫はまだ寝ないかい？」

おたきの言葉に、彼女は春夫を、そっと離れた。春夫は二、三度、口をもぐもぐさせたが、どうやら再び寝入ったようだ。

「そのまま、そこへ寝かせておいて、お前さんはこちらへお出で」

「はい、ただ今」

美津子は、部屋の間へ春夫を、そーッと寝かすと、再びおたきの前へかしまった。

「お前さんはこうだよ」

と云って彼女を立てせると、その手を取って初江の前から顎を抱かせるようにして、彼女の後手と一緒に縛りつけた。美津子の身体は三体の位牌を挟んで縛り合わされた。

「さあ、お位牌を守ってこれから二人で押し合うのだよ。押された方は如意棒だからね」おたきは、木の根の先に拳を握ったような

瘤のある、黒々と光った如意棒を持って、小手調べと云った調子で二人の尻をピシッ、ピシッと一つずつ打った。

「何だねえ、美津子。また押されてるよ。うんと元気を出さないかい」

彼女の尻に又、如意棒がピシッと鳴った。

薄いナイロンのパンティを透して、美津子の尻は真赤になっていた。初江に、ぐい、ぐいと押されて、早や何度も如意棒の洗礼を受けているのだ。初江は小柄ではあったが、力はかなり強かった。美津子は、肌に汗が滲んで氣持が悪く、そんな事を考えている間に、ぐんぐん押され、位牌の角で肌を擦られて、息もつまりそうに喘いでいた。

「お前は、ほんとに意氣地がないよ。ほら、これだよ」

と、おたきが美津子の首に手を廻して、ぐッと引くと

「あッ」

と叫ぶなり、彼女は初江と共にずでんと仰向きに倒れた。

「ああッ、母さん。ゆるしてッ」

激しい衝動と、初江の重圧に思わず声を上げると

「ばかだね、美津子は。初江をど覽。一口も音を上げないじゃアないか」

そう云いながら、初江の背に縛った美津子の手を解いて、宵の口、初江がしていた様に錫杖で、その手を横一文字に縛りつけた。そして初江の腹と胸から三体の位牌を抜き取って、美津子の腹の上へ並べて立てた。

「いいかえ、美津子。そうやって朝までお位牌を落さないようにしているんだよ。お前は今夜は初めての供養だから、これ位にしておくよ」

と言ってから初江の方を振り返り、

「初江は、あちらの部屋でもう一ト供養しようね」

と云うと、彼女は後手に縛られたまま、こつくりと深く頷いた。

「じゃア、これも道具だから持って行かなくちゃ」

と黒い如意棒を、位牌を抜いた初江の胸の縄目に容赦もなく差し込むと、牛を追うようにして次の間へ去って行った。

○
錫杖に添えて両手を横に伸ばしたまま、眼を落して呆然とする美津子は、日が暮れてから先刻までの事が走馬燈のように頭の中を去

来する。夢を見ていたようだ。だが、それは夢ではなかった。現実にも両手は縛られ、苦痛ではないが、自分の体の上には三体の位牌が呼吸をするたびに微かに動いて載っている。

——こんな変な家風ってあるものかしら？

そんな事を思っていると、襖を隔てた隣りの部屋から

「うッ、くーッ」

と、苦痛を耐えた初江の低い呻き声が洩れて来た。何か物音はするが、おたきの声は聞こえない。

「あッ、うーッ」

と初江の呻き声は断続する。彼女は、どんな供養を受けているのであろうか。

美津子は今、春夫が眼を覚して泣き出したらどうなるのだらうと思いつながら、じっと揺れる燈明の灯影を見つめていた。

その小さな炎のゆらめきが、洩れてくる呻き声と調和して、苦痛に悶える初江の姿のようにもみえた。さき程、追い立てられながら自分を見返って微笑した初江の顔が、世にも美しいものの様に浮び上ってくるのだった。

創

作

謎の緊縛フオート

(その二)

久留木 栄

(一) 初枝の話

上田記者と中村婦警は井上和子の家を訪れ和子の母、初枝から和子の日常について色々話を聞いた。

「全く今度のことは最初から今まで驚きと悲しみの連続で、私には最初から自殺の原因が何か分らないのでございます。一応ちゃんとした遺書がありますが、原因は神経衰弱となっておりますが、私達には全く信じられないことでございます。それから今までお話をいたしませんでしたが、和子は私たちの実の娘ではないのでございます。和子は私の妹加津江の一人娘でございました。加津江の夫は、当時では一流の貿易会社の社員で河田定夫とい

年の春、南方で戦死をし、祖母は病死、家は戦災で失うという不幸続きで、加津江は娘を連れて、私の家に身をよせました。戦後、加津江は働きに出ましたが、それが結果的にはよくなく、加津江の死によって自然、和子は子のない私たちの実子として引きとりました。加津江の死……何んという因縁か、これも自殺です。加津江の自殺のことを考えると、ほんとうに今度の和子の運命が恐しいくらいに感ぜられます。生活は苦しくなる。仕事はない、そういうわけで加津江が悪い男にだまされて夜の女になり、さらにオンリーになりましたが、私たちには妹を責める気持など毛頭なかったのでございます。とにかく加津江はオンリーになって渡米する直前に死んだということですが、その辺のこととはよくわからず裸で責められる外人特別シヨウに出されていたとも伝えられています。そして死体受取りにいった時には、もうダビに付されたあとで遺書だけが妹の生活を伝えるよすがとなったのですが、その遺書には、ただ和子のことを頼むとしか記されておりませんでした。兎も角そういうわけなので、私たち夫婦は相談して妹の死を秘め、実子とし

て育てたのです。しかし和子は、両親が違うということ薄々気づいていたようで、私達も高校入学を期に、この事はくわしく話してきかせました。その時も和子には、加津江がオンリーをしていたことや、自殺の件については一切、話ませんでした。その後、和子は別にどうということもなく、かえって明るい生活を送っていたようです。話は前後しますが、あの娘が私の家にやってきた時のことを今でも、はっきり覚えています。頭に桃色のリボンをつけ青白い顔をして、ぼんやりと放心したように母親のそばに突立っていました。私は、この娘は正気なのかしらと思ったくらいでした。しかし座敷に上ると、この部屋でしたが、ちゃんと畳に手をついておじぎをし、よろしく願いますと申しました。その姿のいじらしさ。きっと母親から、そういうようにいわれていたのでしょうけど、思わず涙が出るくらい可愛く感じました。和子が母の加津江と一緒に暮したのは、あれから一年間ばかりでしょうか。当然のことに加津江が働きに出ると和子は家に残されるようになります、加津江が住込むと、とうとう私たちを母と呼ぶようになったのは、先に云ったとお

りです。和子は幼い時から世の荒波をうけているせいか、小さい時から本当によくできた娘でした。黙っていても家の掃除を手伝ったり、お使いに行ったり洗濯をしたり、本当に親孝行で、和子が養女になってから私達夫婦が実子を得た以上の喜びに包まれたといっても過言ではございません。御覧下さい、それが、その当時の和子の写真です。小学校に上った年のことで非常に嬉しそうに笑っています。赤いバラの花模様のランドセルは、働きのいい母が送ってきたものです。この頃のことです。一つ思い出すことがあります。或日、遊びに出た和子の帰りが余りに遅いので迎えにいった処、なんと道端の桜の木に縛りつけられたまま、ぼんやりと空を見つめているではありませんか。そして別に泣いたり腕いたりした跡もなく、まるで人形のように大人しくしていました。すでに辺りは夕闇がせまり、人っ子一人いません。余りのことに私はオロオロしながら縄をほどき、きつく叱ったのですが、和子は一言のいいわけもせず私の体にすがりつき、私の着物に顔を埋め、じっとしていました。でも仕方がなかったの。みんな帰っちゃったんですもの、お母さん。

和子は、そう答えました。近所の子供等と泥棒ごっこをして、女スリだというので捕えられたということでした。暴れたり泣いたりせず余り大人しいので、子供達もつまらなくなり一人帰り二人帰りして、とうとう和子一人だけとり残されてしまったのでしよう。思えば和子は、その頃から緊縛について或る一種独特の感情を持っていたんではないでしょうか。和子の母親の加津江にも、そんな癖がありました。加津江の少女時代、きれいな絹の切れっぱしを持って来て、くくってくれと云ったことを覚えております。私には、どうしてそんなことを云うのか全く理解できませんでしたが、そういった性癖が尾を引いたのでしょう。和子は中学校在学中は演劇部に入っていました。小学校六年の時、シンデレラ姫の劇に出たことが、演劇部に入るきっかけになったようです。このアルバムにある色んな扮装の写真は、みな和子が演じたもので、和子は悲劇のヒロインが好きでした。よく演劇の好きな友達と一緒に、家の三畳で練習していたのを見たことがあります。なんでも、地獄変の良姫だとかいって柱に縛られていたようにも思えます。山しろう大夫という映



画がありました。あの安壽姫も和子の十八番だったとか……。高校生になってからも演劇熱は衰えず、大学の演劇部の人たちと交際しオニール毛猿とか商船テナーシーとか、中学時代とは違った、いわゆる、あちらのむつかしい芝居を練習していました。なんでもゴールズ・ワージーという英国の人の戯曲が好きでジョオンズという貧しい人のおかみさ

んをやってみたといっていました。あの娘は演劇部に入っている関係上、夕方は四時から五時に帰るのが普通で、時には遅く七時頃になることもありましたが、殆んど先生か学友の高子さんという時計屋の娘さんが一緒にいました。そして、あの娘が自殺して一番に見舞に来てくれたのは高子さんでした。高子さんは器量は余り良くありませんでしたが背が高く

元気のいい方で、中学以来の親友でした。私は、和子のことについて高子さんに色々聞いてみましたがやはり中学生の頃より時々、高子さんにも縛ってくれと頼んだそうで、高校に入ってから、さすがに恥しいのか余りいわなかったようです。思えば、もし変な誘惑の手が伸びたとしたら、こんなことに原因があったのではないでしようか」

初枝はそこまで話すと、がっくりと肩を落し、うなだれた。上田記者と中村婦警は、いっしょにアルバムを見るのも忘れ、初枝の話に聞きいつていた。思えば因縁めいた恐い話で、二人とも何んとか変な気持ちにさそれれ思わず顔を見合わせた。何んとか聞きたいことが胸一杯につまっていたが全然、聞かれない気持ち、上田記者は、そんな感じを覚えた。仕方なしにアルバムを何度も何度も、めくりかえしている中、ふと見たような感じの写真にでくわした。それはハイキング姿の和子の一連の五枚の写真であるが、その中に異様なものを感じたのだ。

「お母さん、この写真は？」

「はい、この写真は多分、昨秋、撮ったものだと思います。あの娘の教科書の間に挟まれ

「ていたのでございます」

「なるほど。すると、この写真については余り……」

「ええ、何も知りません……」

上田記者は、しばらく腕組みして考えた。

「アルバムを、しばらく貸して頂けますか。」

実は、この写真の紙とか現像の状況などを調べてみたいと思いますが」

「ええ、それはもう結構でございます。お役にたつことでしたらなんでも……」

「そうですか、それは有難い」

上田記者の顔がパツと輝いた。

二人が辞去したのは、もう夕暮れ近くであった。

(二) 帰り途

「中村さん、例の高子さんという人に会ってみましょうか」

「そうね、でも、これ以上、和子さんのい

じめられる話を聞いたら気が遠くなりそうだしわ」

「では、コーヒーをおごろうか。きっと池田部長もソレイユにきてるかもしれないよ」

「賛成！でも上田さんは記者仲間からドヤさ

れないかしら」

「有難う。ドヤされそうになったら、中村さんの隣に小さくなって隠れるよ」

「冗談じゃないわ。でも本当に縛られるのを好む人もあるのね」

「中村さんも、案外そうじゃないの！」

「あら、いやだ。そんなことをいうと承知しないわ！」

「そら、そういう処が好きだという証拠だ」
上田記者の冷かして中村婦警は真赤になった。

その時、上田記者はボンと肩をたたかれ、

びっくりして小躍りした。

「道でい、ちや、ついちや、あかんア」

「あっ池田さん」

「驚かんでもいいじゃないか。なあ中村さんワシがくると、すぐ神妙になる。そげな男は余り好きでないって、いってやりなさいよ。ヒジテツをくわせると、男は途端にしよげるものだから……」

そういつて池田巡査部長は二人の顔を、ゆ

っくり見渡してから

「で、今日は、どうやった？」

と小声で聞いた。

「うまくいきました。とに角、和子のアルバムを借りてきました。その中に例のフォトと同じような種類の紙の写真があるのです。あとで鑑定して下さい」

「よっしゃ、わかった。ワシの方も、うまくいったよ。どうやら二人の身許がわかった。

一人は隣村だ。もう大分前に捜査願いが出さ

れている家出人、今一人は売春婦だった。ど

うだ、明日は、どちらを尋ねるかね。ワシは

家出人の方は余りネタはないと睨んでいる。それに反して売春婦の方は、かなり面白そう

だ。敏しやんは例の売春禁止法以来、美登里

荘の親父とも親交があるんだろ。中村君も、かなり親しいね。二人で親父に会って見たら」

「ええ、それは面白いと思います」

三人は顔を見合せて微笑した。それから喫茶店ソレイユの戸を押し中に消えた。

(三) 美登利荘の主人

「やあ、お待ちしてました、今度の事件は仲々、面白そうですね。昔の捕物で、いや絵解きという奴ですかね」

玄関まで迎えに出た美登利荘の主人、甲斐

助六氏は、いかにも物知り顔に話しかけた。

甲斐助六氏は、この町では知名士である。怪物と評する人もいる。策士という者もある。

頭の薄くはげた好々爺だが、一癖も二癖もある人物だということは、かつて遊女をかかえていた特殊旅館だったのが鮮かに一流の高級旅館に転換できたという点をもってしても察せられる。現在では観光協会理事と売春婦更生会の参事をしている。

「天下の敏腕記者と美貌刑事でえと、まるで映画の題名ですね。将来は結婚のハッピーエンドという具合にはいきませんか。ハハハハハ、こう顔を揃えられるてえと、いやでも協力せねばなりませんねえ」

二人を奥座敷に案内しながら、しきりと、しやべりまくっている。やがて渡り廊下を通じて、特別に材料を選んで建てたと自慢の離れに案内した。池田巡査部長から前もって連絡があったせいか、ちゃんと応接台にお茶の用意も出来ていた。

「お話は、もう聞いていますでしょうけど……これが件の写真です」

と上田記者が話の糸口を切った。助六氏は眼鏡をかけ、それをジロリとみたが、すぐ目

を離し、手文庫から同じ写真を取り出してみせた。

「池田さんから、ちゃんと貰っていますよ。

エロっぽい写真ですなあ！よかったら沢山ありますよ。同じような写真が、鑑識課より多いかも知れません。もっとも、あなた達には目に毒でしょうがね。池田さんには全部みて貰いましたよ。しかし別に役にたつようなものはなかったようです。池田さんは、複写だから感じがでないんだと、この写真を評していましたかね。現物は、もっとエロっぽいんでしょう」

そういつて老獺そうな苦笑を浮べた。中村婦警は、そういう空気に耐えきれず

「甲斐さん、私たちは、この女の人のことを聞きに来たのですよ」

といった。助六氏は

「いや、これは私の失言でしたな。老人は、どうも横みちに出たがって困りますワイ」

といいながら手文庫から二、三枚の写真を出して見せた。そして、その中の一枚を指さして説明した。

「これは、あの女……山崎春枝が始めて来た日わたしが玄関で写した写真ですよ。三年

前でしたか、梅の花の咲く頃でした。チエックのワンピースに色のあせた茶色のトランク、ナイロン皮のハンドバッグといういでたちで、熊本から出て来たといっていました。勿論、わたし達は信用しませんでした。春枝のことは、上方の仲間から大変なカマトトだから注意しろという伝言があったくらいです。から、向うが向うなら、こっちもこっちというわけで、稼ぎぶりを見てからということ。仮契約したわけです。それら、一年半。どういうわけか神妙につとめていたが、しかし結局、最後はかなりの借金を踏み倒してドロンと消えたわけです。それから、これ。これはあの女のアブノーマルな性格を現していると思います。うちの抱えだった福繁という女は、春枝と非常に仲が良く、春枝から貰ったのだといって私に呉れたのがこれですよ。チヤチな素人写真で俗にいう、えび責めという奴です。現在、福繁は私の義弟の飲食店で働いていますので、あとで呼びますから、春枝の客筋なんかについて聞いて下さい。まあ私の知っている範囲というのは、大ざっぱに言って、そのくらいですよ」

助六氏は、ゆっくりと茶をすすると、写真

を三つ横に並べた。上田記者は、その写真を手にとって持参のフオートと比較してみた。

「お言葉をかえすことになるので失礼とは思いますが、貴方も春枝のなじみ客について全然、知らないということはないでしょう」

「そりや、ある程度は知っています。しかし一般の人には、そういうことは出来るだけ口にしないようにしているんです。でも、ここだけの話として少しお話ししましょう。」

市役所の物部氏、医師の近藤春夫氏、食堂シスロの板場、竹田松次郎氏などが比較的よく来ましたよ。春枝の客は柔男が多かった。と

いうのも柔男の方が女にたいしては冷酷ですからね。それから一昨年の春頃から三国人のパトロンがついていたようですが、よくわかりません。福繁が、いつかこんなことをいってました。お父さん、春枝さんのいうことを聞いて、つきあったら半殺しにされちゃった。でも、お金を五千円もくれたのよ」と。多分その時のお客が三国人だったかも知れません」

「なるほど。すると何か変なことがあったんですね」

「ええ、でももう記憶が古いことで、はっきり

りしたことは覚えていませんが、私の知合いのブローカーで安部という男から電話がかかってきて、春枝を特別に外泊させてくれ。金は、いくらでも積む」といったことを覚えています。安部は相当なヤクザで、つい先頃、東京の浅草で刺し殺されたという話ですがね。私とは虫が合う点があったんでしよう。お前がいうなら……と私も福繁を一度、出してやったことがあります」

「いや、よくわかりました。そのへんのことには福繁によく聞いてみましょう。殺された阿部というのは、麻薬密売の……」

「そうです」

「すると、春枝はヤク中毒ですか」

「いいえ、そうではありません。あの女は割合しっかりしてました。何かこうなるまでに相当の事情があったんじゃないですか。ひよっとすると悪いヒモがいて、それがヤク中毒だとか……そんな感じもするんですがね」

「なるほど」

——こんな風にして、その日の午前中は、またたくまに過ぎてしまった。

(四) 福繁の話

そんなわけで福繁に会ったのは午後一時頃になった。

福繁の本名は衣笠水流子、宮崎県椎葉村の生れで二十七才だが非常にふけてみえ、上田記者が三十四、五才ぐらいと見誤ったほどだ。おっとりとした話しぶりは、愛嬌のある、くぼと正反対の感じを抱かせる。細面の、すんなりした顔立ちで、直ぐくすくす笑う癖があった。

「この人たちはな、女のことには余り知らんやから、念入りに話してやらねばいかんよ」主人から、そういうられると

「あら、そんなこと、いやね」

と小声で答えた。しかし主人が席を外すとべらべら、しゃべり出した。

「わたし、あの人のこと、話したくてたまらなかつたのよ。あの人は根はいい人で、初対面の時から妙に好きになって、特に親しくしていたんですもの。お春ちゃんは今、不幸な自分の身上話をしてくれたが、その時によって話が違うので、どれが本当なのか分らなかつたわ。最初は、埼玉県の農家に生れ、戦争中は徴用で工場の女工をしていたが仕事は辛くて逃げ出し、少年院のような処へ

入れられた。終戦後は浅草でストリップをしたこともあったが落着かず、あちこちを転々とした。その中に俳優くずれの男と駆落して大阪へいったが、その男のために私娼窟に売りとばされ京都、大阪、神戸と流れ歩いた。その俳優くずれの男が非常なサジストで、そのために徹底したマゾヒストに仕込まれた、といったたが次は、福島県の山村の旧家の娘だったが、両親の死後、家が没落し悪い男にだまされて東京の私娼窟に売りとばされた。そして器量がよかったのでテキ屋の親分に身請されたが用人棒と駆落しようとしてつかまり、半殺しにされた上、丸半年間、奴隷のような生活を送っていたが、ようやくその家から逃げ出し、この町へ来た」ともいったわ。

今一つは、熊谷の農家に生れ、そこで大きくなって十六の時、男の後を追って満洲までいき、そこで芸者をしていたが、終戦後、命がらから逃げて帰った」というの。わたしと春ちゃん、暇な時よく縛ったり縛られたりしたのよ。お春ちゃん、お春ちゃんは細引が好きで、手首を出るだけ高く上げて縛らせるの。あんまり上げすぎて、ぎくっといったことがあったけど、春ちゃん、ちょっと顔をしかめただけ

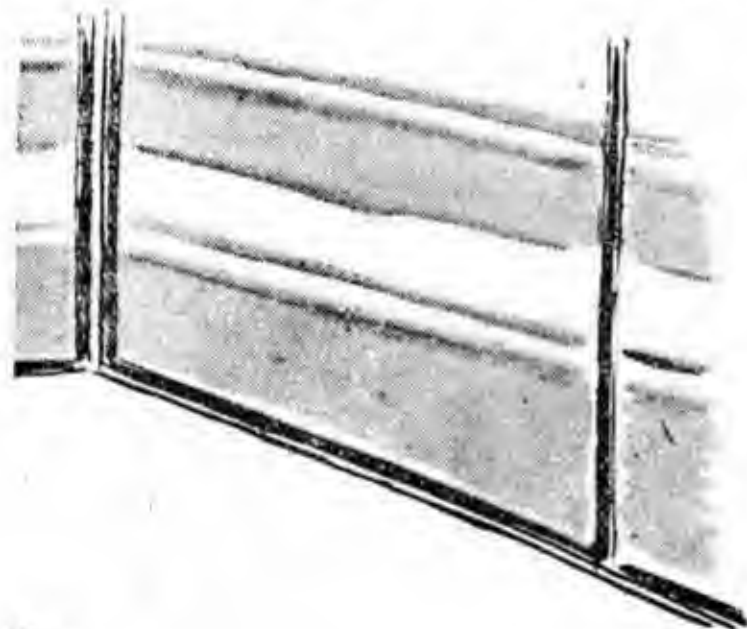
で、縄をほどいたら手を回して自分ではめたようよ。きつと慣れているのでしよう。そして手を高く上げると肩に肉がよるわね、そこを物差で打たせるのよ。目を細くしていい気持だって……。わたしはね、とてもそんな気になれなかった。一度、お春ちゃんから打って貰ったことあるけど、わたしは打たれるの嫌いよ。それから、あの人くすぐられるのが大好きよ。縛られる時は何時も猿ぐつわをさせ、そのためハンカチや絹の手拭などを持っていて自分でキツチリはめて見せわたしに

はめさせる練習させたわ。お春ちゃんのことを考えると今でも、わたしが変になりそうよ。本当にお春ちゃんは変ってたわ」

「ありがとう、よくわかったよ。それから福繁さん、お春ちゃんと一緒に外泊したことがあったでしょう。その時のこと話してくれない？」

「ええ あれは確か五月頃じやなかったかしら。いいだしたのはお春ちゃんなの。うちすごい金持知ってるのよ。一晚五千円だしてもよいというのよ。ねえ、いってみない。う

ち、行きたいけど、うちだけ
やったら旦那様だしてくれん
やる。福ちゃん、旦那さんに
頼んでくれない。そういう
お春ちゃんの頼みでね、うち
旦那様に話してみたの。そし
たら、本来なら出さないけど
特にお前がいうのだからだし
てやろう。って許可をもらっ
たのよ。その日は、しとしと
雨の降る日じやなかったかし
ら。私は一張羅の着物を、め
かしこんで外出することに決



めたのよ。だって二度と、こんなことないと思っただけですもの。わたしもお春ちゃんもまるで遠足に行く小学生のような、はしやぎ方なの。そして家の前まで黒塗りのビュックが迎えに来たのよ。で、わたしが少し、だだをこねてみたら、仕方ないって一万五千円ずつくれたのよ。それですっかり気をよくしてお金をお父さんに渡して自動車に乗りこんだの。その男は、お父さんを知っているらしく、たしか阿部という名前だったと思うの。そして車に乗ると直ぐ黒い眼鏡をかけさせられ、その眼鏡をかけると、ちやうど目隠しをされたようになるわけよ。とに角一時間ばかり、ぐるぐると回ったと思われる頃、自動車は止まり、建物の中へ連れこまれ眼鏡をとるよういわれた。その部屋には社長と呼ばれる赤ら顔の男、支那服を上手に着こなした爪実顔の女、万吉と呼ばれる若い男、等がいたの。わたしは少し不安になって、お春ちゃんに「これから、どうなるの」と、こっそり聞いた処が、「いまにわかるわよ」ってお春ちゃんというのよ、そうこうする中にわたしたちの品定めがすんだのか、社長といわれる男が、春枝、お前が先か」って聞くのよ。お春ちゃん



んたら、あら、今日はわたしが見物役じゃないの。そんな約束じゃなかった。この人、いつも、わたしをいじめてばかりいるのよ。仇をとってくれない」なんていうの。勿論、わたしは冗談とばかり思って、オホホホ、だめよ、お春ちゃん。そんなに冷かしたって。もう二度ということを書いてやらないから」

と一本きめつけたのよ。すると、社長って男が「おや、お春。この人、何も知らないのか」と聞くでしょ。その時、はじめて私は何かあるなと思ったのよ。お春ちゃんは私のことなど委細かまわず、その方が面白いでしょう。どうせ、なる様にしかならないもの。なんて空うそぶいているの。わたしは癪にさわったけど、どうにもならないの。例の社長が「福ちゃんというそうだね。着物を脱いでごらん」とやわらかくいうのよ。わたしは、いくらなんでも明るい電燈の下で、しかも数人の男の前で着物を脱げとは、ひどいと思ひ、いやです。死んでもいやです」といったのよ。そして、お春ちゃんが「あら、姉さん、案外うぶね」といいながら、知らぬ間にわたしの帯をとっているのよ。そして長襦袢一枚にされ辰という男が近づくと、苦もなくわたしの両腕を後にねじ曲げ、麻ロープで縛ってしまっ

たの。その時の手首の痛さ。男って、やっぱりすごい力ね。長襦袢は脱がされなかったけど、縄尻を胸にまわされて縛られ、前を適當にはだけて乳房をむき出しにするように二の

腕にかけられ、縄が肌にくい込むほど、ひどくしめあげられちゃった。余りのことに声も出ないほど驚いているわたしを、みんなはニヤニヤしながら眺めている。わたしは本当に

乙女の浪曲に想う

藤 川 力 行

先日——正確に言えば五月二十一日——の夜、私は理髪店の椅子にあって頭を刈って貰っていた。店のラジオが、どこかの会社が出演者に好きな歌を唱わせては賞品を貰ってもらふ番組を流していた。私は聞くともなく聞いていたが、そのうち、十八歳とかいうお嬢さんが、浪曲のもの、真似を一節唸って忽ち最高賞というのを獲得してしまった。私の頭を刈っていた店のオヤジさんが、「娘のくせうまいもんですナア」と感心する。私も感心して合づちを打った。

しかし、この両者の感心のし方には、少々開きがあったと云う。オヤジさんはおそらく、その年頃の娘に似合わぬ巧みな節廻しに感心したのであるが、私の感心？はそうではなかった。……というのはその一節が、天野屋利兵衛拷問の一節であったからだ。

（二枚、三枚と重ねられ、なんじよう以てたまるべき。皮肉は破れ、血汐は流れ、髪振り乱してウームっと……カンカンカン。という次第であったからである。私はこの浪曲が誰の演し物か知らない。従って似ているかどうかとも判らないが、とにかく、長々と続くであろうこの物語りの内で、十八歳のお嬢さんが、多くの聴衆の前に立って好んで抜読みした箇所がこの一くさりだというところに感心したのである。

腹がたっちゃった。辰といわれた男は、縄尻を天井の滑車から降りている綱に結びつけたので、わたしは立つことも坐することも出来ずくやしいやら恥しいやらで、じっと唇を噛みしめて睨みつけてやったの。お春ちゃんは平手で、わたしの尻をピシヤリと叩き、お姉さん、嬉しいでしよ。あすの晩までは、いくら泣いても帰れないのよ。うんと虐めてもらうといいよ」というの。そして、みんなでかわるがわる、わたしを責めるのよ。それから尻打ち、木馬、パイプ責めなど、わたしは半死半生の目にあわされちゃった。でも、お春ちゃん、わたしより、もっとすぐ責められたの。たった一時間ばかりで、お春ちゃんは足腰が立たなくなり、翌日まで唸っていたんだもの。わたしは丸一日お春ちゃんの看病をしたのよ。お春ちゃん、うちは、あの人たちの奴隷になるって約束しちゃったんだもの、自業自得だけど、あんたは、そんな約束はしないのに、ほんとにごめんよ」とわたしに謝ったわ。それから一と月ほどしてから、お春ちゃん、わたしに、ねえ、あなただけは信用してくれるわね。うち、あの人たちから呼び出しが来たのよ。ここの御主人には随分、迷

おそらく、この責め場がこの浪曲のヤマであらうが、一枚のレコードを、何回も何回も繰返してはじっと聴き入り、その場面を想像しながら、悲壮な苦痛をわが身に置き替えて、一心に練習している娘さんの姿を頭に描いてみると、名状し難い何ものかを感じるのは、そのお嬢さんに対して失礼であらうか？

勿論ラジオだから、その姿は見られないが、後で司会者と問答するその声は、恥し気ながら可憐な明るさが感ぜられた。

以前、私が何かの会合に出席した折、そのアトラクションとして、女流浪曲家が演ずるのを見たことがあるが、その時にも筋に御殿女中の折檻場があって、語る演者は両手を背に廻し、縛られた姿よろしく熱演していた。

この番組に出演したお嬢さんの場合、どういうしぐさで、あの一節を唸ったのか、まさか、あの瞬間にも等しい短い時間に、縛られた恰好はしなかったと思うが、家で練習中は果してどうであつたらうか……。よし形の上に表わさなくとも、頭に描く利兵衛の姿は……。などと、私は我が田へ水

を引く連想を逞しくしてしまっていた。お蔭で、その日の調髪はまたたく間に済んでしまった訳だが、奇妙な退屈しのぎをするものだといわねえ。おかしな話だ。

大衆演芸の浪曲に、縛り、猿ぐつわ、折檻などの情景が出てくるのは、何も珍らしいことではない筈だ。従って浪曲に興味のある人が、たまたまその件りを真似たといささかも奇異とするに当たらない。それを聴いて、何かを感じる方が、どうにかしているに違いないのだ。

私は映画館の前でスチール写真を眺める時でも、書店で雑誌の頁を繰る時でも、そこに女性の縛り姿を発見すると、ハッとなつてさり気なく周囲を見廻してしまう。そして、人の注視を受けていないことを認めてから改めて恐々見直すのである……。ソロソロと……。実に以って情けない気の弱さであるが、もっと開放的であつてよい筈なのに、これもなまじ縛りに関心が強い故であらうか。この調子だと、如何に自分が得意であり、自信があつたとしても、観衆の前に立って、利兵衛拷問の場の抜読みは不可能ではなからうかとも考える。

花恥しき最高賞獲得のお嬢さんの上に、幸多からんことを祈るものである。

惑をかけっ放しなのに、このまま帰って来なかったら、さぞ御主人は腹を立てるでしょうね。福ちゃん、あんた、よろしくいってね」と目に一ぱい涙をためていうの。わたしも、つい同情して泣いちゃった。そして、その日、お春ちゃんはお出でいまままとうとう帰って来なかったのよ。お春ちゃんという女は、ちよっと間の抜けたところがあつたが根は良い人間のような気がするの。ほんとに可哀そうな女だと思ふわ」

「ありがとう。お春ちゃんのことはよくわかつた。それで、君は社長という男と辰、万吉という男や、支那服の女の顔をおぼえているかね」

「そうね、もう大分、記憶も薄らいだけど、あんなひどい目にあわされたんだから、やっぱり忘れられないわ。そう、万吉という男はたしかに顔に疵があつて、社長と呼ばれていた男は髭をはやして赤ら顔だったわ。辰という男と支那服の女は余り特徴がなかったのよ」

「写真を見せれば、わかるかね」

「そうやって捜査第二日目は暮れた。」

(続)

マゾヒズム百景

馬場好男

第二十二景 奇怪な遊び

六、七年前の事である。私がまだ独身時代で大いにハネをのぼしていた頃、その夜も何時もの様に遅くまで遊び歩き、ふら／＼と新宿駅に向う途中の事である。時間はもう十一時になっていたと思うが、西口の駅に出る暗い道を歩いていると、スッと一人の女が寄り添うように、

「遊ばない？」

と声をかけて来た。夜の天候の相手は二の足をふむ私だったが、日頃、念願にしてはた

せないマゾプレイを、今夜こそ此の女とやってみようと、はかない望みをかけてうなずいてしまったのである。

その時、既に私の身体に可成りのアルコールは入っていたのだが、もっと酔って、と下心を出し、

「一寸のんで行こうか」

と誘ったものだ。

「うれしいわ」

彼女は私によりそった。私はその時、此の女は男みtainな声を出すな、とは思ったが、さして気にしなかった。暗い道路の片すみに

あった屋台で酒をのんだが、屋台の爺さんがジロ／＼と私や、彼女を見るので不審に思い乍らも其処を出た時は、私も彼女も大分酔ってしまった。

「今夜泊って下さるなら私の家に来てね、汚いバラックだけど」

と、その女が私の右手にすがりついたので私もそつと彼女の腕に手をかけてハッとしてしまった。固い腕！此奴は女でない、男だ。咄嗟に私は酔いがさめる様な気持になったが今さら後へは引けない気がして、えい、ままよ」とばかり覚悟を決めてしまった。

彼女？の住家は其処から程近い処にあったが、一軒家とはいえず、ひどいバラックで、たしか四畳半一間の汚い畳の部屋で、それでも女性の部屋らしい調度品がおかれてあった。

彼女？の名は「かおる」といった。

かおるは途中、私の態度の変ったのに気づいたらしく、家に着くや、

「私の事はもう判ってるのでしよう？でもいいわね。お願い、遊んでってちょうだい」

と手を合わせて頼むのである。私も来た以上はその気だったので「おかま」と聞いたただけでも嫌だった相手と、度胸を据えて相対したのである。

「ね、抱いて」

かおるは私が実に消極的なものだから、する様に私の身体にまつわりついてきた。

酔っている私だったが、女のなりはしていても男だと思ふと、どうも不快さが先に立って私は全く後悔していたのである。

「いいわ、私からこうしてあげる」

業を煮やしたかおるは、いきなり私に抱きつき顔を近づけた。

「よ、よせよ」

私はハネ起きたが、言葉とは逆にかおるの首に馬のりに跨ってしまった。私は、私が常に空想に耽り、考えていた事を、自分がされるのではなく、いわゆるMでなくSになった形となってしまったのである。

私は狂った様にかおるの顔を踏みつぶしかおるの頭の毛を掴んでは、こずき廻す様に傷めつけたのである。

「悪かったな、ひどい事をして」

私は何かボンヤリして、かおるの背中から降りたが、かおるはガバツと私の脚にすがって、

「うれしかったワ／＼折かんされてる様で、とても嬉しかった。ね、私を縛ってよ、どんな事をしてもいい。ぶつても蹴ってもいいの

私はそうされたいのよ。だから、もっと苛めて、ね、お願いよ」

私はかおるの言葉を聞いて、いささか驚いてしまった。此の男もマゾヒストだ！女装してのマゾヒストの事を何って言うのだろう……私はそんな事を考えてかおるを見下していたが、自分が女性に求めるマゾプレイの出来ない焦だたい反抗？かどうだったかは知らないが再び、かおるの頭の毛を掴んで床の上を引きずり廻し、馬のりになって、かおるの両手を後手にして背中に高く縛りあげてしまった。その間にも私は、かおるが身をくねらせて女性の様に？脚を開くまいとしているのを見て、むら／＼と不思議な気持ちが湧き起って、傍にあった衣桁かけを倒すと、ちようどハリツケの様に、かおるを縛りつけてしまった。今は許しを乞うかおるの口に私は自分の靴下をおしこみ、縛られ乍ら逃げようとするかおるの身体を踏みしめたのである。

私はその姿を見た時、女性の前ならひれ伏してドレイの誓いの接吻したであろうが、此の時は憎しみが先に走って（今、考えると憎しみかどうか判らない）かおるの両頬を平手打ちにしたり、撲ったり、果は蹴りつけ、遂にはバンドを振り廻してしまったのである。

「許して、もう許して」

かおるは後手のまま、人間のみにくい顔をそのまま現わしてうごめいていたが、その眼に何か恍惚としたものをみて、私は妙に不安と恐怖みたいなものを覚えたのである。

私は、かおるが出していたウイスキーをラッパのみに口に含むと少しづつ飲み込んだ。再びカアツと全身に酔いが廻ってくると、自分の言葉にも度胸がついてきて私はかおるの両手、両足の縛めを解いたのである。

「さ、今度は君がやれ、僕の上に乘れよ。ただ僕は君があくまでも女性としての態度で苛めてくれ。僕もどんなものだか女性の君から苛めてもらってみたい。」

「ええ、貴方がやれていうなら」

かおるはそういうと乱れた髪を一寸直して膝小僧をくつつける様な恰好で私の胸の上に馬のりに跨った。

私の上に跨って、首を横にしたかおるの姿は完全に女性だった。

私は、胸をずしりと重い男の体重に、組みしかれ乍ら、何時か本当の女性に組みしかれた淡い満足感に、次第に酒の酔いばかりでない酔いにただれていたのがあった。

白

告

自分をハダカにする (四)

松 井 籟 子

私は縛られたいと思いつつ、一度も縛られたことがないと書いた。いつも、いつも、ただ夢想の中だけで人を縛り、自分を縛るのだと……。

しかし、私が柱を背に、ぐる／＼と縄をかけられたことがあるのだ。

という、やっぱりそうだろう、そうなくちや……と、気の早い人は思うだろうが、私は決して、今までこの告白で嘘をついたわけではないのだ。本当に縛られたことはないのだ。

では、何故……と思うかもしれない。

私は私の体を、私の手で柱へ縛りつけたことがある。

「みだらび」を書いていた時だ。

当時私は小屋のような小さな家にひとりで住んでいた。

駅から三十分も山道を歩いて行くような、

静かな所で、松林にかこまれていた。

その家の、玄関と、座敷と、廊下の間にある一本の柱が、襖と障子をあけはなすと、手頃な仕置柱になるのだった。

「みだらび」のさし絵をかいていた喜多玲子さんが、さし絵のうちあわせにきた時に、ニ

ヤニやわらいながらその柱をみていった。

「いい柱がありますね」と……。

さすが目が早いなと感心したが、

「そういえばそうね」

と私はとぼけていた。

「画かせて下さいよ、あの柱にあなたを縛って……」

道具立ては揃っている。

松林の中の一軒家。虐げられる女の美しさばかり、情熱を注いで小説をかいている女と、同じような絵をかいている女と……。

小説なら女同志よりも、どっちかを男にするだろう。そして、縄と、責め具に家中がむごたらしい仕置場以上の様相を呈し、責める方も責められる方も、汗にまみれてむんむんと生命の香りにむせぶようになるとしたら、私の書く小説以上だったかもしれない。

けれど私のいつもの癖で、見栄だか、羞恥だかわからない感情が邪魔をして、折角のチャンス逸してしまった。

二人で柱を気にしているということが、ひどく私の居心地を悪くさせたのだ。

「駅の近くにビヤホールが出来たからのみに行きましょう」

と、無理に喜多さんをうながして外へ出てしまった。

私が私をその柱へ縛ってみたのはその晩だった。

酔って帰った私は、何となくひとり寝をわびしく思った。

男だって酔うと、はじめて会った酒場の女給を相手にキッスすることもあるだろう。

朝日新聞に連載中の小説だって、大学教授が酒場の女にキッスする所からはじまっている。

女が酔って、子供が母親の乳房を欲しがる

ように唇を求めたって、不合理ではない筈なのだがどうもいけない。

第一、相手に困る。まさかゲイバーの男給さんにキッスするわけにもいかない。

しかし、私だって、酔えば誰かの唇が欲しくなるし、求めても無駄と知れば、せめて、自分で自分を慰めたくもなる。

そして、私は自分で自分を縛ってみたくなつたのだ。

以前、本誌に、自分で自分に縄をかける方法が出ていたように思うけれど、その時は、

そんな記事を探すのもわずらわしかった。ただ、人に抱かれない思いが、縄に抱かれない思いにかわつただけだ。

私は両手を後にまわして、指さきを使って縄をかけてみた。

しかし、後手にきっちり結ぶということはひとりでは無理だった。

前なら出来る。

口を使って、両手をしっかりと結び合わせるこ

とが出来た。しかし、後手に結ぼうとするとどうしてもすき間が生じるのだ。

片方の手首に、ぐるぐると縄をまきつけて片方の手首へもまきつける。そこまではうまくゆくが、きっちり締められない。

そこで私は少しの間隔があくのは仕方ないとして、自分の体を柱にぐるぐると縛りつけた。それもなかなか思うような位置に縄がか

かってくれない。低い胴のあたりをしめるのはわけではないが、乳房の上下へかけようとすると相当に身をくねらせなければならぬ。

私は、私自身を上手に柱にくくりつけることが、まるで私に課せられた刑罰のように、汗をかきながら懸命に努力した。

見えない男がそばで鞭をもって立っているように想像した。

「ゆるい。もっとしっかりと」

と、男は鞭をふって私の縄のかけ方をながめていた。

長い細引は一巻きして畳におとす度に、ザラツという、まるで鎖のような音をたてる。

自分を縛るということは、人を縛る以上にエネルギーのいるものだということを私は知った。

手首は縄のあとが赤くこすれて、皮がむける位になっている。どうしてもその指さきを働かせなければならぬので、必要以上に手首にかけた縄がくい入るのだ。

松風の音しかきこえない夜の静寂の中で、私はびっしり汗をかきながら、たったひと

りで自分を責めていた。

後手に縛った体を柱につながられるより、柱を後手に抱くようにして、柱のむこう側で後手に縛られる方が苦痛が大きいことも知った。

私は「みだらび」の中で、ヒロインがそろばん責めにあうシーンを書いていた。

しかし、私自身、そろばん責めが、どんな苦痛をともしうのか、身をもって知らなかった。

私は柱を背にして坐って、膝の下へそろばんを入れてみた。

「ああっ！」

と声が出る程痛い。

とても、そろばんを膝の下に敷いて正座してはいられなかった。

それも小さいそろばんで、膝か、足首が、どっちかが畳にふれていれば、まだ我慢が出来る。

しかし自分の体が宙にうい

たように、まともにそろばんの上へ全重量がかけられると脛にそろばん玉がくいいて、たとえ鞭でうたれなくても、ただ縛られて、

そろばんの上にのせられているというだけで責める方は何の労力も使わずに、責められる方が苦痛に汗を流すだろうと思われた。

しかし、痛いといっても、それはまだ失心する程の痛さではない。

石を抱かせる拷問では、足の下に三角の木を敷かせるといふ。そして一枚、二枚と石の重さが加わると、脛は三角の木にめいりこんで血を流し、しまいには口からよだれを流して失心するという。

私はそろばんの痛さを我慢しながら、その膝の上へ重さのかかるのを想像した。

自分で自分を責めるのでは、柱に自分の体をまきつけて、脛の下へそろばんを入れるのがせいぜいだ。それ以上立って行って、膝の上へ何かおもりになるものをのせるのは不可能なのだ。

私はただ部屋の中を見廻した。

そして、分厚い裁ち板があるのが目についた。

私は「みだらび」の中で、ヒロインをそろばん責めにして、さらにそ



の膝の上へ裁ち板をのせた。

そして、それだけではあきたらず、火鉢をのせ、その火鉢の中で煙草のすいがらをいぶらせさせたのだ。

私のそれまでに書いた小説は、すべて想像の産物だった。

しかし、私が「みだらび」を書き出した頃は本誌が一番充実してきた頃で、私のような夢想家ではなく、本当に責めたり責められたりする経験のある行動派が、告白物を寄稿し出していた。

自分の異常さに涙を流して書いているような手記にぶつくと、私は私の夢想が恥じられた。私は臆をでっちあげたとは思っていないが、けれどあくまで小説として書いたものと、真実の手記とは迫力が違うような気がした。

そして、私は、たとえ小説でもやっぱある程度本当のことが書きたいと思ったのだ。相手のいないひとりぐらしでは、誰かにしてもらったことが出来ないから、自分でするより仕方ない。

裸になって、自分の手で、自分の体の方々へ、洗濯ばさみをはさんでみたこともある。銀色に光る金属の洗濯ばさみで、腕も胸も

胴も腿も、手の届くかぎりはさんで、針ねずみのような姿を鏡にうつしてみたりした。

誰も見ている筈のないしめ切った一軒家なのに、どこかで空気が動くような気がして、自分で自分のそんな姿をながめていることにたまらない恥しさを感じた。

そしてその恥しさの中に、奇妙な自己満足がひそんでいた。

それは、恥しめをうけているというマゾヒストの喜びだったのかもしれない。

そしていったい自分は小説を書くために自分をいじめてみているのか、小説にかこつけて、自分をいじめているのかと、もやもやした思いが頭一杯にひろがると、何となくいたたまれなくなつて、町へ出てお酒をのんだこともある。

男だったら娼婦を買いにいけるのにと、女の身を残念に思った。

今でもそれはよく思うことなのだ。

男だったら、汽車に乗って、どこか遠くの知らない町で、行きずりの女を買って、苛めるか苛められるかして帰ってこることも出来るだろう。

本当は愛している人にしてもらいたいことだが、それは私が女だからそう思うので、男

の体を持っていたら、又考え方も違ってくるだろうし、案外その日限りの娼婦を相手に慰を見出すかもしれないような気もするのだ。

○

○

しかし、いったい他の人達はどうやって正常ではない希求を相手にいい出すのだろう。

その点でも相手が商売女ならいい出しやすいだろうが、素人の女に恋をして、その女にどういつて縄をとり出すことが出来るのだろうか。

江戸川乱歩の小説に、女が鞭をかくして持って行って、相手の男に打ってくれと頼む情景があったけれど、普通に結婚して、女の方にその慾望があった時、どうするのかしらと考えてしまう。

第一、こんな慾望は先天的なものなのか後天的なものなのか、それもよくわからない。

好色さというようなものが、よく親に似ることがあるように、被虐や加虐の興味も遺伝するのではないかと考える。

しかし、私の母はすでに亡いのできいてみることが出来ないのだが、父は谷崎潤一郎の愛読者だった。

私は女学校の頃、父の書架からぬき出しては谷崎の作品を読んだが、今だに父は谷崎の

ものというを買っている。

いつかある人がいつかいた。

「谷崎を好きだという人には、多かれ少かれそういう分子があるのではないですか」

と――。

だから父の血の中にまでに何かあるのかもしれない。けれど、酒の上で父にそれとなくきいた時にはアブノーマルに興味はもっていないようにみえた。

そして、女の姉妹達が結婚後は相当あけすけなおしやべりをするので、それもさぐってみたのだが、みんな正常な夫婦生活で満足しているらしい。

だから異常なのは私だけということになってしまふ。

「肉体の門」が評判だった頃は、その芝居の話を話題にして、相手の心を探ったこともあった。

わざと一緒に見に行つて、私はすでに見ているので舞台よりも、隣の方の反応をうかがっていたこともある。

この本の読者なら、当時年令的にそれを見る可能性があった人は、大抵見ているだろうが、和服の女が柱へ縛りつけられて、ベルトで打たれるシーンはかたずをのんだに違いな

い。

肩から着物がずりおちて、その日によって乳房までが見えてしまふようになるというのでさわいでいたが、太い縄でぐるぐるまきにされることの方が、私にとってはショックングだった。

最後に別の女が、裸に近い姿で吊りさげられて、鞭打たれる所があるのだが、私には最初の責め場の方が印象的だったのだ。

そこで自分の好きな人を誘って見に行つたのにかかわらず、私はひそかな目的を達することが出来なかった。

私は時々そんな風に空まわりする。そして自分の異常さが恥くてたまらなくなるのだ。いったい此の人達はどうかやって相手を求めているのだろう。

私の近くに年配の医者がいて、いつの頃からかその人の情事の話をかきかされるようになった。

ひとは自分の情事とか恋愛とかを誰かにしやべりたい気持ちをもっているが、秘密にしておかなければ支障が起ると思つて我慢していることが多い。

新婚早々の夫婦が、のろけるつもりもなく相手のことがちらちらと話題の中に入りこむ

ように、たのしかった異性の話はしたいのではないだろうか。

そこでその医者は、私なら、紙に向つてしやべることがあつても、その人の妻や、近所の人達にしやべることはないと思つて、のろけのはけ口になっているらしい。

その医者が、映画館で知り合った女があつた。郊外の映画館で、平日はさほど混んでもいないらしく、映画そっちのけでラブシーンの真最中という男女がいたのだそう。

医者は――仮に室田としておこう。

室田はその男女を見ながら、自分の若い時のことを考えたり、すでに同衾しなくなっている老妻を思つて、淋しかったらしい。

平日に映画を見に行ける程、彼はもう家庭でも老先生として、敬遠されていたのだ。実権は息子の若先生にうつり、患者は老先生の診察には、口実を作つて帰えつていたりする。そんな淋しさを慰めるつもりで入った映画館で、思わぬ恋人をひろつたのだ。

彼の前に、三十がらみの人妻らしい女が坐つていて、やはり、映画よりも、実演中の男女のラブシーンが気になるらしく、うしろを振り返っていた。

そのうち、彼の組んだ足が、偶然、前の女

の椅子にぶつかってトントンと音を發した。すると、女はトントンと足音をたてた。

室田は偶然にしたことなのだが、女のはまるでそれに答えるようだったらしい。

そこで今度は偶然ではなく、故意にトントンと信号を送った。

すると、やはりトントンとかえってくる。

トントントン。

トントントン。

もう大丈夫だと室田は思った。

しかし、前と後では手を握ることも出来ない。よし、握れたとしても、足さきのあそびは面白がっていても、握った手で、室田を老人と知って、「いけすかない」と思うかもしれない。

もし大きな声を立てられたら、少くとも、一人や二人の患者はその映画にまじっているだろうし、室田病院の名にかかわることだった。

彼はとうとう辛抱して、映画が終るまでだまって見て、外へ出た。

外へ出ながら、女がどうするかなと思ったが、女も彼の後から外へ出た。

彼はわざと女の方へ背を向けて、駅の方へ少し歩いてから振かえると、女は映画館の前

で立ち止って、彼の後姿を見ていたらしい。

視線が合った。

彼が微笑すると女もほえんだ。

そこで彼は近付いて行った。

順序を追って書いていると、私の書こうと思ったこの女のマゾヒズムに対して、前置きが長くなりすぎるが、よく他の小説でも、こんな風に街で行きずりに女を拾って、一夜の恋をたのしむ描写がある。そして、そんな時大抵は、もう私がここまで書いた位でホテルの部屋あたりへ筆がとんでしまうのが常なのだ。

どうして、どういう風に、未知の女をそこまでつれて行くかという事は書かれていない。もしかしたらその筋へのさしさわりがあって、書いてはいけないのかもしれないが、何もこの通りまねてみた所で、一方的にうまくいかないことなのだから、筆のついでに書かせてもらう。

室田は女に微笑をおくりながら、再び背をみせて喫茶店の前まで歩いて行った。

喫茶店の前で振り返って女の方を見ると、女も少しおくれについてくる。

彼はもう一度女の方を見て、喫茶店へ入っ

た。

女がつづいて入って来た。

室田の席とは別の席へかけたが、彼はもう大丈夫と思って、女の席の前へ坐った。

「あなたは何を召上りますか？」

室田がきくと、

「ジュース」

と、女が答えた。

そこで室田は同じようにジュースをのんだが、まだ彼がのみ終らないうちに、

「御馳走さま」

といって女は立って行ってしまった。

そして、入口でソフトアイスクリームを二つ、紙袋に入れてもらって、自分でお金を払って出て行った。

室田はがっかりした。

なんだ人の奥さんに御馳走してやって、うちへ帰えって二人でクリームを食べながら女にあまい老人がいたと笑うのだろうと思うとたった五十円のジュース代がばかに惜しく思われた。

俺だつてのまなくともいいものをのんでしまった。

そうも思った。

そして、若い頃どこへ遊びに行っても外国

俳優のコールマンに似ているともてた自分の年令を考えると、淋しさにやりきれない思いだった。

室田が喫茶店を出ると、女は電柱のかげに立って彼の出てくるのを待っていた。

室田はもう一度期待を持った。

「どちらへ帰えるんですか？」

と彼が聞くと、

「先生は？」

と女が聞いた。

「先生って……あなた、僕を知っているの？」

と室田がきくと、女は笑ってうなずいた。

こりやあ、いけない、うっかり手は出せないと思つた。

「僕はもうおそいし真直、家へ帰ります」というと、

「そう」

という。

室田は話しながら駅の方へ足を向けた。すると、

「先生のお家、こっち？」

と女がきく。

室田は不しんに思った。自分を医者と知っている以上、駅から電車で二つ程さきの、室

田医院も知っている筈なのに、女の問いは不思議だった。

「僕は駅から電車へ乗るのだけど、どうしてあなた、僕を先生というの？」

というと、

「だってお医者さんでしょう？」

という。

「どうして医者だとわかるの？」

というと、

「あら、その位わかりますわ。先生、とってもくすりくさいんですもの……」

といった。

この女、案外敏感なんだなと室田は思った。そんな話をしながら、駅まで来てしまった。

「もうおそいし、僕は電車で帰えるの億劫だから、どこかこの辺にきれいな宿屋があれば泊って行きたいけれど、御存知ありませんか？」

と室田はきいた。

「さあ、駅の近くにはあまりないんですけど少し、行けばあるようですわ」

と女がいう。

「教えてくれますか？」

というと、無言で女は歩き出した。

そこで室田は女のあとに従った。

女が案内した家は、当節流行の温泉マークのホテルではなくて、普通の旅人宿のような家だった。

室田は又わからなくなってしまった。

どうしても女の正体がかめないのだ。

「じゃあ、僕はここへ泊るけれど、あなた、よかったら、少し休んでいきませんか？」

というと、無言であとに従って来た。

医者ということが、女の信頼を得たのかも知れない。

そして、その旅館の一室で、女の買ったアイスクリームを仲よく一ずつ食べて、とうとう泊ってしまったのだ。

これで私の長い前置きも終るのだが、あくまで、室田は又、女に金をどうやって渡したらいのか困った。

そこで、

「帰えりに何か食べて下さい」

といって、千円出すと、女はどうしても受取らず、そんなつもりじゃなかったから、お金はいらないという。ただ、これからも会ってほしいという。

ただ室田が一番ふしんに思ったのは、女と愛を語っていると、女が、

「痛い、痛い」

ということだった。

最初は愛を語ることが女に苦痛を与えるのかと思って、「痛いなら、やめる」というと苦痛ではないというのだ。

「痛い！」

という言葉は女にとって、喜びの言葉であるらしかった。

私は室田先生の長物語をきいて、そこは蛇の道は蛇の例えどおり、この女はマゾヒストなのだと思った。

すると、案の定、どうもそうらしいのだ。

○

○

彼がこの女の許へ、一週間に一ぺん通い出して、一と月程立った時だ。

女は船員の妻で、夫は長い航海に出ているということもわかってきた。

室田が行って、いつものように一緒に夕飯を食べ、寝床までとったあとで、

「ねえ、先生、親戚へ古い着物を送ってやりたいので、行李へ縄をかけて下さいませんか？」

と女がいった。

「あしたにすればいいのに………」

と彼がいうと、

「でも、思い出した時しておかないと忘れて

しまうのですもの」

といって、小さな行李を押入れから出してきた。

そして、

「どの縄がいいかしら？」

と、真白い麻紐や茶色がかかった棕櫚縄や灰色の細引などを何本も輪にしたのや、たばねたのを出して来て、座敷一杯にひげてしまった。

「さあ、どれにしようか」

と、室田が手頃な縄をよりながら、ふと女の顔を見ると濡れて光るような瞳をしていた。彼はその瞳にふと誘われた。

「こんなに沢山縄を出してくると、行李一つではあまってしまから、あんたまでくくってしまおうか」

「いいわ」といって、



と女はいった。

「どの縄がいいかな」

というと、

「どれでも……」

と、女は体をよじらせた。それは羞恥の色気というのか、彼が今までにこの女に見られなかったものだった。

「どうせ縛るのなら、着物の上からでは仕様がなない。裸になるか」

というと、

「ええ」

と女は恥しそうに首をたれて、うなずいた。

室田は女を裸にした。

そして、後手に縛り、胸へも腕へも縄をまわした。

女は自分が縛られて行くのを、自分でじっと見るように首をたれていた。

女の上半身は縄だらけとでもいうように、何本も何本もかけまわされていた。首にかけた縄は横の縄へ縦にかけあわされ、又首にもどされて後手に結ばれ、又前にまわされて菱形になる。

女の裸身は縄で装飾された。

両方の乳房が奇妙な形にとび出した。

室田は縄を胸をまわすようにして、ザラザ

ラした縄の面で、それにふれた。

「このまま、明日まで放っておいたらどうする？」

室田は笑いながらいった。

「大丈夫よ、苦しいことないわ」

女がいった。

「じゃ、もっと苦しませてやろうか」

「どうするの？」

女の声がはずんでいた。

「どうしてやろう？」

室田がいうと、女はまるでひとり言のようにいった。

「あの行李の中へ入れられて、体を押しまげられたら、とても苦しいでしょうね。死んじやうかしら？」

「死にはしないさ。してやろうか」

「いやよ、苦しいわ、きつと……」

厭よといいながら、女の瞳はキラキラと燃えるような美しさを呈していた。

室田は行李をあけた。

「中のもの出してもいいか？」

ときくと、女は無言でうなずいた。

「さあ、ここへ入るんだ」

「どうやって？」

女は後手のまま、にじりよるように行きへ

近付いた。

よく行李詰め死体というのがあがあるが、手足をポキポキ折れば入るだろうが、生身の体を行きの中へ入れるのは、なかなか骨である。

えび責めというのがあるが、あぐらをかい足と、顔がくっつくように縛りつける。そのエビ責めに近い恰好にならないと入らないしかし、べつにその行李に縄をかけて、よそへ送るというのではないから、フタがそうきっちりあわなくてもごまかせる。

とに角、彼は女を行きの中へおしこめた。

そして、フタがういたままに行李に縄をかけ、やっと一服することにした。

いっそ行李に入れたまま、煙草のけむりでむせさせてやろうかと思ったが、そこまでは出来なかった。

ただ、部屋の中を、一、二度、ぐるぐると行きごところがしてみた。

若い頃スポーツできたえていたから、老人といっても力はあった。しかし、女の入った行李をころがすのは相当のエネルギー消耗である。

縄をといて、女を行きから出した時、女よりも彼の方があらい息をついているくらいだった。

それでも

「苦しかったろう」

と女にいうと、

「うん」

と、鼻をならすようないい方で彼女は笑っていた。そして、こんなことをいつていたそう。

「先生がお医者さんだと思ったから仲よかったのよ。お医者さんなら、私がどんなにいいめられても、限度をよく知っているでしようし、もし失心しても応急手当が出来るし、安心していいじめてもらえると思ったから……」。私、お医者さんで私の恋人になってくれる人がほしかったの。それに先生は柔道も習ったと仰言ったでしよう？首をしめるのもとくいでしょう？私、嬉しいの、先生のような方に会えて……」

そんなわけで、室田先生はだんだんに女の求めに応じて、サジストになっていく。

そこで、参考書類が入用になって、私の所へ来ては、古い本誌やF誌などをあさっているのである。

私は又、室田先生の実験談を聞いては、ひとり、夢想をたのしんでいる次第なのだ。

縛りの美感

正 木 真 龍

戦時中、私は満州国の熱河省承德というところにしばらく居たことがあるが、その街中で、道からまる見えの壊れた土塀の中に、十二、三才の満人の女兒が、ボロボロのシャツのまま、腰の後で両手首を括り合されて木に繋がれているのを見て驚いたことがある。垢と埃にまっ黒になったその子が、道からカラカウ悪童共に、時折思い出したように、足許の砂を蹴りかける態は、痛々しさと共に一種の鬼気を感じた。訊けば、兇暴性の気狂いだそうだが、なんともその処遇には納得し兼ねるものがあった。その姿は悲惨そのものだったからだ。

戦後、北陸地方に旅行したとき、宿の前で一寸した騒ぎがあった。二十二、三の女性、半裸に近い乱れ姿で、二、三人の男に取り巻かれ、腕や肩を掴まれて暴れていたが、ややあって担ぐようにして連れ去られた。宿の女中の話で、この女性も気が触れており、時々発作が起るのだと判ったが、貧農の家だとかで、病院にも入れず、発作の起る度に納まるまで納屋の柱に縛りつけて置くのだという。気の触れる迄には

気の毒な経緯があったそうだが、そう聞いた途端、御本人には誠に申し訳ないが、私の頭に、その若き女性の縛られた姿が浮び上って、異常な血の高鳴りを覚えたのは確かだった。その実際の被縛体はみられなかったが、本人の暴れている所を見ているだけに、その幻想は実感を以って仲々消えなかった。

ところが、しばらく経つと、その姿と、満人の女兒の悲惨さが、入り交って、美しくあるべき幻想図が、ことその女性に関する限り、美を感じ得なくなってしまう。両者の狂気という関連性がそうさせたのだろう。

あれからもう十年余りも経つ。彼女が納屋の柱と縁切りになったであろうことを心から希う。私は事実を目撃したことがないので想像に過ぎないが、犯罪に用いられる縛りに、映画や小説にあるような程のよさがあるう筈はなし勿論、美の感じられる筈はないと思う。その緊迫した空気が、あらゆるものをケシ飛ばしてしまうだろう。

縛りの美というものは、飽くまでも、合意による遊戯か、芝居か、もしくは空想上に於てのみ、活き活きと感じられるものだろうと思う次第である。

創作

続・運命の少女



(その一)

嵯峨紀世

志津江が美佐子のふとした嫉妬心からの激しい責苦を受けた日から後は、美佐子の割り切った気持と志津江の心配りことから、二人の間には何らのわだかまりも消滅し去り、日常生活は勿論の事、英雄を加えての責め遊戯も二、三度は行われたが、以前にも増して和やかな日々を送っていた。だが、運命は志津江を此の儘幸福なそして平和な生活の中の一少女として存在させておいては呉れなかった。

或る日の午後九時も過ぎた頃、朝から嘔吐や胃痛の為就寝していた美佐子が急に右下腹部の疼痛を訴え始め、慌てた英雄に電話で医者を呼ぶ事を云い付けられた志津江は、十分程かかる大通りの公衆電話から近くの医者迄電話し、直ぐ往診して貰える返事にホッとしながら急いで帰宅すべく家並みの途切れた暗がりに差し掛った時、背後から来た一台のハイヤーが追い抜きざまピタリと止まった。志津江はもう医者が駆けつけてくれたものと思いい、「せんせいですか。御苦労様です」と挨拶しながら傍へ寄って行った途端、客席の扉がサツと開かれ、中から鼻から下を黒布で覆った二人の男が飛び出すと、いきなり「アツ」と驚きの声を挙げる志津江に躍りかかり、手にしたハンカチを口中に押し込み、その上を

頬もくびれる程きつく巾広の布で猿轡を噛ませると、暴れ跳く両手を後手に括し上げ更に両足をも括つた後、客席の中から大型トランクを出しその中にボロボロの塊でも詰め込むようにして押し込むと手早くベルトを掛け、車の背後の荷物入に放り込み、何事もなかったかのようにその場を走り去ってしまった。その間三分とかからぬ早業であった為、付近の住人には全然気付かれなかったし、勿論、通行人もなかった。今志津江が何者とも知れぬ男達の為に誘拐された事は誰一人として知っている者はなかったのである。皮肉にも電話で呼んだ医者はその後十分と経たぬ裡に此の場を自動車で通り過ぎたが、勿論、今先きに行われた志津江の誘拐は全然知る由もない。斯うして、此の少女の運命は、再び新たな境遇へと移されていったのである。

さて、トランクの中に海老のように曲げられ身動きすら出来ぬ儘押込められた志津江は暴れようにも暴れられず、叫ぼうにも叫ばれず、観念のまなこを閉じながら、自分の帰らぬ家での英雄や美佐子の心配するであろう事を想い、又これから何処へ運ばれ、どんな目に遭わされるのであろう事を考えると、ひとりでに涙が流れ頬に喰い込んだ猿轡の布を濡

らし、その蔭から嗚咽の呻きを洩らしていたが、やがて窮屈な身体の苦痛と息苦しさとから氣を失ってしまった。

しばらくして、ハッと正氣に返った志津江は、自分の入れられているトランクが持ち上げられ運ばれているのを感じた。トランクは二度階段を運び下されたらしく二度斜めにされた後、かすかにドアを開ける音が聞え、それから下に置かれた。と同時に、かすかながら男達の話す声が聞えてきた。

「やれやれ。玉を捜し出すのは案外、手間どらずに済んだが、さらって運ぶ段になると随分苦労するなあ」

「全くよ、此処迄来るのに随分神経をすり減らしたなあ」

「だが、上玉のようだぜ。俺あ一寸運転台から面あ見たが、仲々可愛い顔してたぜ」

「さあて、窮屈だったろう。出してやるか」「出してやる」という声を耳にし、志津江は一瞬緊張し身体を固くした。やがて、バンドが解かれ、トランクの蓋が開けられ、男達に抱え出されて床の上に転がされた志津江は男達三人の視線を全身に浴びながら身体を縮めた。それをニヤニヤしながら見つめる男達は「大分怖ろし相な顔をしているな。そうだと

うな。いきなり猿轡、後手、そしてトランクの中だからな」

「だが、俺達は、お前のその怖しそうな顔、身振り、それが必要なんだ。だから、これからもっと怖ろしい目に遭ってもらうんだ。見る、此の部屋の中にあるものを」

と云って志津江の上体を起し、あごに手をかけて部屋の中を見させた。そこには、寝台椅子は当然として、三角木馬、十字架、鉄の柱、そろばん板、天井から吊り下っているいくつもの滑車、その他どれもが志津江にはよく分る責め道具ばかりなのだ。志津江は猿轡の下から「アツ」と驚きの声を挙げたが、自分の運命を直観すると、猿轡の下から「許して、私を家へ帰して」と声にならぬ呻きを洩らしながら不自由な身体をもがいた。だが緊縛された身体はどうにもならず、いたずらに床の上をごろごろ転がるだけだった。そしてそれが男達の加虐感をあふる結果となり

「おい、早速一つ、テストといこうや」

「よかろう。顔といいスタイルといい、申し分ない。こいつは珠子より評判がいいかも知れんぞ」

「それじゃあ、準備に掛かろう」

と云い合うと、縛り縄と布切れを用意して

来た。

「さあてと、こいつはどんなふうに縛り上げたらいかな。」

と云いながら、呻き暴れる志津江を押えつけると、手足の縛しめを解き、改めて再び両腕を背にねじ上げ、細引で高手小手に固く縛り上げると、余り縄で両腕からふくらと盛り上った胸を二巻きし、更に胴にも二巻きした後、猿轡の下から呻き、不自由な上体をもがき、両足をばたつかせる志津江を傍の柱迄運び、両足首を柱の背後で括り合わせると、前に倒れかかる志津江を抱き止め乍ら、改めて背の両手首と胴を巻いた縄に細引きを結びつけ、その端を柱に縛りつけた。その為、志津江の上体は、背後の柱から細引で手首と胴を引張られながら斜めに前に倒れかかった姿勢になってしまった。両足首が柱の背後にある為、上体の重みは柱から引張られる両手首と胴、そしてそれに連なる腕や胸を締めつける細引を肌に通い込ませる結果となり、その苦痛を和らげようと上体を起しても、それ自身に耐えかねて又前に倒し、もがけば上体は左右にぶらつき、一層縄目は肌に喰い込む。まさに地獄の責苦である。これまで英雄や美佐子との責め遊戯で色々な責め方をさ

れたが、その時は責めがどんなにきつても毎日、共に生活している者同志の遊戯でありひどく跡の残るような責め方は避けるようにしていたし、余り苦痛が激しければ直ぐその責めを止めて呉れた。だが、今は違う。見も知らぬ男達に誘拐されて、情け容赦なく責められ、苦しめば苦しむ程、男達はよろこぶ。精神的にもその苦痛は大きいのに加えて、此の残酷な責めである。流石に馴れている筈の志津江も心の真底から此の苦痛にあえぎ、呻き、もがいた。然し、此のように緊縛されては、もがけばもがく程苦痛は増すばかりであるし、さりとて、じっと身動きしないようにすれば、背後から引張られる細引きの縄目がじりじりと肌に喰い入ってくる。此の苦痛に耐えようと志津江は、激しい息遣いをしながら全身からタラタラと油汗を流し、固い猿轡の下からうめき続けていた。此の様を男達はあらゆる角度から情容赦なく観察していたがやがて、苦痛に耐えられなくなった志津江ががっくり首を垂れ失神すると、互に満足気にならずき合い、急いで柱から解き放し、ぐったりしている志津江を猿轡、緊縛の儘抱き上げると、ドアを開けて隣室へ連れて行った。その部屋は小綺麗な八畳敷の日本間になって

居り、その床の間の柱には、先刻男達の話していた珠子という女であろう二十才位の女が猿轡を嵌められ、パンティ一枚の儘後手に縛しめられ、縄尻を繋かれ、括られた両足を縮めながら横になっていた。そして、部屋に入って行った男達を見ると、「ハッ」と身体を固くしながら、恐怖の目差しで男達に抱きかえられた志津江の、ぐったりした身体を見つめた。

「やあ、お目覚めだな。一人で淋しかったろう。今日から仲間が増えたから淋しくはないぜ」

男達はそう云いながら、床の間の横の障子を開け、縁側の柱に志津江の縄尻を繋ぎ、両足を括ると、

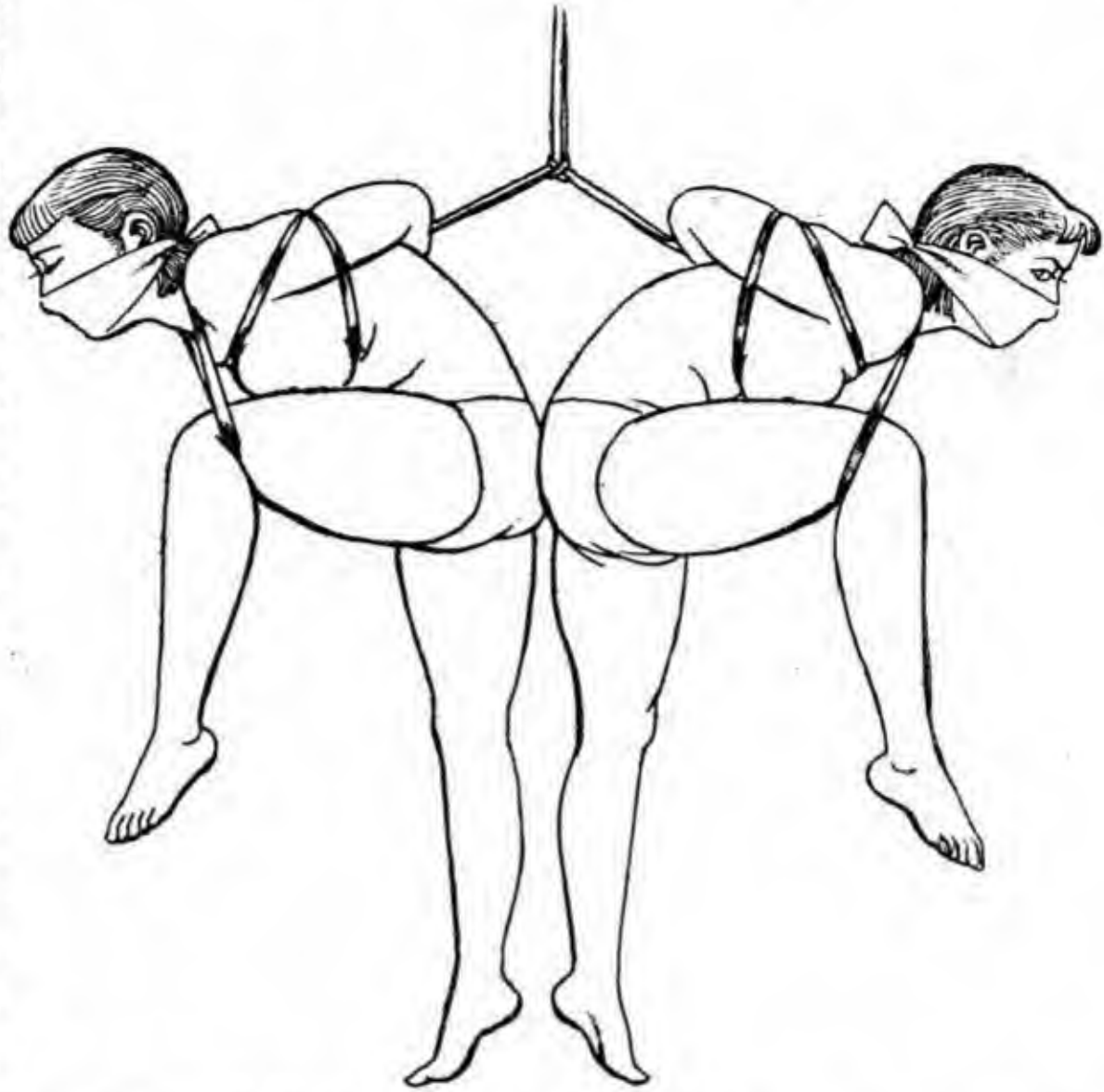
「さあて、今夜は遅いし、疲れたから此の辺で休むことにするか」

と云いながら先刻の部屋へ戻って行った。

あとには、共に猿轡を噛まされ、後手に緊縛されて柱に繋がれた珠子と呼ばれた女と志津江の二人が横たわっているだけだった。

志津江が正気付いたのは翌朝になってからであった。ハッと緊縛された上体を起し、目前に同じように緊縛された珠子を見た時の志津江の驚き。だが、早くから目覚め、志津江

の正気付くのを待っていたのであろう珠子が目て笑いかけたので、志津江もそれにつられて同じように目で笑い返した。互いに猿轡の為にものが云えないもどかしさを感じながらも、同じ運命にある者同志という親近感直



ちにお互いに感じ合った様である。

「貴女も誘拐されて来たのね」

「ええ、貴女もそうなのね」

二人は互いにこう云ったつもりもだったが、猿轡の為に「う、う、う」と云う呻き声にしかならず、仕方なく互いの目で問い顔き合った。これからどんなふうになるのか、志津江は珠子に聞いたかったし、珠子も又志津江から、昨夜どんな目に遭わされて失神したのか聞きたかったが、ものが云えない二人であった。志津江は唯不安そうな面持ちで又、珠子はその志津江を可哀想な目差しで見つめているだけだった。そうしている裡に、昨夜の男達が牛乳とパン、そして注射器を手にして

入って来た。

「おお、二人共お目覚めだね。よく眠って疲れを抜いただろうな。そうでなければ身体がもたないからな」

「さあ、朝めしだ。今日はこれで我慢して呉れよ。」

男達はそんな事を口にしながら、それぞれ志津江と珠子の傍へ寄ると、猿轡を外し、牛乳を口にふくませ、パンを頬ばらせた。珠子は別に厭いもせず、むしろ美味しそうに食べたが、志津江は口をつぐんだ儘、仲々食べようとはしなかった。それを見て珠子が

「貴女、厭でも食べなければ死んじやいますよ。ね、食べたくななくてもつめ込んでおきなさい」

と奨めると、厭々ながらも男の差し出す牛乳を飲み、パンをかじった。そして、志津江の食事が終ると、男達は

「さあ、元気が出るようにメタボリンの注射だ」

と云いながら、二人の腕に手早く注射を済ませてから、

「少しの間、口を楽にしておいてやるからな。但し、断っておくが、此処は地下の又地下だから大きな声を出したって駄目なんだか

らな。そんな事をしたら疲れるだけだぜ」

と云い捨てて部屋を出て行った。

やっとものが云えるようになった二人は、柱に繋がれた儘、今迄互いに聞きたいと思っていた事を話し合った。それによると、珠子は誘拐されて来てから既に二週間近くにもなり、その間、色々な責苦に遭わされて来たとの事だし、家は偶然にも志津江と同県の農家であり、町の会社に勤めての帰途、志津江と同じようにして誘拐されたという事であった。郷里が同県という事だけでも、志津江にとっては非常に懐かしく、且、珠子のいたわるような優しい態度に対しては、姉という感じを抱き始めていた。

これからどうなるのだろうかという志津江の懸念に対して珠子は

「私の耳にした範囲では、殺される心配はないようだけど、二日に一度位ずつは私達を色々責めさいなみ、苦しさに耐える練習させるのよ。それで、いずれはどこか外国へ売られてしまうかも知れないけど……」

と教えて呉れた。だから、責められるのは苦痛だけど、死なせては自分達の金づるを失う事になるから、身体だけは大切にしていれば、と付け加えて云った。その珠子の

話を聞きながら、志津江はつくづく自分の運命が緊縛、そして責めから離れられないよう

になっている事に気付く、驚きながらも、どう境遇が変わったところで、どうせ一生、縛られ、責められなければならないようになっていくのだという、諦めの念が湧いて来ている。既にそんな運命のみを辿って来ている志津江には、むしろ、責められるよろこびが心の底で頭をもたげて来つつあるようにも思われる。そんな事を考えている裡に、ドアが開き男達が入って来ると、

「さあ、今日は朝から訓練だ。又しばらく辛抱して貰うぜ」

と云いながら、そうさせまいと首を振る二人の口に無理矢理、猿轡を噛ませ、柱に繋いだ縄と両足を括った縄を解き、パンツ一枚の二人を隣りの部屋へ引立てた。そして「やっと二人揃ったんだ。今日は連縛というぜ」

と云いながら、もがく二人を、各々の膝を括り、その余り縄を両肩から背に廻し、ももが胸につく程引き締めながら手首に結びつけると、その二人を片足立ちの儘背中合わせに立たせ、縄でぐるぐる巻きにして、各々の手首に結びつけた縄の余りを上に引き出し、一

緒にねじり合わせて、天井から下っている滑車に通した。

「準備OKだ。いいか」

と云いながら、その縄をぐいぐいと引き、二人の片足のつま先が床に僅かにつくかつかぬというところで止めた。唯立っているのさえ苦しい姿勢であるのを更に引き上げられてはたまらない。志津江も珠子もその苦痛に顔を真赤にし、目を引き釣らせ、猿轡の下から「う、む、む」と呻きながら、もがきにもがいた。屈曲した身体を無理に引き伸ばされる苦痛に二人の顔はだんだん蒼白に変わり、油汗が全身を伝い流れ始めた。その二人の姿をじっと見て居た男達も流石に心配になったのか、急いで縄を引いている男に合図し、縄をゆるめさせた。ドサリと二人の身体は連縛されたまま床に投げ出された。失神一步前まで下に降された二人は、ぐったりして肩で息をしていたが、男達はその二人の連縛と膝の縄を解くと、矢次早に、各々の両足で相手の胴を背後から締めつける格好に縛り合わせた。二人の身体は共にそり合い、一方がその苦痛に身体を縮めようとすれば他方は尚一層激しいそり身になる。男達は、互いにそんな事を繰り返しながら少しでも我が身の苦痛を和ら

げようと、もがき続ける二人の様子を又、具に観察していた。

やがて、幾多の激しい責苦にぐったりとなり、身動きすら出来なくなった二人は、そこで始めて緊縛された手足の縄を解かれたが、既に息も絶え々々になり、男達の手によってぶどう糖の注射をされ、隣りの日本間に運び込まれ、横たえられても身動きすら出来なかった。その二人を残して男達は隣りの部屋へ引きあげた。

二時間経て、二人がやっと起き上る事が出来るようになった頃、男達は昼食を持って部屋に入り、昼食を振らせた後、メタボリン注射を打つと、まだやっと動けるようになったばかりの二人を、逃亡を恐れる余りか、再び高手小手に縛り上げ、猿轡まで噛ませると今度は寝具の上に転がしておいて部屋を出て行った。残された二人は互いに寄り合い、ひとりでに溢れ出る涙で互いの猿轡を濡らした。自分達の境遇の惨めさに二人はそのままの姿勢で泣き続けた。

その日の夜と次の日一日は緊縛されたまま転がされ、身体を休めさせられたが、三日目の夜になってから再び責の訓練が行われ、二人は各々、三角木馬に乗せられたり、天井か

ら吊られたりした上で、黒めがねをかけ変装した男に鞭打たれた後、失神した身体を寝具の上に横たえられた。こうして殆ど一日おきに色々な姿態で責められ、訓練されながら暮らさねならなかったが、こんなに責められても不思議に二人の身体が衰弱しなかったのは男達が金づるを死なしてはと、責める時以外は緊縛はするが、色々手を尽くして二人の健康に注意して呉れるからである。こうして志津江が誘拐されて来てから、はや十日は過ぎ去った。

茲で目を離して転じてみなければならぬ。あの夜、医者が往診して美佐子が盲腸炎である事が判り、直ぐ入院し手術した為、美佐子は幸い事なきを得、一週間も経つた今日では、既に退院し、家庭で静かに日々を送っては居るが、英雄は勿論のこと特に美佐子にとっては志津江の居ない事が不自由でもあり又淋しく、その消息が仲々つかめない事が心配であった。あの夜は入院やら手術やらで心にかけてながらも何も出来ずに居た二人だったが、三日目になって英雄は警察へも捜索願を出す一方、自分でも心当たりに問い合わせるなどしているのであるが、全然消息が判らな

い。他に家出する理由もないのだから、恐らくは誘拐されたのではあるまいか。それならば何処でどんな目に遭っているだろう。と心配しながら一日々々を送っていた。特に美佐子は日中一人ぼっちである事が尚更、色々な憶測を立て、心配する結果となって居た。あれから英雄は毎日勤めから帰ると直ぐ、八方に足を運び、何とか消息をつかもうと努めていたが、既に一週間経った今夜も、若しや誘拐された後、白線地域にでも売られて居はしまいかと、それと思ほしき辺りを目を皿にして歩いていた。若しそうだとすれば、明かるい所よりもむしろ暗い路地や、貸室を経営している家のある辺りの方が、案外見付け易いかも知れぬ。そんな事を考えながら歩いていると、いきなり横合いから

「よう」と声をかけられた。驚いた英雄が振り向くと、同僚の船越がニヤニヤ笑い乍ら近寄って来た。

「どうしたんだい。今時分こんなところをウロツいてさ。君の奥さん病気だそうじゃないか、ええ？ フッフ、あやしいぞー」と船越はからかい口調で云った。英雄は慌てて首を振った。

「そ、そんなんじゃないよ」

「いや、怪しい。白状しろ。場合によっては味方にもなってるサ。マ、そこらで一杯やるんじゃないか」

と、冗談まじりで肩を叩かれると、英雄も苦笑しながら肯かざるを得なかった。

近くの小料理屋の二階で、話を聞いた船越は、大変同情してくれて、何か深く考えこむ様にしていたが、思い切った様にして内ポケットから紙包みを取り出した。

「そんなことはないと思うが……。ネエ君、これは会社では絶対に内証にして貰いたい。

君にも知られたくないことだが、今の話を聞いてその志津江さんという人の行方を捜す為には己むを得ないから思いきって話す。だからその積りで聞いてくれたまえ」

といいながら、船越は取り出した紙包みを開き、中から数葉の写真を出して英雄に差出した。

英雄はそれに目を落すなり、息を呑んで喰い入るように眺めた。そこには、若い女性があられもない姿で、痛々しく縛り上げられて、様々な苦悶の美態をみせて焼きつけられているのだった。

「僕が撮ったんだ。僕にはこういう嗜好があ

ってね。ある会の会員になっているんだが、その会の詳しい事はともかくとして、先日会合があつて何時もの通りショーや撮影会があったんだ。その時僕が撮って今出来上って受取って来たばかりなんだ。で、その時に次のショーには、新顔のモデルを出演さす、今訓練中だから……と云っていたんだ。まさかとは思うが、こういう方面にも当る必要はないとはいえないからね」

と話す船越の口調は、自分だけの秘密を人に知られるのを辛がっている様子だった。

英雄は眼を輝やかせて、その会のことを詳しく訊ねた。船越は、モデルは職業的に自主的出演しているのだと思うが……と前置きして、色々会のことを教えてくれた。二カ月に一度、ショーの開催があること。ショーは他では観られない迫真的なものであること。厳重に会員組織が守られていること。会員になる方法が大変ウルサイ事。等等であるが、主催者やモデルの素性となると全々わからないらしいのである。英雄は聞いてる内に、志津江がその会のモデルとして誘拐され、訓練に苦しみのたうっているに違いないという予感がして仕方がなかった。

「君、何とかして僕をその会員にしてくれ給

え。いや会員にならなくても、次のショーの時に、是非僕も行ける様に計らってくれないか。頼む！ 人の命にも拘わることだ。ナ」と懸命に頼んだ。船越もなんとか努力しようとしてくれたので、後日の連絡を約して店を出たときには、もう夜も相当に更けていた。

茲で再び地下室に目を移してみる。あれから後も志津江達は一日おき位に二人一緒に責められ、時にはその苦しむ姿を撮影されて過ごしていたが、志津江が此処へ連れ込まれてから二週間近くも経った頃から、珠子が時々激しい発作を起し苦悶するようになった。だが、その度びに男達に注射されるとガラリと人が変わったようにおとなしくなる。傍でそれを見ている志津江には、その原因が何であり、注射されると何故急におとなしくなるのか不思議でならなかった。毎食後の猿轡を外して呉れる少しの時間に珠子に問い糺してみても、何故か彼女は淋しそうな顔をするだけで何も教えては呉れなかった。然し、間もなくその変化の原因を知る事が出来た。その日は先ず、志津江一人が例のように、両足を揃えて縄を腋の下から背に廻し、更に胸に一巻き

して、海老縛りにされ、丸くなった身体を、両手首の余り縄と両足首の括り縄の余りとを一つにして天井から下っている吊り輪に結びつけられ中吊りにされた後、恐怖の目差してそれを見つめていた珠子に男達は

「おい、今日はお前に薬をさせてやるぞ。その代り云う通りにやるんだぜ。さあ、縄を解いてやるぜ」

と云いながら、びっくりしたように目を見はる珠子の縛しめの縄や猿轡を解き外すと、ブラジャーとシュミーズを突き出し、

「ほら、早く身体につけな」

と云われ、何時もと違う男達のやり方を納得しかねるようにつめていた珠子だったが僅かながらも始めて身に纏うものを与えられた嬉しさに急いで与えられた二つを身につけた。すると、男達はいきなり彼女を、吊り下げられている志津江の傍へ引き出し、その手に鞭を持たせると、

「さあ、之でこいつを打つんだ。今日はお前が責役だ。さあ、早く打つんだ」

と珠子をせき立てた。縛しめを解かれ、身に纏うもの迄与えられた意味が志津江の責め役の為と知った珠子は、いきなり鞭を投げ捨てると、

「厭です。こんな事、私には出来ません」

と云いながら、逆吊りの儘、苦しさに猿轡の中から呻き声を洩らし、丸められた身体を左右に揺らしながら跪いている志津江を抱え込むようにしてすがりついたが、直ぐに男達の手によって引き戻され

「おい。そんな事を云っていいのか。薬が切れても注射してやらんぞ。云う通りにしてりや、薬も貰えるし、こんなふうにも出来るんだぜ。」

と云われると、珠子は「ハッ」としたように立ちすくんでしまった。逆吊りのまま此の言葉を耳にした志津江は、やっと珠子の突然の発作が麻薬中毒の為である事を知った。大分以前から珠子に知られぬようにしてメタボリンの代りに麻薬を注射していたのだろう。だから麻薬が切れてくると苦しみ出すのだ。何度聞いても珠子が教えて呉れなかった訳もそれで判った。「可哀想なお姉さん」そう思うと志津江は逆さまに下っている頭を起し珠子の方にねじ向けると



「お姉さん。私に構わないで打って。でなければ苦しくなっても薬が貰えなくなるわ。さあ、早く打って」

と云うようにして猿轡の下から呻き声を出しながら身体をよじった。しばし呆然と立ちすくんでいた珠子は、やがて意を決したかのように鞭を拾うと、つかつかと志津江の傍迄歩み寄り、

「志津江さん、許して頂戴」

と叫ぶや否や、さながら狂った人のようにピシリ、ピシリと、一鞭毎に左右に揺れ、果てはくるくると廻りながら不自由な身体をくねらせ、呻きもがく志津江の純白の肌を打った。男達はその機を逃さじと、右に廻り左に廻りながらその有様を八咫カメラで撮り廻った。間もなく、「む、む、む」と大きく呻いた志津江が氣を失ってぶらりとぶら下ると、汗びっしよりの珠子は鞭を投げ捨てるなりその身体に抱きつき

「堪忍して、許して、志津江さん」

と泣き崩れた。男達はあわてて志津江を吊り環から外すと、

「もういい、もういいから泣くのは止める。」

こいつも楽にしてやるからな」

と云いながら、志津江の猿轡と縄を解き外すと、抱き抱えて志津江達の部屋へ運び、布団の上に寝かせると、何時ものようにぶどう糖の注射を打った後、「氣がついたら飲ませてやれ」とぶどう酒を一瓶おいて出て行った。残った珠子は泣きながら志津江の純白の肌に食い込んだ縄目の跡と赤くみみず腫れになった鞭の跡とを熱心にさすり始めた。一時間近くも経った頃、志津江はやっと正気に返ったが、それから何分も経ないうちに今度は

珠子の発作が始まった。のどをかきむしりながら「薬、薬」とあえぎ、転がり廻る珠子の哀れな姿を見ると、志津江は身の痛さをこらえながら畳を這い、扉をたたきながら隣室の男達を呼ぶと、

「おい、切れたらしいぜ。少し早いようだが一本打っておくか。大事な女だからな」

と云いながら注射器を持った男が入って来ると、待ちかまえたようにいきなりその男にすがりついた珠子に、

「よしよし。俺達の云う通りにしたから薬はやるぜ。いいか、之からも云う通りにするんだぜ、判ったな」

と云いながら、素直にこっくり頷ぐ珠子の腕に注射を打って出て行った。やっと正気に返ったようにおとなしくなった珠子は、心配そうに自分を見守る志津江に

「先刻は勘忍してね。私って悪い女だわ。自分だけ楽しようとして貴女を苦しめたりして私死んでしまいたいわ」

と泣きながら謝り続けつつぐったりするとそのまま眠りに入ってしまった。傍には痛さのため身動きすら出来ない志津江も、じっと天井を見つめ、そしてすやすや眠入っている珠子を見つめながら放心したように横たわっ

ていた。隣室では、男達が暗室で、撮影したフィルムの現像をしているらしく、時々器具の触れ合うような音を立てていた。彼らは元映画会社の現像係の助手をしていたとかで、八咫フィルムの現像も自分達で仕上げていると云っていたが、先刻の志津江の責めももう立派な映画として、あの細いフィルムの各場面を構成しているであろう。ぼんやりそんな事を考えていた志津江だったが、やがて彼女も又疲労の為に再び眠ってしまった。

翌る朝、といっても陽の差し込まぬ此の地下室では部屋の中にある置時計の時刻で知る訳であるが、十時頃になってから目覚めた二人は、いくらか話し合ね裡に朝食を食べさせられ、それが済むと、元氣を取り戻した二人の逃亡を恐れてか、再び何時ものように後手に縛り上げられ、猿轡も嚙まされた上、背中合せにロープでぐるぐる巻きにされると、男達に

「さあ、今日は仕事はないからゆっくり休ませてやるが、午後になったらいいものを見せてやるからな。此処に居ては何も楽しみがないからな。まあ、楽しみにしてるサ」

と云われ、いいものとは何だろう。と二人は顔も見合わせられず、ものも云えず、各々

がそれを考えていた。やがて、昼食が済むと男達は二人を連縛したロープを解き、後手狼轡のまま二人を隣りの部屋に連れ出すと、各々椅子の背当てを両腕と背の間に差し入れ、背当てを背負ったようにして腰掛けさせて、左右の両脚に各々を括りつけた後、スイッチを切り部屋の中を真暗にした。と同時に、パツと二人の目の前の白い壁に映画が写し出された。「悶える女体」というタイトルが消えたと、そこには志津江達の今居る部屋の中が画面に現われ、その中に、口に狼轡を嵌められた志津江と珠子が後手に縛り上げられた裸の身体をくねらせている姿が写されているではないか。そして、何回となくあらゆる姿態で責め苛まれ、その度にその苦痛に呻きもがいてきたその有様が残すところなく、次々と二人の目前に再現されているのである。緊縛された身体を吊られ、鞭打たれ、又三角木馬に乗せられて足の裏をくすぐられ、石抱きの責に遭いながら、あえぎのた打つ自分の姿を同じように緊縛された姿で見ようとは。然しじつと画面を見つめる二人の目は、何故かだんだん輝やきを増し、喰い入るような目つきに変わっていった。それと同時に息遣いもだんだん荒くなって来た。だがものの十五分も

経ったかと思われる頃、それらの画面も消え去り「終」のタイトルが現われた。ふーとため息を洩らすように緊張していた身体の力を抜く二人の様子をチラと見た男達は会心の笑みを浮かべたが、間もなく、再び室内は暗くされ、二巻目の映画が映し出された。タイトル「あえぎ泣く」が消えたと、画面は志津江達の日本間。そこでは、日本髪のかつらをつけられた志津江や珠子が、吊られ、鞭打たれ十字架でくすぐられ、或いは床柱に繋がれ海老責めにされてもがき廻っている光景が、更に昨日の珠子に鞭打たれ逆さ吊りの志津江がのけ反り、身体をくねらせながらのた打ち廻る様子が余さず写し出された。何時の間にか画面の中の自分と同じように今の自分も責められつつあるような錯覚に陥ってしまった二人は、全身汗びっしりのまま羞恥にあえぎ、遂には狼轡の下から大きな呻き声まで洩らしながらもがき始めていた。映画が終り部屋の中が明かるとなっても二人の羞恥は未ださめず、小刻みに身体を震わせながらあえぎ続けていた。此の様を見た男はこれはいけるわいと思ったのか、急いでカメラや八咫撮影機を取り出すと、その二人の様子をサツと撮し取るや、続いて椅子に固定されている志津

江の脚に灸をすえ、珠子は椅子を前向きに倒し、その両脚を床から跳ね上らないように押えつけると、前屈みになる顔の真下に灯した線香の束を立てた。そして灸の熱さに両脚と腰とを一緒にずらすように動かし、筋肉をピクピクけいれんさせながら呻きのけぞる志津江と、下げると顔が火に触れるかと思われる程目の真下に立てられた線香の煙にむせび涙を流しながらのけぞり呻き続ける珠子とを、男達は上から左から右から下からと撮影し続けていたが、やがて余りの苦しみに堪えられず相前後して一声大きく呻いた後、失神してしまった二人を見ると慌てて艾と線香を取り去り、緊縛した縄と狼轡を解き外し、急いで隣室へ運び込み、おどろ糖の注射をした後、やがて二人共頬に赤味を帯び出し、荒いが息遣いもはつきりしてくると、ホツとしたらしく

「やあ、びっくりしたな。危うく金づるを台無しにしてしまふところだった」

「然し、今の場面は凄まじかったぜ。これはきっと受けるぜ。アメリカや香港には五、六本ぐらいプリントしておいても大丈夫はけるぜ」

そんな事を口々に云い合いながら隣室へ去

つた。残された二人はしばらくそのまま、薄目を開けたり閉じたりしていたが、云い合わせたように

「志津江さん」

「お姉さん」

とひとと抱き合った。だが、此の様な自由な姿態とも長くは続けられなかった。夕食を

与えられた後、二人は男達に

「俺達はこれから出掛けなけりやならんからな。明日の朝まで又窮屈な思いをしてもらうぜ」

と云われ、再び後手に縛り上げられ、猿轡を噛まされた上、布団の中に寝かされてしまった。男達は出掛けに珠子の腕に注射を打っ

て行つたので薬が切れて苦しむような事はなかったが、向き合つて横たえられた二人は、身体を動かす事も口をきく事も出来ず、今夜これから男達は何処で誰にあの映画を見せようというのだろうか。そんなことを考えながらじつと横たわっているより仕方がなかった。

——未完——



女 装 願 望 告 白

桜 惠之助

そろりそろりと、物音に注意しながら襖を

開ける。隣部屋は妹の部屋である。若い女性の芳香の立ち籠める部屋、その部屋の主は居ない。二泊三日の旅行に出かけた後だ。

私は、ギッシリ詰まったタン、スから、気に入った着物を取り出す。腰巻、肌着、長襦袢、白足袋、帯、そして腰紐類。それらを一纏めにして自分の部屋に運ぶ。姿見を持ち込む。更に粧化具、洗面具を用意し、私の日頃の夢である女装の準備完了の頃は、もう午前二時

を過ぎました。

長い間の、胸うずくような女装への憧れ、この希いは、思いがけなく妹の旅行で実現しようとしている。他の家族は皆深い眠りを追っている。私は期待と悦びに胸はずませて、独り深夜に作業を始めるのです。

まず化粧、妹のそのの見様見真似で顔を焼く。次に腰巻をつける。足袋は絹の五枚コハゼ。胸に盛り上りを作り、緋の長襦袢を着て伊達巻を締めると、もう半分は女性化の気

分は出ます。姿見の自分？を覗めながら、紫地に白菊模様の着物、キユツと締まる腰紐、白地に御所車の帯、ピンクの帯揚げと段々、女に近づくときの嬉しさ。帯を締めるのには苦労したが、長い時間をかけてどうやら成功しました。かつらがあれば申し分ないが、持っていないので我慢しましたが、七三の横分けの頭も、歌劇の男役スターの和服姿を連想して悪くはありません。やわらかな絹物の感じが堪らない程こころよく、私は雲に乗ったような気持で部屋中を歩き廻る。サラサラと白足袋と着物の裾が触れ合う衣ずれの音。深夜の静寂がこの僅かな音を引き立たすのです。

——女性に生れたかった——私はしみじみそう思う。若しどうしても男でなければならぬ運命なら、昭和の今日でなく、元禄時代の昔に生れたかった。そうしたら大手を振って

華美な着物が着られたらうに……。それ程、女性の着物に惹かれるのです。

——いやらしい！——と、自分自身のこの性癖を呪う気持もあるのだが、これだけではどうにもならない。女装なんか考えまいとスボーツに打込んでもみたが、私が自分の性癖に反旗をひるがえせば、幾倍かの勢力となつて女装願望軍が押し返して来るのです。街を歩いていても、女性の和服姿には眼をつぶっている積りが、何時の間にか羨望の視線を送っている自分を発見してしまうのです。たまらない魅力、美しい女性の前で女装してみたという憧れが日と共に増々強くなつて行くのです。

世間にはオカマなる種族が居るが、彼らの女装の対象は男性であるらしいが、私のそれは女性を望む。すなわち男性の女装を喜ぶ女性の前で、思う存分女装してみたいのです。しかし、それは実現しない夢で終りそうで、現在の私は、その夢に無理にも自身を溶けこまし、深夜ひそかに家人の眼を盗んで、僅かに自分を慰める他には方法がないのです。鏡の中のわが女装姿を眺め、立ったり坐ったり歩いてみたり……。私のこの切ない希望は不

可能なことだろうか。広い世の中の何処かに、男性の女装を喜ぶ女性の幾人かは必ず居るに違いないとは思ふのだが、巡り合う日があるか否か……。それは運命の神のみが知ることでしょう。

私は部屋内だけでは我慢ならず、勇をこしてそつと廊下にすべり出した。家人が便所にも立って見付けられたらどうしよう。家には居れない程の羞しい思いをするだろう。私は必死に聞き耳をたてながら、泥棒よろしくそろりそろりと歩いた。母の部屋でパツとスタンドライしい灯りが点った。ハツとなつて、曲り廊下に退いて様子をうかがった。母が手洗いに這入った瞬間、私は着物の裾をからげて逃げ出し、元の部屋へ飛び込むなり電灯を消して息をこらした。幸い気付かれなかったようだったが、胸は早鐘のように激しく高鳴っている。情けない、私は、こんな想いをしてまで女装したいという自分の気持に、涙の出る程の情けなさを感じました。でも、その直後にまた、折角着たこの着物を脱ぐのが惜しくてたまらない気持が、モクモクと頭をもたげて来て私を苦しめるのです。

折角、苦勞して着たこの衣裳。こんな絶好

の機会は、そうたびたびはある筈がない。この着物を今脱いでしまったら、今度はいつ手を通すことが出来るのか。そう思うと、コチコチと秒を刻む時計の針が、私と恋人のとの仲を無情に引裂く悪魔のように思われ、怨めしくさえるのです。

でも、時間はもはや五時に近い。どうしても、もう終らねばならないプレー。私は脱いだ衣類その他をもとに戻した。そして呆然としたように考えこんでしまうのです。

妹のものを無断借用するのではなく、自分の専用の和服が欲しい。白、赤、紫、ピンク、グリーン等の、好きな色の美しい着物。しかし私は自身の気の弱さを知っている。デパートや店頭で、女物の何一つですら、自分で買求める勇氣が出そうにないのだ。羞しさが先に立ってしまう。しかしその内、誰か女性友達にでもなんとか名目をつけて買って貰おうと思っています。京都、大阪辺りのデパートで、たった一人で女性の白足袋でも欲しうに眺めて立ち尽している男を見かけることがあったら、どなたか代りに買ってやろうと声をかけてやって下さい。それは多分、私の羞しげな姿でしょうから……。

本誌百号突破懸賞募集原稿入選作品

乳房に火を

つけるな・第五回

羞 恥 の 畏

藤 木 仙 治

深夜の埋立地

芝浦下水処理場附近――

隣接して、都設の屠殺場もある。東京湾からの水が、すぐ近くの掘割まで溢れているので、潮くさい風が吹いていた。

人気がない、さびしい埋立地が墓場のようにつめたく沈黙して、海辺までつづいている。ここが、北条哲夫と星島大五郎の対決の場所であった。

三年前、大五郎のために恋人を奪われ、さらに命までも狙われて東京湾のなかへ叩きこまれた哲夫の恨みが、今夜十二時、この地点で爆発するのだ。

だが――大五郎の手中には哲夫の妹、真紀子が捕われている。しかし哲夫もまた、大五郎の一人娘、千絵子をおさえてある。

たがい人質をおさえあっているのは、復讐と憎悪の激闘も、氣勢をそがれたという形であった。

満月に近い月光が、この埋立地の荒漠とした眺望を、青白く浮かびあがらせていた。

「――きたな……」

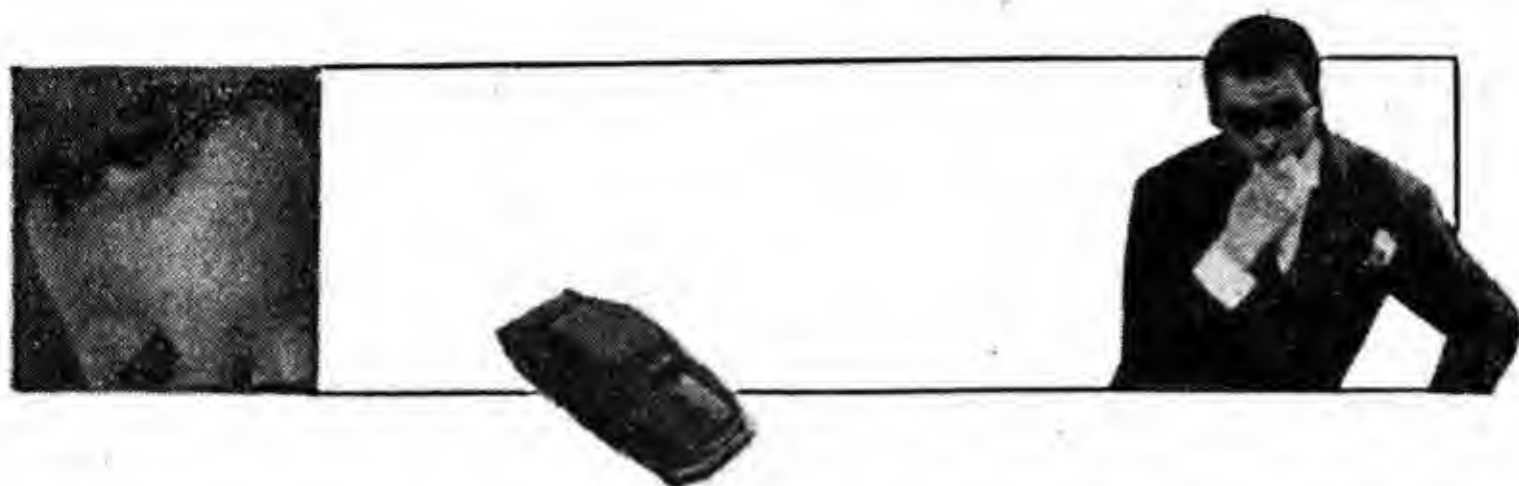
哲夫が、ピクリと耳をうごかしてつぶやいた。

「きたらしいですね」

あいづちをうったのは、順吉である。

彼は、哲夫の復讐に、今夜も助っ人を買ってついてきた。拳銃を射ちたくてたまらない男なのだ。

二人の男の背後には、二人が乗ってきた車がある。横浜の竜一樓をでて、まっすぐにここへやってきたのだ。車のなかには、千絵子



が押しこめられている。嚴重な猿ぐつわが噛まされ、両手をうしろに縛りあげられたまま、生きた心地もなくうめいていた。

田町の方角から、ヘッド・ライトを鋭く光らせて、一台の車が近づいてきた。

砂地や小石をびしびしと踏みくだき、やがてその車は、哲夫の方約二十メートルを離して停止した。

「——哲夫か」

車のドアがあき、その肥えた身体をのそりと現わして大五郎がいった。落ちぶれつつあるとはいえ、さすがに銀座を根城とするヤクザである。どっしりとした貫録が、身についていた。

「社長ですか……」

哲夫も、車のかげから二、三步踏みだして姿をみせた。三年ぶりの対面である。

二人は、二十メートルの距離をおいたまま凝然とむかいあった。つめたく冴えた月光が、さんと二人の身体を照らした。昼のような明るさである。

「——だが、よく生きていたな」

大五郎が、怖れと嘲けりのこもった声音でいった。

「真紀子か？」

哲夫は、まず妹のことが心配だった。

「つれてきた。——千絵子か？」

と、逆に大五郎が問いかえした。いかに奸悪なヤクザとて、人の子の親である。

「一度はうまく逃げられましたがね、このとおり、またこっちの網にひっかかりましたよ」

哲夫は、車のなかから、千絵子をひきずりだした。うしろ手に縛ったその腕を、ぐいとかんで地面に立たせると、顔を大五郎にむけさせた。

「む、む、む……」

なにかさげんだが、猿ぐつわのために、声がでない。髪が乱れて顔の前に大きく垂れさがり、その前髪のあいだから、眼だけがあえて大五郎をみた。

「千絵子！……」

大五郎の身体が、僅かにゆらいだ。憤怒の眼で、哲夫をにらむ。

「真紀子をだしてください。交換は同時にやりましょう」

「ふふふ……。用心ぶかいな」

大五郎はうなずいて、背後に目くばせをする。と——大五郎が乗ってきた車のなかから、二人の男にひきたてられて、真紀子がでてきた。

二人の男とは、ズル松にチビ啓である。

そして真紀子は、これも縄でうしろ手に縛られ、口には猿ぐつわを噛まされたむざんな姿であった。

（うぬッ、ズル松にチビ啓！……）

哲夫の胸に、火のような怒りが燃えたぎった。三年前、芝浦港の岸壁で、哲夫を襲った三人組のうちの二人である。

「さあ、同時に手を離し、娘たちをおたがいの味方のところまで歩かせるんだ」

大五郎が提案した。

「よし——」

哲夫がうなずいた。緊迫した空気が、この深夜の埋立地に、熱っ

ぽくながれた。

「一、二、三……それッ……」

縛られた二人の娘は、背中をドンと突きはなされて、よろよろッと足を踏みだした。

苛酷な責めに傷つき、疲労した二人の肉体は、わずか二十メートルを歩くのも容易ではないのだ。

まんなかですれちがい、やがて、ほぼ同時に、千絵子は父親のもとに、真紀子は兄の胸に抱かれた。

「おお、真紀子！……」

無頼の兄は、何年ぶりかで、妹の身体を抱きしめた。

いそいで猿ぐつわをはずしにかかるのだ。

そこに、一瞬の隙が生じた。

「兄貴、あぶねえッ」

順吉がさげんだ。同時に、

ブスンッ！ ブスンッ！ という不気味な音が哲夫の耳もとをかすった。消音拳銃である。大五郎がたの、ズル松、チビ啓がいっせいに発射したのだ。

「ちくしように！」

哲夫は真紀子の身体を突き倒し、背広の内側から拳銃をぬいた。双方のあいだに、壮烈な拳銃戦が展開された。五人の敵味方は、相手の命を狙って、銃口から鋭い火花をほとばしらせる。

「うッ！」

ついに大五郎が、右肩をおさえてのけぞった。哲夫の狙った激怒の一弾が命中したのだ。よろめいた大五郎は地面に片膝をついた。

「社長！」

ズル松とチビ啓が、慌てて大五郎を車のなかに抱き入れた。

「しかたがない。ひとまず後退だ……」

大五郎が、無念のひびきをこめてうめく。右肩から鮮血がドクドクとあふれている。

チビ啓がハンドルを握り、車は急激に走りだした。

「追いましよう、兄貴！」

順吉が、勢いにのっていった。逃げていく車のタイヤを狙って、

二、三発ぶっぱなす。

「待て。町のなかへ出られては、追っても無駄だ」

哲夫が、それをおしとどめた。

（今夜はこれで逃がしてやる。だが、おれの復讐がこれですんだと思ったら大間違いだぞ。そのうちに、きっと、やつの息の根をとめてやる！……）

みるまに小さくなっていく尾燈をにらみながら、哲夫は火を吐くような激しさでつぶやくのだ。

魅惑の肌

同じ、そのころ――。

横浜月光町の中華料理店、竜一樓の奥室では、一人残された美佐が、手きびしい監禁をうけてうめいていた。

大五郎方から誘拐してきた二人の女のうち、哲夫は千絵子だけを連れて、大五郎との対決の場に出向いたのだ。

残された美佐は、着ていたキモノをぬがされ真紅の腰のもの一つにされていた。逃亡を防ぐためである。さらに、自分がしていた腰紐で、うしろ手に縛りあげられているのだった。紐は乳房の上下を

二重に縛り、うしろ手の手首をくくって、さらに背中から両肩を越し、乳房の下部をしめつけた紐につなげてある。

身じろぎもできない、厳重な縛りかたであった。おまけに縄尻は背後の柱に結びつけてあるのだ。ここは、昨夜、千絵子がすさまじい木馬責めの苛酷に泣いた部屋であった。

「アア……」

苦しい息をつくたびに、ふたつの乳房がゆれる。はじめのうちはなんとかして、この腰紐から脱けだそうとしてもがいたのだ。

だが、無駄であった。

固い縄とちがって、肌を噛む痛さではないが、紐は急所要所を巧みに縛ってあって、すこしのゆるみもみせないのだ。

急激な苦痛はないかわり、じわりじわりと柔肌を責めつけて、美佐の両腕はしびれ、手首の感覚はなくなっていた。

「ああ！……」

ふかい溜息が吐きだされ、美佐はいま、はげしい後悔に襲われている。

哲夫の誘いに応じて、杉並の家から、ノコノコと出てきたばかりに、この始末である。

（三年前の哲夫さんとは、ずいぶん人が変っている……）

美佐は、そう感じるのだ。

三年前――。東銀座裏の喫茶店に働いていた美佐に惚れて、日に一度はかならず姿をみせた、あの頃の哲夫は、青白い伶俐な風貌をもった。インテリ・ヤクザであった。

人一倍のおしゃれで、現われるたびに、異った服装で、やさしさのなかにも、ときおりヤクザらしい陰険な鋭さがチラついた。

そこがまた、美佐のような少女にとっては魅力であった。——それが今では、大五郎に対する復讐一途に凝り固まった鬼である。

(あの人は、これからあたしを、どうしようというのだろうか……) 大五郎を倒すためのオトリだといった。

だが、大五郎にはすでに飽きられているあたしだ。オトリになるような値打ちがあるのだろうか。こんなにむごい扱いをして、哲夫さんには、もうあたしへの愛情は、ないのだろうか……。

美佐の思考は、身を縛られている苦しさのために、しばしば途切れた。しまいには頭が混乱し、なにもわからなくなって、ただ不安と恐怖の涙を、ホロホロとこぼすだけであった。

と、そのとき——この部屋の扉が静かにあいた。

顔をみせたのは、王竜元である。美佐のそばへ、ゆっくりと足を運ぶ。

「フフフ……。可哀そうに、痛いでしょう。そんなにきつく縛られて……。その紐を解いてあげましょうかね」

不気味なほど、やさしい声だ。ダブルの背広を堂々と着こなした紳士。女と相対したときは、別人のようにていねいな言葉を使う男であった。だが、その笑顔の底には、ゾッとするほどの、つめたい非情なものがひそんでいる。

(この男が、哲夫さんのいまのボスなんだわ……)

美佐はおびえた。

「フフフ……。こわがることはないですよ」

王竜元の手が、美佐の肩に、そっとおかれた。

(ひえッ!)

美佐はふるえあがった。男のくせに、まるで女の手のようなやわ

らかさだ。餅のようにねっとりしていて、ひどく気味の悪い感触なのだ。

(フフフ……。なんという、なめらかな肌をもった女なのだ……)

王竜元は、眼をほそめた。

牛乳を塗るかためたように白く、キメのこまかい肌である。白痴美——と思わせるほどの天性の美貌は、大五郎の妻になってから、いよいよ美しさとみずみずしさを加えて、あふれるばかりの色づきであった。

三年前、この美貌に惚れた哲夫は、ヤクザの足を洗うことを誓った。そして、このみずみずしい魅力に眼をみはった大五郎は、哲夫を殺してまでも、美佐を自分のものにしようとした。その結果、大五郎はいま哲夫に命を狙われる運命にある。

思えば、男にとってはむしろ魔性の女というべきかも知れない。そして、いま——。国際麻薬ボスの王竜元も、この美しさに、心を奪われかけていた。

(このすばらしい肌のために、哲夫が復讐鬼となった……。無理もないことだ。フフフ)

王竜元の眼を奪ったのは、美貌よりも、その均勢のとれた四肢のみごとさであった。

「美佐さん——とか、いいましたね。ふむ、名前もきれいだ。わたし、あなたの身体を、もっとよくみたいよ。立ってその美しいボーズをみせてくれたら、紐を解いてあげましょう……」

王竜元は、いっそうの猫なで声でいった。

美佐は首を垂れたまま、黙って首を横にふった。——王竜元の眼が、キラリと光った。

「さア、立ちなさいよ」

美佐を縛った紐は、背後の柱に結びつけてある。その紐を柱から解くと、王竜元は、こんどは自分の手に握った。そして、しほりあげるようにして、ぐいっと上に持ちあげた。

「ううむッ！」

背中にぐくられた両手首がぎりりと上にあがった。しかたなく、美佐はよろよろと立ちあがる。

王竜元は、その紐のさきを、壁ぎわに打ちこんである、鉤に結びつけた。その鉤の高さは、王竜元が頭の上に手をのばして、すれすれのところにある。だから美佐は、縛られたまま、爪さきだって壁際に立たされたのであった。

吊られた白鳥だった。いや、白鳥ではなかった。上半身は輝くばかりの白さだが、下半身には、真紅の腰巻がおおわれている。

この腰巻の色は、あるいは大五郎の趣味なのか。純白と真紅の対照は、眼もさめるばかりの、鮮やかな色どりであった。

「あれッ、なにするンです、やめてッ」

美佐は、するどい悲鳴をあげて、必死に腰をくねらせた。王竜元の手が、その真紅のものにかかり、ズルズルと剥ぎとったのだ。



いくら身もだえても、うしろに縛られた手は、どうにも抵抗できない。逃げようにも、縄尻は、壁際の鉤にたかだかとくくりつけられている。

「おや、これははいねいなことですね……」

王竜元が、感心したように呟いた。

さすがに、現代の女である。腰巻の下にもうすいナイロンのパンティをはいていたのだ。これには、王竜元もアテ外れのように眼をみはった。

「ああッ！……」

みつめられて、美佐の全身の血が、羞恥のために逆流した。ひときわ、つややかな白さと、むっちりとした肉づきの足が、屈辱にふ

るえて、よじり合わされた。

「ふうむ……。まったくすばらしい身体だ。脚の形、胴のはそさ、くびれかた、きれいに流れる曲線……。すべての男性がヨダレをながす美しさですよ……」

天性の美に加えて、三年のあいだ、星島大五郎という、したたか者に調教された美体である。

王竜元の咽喉が、ゴクリと鳴った。陶醉の色を眼にうかべて、しばらくのあいだは美佐の美体を鑑賞しているのだ。

やがて——ピッチリとまとったナイロンの布地に、王竜元の手がそろりとのびた。

シナ服の女

と、そのとき——

「竜さん。そんなことして、いいの？」

王竜元の背後に、つめたい声がひびいた。

「なにッ」

ギクリとしてふりかえった王竜元の眼に、濃艶な女の姿体があった。

金糸銀糸に縫いとられた、花模様のシナ服を着た女だ。裾脇が大きく割れて、歩くたびに、太腿がチラリチラリとのぞける仕掛けになっている。年のころは二十七、八か。緋牡丹のような、華美な女である。

「桃華か。なんの用があつて、この部屋に入ってきた！」
にがい顔をして、王竜元がいった。

「悲鳴がきこえたので、なにかしら、と思つて——。そしたら、案

の定だったわ。真夜中だから、上の寢室まで、よくひびくのよ」

桃華は、皮肉な笑いを、その花びらのような唇にのせた。

この女は、王竜元の何番目かの情婦であつた。香港の魔窟で知りあつた女である。国籍は中国か台湾か日本か。それらの国の混血か。それとも、無国籍か。そんなことはわからない。

女ざかりで、あぶらがのりきっている。王竜元が、日本で一番寵愛している女だ。いまは、この竜一樓の女将をやらせているのだ。

「なにをしようと、おれのすることに口だしをするな。おとなしく寝ていろ」

「でもさ、そのひとは、哲夫の女だつていうじゃないか。子分の女に狙いをつけるなんて、どうかと思うわ」

「馬鹿をいえ。そんな気はない。——こいつは、三年前に哲夫を裏切つて、哲夫のボスだった男に囲われた女だ。だから、哲夫に頼まれて、こうして痛い目にあわせているのだ」

苦しい、いいわけである。

「ふん……」

桃華は下唇をつきだし、小鼻のわきに皺を寄せた。いくら弁解をしたつて、あんなの腹の中はわかつているよ……。そんな桃華の顔つきである。

「むこうへいつてろ」

「いやよ。その女を痛めるのなら、あたしも手伝うわ。どうせ寝そびれちやつたんだもの……」

桃華は、美佐の吊りさげられている、すぐ前まできて、ジロリと眼をあげた。

「ふん。きれいなひとね。顔も身体も、あんな好みじゃないの。こ

れじゃ油断ができないわ」にくにくしげに、美佐の顔から胸、腹から足のさきまで眺めおろすのだ。

「なんてまア、形のいい乳房をしてるんだろぅねえ……」

桃華は、すうっと手をのぼした。女は、女の急所をよく知っているのだ。指に力をいれて、キュウツとつねりあげた。

「ひいッ——」

美佐は、すさまじい悲鳴をあげてのけぞった。

「あら、いい声ね。気にいったわ」

桃華には、嫉妬がある。王竜元の欲情をそそった、美佐の若さが憎いのだ。

「やめろ、桃華——」

と王竜元はいったが、それきり彼は黙って腕組みした。

(女が女を責める。フッフ……面白い。見物しようじゃないか)
残忍な期待に、彼はほくそ笑んだ。

「金次、ちよっとここへおいで——」

桃華は、扉の外へ顔をだして、大声で呼んだ。

「へい——」

けたたましい返事とともに、金次がネズミのようにすっ飛んできた。そのかさされて千絵子を助けだしたまではよかったが、すぐに捕まってリンチにかけられた、オッチョコチョイの金次だ。その不名誉を挽回しようとして、必死になっている男だ。

「ヤカンに塩水をいれて持っておいで——」

桃華は命令した。

「ヤカンに塩水？ なんに使うんです？」

「いいから持っておいで！ よけいなことをいうんじゃないよ」

「へいッ——」

叱られて金次はすっ飛んでいった。五分とたたないうちに、命じられたものを持ってくる。

桃華は、そのヤカンを右手に持って、また美佐とむかいあった。

「さア、縛られっぱなしで、咽喉が乾いたろう。水を飲ましてあげるから、口をあけな」

いわれて美佐は、急に咽喉がカラカラに乾いているのを感じた。いままでは恐怖と苦痛に、それどころではなかったのだ。

感謝の視線を、チラと桃華にむけて、美佐は口をあけた。桃華はニヤリと笑って、ヤカンの口を、美佐の顔の前につきだした。

奸計にうまくひっかけたのだ。ぐいぐいとそそぎこむ。

「むッ、からい！……」

美佐は、顔をしかめて吐きだした。

「吐きだしちゃいけないよ、馬鹿ッ。飲むんだよ、もっと——」

桃華は、美佐の鼻をつまみ、口をあかせると、無理やりにヤカンの水を流しこむのだ。

ゴボ、ゴボ、ゴボ……むせながら、美佐は塩水を飲んだ。

「も、もう、けっこうです！」

「さア、もっとだよ。飲まないと、またこうしてひつつねるよ」

脅かしではなく、桃華の左手は、美佐の胸肌を、キュウツとつねりあげるのだ。

「ひい——ッ、むうッ、むうッ、むうッ！」

縛られた身体を、必死にふりもがく。

口から水が溢れて、咽喉から胸につたわった。それでも、桃華は執拗に水を飲ませつけ、ついにヤカンの大半を、カラにしてしま

ったのである。
「フフフ……。だいぶ、おなかがふくれて、いい恰好になったじゃないか」

大書の水を飲ませられたために、なだらかにふくあがった美佐の腹を、桃華は冷酷な眼で眺めた。

下腹はパンティにかくれているが、臍の上あたりからは、白いなめらかな腹の肉が、ヒク、ヒクと苦しい呼吸をしている。

「金次、こんどは、ムチを持っておいで」

ふたたび、桃華は命令した。

「へえ、ムチ？」

「ムチになるものなら、なんでもいい。そうだ、竹のものさしを持っておいで——」

「へいッ——」

やがて金次の手から、三尺の竹のものさしが渡された。

桃華は、そのムチをびゅっと空鳴りさせると、王竜元をふりむいて、ニンマリと笑うのだ。

「ようく、見ておいでよ。いまにあンたが、ソクソクするような場面がみられるよ」

桃華は、シナ服のポケットからタバコをとりだすと、うまそうにふかしはじめた。

「なんだ、そのムチで女を打たないのか」

と、王竜元が、さいそくするようにいった。桃華は、フフフと鼻のさきで笑い、王竜元が腰をおろしている木箱に、自分も坐った。裾が大きく割れて、白い太腿が、むっちりとこぼれる。

「まだよ。もう三十分もしたらはじめるよ。ウイスキーでも持ってこさせようか。この女をサカナに、ちびりちびりやるの



も、うまそうじゃないか」

吊り上げた女を前に、ウイスキーを飲み、たがいに腕をからみあ
ってふざけているうちに、その三十分はすぐ経過した。

「あの……おねがいです……」

小さな声で、美佐が訴えた。

「なんだい？」

ニヤリと笑う、桃華である。

「あの……トイレにいかせて……」

消え入るような声で、美佐がいった。

「そら、ムチを使うときがきたよ」

桃華は、ものさしを手に腰をあげた。

そのムチをふりあげると、まず美佐の太腿に打ちおろしたのであ
る。

ピシリッ！……

「ああッ——」

悲鳴をあげ、美佐の筋肉は、ブルブルふるえた。

「フン、まだ泣くのは早いよ。これからが本番だよ」

桃華のムチは、つぎに美佐の腹部をねらって、はげしく鳴った。

ピシリッ！……

白い柔肉に、たちまち赤い痕が走り、美佐はやけつくような痛み
に、悲鳴をあげて、蛇のようにのたうった。

そして、さっき塩水を飲まされたために、あらわれる生理の現象
が、耐えがたい時間の限界となってやってくるのだ。

美佐は、やっとわかったのだ。無理やりに飲まされたあのヤカン
の水こそ、このおそるべき、羞恥の罠だったことを……。

「おねがい……。いかせて、あの……トイレに……」

ムチ打たれ、悲鳴をあげるきれぎれのあいだに、美佐は必死に哀
願する。このまま時間がたてば、どういう結果が展開するとい
うのだ。

だが、桃華は残忍なうす笑いをうかべたまま、ムチをふりあげ
ては、美佐の腹を容赦なく打ちすえるのだ。

ピシリッ、ピシリッ、ピシリッ……

そして時間は経過し、生理はますます膨脹する。

「アアッ……ゆ、ゆ、ゆるして！……」

もたえる。腰をくねらせる。縛られた腕を必死にもがく。だが、
我慢できないものは、我慢できないのだ。いまはもう、ムチの痛み
よりも、膨脹の限界が迫ってくる苦痛だった。

ピシリッ……

腹を打たれる。痛さを耐えるために、そこに力はいる。

「ああッ！……」

美佐は眼をつぶった。歯を喰いしばった。どうしても耐えること
のできない瞬間が恐いのだ。

「うううッ……」

全身がけいれんし、硬直し、そして飽和した。

美佐の顔色が赤くなり、青くなり、そして又、まっ赤になった。

「うふ、うふ、うふふふ……」

王竜元が、蛙のように咽喉で笑いだした。

「クッククック……」

桃華は、ゾツとするような非情な眼で笑った。

「ううう……」

を手にして

絵の一考察

高 志

この悪辣きわまる羞恥の罠に、唇を噛んで身もだえる美佐の姿こそ、哀れであった。

「うふ、うふ、うふふふ……」

王竜元の笑いはとまらない。女に屈辱を与え、それを傍観することと快感をおぼえる悪趣味の男だ。

——だが、こんなところを哲夫がみたら、あいつはきっと怒るだろうな……。なんののかんものといつても、あいつは結局、この美佐に惚れているのだから……。

王竜元は、笑いながら、そんなことを思った。

（すると、いつまでもこんなことをしてはまずいな……）

そろそろ、哲夫も帰ってくるころだ。

だが、この珍奇な光景はどうだ。この、胸の底がムズムズとくすぐられるような、妖しい血の高鳴りはどうだ。

凌辱にまみれ、羞恥にのたうつ美佐の表情——。その麗身のもだ

えの美しさは、異常な魅力で王竜元の心をとらえて放さない。

美佐の醜い面をみせて、王竜元に嫌気をおこさせてやろうと謀った桃華の奸計は、逆の効果を生む結果となった。

（この女を、このまま、哲夫のものにさせてしまうのは、ちょっと惜しいな……）

王竜元は、ふと、そんなことを思ったのである。

（哲夫のやつ、反対に星島大五郎の手にかかって、今夜殺されてしまえば、都合がよいのだが……）

いくら親分子分の間に、固い契約がなされていても、しよせん、暗黒街に住む男は非情である。冷酷、残忍である。

そして——。

やはり、美佐は魔性の女であった。自分にその意志はなくとも、こうして男の心を、つぎつぎと迷わしていくのである。（未完）

先ず本号を手にとって、心せくままにパラパラとグラビア写真を見るに及んで何を感じたか？

頭の中に閃めいたことを卒直にいうならば①にこれは全カット共に秀逸ともいうべき収穫物であり、最新版の名に恥じぬ構図の偉大さ、洗練さ、そして進歩さを示したものであること。（断つて置くが筆者は本号編集とは全くの無関係な立場の者である）だが一つ心配なことがある。すなわち②として本号発刊

の罪によりその筋よりの弾圧も厳しく天星社は遂に廃社壊滅、愛誌奇譚クラブは永久に発行を禁止されるかもしれない……という悲しくも愚しき戦き。

しかし満天下の同好諸兄姉諸君！これは恐らく杞憂に過ぎないであろう。実は、それ程「悶悦姿態特選集」なる一連の写真画集は絶景なのである。——では、どう絶景であるのか総論的にかいつまんで申上げると

④ 縄の締めに緩るみ……つまり、どうで

『悦・特第二集』

——私の短評と縛り

——牧

もよいような縛りでないこと、真実仮借なくモデルを縛り上げている。

④ 珍らしい程多条式に縄を掛けてあること（さぞかしモデルの諸嬢は痛かったことで御座んじよう……）

⑤ 筆者らの迷言が今回は効？を奏したのか、どのポーズにもわざとらしさがないこと。

といった処であるが、満月は欠けるのたとえの如く欠所欠点は勿論ある。その惜しい処を厚つかましく進言申上げるならば

⑥ モデル諸嬢がそろって淑女と見えて、どの顔の表情もお澄ましであること。これは

注文する方が無理であって、半公刊誌の手前上、苦言を呈する筆者でも、踏み切れない。（勿論、編集部では得心の行くよう相当な処まで撮っておられることと思うのだが……。唯一人、絹川文代さんには特に85点の努力賞を差上げて置きましょうか）

⑦ としていってよいかどうか判らぬが、限られた頁面に、編集部の意気込みも凄まじく盛沢山にカットを押し込もうとした、その御親切な親心は重々判るんだが、首が切れたり胴から下がなかったりする乱暴？なアレマジメントは、一步誤ると推理小説ならぬ「淑女のコマ切れ」となる恐れがありそうだ。（顔だけは写さないで、お願い……とも角、新人のモデルはいうものではあるが——）

以上、グラビヤ版オンリーで総論を終るのはこれこそ乱暴な逃口上なりと申さるるならば、例によって近代感覚を以て描く御馴染み四馬孝画伯の巻頭口絵——これをカメラで撮ったら？と思うのは筆者ばかりではあるまい——に文字通り麗筆を振るわれた、滝麗子画伯の挿絵に躍る特選貴小説の数々は壮観である。しかもその水も洩さぬ落ちつき払った編集振りは小憎くいばかり、文献として後世に残るものならば、一冊千円也をだしても高く

はないであろう。コマージュはそれ位にて次は各論へとペンを進めて参りたい。

さて緊縛の個別訪問となると事柄は要約されたタイトル以上に六ヶ敷しいのだが、この際、じっくり「読む」といった方面を省略して、専ら「見る」つまり絵画と写真に限定して零頁から放言居士を發揮してみたいと思う。

表紙——伊藤晴雨氏も確かこのような黒表紙を好まれたように記憶するが大変よろしい。宛らデズニールランドで遊ぶようだ。

目次カット——七人の小人に操つられる縛られた白雪姫、一切ノーコメント・サイレントなるが故に秀逸、どうか、ふんだんにお描きの上、発表されますように。

四馬孝絵画中では「深夜の水浴」と「喰込む縄」が印象的である。画中のモデルがそつと私に囁やいてくれた。「どうして、あたし達女ばかりが後手に縛られて責苦を受けるのでしょうか？」と。

何故って、左様、女というものは由来縛らなけやならないものです、縛られるために生れてきたようなものだから……マア、失礼といわせもせで猿轡をかませたあたり、流石は四馬先生ですな。

さて、待望の「悶悦姿態特選集」——一つ思う存分いわせて貰いますかな。

開幕第一頁、絹川文代嬢演ずるの「逢瀬のポーズ」、シーズンを考慮してゆかた篇、正面ひざ崩しでは判らないが二頁の後背の何んと紐繩の多いことよ。ゆかたでこれ位縛ったら縛り甲斐があるというもの。処でこのゆかた姿は有難いが素肌で赤いお腰しを省いていらっしやる。じゃ、裸になるワ……でお腰し一枚で（この腰巻は一体何処から湧いたか）取急ぎ縛られ申候式の縛りは不思議な現象といわざるをえない。余計な事だが待合での遊戯と見たのは、ひが目か……。

「しずかなる受縄」の花坂道子夫人（まだ早いのか）は帯のない処がミソである。

「あたしネ、うっかり貴方かと思つて玄関の扉をあけたら、いきなりでしょ。帯を解かれて、持って盗かれたのは仕方ないとして、転ろがしたり、色んなことさせるのよ」といった風景。新婚早々の受難と見てよからう。

田中芳代嬢の「はかなき悶え」なるアクロバットは縛られた美容体操と見れば充分頂ける。豊満な白い雌海老が海底で独り悶える姿だ。

次、再び絹川文代嬢登場の誰がつけたか、

「美囚第十四号」の拘束姿。この異例のコスチウムは半ば感心しながら、半ば考えざるをえない。単に「君、囚人になってみないか？」ではおさまらない代物。悪くいつて右や左の旦那さま、よく申してお江戸日本橋畔のさらしものであろうか。文代さんも余程悪いことをしましたネ。右頁下二枚のカサカサな腰巻の代りに、せめてサラリとした本縮緬の湯文字でも締めて下さいよ。

以上の償いとして、次頁に続く三枚の姿態は同じ囚人服ながら、ぐっと趣きを変えて妙。顔が美しいだけに頂けますネ。夕食の食事はきっと私が食べさせてあげます……。

さて、次は遠目鏡で隣の某邸を盗見したスナップであるらしい。夏日陽の暮れるをかまわず、飽かず眺めたとあって、その名も「羞姿晒陽」。この愛川悦子嬢演ずる娘さんは早くいつて隠居のホルモン剤であつて、若い女性を裸にして、パンツか腰巻一枚の両手を後手にギユウギユウに縛り上げ、御隠居さんのいう儘にならねばならない人身御供。ある時は松の樹に縛りつけられたり、またある時は裸足のまま池畔に隠居と同行、容赦もなく鞭も受けるという。「おなこの縛られた姿チウものは、わしら見たいな年寄には若返えりの

薬じゃよ。じゃによって、一日に一度は必ず女を後手に縛ることにしちよる。ただそれだけなんじゃよ。アハハッハッ……」と誠に終生幸福な老人ではあるまいか。（但し、これは飛んでもない筆者の妄想である。）

サア、何処からか軽快なオルゴールが聴こえてきましたよ。そうです、「悦びの一刻」です。どちらが浜本喜美さんでどちらが三木敬子さんか判らないが、とも角お二人共新人。しかし、何んとニューフェスにしてはませたゼスチュアであることよ。嬉しことに本当に縛ってありますネ。感心致しました。どうぞこの上とも頑張つて下さい。それこそ、何処からかお嫁の口が掛つてこないとも限りませんから……。

さて、このあたりで申入りのお茶を一杯頂いて、次へ参りましょうか。「綾なす白縄」——余りアイディアが高級過ぎて本当に申し訳ありません。何んと申上げてよろしいか、どなたかどうぞ発表理由をお教え下さい。

処が馬鹿なもので同じ絹川嬢でも「乱れ咲く哀花」は判ります。いきなりバァーに飛び込んだら恋人の彼女が縛られてるんだよ。いや、そうじゃない。応接間のドアをあけるとお嬢さまが細引で後手に縛られていたんだネ

……何んとでもいい給え、『この謎は何処かの私が解く』だろうからさ。透いた乳房に隆起した腹部の線が絶讃ものである。流石はベテラン。

処でいよいよ淑女のコマ切れが現われた。ニューフェース平野笑子嬢の「柔肌の喘ぎ」の九肉片、食べて美味しいなど、夢にも仰言つてはいけません。お顔はとくと拝見出来ないうが、今後活躍出来るひとにらんだ。随分痛かったでしょうに、肉が盛り上ってますネ。今度は是非ロースのあたりを一縛り願いますよ。

へサアいらっしやい。再々度御登場の文代嬢演ずるは廃家に連れ込まれた家出娘の一幕、で御座い。題して「荒縄と美貌」だが分厚いネルの腰巻は少々野暮ったかったですネ。しかし街道筋の雲助流に申せば「チエッ堪らネエ恰好だぜ。どうでい。兄弟、一つこのアマッ子としっぽり……へッへ……」「成程、堪らネエやナ……」(筆者曰く、この時の撮影指揮者のお顔が拝見したい。妄言多謝)このアマッ子の頁をめくると、ジャズシンガーを想わせるこれまたニューフェースの岩井知子嬢の半裸娘である。全く以て、文字通りの「未知の驚き」。中でも豆絞りの猿轡をかまさ

れ右方をちよいとにらんだ表情は相当なもの。素直な人? だけに肉がつけば必ず優れた縛られモデルになれます。

さて、お後……どうも自信満々な縛りカットの連続で、選挙ならぬ個別訪問は少々疲れますな。「悦虐狂奏曲」いわずとしれたベテラン大塚啓子嬢。このひとの体は弾力性があるから、縛り紐がぐっと生きてくる。就中、左半頁のカモイ吊りは逸品。じっと見ているうちに往年洛陽の紙価? を高からしめた、被虐の寄稿者古川裕子氏を想い浮べた。そのまた一枚めくると「造形美術」の花坂嬢。暑いから御免なすつてとばかりブラパン(ブラジャーとパンティの略)全く凄まじいではありませんか。特に花坂嬢の和服は定評があり鹿の子絞りの長襦袢に赤い腰巻それに豆しほりの手拭猿轡……ただただ勿体なさに涙こぼるであります。さだめし愛の巢は朝な夕な……大変失礼なことを申し上げました。

さあ、ラストパーツ、双丘の女王! 愛川悦子嬢の見事な「ロープブラジャー」いいタイトルですナ。如何です? こんなロープ製ブラジャーを召して街をお歩きになつては……冗談はさて置き、このひとの乳房の円球は全く素晴らしい第一級ものである。恐らく奇ク

編集部を挙げて推せん羨望視されているものと妄想する。縄でひくくくるの余り、傷まないうれぐれもお願ひ申上げて置きます。

この次は一度きものを着て貰つて縛られた……オヤオヤ早速お聴届け下さつて有難う御座います。待っておりますよ、必らずネ。ゲンマン(こんなことをいう奴は何処かイカレてるかもしれない、ひっ込み給え!)

序でに一写千里、貴小説に飛んで挿絵の逸品は64頁の「縛られたお富」さん、小説は何処をお開きになつて読んでも特選物ばかり、安心して若返えりが出来ます……テナ処で誠にスピーディな迷批評。

「おい、おいッ君。最初のサブタイトルにある私の短評は以上で判るんだが縛り絵の一考察とは何んだい? 何処にも考察らしい考察は見当たらないじゃないか……」申訳ありません。実は……一つそのこと、どうでもいいじゃないませんか。それよりか次集第3集は是非「ハイ、写しました。これで我慢して下さい」ではなくてグラビヤ版挙げてオールK誌特選モデル嬢が後手に縛られて行く道程、(縛った肉体を二階から猫を放り落すように反転させるだけが能でありせん)を提供して貰おうではありませんか。

創作

王宮の浣腸室

(二回)

柴崎 黎子

五

お友達になったばかりのポーラが、驚のよ
うな顔をした女官長に連れ去られて、王様と
スザードも席を立て、昼饗はおしまいにな
りました。二十人の女性達は、先刻の陽気さ
などは忘れてしまったように、静かに立ち上

ってお部屋をでようと
しました。

この人々が急にふさ
ぎこんでしまったり陽
気になったりするさま
は、私には奇異な感じ
を与えました。ふつう



王様は、私をお招きになると、ひよいとお膝の上に持ちあげました。

「勿体のうございます。陛下」

私はお膝を下りて、王様の足下にひざまずこうと致しましたが、王様は許して下さいませんでした。

「そちも見えておくのじや。これなる不埒な女をよく見ておくのじや」

と王様は、私の顔をポーラの方へ向けさせようとなさいました。

私の胸が痛い程、動悸を打っていました。

とても、かわいそうなポーラの姿など正視する事はできませんでした。私は、ポーラの方を見るふりをして、ポーラの上方に視線を走らせて、お部屋の中を眺めました。

ここもずい分と広いお部屋でした。太い柱が何本も立っており、何に使うのかわからない道具が、雑然と置かれていました。

私の一番恐ろしい女官長が別の扉から入ってきました、こわい一瞥を私の上に投げました。私は思わず目をあわれなポーラの上に落しました。

女官長は、長い鞭を振り上げて、ポーラの身体に叩きつけました。ピュン、ピシッと大きな音がして、ポーラの口から悲鳴が上がり

ました。私の口からも悲鳴が洩れました。

「そちも見ろのじや！」

顔を伏せた私に、王様がきびしくお命じになりました。私はもう一度ポーラの姿を見ない訳には行きませんでした。

女官長は腕を大きく振り上げて、又も鞭を当てました。ポーラの腰がはね上がり、二人の女官が必死にその肩を押さえつけました。見る見るうちに、まっ白な肌に二本の筋が赤く浮かび上がって参りました。私の目からは涙が流れだしました。

女官長は、なおも鞭を振りました。ポーラは痛々しい悲鳴を上げながら、のたうちまわりました。その度に私の心臓は凍りつきそうになりました。

「もっと打て」

私は、王様がこんなにも非情な方だとは知りませんでした。何本ものみみずばれを作って呻いているポーラに、もっと鞭打ちを続けよとお命じになるのです。

ポーラは恥も外聞も忘れて、美しい体を左右に、上下に動かして鞭を避けようと致しました。自由になる両足でもがき、しまいには膝をついて、逃げまわりました。

王様は、私をしっかりお掴えになっ

した。私は目の前で行われている惨劇の恐ろしさに、自分が置かれている立場も忘れていましたが、王様のお手が顔にかかった時、始めてこわい、と思ったのでした。

「よい、鞭を止めい」

漸く王様は女官長にそうお命じになりました。私はともかくほっと致しました。でもポーラの懲罰はそれで終わったわけではありませんでした。いつのまにやらポーラの横に立ってじっと眺めていたスザードが、女官長にかわって何やらピカピカ光る器具をとりだしたのです。

スザードは、その器具を、かわいそうに身動きもできないで俯おしいるポーラの上にかがみこんで、私の想像もした事のないやり方で使用し始めました。

「浣腸室」！。その言葉の意味がはっきり分りました。スザードは、そして王様も、何て破廉恥な、冒瀆漢なのでしょう！。

私は、どんなに我慢をしても見ていられませんでした。

女官長によって、あの、私には苦しみの象徴である壺が用意されました。二人の女官はもう死んだように動きもしないポーラを、なおも必死に押さえつけています。

私は王様の腕の上に顔を伏せました。

「よい、よい、そうしておれ」

と王様は満足なさった、やさしいお声で許して下さいました。

いいえ、許して下さいたものではありません。王様は私の身体により強い力を加え始めたのです。あわれなポーラのあり様を御鑑賞になりながら、私を人形か何かのように苛め始めたのです。

相手が王様でなかったら、私は厚い胸を押して逃れたでしょう。

私は王様の腕に戦慄を覚えました。しかも私の背後には、ポーラの処置に没頭しているとはいえ、女官長とスザードがいるのです。私は呼吸さえ困難でした。

そのまま私は王様のお傍に侍らねばなりませんでした。陽光が大きな窓からさんさんと流れこむお部屋で、私は始めての経験をしなければならなかったのです。それは常識を越えて、ただただ苦痛と驚愕との連続でしかありませんでした。

六

「マギ、マギ」

ベッドの中で、私は眼覚めの用を足すため

にマギを呼びました。

カーテンの蔭の小部屋から、いつものようにマギが壺を捧げるように持って来ました。

私はもう慣れかけていました。王宮での生活が始まって、いつの間にか半月たっていたのです。

ベッドの上に上半身を起こした恰好のまま、足もとの床に膝まずいているマギとお話もできるようになりました。

「御主人様が王様を独占なされたと、皆さまがしきりに嫉んでいらっしゃるそうでございます。マギも鼻が高うございます」

そういつていかにも嬉しそうなマギに、私も思わず微笑を返すほどになっていました。

そう、王様はこの私を大変な御寵愛ぶりでした。ほとんど毎日私をお召しになって、おたわむれになる事に満足なさっているのです。私も王様にすっかり身心をおゆだねして今まで知らなかった激しく、そしてやさしめでいっぱいの喜びを感じるようになっていました。

ポーラのあの日以来、誰も懲罰室へ呼ばれた者はありません。それは誰もが失態をしでかさなかったからという訳ではなく（王様がそのお氣持になれば何とでも理由をつける事

ができるのですから）、王様がそのような事をお望みにならなかったからでした。

あの気味の悪いお部屋が王様にとって或る種の娯楽と愛情の場所である事は、私にもわかって参りました。ですから、王様があの部屋をお使いにならないのは、マギの申しますには、私を御寵愛なさる事です。すっかり満足なさっているからなのです。

私は昼夜のお食事はもとより、午後のお憩いや夜のお寝みの時間には、ほとんど毎度お側に召されました。王様は私をお相手に冗談を申されたり、私にお酒を賜わったり致しました。私は倅せでした。

そういう時間を除いては、宮廷の生活って何て単調なのでしょう。一週に一度位行われる晩餐会の時でもなければ、二十人以上もいる同年配のお友達と顔を合わせる事もないのです。私の話し相手は、マギと鏡だけなのです。私は長い午前中、許される僅かばかりのお庭を散歩したり、読書をしたりして気を紛らす外はする事もないのでした。だから余計に、王様がお召しになるのを心待ちするようになってしまいます。こういう単調な生活は或いはそのためにわざとたくらまれたものなのかもしれません。

壺を下げさせて入浴、軽いお食事、そのあと、上半身をぬいで入念なお化粧、と、これが最大の義務であるかのような毎日の日課をたしながら、今朝の私は何か寂しい気持でした。王様が旅立たれたからです。

僅か三日間の御旅行だというのに、この所在なさはどうでしょう。ここでは本当に王様だけが生活の対象にされている事が痛切に感じられます。

でもその朝は、私は不意の乱暴な陳入者を迎えなければなりませんでした。それは、王様が御不在だと気儘勝手な事をして皆を困らせるエルモンド王子様だったのです。

王子様がノックもしないで飛び込んで来た時、私は驚きのあまり悲鳴を上げて、肩脱ぎの上半身を両腕で隠したまま立ちつくしてしまいました。王子様は持ち前の残酷そうな眼に恐ろしい笑みを浮かべて、私をじっと眺めているので



す。マギも恐ろしさに震えながら私の肩に化粧衣をかけて息をのんでいます。

「おまえ、僕が気に入らぬな」と王子様は私に近寄りながらいいました。

「僕もおまえが気に入らぬ。だが僕を気に入るようにしてやろうと思つてやつて来たのだ」

「王子様、私の御主人様はまだお仕度中でいらっしゃいます」

マギが恐る恐る申しましたが、王子様は意に介する風でもなく、私の肩のものを引たくるなり、遠くへ投げ出してしまいました。私はまだこういう暴君の扱い方を知りませんでしたので、恐ろしさと羞恥で青ざめるばかりで、どうしてよいかわからず、

「御無様な事をなさいますと、王様に申し上げてしまいますから」といってしまいました。すると王様は余計に癪をお立てになつて私の膝の辺りを蹴りつけました。「まあ、何をなさいます！」

私は恥ずかしさも忘れて両手を下にやりまして。するとむき出しの胸にガンと拳を振るって来ました。私は、うっと呻いて床の上に倒れてしまいました。殴られたのも生まれて始めてですが、その場所が場所だけに息も止まりそんな程苦しく、そのまま起き上がれませんでした。

「お許し下さいませ、王子様。お許し下さいませ」

マギが泣きながら哀願している声が耳に入りました。でも王子様は、ますます威猛高くなって、

「うるさい！ あっちの隅に下がっておれ。」

下がれというのがわからぬか！」

と怒鳴り散らしています。

「いえ、どうぞお許し下さいますように。かわりにこの私を」

「ええい、邪魔な奴だ！」

マギが突き転がされ、ビリッと衣服の破れる音がしました。

「おとなしくあっちへ行っておらぬと只ではすまされぬぞ！」

恐ろしい声でした。マギは泣き泣き、諦めて隅に下がりました。

「この不屈きな奴め。僕に向かって何てこと

をいうのだ。僕の父君に何を申すといったのだ。身の程知らず奴！」

王子様は私の不用意な言葉にカンカンに御立腹なさって、私の上に馬乗りになると、頬や肩を力任せになぐりつけました。私は余りの痛さと情なさで声も出せませんでした。

王子様は私の体をゆすって私を叩かせながら、不気味よさそうにいいました。

「おまえが何をいおうと、僕は父王の嗣子なのだぞ。おまえの為に父君が僕を責めたりなさると思うのか。おろかな奴め。いっておくが、やがて僕は王になるのだ。おまえは、この未来の王に対して不敬ではないか。僕に逆うことは王に逆うも同じことだ。僕は未来の王として、おまえを折檻してやらねばならぬ」

私は苦しさで悲しさで一言もいい返せませんでした。王子様はされるままにうつ伏している私の上で勝ちほこって、なおもピシヤピシヤと叩き続けました。

王子様がやがて、一陣の颶風のように荒れっ放して去って行った時、あわれにも私の体は、ひりひりと痛んでいました。私は愈々この恐ろしい王子様が嫌いになりました。

「ルピア様は王子様にも、もっとひどい目に

お会わされになりました。御主人様は、まだまだおしあわせの方ですわ」

マギは甲斐甲斐しく私の介抱をしながら慰めてくれました。私はマギを一層好きになりました。

七

この日は事件の多い日でした。それまで私は単調ではありながらも甘い平穏な日々を送っていましたが、王様のお出ましを待っていたかのように、どっといろいろな事が押し寄せて来たように思われました。

まずマギが呼び出されました。医室へ来るように、と。それを伝えて来たのは下級の女官の一人でしたが、マギは何の為の招集かわかっていたらしく、それとわかる程身震いして尻ごみしました。その顔は青ざめて、事情はわかりませんでした。かわいそうな程怯えていました。

「私達召使いのお調べがあるのですわ」

そう、一言いい残してマギは出て行きました。私は一人取り残されてベッドにうつ伏したまま、激しい屈辱と羞恥の念に悶えていました。皮膚の痛みは次第に薄らいで行きましたが、心に残された強烈な傷は、ますます燃

えさかるばかりでした。王子様は單なる好奇心から、私の身体に暴力を揮るわれたのです。どうしてすぐに忘れられましょう。

自然に流れおちる苦しい涙を拭いている時でした。控え目にドアをノックする音が聞えました。私ははっとしてとび起きました。今まで私のお部屋に来る人で、スザートにしろ女官長にしろ、ノックなどする人はなかったのです。私は大急ぎで室内着を身にまとい、髪を撫であげました。

静かにドアをあけてすべりこんで来たのは同じく王様にお仕えするイベットという女性でした。私は、ほっと安堵して彼女を招こみました。

「そうとやって来ましたの。あなたとお話がしたくてね」

イベットは肩をすくめて笑いました。私も心中の苦しみを隠して、無理に笑顔を作りました。同性の人にさっきの事件を感じられる事は、それこそ堪え得ない事でしたから。

それに、ここへ来てから私には始めてのお客さまでした。何しろ勝手にお部屋を出る事さえ禁じられているのですから、お友達ができる筈もなかったのです。

「ベッドにおかけなさいな」

そうすすめて、私は化粧台の前に立ちました。彼女と面と向かう前に顔を造っておく必要がありました。

イベットとはいつぞやの晚餐の時に僅かにお話した事があるだけでしたが、大変あたたかい感じがする人でした。それに他の人々に比べてどこかしっかりしていて信頼できそうな気がしました。私よりも三つ年上で、王宮の生活についても万事のみこんでいるようでした。そして朗らかな事は、この二十数人の女性中随一と思われました。私にとって、だから本当にうれしいお客さまなのでした。

私がイベットに並んでベッドに腰をかけますと、早速、彼女のおしゃべりが始まりました。ああ何て長い間、私はこのような気楽なおしゃべりを忘れていた事でしよう。

「あなた、こんな生活に飽き飽きしませんこと？。私は一度でいいからお城の外に出てみたいと思いますわ。けれどね、いくらお願いしてもお許し下さらないのよ。私はもう二年間もお城にこもりっきりなんですもの。本当にここに来たら、もうおしまいなんですものね。この先、五年でも十年でもこうして変化のない毎日を送っていかなきゃならないと思うと、それだけが悲しいわ」

「まあ、そんなに？」

「そうよ。誰でもがそうですもの。もともと若くなくなってしまう方や、特別に女官長のお気に入りになると、お里帰りが許されたり、お城を去ったりできるのですけれどね。でも私はだめ、女官長ににらまれちゃっているんですもの」

「女官長ってこわい方ですのね」

「そうですよ。陛下の御従妹でね、若い時からずっと独身でこのお目つけ役をなさっているのです。それはそれは無慈悲な方ですわ」

そんな悲しい話題ではありましたが、でもそのうちにイベットは自分の生国である北シナライの風物や、子供の時から楽しんでいる出などを語って、思わず長い時を過ぎてしまいました。私もこんなに楽しい事は始めてでしたが、イベットも心から嬉しかったらしく、私の額に接吻をして立ち上がりました。

「またしので来ますわね。でもあなたが来てはだめよ。見つかったら大変なのですからね」

その言葉が終るか終わらないかに、まあ何て事でしょう、ドアがあいてあの恐ろしい女官



長が顔を出したのです。イベットも私もあまりに不意の事なので、啞然として立ちすくんでしまいました。女官長は見るも恐ろしい形相でつかつかと入って来て、ぐっとイベットをにらみすえました。「何という事です、あなた方は！」

女官長は、あの不気味なとげを含んだ声で叫びました。

「陛下がいらっしゃらないからといって、このような勝手な真似は許しませんぞ。あなた方はここで何をしていたのです」

「はい、故郷のお話などをしていました」

とイベットが答えました。

「そんな事を誰が許し

ましたか。よろしい、二人ともお仕置をして上げます。私の後についておいでなさい」

お仕置と聞いて、二人とも真青になりました。イベットは勿論、私も女官長が行うお仕置がどのような種類のものであるか、大体わかっていたからです。私はポーラのあの日の光景をちらっと思い浮かべました。いよいよ私がその苦しみを、いやでも受けなければならぬのかと思うと、胸が悲しみの余り痛くなりました。

「女官長様、私が勝手に参ったのでございます。どうぞ私一人だけにお仕置を下さいますように」

イベットは私をかばってくれました。

「なりません。あなたも来るのです」と女官長は私に命じました。

私はもう決心していました。それにイベットといっしょなら多少、心強いような気もしました。ですが、室内着の下には王子様に引き裂かれたままの化粧着をまとっているのです。これだけではどうしても着かえて行かなければなりませんでした。

ちやうどマギが戻って参りました。目にいっぱい涙を浮かべて、まっかな顔をして、今までどんなひどい事をされていたのかと思わ

せるような姿でした。が、お部屋の中に予期もしない二人の人物がいるのを見ると、驚いて立ち止まりました。

「マギ、私の着換えを出してちょうだい」

私はベッドの蔭にまわりながら、そういうつけました。すると女官長は、

「着換える必要はありません。そのまま来るのです」

ときびしい口調でいいました。それは私の秘密を知っているかのような口ぶりでした。私は困ってしまいました。でも、それ以上、抗えませんでした。意を決して私はイベットの後につづきました。

八

イベットと私が連れて行かれたのは、やっぱりあの懲罰室でした。私にとっては二度目のお部屋でした。イベットはもう経験済みなのか、じつとうなだれているばかりです。目の前に、あわれな犠牲者を待ち受けるかのような恐ろしい寝台がおかれています。

「脱衣なさい！」

女官長はイベットに命じました。イベットは無言のままドレスをはずします。

「それものです！」

女官長はイベットにペティコートまでとらせました。イベットはそれをするりと床におとして立ちました。

ああ！。私はイベットが立っている姿で思わず目を伏せました。胸が急にドキドキします。まるで自分がそうされたようなのです。むごいこと。ポラでさえ衣類は身につけていたのに。

私はそれきり必死に目をつぶって、イベットを見るまいとしました。二人は寝台をまわって室の片隅に行ったようでした。そこで何をされるのか、イベットのかすかな声が洩れました。女官長が何やら叱っています。カチャッと金属的な音がしました。私は耳もおおってしまいたい気持で、固く目をつぶって立っていました。

やがて、以前に聞いたピシッという音がして、イベットの呻き声が聞えました。鞭うたれたに違いないのです。私の胸はいっそう動悸を増して苦しい位でした。

続いてピシッピシッと音がして、呻き声が大きくなりました。私の目からは涙がにじみ出しました。

「あなたの自業自得なのだ。もっともつと後悔しなければいけない」

女官長は昂ぶった声でいっています。鞭の音はつづきました。

私は手の甲で涙を拭う拍子に、ちらっとイベットの方を見てしまいました。イベットはこちらに背中を見せて丸い柱にくくりつけられていました。ちようど柱を抱きしめるような恰好で、両腕はおそらく向こう側で一つに縛られているでしょう。彼女の背にも脚にも、鞭のあとが痛々しく、ついていました。

女官長は両足をふんばって、まだ鞭を振りあげていました。今度はどこを打ってやろうかと考えているように、イベットを凝視して。

なまじっかイベットの赤く腫れた背を見たばかりに、その後の鞭の音や悲鳴がいつそう私の肺をえぐりました。暫くして、やっと鞭打ちが終った時、私はどんなにほっとした事だったでしょう。

ですがイベットへの懲罰はそれだけでは終りませんでした。彼女は両腕はそのままにして、更に片脚を柱にまきつけさせられました。それは一本足で立って、両手と片足で柱にからみついたような恰好でした。イベットをそのようなあわれな姿にしておいて、女官長は何か道具を持って来ました。

それが浣腸器であると知った時の私の驚き

は、筆舌には尽せません。世の中にこれほど恐ろしい物は見た事がありませんでした。それは人間の誇りや美しさを、一挙にふみ碎いてしまいそうな悪魔の姿に見えました。ポラに対してスザードが用いたそれは、この巨大な悪魔に比べれば何とかわいらしいものだったでしょう。私は、やがて私自身がその悪魔に襲われるのだという事は念頭にもおかし息をのんで見つめていました。

女官長がイベットに対して行う、非情な折檻は、随分長い時間がかかりました。イベットは苦悶を全身にあらわして、自由にならないう上半身をのけぞらせ、苦叫を挙げ、時々首を振りました。

女官長はやっと立ち上ると、今度はお部屋の隅から奇妙な椅子を持ち出しました。椅子というのは当らないかも知れません。それは椅子のように四本の脚はついていましたが、坐る所は半球のように丸くなっていて、スプリングも何もない金属ばりなのです。しかもその頂上には、先端が急に細くなった七、八センチの牙のようなものが垂直に突出しているのです。私は一体それが何に使われるためのものなのか見当もつかず、女官長がイベットのいましめを解いて、苦しそうに前こごみに

なるイベットを連れて来るのを呆然と眺めていました。

イベットは小声で女官長に何か哀願しました。何をいったのか私の耳には入りませんでした。したが、

「なりませぬ。我慢するのです！」

冷酷にいい放つ女官長が、何か非常に残酷な苦行をイベットに課す事を意図しているらしい事はわかりました。

やがてその世にも不思議な椅子がどのように使われたかを、詳しくお話する事はできません。ただ、苦痛の呻きを上げるイベットが身動きもできなくなってしまうという事だけをお話できます。女官長がイベットの足首とひざを、椅子の脚にしっかりとくくりつけてしまった時、私はあまりの事に失神しそうでした。

女官長は、驚きと恐ろしさで茫然として無抵抗になっている私の前に立ち、私の番が来た事を告げました。私はいわれるままに部屋着を脱ぎました。その途端、女官長の口から「まあ！」

という驚きの声が上がりました。

「一体、どうしたというのです！。その恰好は」

そうです、女官長は、王子様にひき裂かれた私の化粧着を見たのです。

「あなたは……」

と女官長はイベットの方に向かって叫びました。

「何をしたのです。さあ隠さずに白状しなさい。何をしていたのです」

ですが、もはやイベットは物をいう事もできず、全身をわななかせているばかりなのでした。

「これは、あの、王子様が……」

私は必死に弁解しました。けれど女官長はそのあとを私にいわせず、ピシッと私の頬を打ちました。

「よろしい。そのような弁解は聞きたくはありません。さあ、それもお脱ぎなさい」

王子様と聞いて女官長はいっさいがわかったのでしょうか、何もいわないで私を見つめました。私は頬を叩かれた屈辱と羞恥に気も遠くなりそうでした。

私が衣類をとってしまった時、女官長は更に驚きの声を上げました。

「まあ、あなたは！」

女官長は、私の背や肩がまだ赤く充血しているのを見つけたのです。

「何てことをしたのです。私でさえ、まもなく陛下がお帰りになるからと思って、鞭だけは許してあげようと考えていたのに。そんな身体にしてしまって、あなたは何と陛下にお

詫びするつもりなのですか」
「申し訳ございません。けれど、これは王子様が……」
といいかけて、又私は頬を打たれました。

スクラップ

レポ

新聞切抜通信

○お腹から出て来た鉄

胃かいような手術で患者の腹中に忘れっ放しにしていた止血用ハサミが三年ぶりに取り出されたという珍らしい事件が、山形県天童市であった。話題の主は天童温泉料理店主、伊藤彦一さん(四三)一昨年九月に山形市香澄町、篠田病院(院長篠田甚吉氏)で手術を受けたが、退院後も胃の重苦しさは変わらず去る三月、改めて篠田病院でレントゲン検査をうけたところ、なんと胃の左側に長さ十五センチのハサミがタテに入っているのびっくり。再入院してやっとり出しこの程退院したが三年間もよく無事で……と伊藤さんは腹をさすってホッとしている。

(山形)

(昭和三十四年五月五日附毎日新聞)

○嫉妬に狂った腹切り夫人

嫉妬に狂うと女性はどうな事でもする——七日夜七時四十分ごろ荒川区町屋三の一一八七『さくら荘』二階でそば屋店員池崎喜久夫さんは妻ケイ子さん(二五)と訪ねてきた愛人のY子さんの三人で別れ話をしていた。『私は別れ度くない』というY子さんとケイ子さんの話がつれて、すつたもんだの揚句、台所から肉切庖丁を持出したケイ子さんは『私が死ねばいいんでしよう』といったと思うといきなりお腹に突き刺してしまった。幸い命は取止めたが、それにしても女性の腹切りとは余り聞かない話。

「余計な弁解をするでない」

私はポロポロとくやし涙を落しました。一体、女官長は私の何を責めようというのでしょうか。私は何一つ悪い事をしていない、あわれな犠牲者ですのに。

でも私はそれ以上、抗えませんでした。容赦なく私を寝台の上に追い上げる女官長のさすがさま、私は従順に従わせざるを得ませんでした。

女官長は台の上に坐ってちぢこまっている私の足首を、寝台のヘリについている丸い金具で留めました。もう一方の足首も、反対側の金具につながれました。それだけで、私は生まれて始めての、みじめな恰好にさせられたのを意識しない訳には行きませんでした。次に私の首は、寝台の上に押しつけられ、両手はそのまま後へまわして、折り曲げられた膝にしばりつけられました。これで私は、上半身を起すことも、膝を伸ばすことも、横転することもできなくなりました。繋留されているのは両の足首だけですのに、全身の自由を奪われてしまって、世にもみじめな恰好にさせられてしまったのです。

腰からももにかけて、血が燃え出すのを感じました。ああせめて、上体を起すことだけ

(昭和三十四年五月十三日附内外タイムス)

○短刀で切腹自殺

十二日午前六時十分ごろ、東京都大田区山王一の二五九〇地、味岡英二さん(五一)が自宅八畳間で座布トンにすわったまま刃渡り三〇センチの短刀で切腹自殺しているのを妻久子さん(三八)が見つけた大森署に届出た。調べでは久子さん宛に「五、六年前からの肝臓病が治らないので病氣と別れたかった」と遺書。

(昭和三十四年五月三十日附内外タイムス)

△須藤律夫・提供▽

○中学生に売春さす

一宮署では、十六日から県警本部売春特捜班の協力を得て、茂原市内の売春宿の内偵を進めていたが、十八日朝、茂原市町保八六料理店「まるえい」こと渡辺うめ(四〇)と情夫前科一犯石川英(五五)の二人を売春法、児童福祉法違反の疑いで捕えた。

昨春秋、長生郡長生村の少女(一四)一松中二年生Ⅱを女中として雇入れ、昨年暮から捕まるまで、五百円から千円で客をとらせ、いやがる少女が逃げると、自動車で追いかけ、自動車代を前借に入れるなどして、少女にかせがせていた。このほか、茂

原市内のもと特飲店にいた売春婦を、女中として雇入れ、客をとらせていた疑い。

一松中の話 この生徒の家庭は父がなく母が行商をしていた。しかし昨年五月、母が病氣となったため生活苦となり、学校を休むようになった。母親にきいても、行先がわからないというので困っていた。まさか、転落しているとは思わなかった。

(昭和三十四年三月十九日附東京新聞 千葉版)

○

悲惨な話である。この父親のない家庭の貧困は、そのまま政治の貧しさに通じていると思う。学校の教師にきかれても、娘の行方は知らないという母親。十四才の少女を働きにだした母親が、その働き先を知らない筈はない。かくしているのは、母親が娘の仕事の実情を知っているからに違いない。

悪ラツな雇主。相手が十四才の少女だけに、よけいに哀れである。捕えた少女を、この雇主夫婦がそのままにしておく筈はない。むごたらしい折檻がはじまるだろう。縛り、なぐり、蹴るだろう。泣いて詫びる少女——。この事件に憤激をおぼえながらも、私のイメージは、つきつきにひろがる。

△藤木仙治・提供▽

でも許されたら!

次の瞬間、女官長が、イベットに使った責具をとりあげるのを見ました。私は観念して目を閉じました。

ああ思い出しても苦しい。それから何十分間か、私の身体が人間らしい感覚をとり戻す迄の長い長い、忍耐の時間——。

これが始めての経験だったので。これ程の苦しい責めが、世に又とあるものでしょうか。私は自らのものに、この上なく穢れた。

穢れたというより、人間の持つ一番みじめなものにまみれたのです。女官長が、いかに悪魔的な人間であるか、私は嘔吐をもよおす程の嫌悪の中に実感しました。

人間に生まれて来なければよかった、と思いました。それ程に私は自分の身体を呪い後悔したのでした。

イベットはどうなったのか、もうそれは記憶にありません。けれど、彼女の受けた責苦は、私の比ではなかっただろうと思います。

こうして王宮に於ける私の生活は、世間の人達の想像もつかない懲罰と折檻の繰り返えしの中に、明け暮れてゆくのでした。

(未完)



(十五) 奇譚の世界

「奇譚」の世界では概ね、映画とは違って、憎しみによる真の敵対紛争ではありません。将棋や、碁にしたところで、ゲームではあっても、憎悪ではないでしょう。乗ったり敷いたりするのが楽しみで、やっているのであって、そうでもなければ、やたらに態々そんなことをして見るわけはありません。

春木氏が16才の頃、偶然、見ることの出来た女学院寄宿舎に於ける組討ち光景も、実は

☆KKスクラップより☆

馬 化 白 書

(その三)

鞍

良 人

彼女等、生徒の楽しみであつたのです。二人の少女が畳の上で、上になり下になりしてキヤキヤア笑い乍ら組みあつてゐる。やがて一人が上になって、もう一人の背中に馬乗りになり跨がってしまった。そして両手で相手の首筋をぎゅうぎゅう抑えつけた。組敷かれた方は両足をばたばたさせてもがいていたが、はね返せない。馬乗りになった方は勝ち誇った様に悠々と跨がっている。(三十二年六月号五十八頁「見たり聞いたりためしたり④」)

結婚後五年間、絶えず夫、誠一郎を無体

組敷いて来た妙子にしても、それが楽しみなのです。

「ね、お前、男のくせに女のわたしに、こんなにされても口惜しくないの。なさけない男ね。一ぺん誰かにお前がわたしにこんなにされているところを見せてやりたい様な気にもなるわ。」と、妙子は組敷いた誠一郎の身体にどっしりと大きなそのお尻で跨がって、慥れみを乞う様な誠一郎の顔を見下し乍ら、その優越観を見せることもある。

(三十年五月号二七四頁日文卅古六「あわ

れ誠一郎」)

健康そのもののはち切れそうな体を派手な水着一つにつつんだ美貌の若妻春子が、今日も夫婦用特設リング上で、夫三郎の胸の上に堂々と馬乗りになって、その大きなお尻でぎゅうぎゅう抑えつけ、真白な美しい脚で、赫い顔をしてはね返そうとふんばる三郎をグッとおさえつけて降参させている。(三十三年七月号百六十頁「マゾヒズム第一景」)。これ等も、全くのゲームであって、彼女にとつてはこよなくも楽しき美容法でさえあるのです。さればこそ、この共稼ぎ夫婦はいつも若々しく、倦怠期が訪れることもありません。

若き葉村先生の下宿を、朝早く訪れた女子学生、鮎沢エミは、こっそり部屋にしのび込んで「せ、ん、せ、え!」といったまま、まだ仰向けになって就寝中の葉村の布団の上に大きく馬乗りにとびかかってしまう。

「あっ」驚いて飛び起きようとする葉村の頸を、エミは馬乗りになったまま両手で締めつけた。

「あ、あゆさわ君じやないか」(三十一年六月号百二頁「マゾ・スクラップ帳より」)

ここにも何等の敵意も憎しみもあろう筈が

ありません。

金持紳士の上に堂々と馬乗りに跨がってしまふチャッカリ娘の話(同上百一頁)にしても、それは彼女がお金を引き出す狙いから男をトリコにする手段として用いた一つの手管でありました。

腰巻ドロを馬乗りになって捕えた芸者の話(三十年三月号百七十六頁「ローカルレポート」)お転婆娘、明子が、夜あそびの帰りに出会った痴漢を、寒風吹きまくる夜半の街頭に一時間以上も捻じ伏せていた話(三十二年六月号五十八頁)も、追いはぎ青年を態々捻じ伏せてこらしめた石原しげ子(三十二年四月号三十二頁)や、バアで酔っ払った馬場氏を不良から救う為に、その場に突き倒して組敷いた上、撲りに撲った現代巴御前の場合(三十三年八月号百十四頁)も、水泳中に自分の下をもぐり抜けたからといって、その男の上に馬乗りになった海女達の場合(三十三年九月号百五頁)も、外の人なら恐らくはそんな手段に訴えなかったかも知れない際にかかわらず、好みであつたればこそ、あえて敢行したのだと見られます。

(十六) ナオミ群像

人を馬にして這わせるに至っては、たとえそれが多少の刑罰の目的があつたにしても、欲せざるところを止むを得ずやるという場合があるでしょうか。彼女は快を追ひ、楽を求めるが故にこそ「馬になれ!」と命ずるのではありませんか。自らの享楽こそが、馬乗り姫の意図するところでしょう。先に絵に就いて述べました。かづ子の松崎乗り、ダイアナ夫人達の室内乗馬、花奴の狸狂乗り(一三十年十一月号六十四頁にこれと類似したのがある)慶子の工藤乗り等の外、まだ幾例かが本誌に出ますから、女騎手と馬の表を示しましょう。

馬のり姫	馬	年月頁
女獅子使い(二十五、六才)	此村大膳(五十男)	
赤と黄のだんだら染めのピッタリ身についたメリヤス風のシャツとズボンだけ、外に鞭、手綱の紐	裸。恰幅よく頑丈な体つき。不良代議士。	30 3 286

弥生子 (十六才以上)	木田一郎 (十六才以上)	30	4	221
寝巻姿。細紐が手綱				
利子	信一			
最初の時は、赤い扱帯が手綱。後の時は、シュミーズ一枚の姿	後の時は猿ぐつわをしている。	30	10	29, 32
キン子 (肉体女優)	東屋青助 (万才師)	31	6	102
めぐみ (六才)	明男 (六才)	31	10	135
手綱の紐	兄 (八才)			
めぐみ (十一才)	勇一 (十三才位)	32	1	131
K子 (七才位)	節夫 (九才位)	32	6	42
K子 (十九才位)	節夫 (二十一才位)	32	7	158
K子 (二十、一才)	節夫 (二十二、三才位)	32	11	79
細帯の手綱				
キヌ (十七才)	節夫 (十五才)	32	6	45
着物				
従姉 (二十五才位)	節夫 (二十二、三才)	32	11	81
	椅子に手をつく			

組打ちに勝った少女 (十五才位)	負けた少女 (十五才位)	32	6	58
緑川百合子	可奈子	32	8	160
洋服。	裸体。車輪パイプを使用			
貴代子 (四十二、三才)	佐竹良隆 (六十年輩)	32	11	70
五尺三寸、十三貫五百、凝った乗馬の服装	五尺五寸、十六貫、泡ゴムのマツトを背につける補助三輪車を握る			
貴代子 (四十二、三才)				
細いゴム管にヒゴ竹を通した鞭手綱。	苫谷ユキ (二十才)	32	12	76
慶子 (二十一才位)	殆ど裸			
身長1.62m、バスト89cm 体重55kg				
金持の少女 (アメリカ)	男奴隷	32	11	81
裸に長靴拍車のいでたち				

美人女学生	子分格の不良少年及び 新に降参させられた中学生	32	11	83
光枝 (二十一、二才)	杉本真二 (「ちよっと兄さん」と呼ばれる位の年令)	33	1	131
大柄				
マダム (三十二、三才)				
かなり太っている				
佐代美 (二十八才)	従弟 (十四才)	33	7	115
十四貫。赤いネルの腰巻姿。手綱	赤色の下帯だけ掌と膝に布製くつを履き、さらしの鎧をつける			
春子 (二十七才)	三郎 (三十一才)	33	7	160
勝利による女王様として	敗北による奴隷として			
佐代美の従弟乗りは毎日行われるそうで、此の頃では三十分位は耐えられますが「馬が疲れて倒れると蒲団を細長く畳んでその上に腹這いにならせ、私は跨がったまま休ませます。」とありますから、休憩後は又、歩かされ				

るのでしよう。

女獅子使いの此村（ジャンゴ）乗りは、先の「ジャンゴ潰し」の項でも出ました様に、有名な乱歩の「影男」——断末魔の牡獅子——の件です。

凡ての曲線をあらわにした彼女のからだは、ギリシア彫刻のように均整がとれていた。脚は長くて、お尻は見事にふくらんでいて、腹は蜂のようにくびれ、もり上った胸が烈しい身動きをするたびに、ゼリーの様に震えた。その胸の上に、恰好のよい長い頸と、プロテア（女賊映画の主人公の名）の顔がついていた。……

「よろしい。……こんどはお馬だ！」そして鞭が宙にはためく。

獅子男は四つん這いになった。……

空中曲芸師のようにしなやかで敏捷なんだら染めの美しいからだ、ヒラリと牡獅子ジャンゴの背中にまたがった。どこから取り出したのか手綱代りの同じだんだら染めの紐が、男の口にくわえさせられ、その両端を持って、ハイシドウドウと、お馬の曲乗りがはじまった。（以上原典による）
こうして男はヘトヘトに乗り潰されてしま

います。

K子の節夫乗りは、三つありますが、第二番目は恐らく東京でしょう。そして、節夫がK子の家を訪ねた折のこと、

……毎日お馬にしたわね。どうしてそんなこと覚えてるの。私すっかり忘れてた。今だったらどうかしら。私は伏眼勝ちで、おすおすしながら聞いて見た。節ちゃんがお馬になるっていうの。へえ、私重いのよ。大丈夫？……四つん這いになった私の後に廻るとK子はためらいもなく背中に跨がった。その後の経験からいえる事だが、女は一遍男を馬にしてしまうと相当大胆に振舞うものである。そして必ず片手で馬の尻を叩き、ハイシハイシさあ歩け、という独言をいう。之も先天的な一つの本能的なだろうか。（キタ・セクシユアリス）

第三番目は夢科高原の宿屋の一室。八月も末近い頃。

風呂に入って薄化粧をした彼女が私の部屋を訪れたのは夕方近くであった。昼間、本ものの馬を心ゆく迄乗りまわしたこと。高原の宿に一人できていること等が彼女を一

層大胆に振舞わせた。

「さあお馬になれ。よし、乗るぞ。ハイシハイシしっかり歩け、ヤセ馬め。つぶれたら承知しないぞ」

実際の馬に乗っている積りか、いつもより脚の締めかたもきつく、細帯の手綱の引き方も強かった。六畳の部屋を十二、三回這い廻らされると、私はすっかりバテてしまった。

「どうした？ヨタ馬。もうつぶれちゃったの。……」（同上）

その先は、ジャンゴ潰しの項で引用しました。

従姉の節夫乗りは、主として、跪座でしめる。ことの指導を垂れ給うところですから、節夫はただ椅子に手をつないでじっとしていたのでしよう。

彼女ははじめ椅子に馬乗りになって、自分の脚を指し示してこの部分でどうこうといていたが、やがてもどかしくなったか「節夫さん。一寸ここへ四這いになってみてよ。」

私は椅子に手をついて馬にさせられた。「一寸ごめんなさい。背中に跨がらして

ね」

跨がる前にも私の顔の横で手綱のさばき方、タテガミのにぎり方、あぶみのかけ方を教え、そしてひらりと私の背中に跨がると、実際に跪座でしめつける動作を何回もくり返した。

「どう判った。乗ってみると馬って可愛いものよ」(同上)

貴代子と慶子の苦谷ユキ乗りは、二日おきにあります。この女奴隷(一女中とは書いてありません)が太り過ぎているということをお願い口実にして、二人がかりで責めるのです。半裸にされた馬を、細いゴム管にヒゴ竹を通したムチで鞭打しながら、一時間余りも責め続けますから、口に噛ませたさらしの手綱は、つばきとよだれでビショ濡れとなり、背中は摩擦で赤くなり、尻から脚にかけては何条かの鞭跡が後を断たないのです。いちいち構ってはいはれませんが減殺されるので楽しめるだけ楽しんで潰れる寸前にやめます。乗り潰してしまわないのは、お慈悲からかと思いましたが、乗馬のあとのからだの手入れをさせる為だそうです。(三十二年十二月号七十六頁ダイアナ夫人未亡人期②)

馬場喬次氏は折角、赤線女に乗ってもらったのでしたが、女が遠慮してしまった(註20)

らしくて十分もたないうちにあっけなく終ってしまったそうです。遠慮したということは、背中に乗って愉快だったのでしょうか。お客さんを犠牲にしてこんな面白い愉悅を楽しんだのでは、悪い、申し訳けないということなのでしょう。彼女をして「平気」たらしめる事に馬場氏は成功しなかったわけでしょう。はじめは「変態なんて大嫌さ」というっていた娼婦を遂にためらいなからしむるのに成功したのが光枝とマダムの真三乗りです。

「マダム、マダム、お馬に乗ってお迎えに来たわ」

光枝がマダムを呼びました。

「ね、マダム、面白いでしょ。人間と犬じやなくて、今度は人と馬よ。ホ、ホ、さ、お乗りなさいな。お部屋まで御案内申し上げます。」

「まあ、でも、私まで乗ったりしちや、悪いじゃないの。私、あんた達から比べたらちよいと重たいのよ」

「平気よ、さ交代！」

光枝は私の背から降りました。急に背中が

すうとした気持です。

「さあ、早く、遠慮なんかいらないのよ」

光枝は急がせます。

「だって……悪いわね、お客さんにさ。ホ、ホ、ホ、」

マダムは笑いながら、私の傍へ寄って来ました。

「じゃ乗るわよ、ヨイショ」

マダムは掛声をかけて、私の背にどっかりと跨がりました。(三十三年一日号百三十一頁杉本真三「犬の生態」)

「お前のいう通りにしたもんだからつかれちゃったわ」といいながらも、乗ることが面白くないことはないと言います。面白いからこそ、そんなことしたんじや……悪いわね、お客さんにさ、という遠慮もある訳ではないのでしょうか。ところが光枝は既に「平気よ」遠慮なんかいらぬのよ、いくら楽しんだって、そのため馬がどんな重い目に遭ったって、うんと面白いことしなきゃ損だ！という心境にまで達したのでしよう。

(十七) 叶えられない

女性の希い

跨がることは、征服の象徴ではな

いかと山本節夫氏は述べています。(三十二年六月号四十頁) 組み敷いた場合にしろ、四つ這の上にしる、確かに背中が跨がっている女性が、その優越の感情に胸をときめかせている事は想像に難くありません。

自転車に乗ってさえ、女性はその誘惑に参りかねないといえます。(三十二年六月号百六十二頁) 女性の体は、そんな構造に出来ているのだといえます。ものに乗った女性は、女性でなくては味わえぬ独得の征服感のようなものを、それ自身伴う様になっているらしいのです。(註21) こうして一たび刺戟された特有の気持が募りゆくにつれて、もはや彼女の気分は優越感と制御慾のとりことなってしまう。敷いているものへの気兼ねといった感じは圧倒され、麻痺させられてしまうでしょう。潰れようと、こわれようとそんなことを心配する余裕は残っているでしょう。暴虐の鬼共が今や彼女の体内で跳梁を擡にしています。鬼共は彼女を慾望(征服・制御・支配)の充足のために、ひたすら駆り立てるのです。かかる満足を存分に味わう行為は、確かに「あられない」業かも知れません。人前をはばかり所作かも知れませんが、女性

は、多くの場合、自らを制してその満足を放棄してはいませんか。そういった悪魔の悦びに強い憧れを持ちながらも、実際には味う機会がないのでしよう。男を馬扱いにして乗り廻す女性は、アブの部類に入れられるであろうとも山本氏は述べています。(三十二年六月号四十一頁) 確かに我々はそういう女性の姿を見ることは皆無に近いのです。勿論、我々は女性が手洗で用を達する姿を見ることは稀かも知れませんが、用を達しないと信じる者はありません。ところが、同様にして女性が我々の目の触れないところでは男乗りを楽しんでいると信ずべきでしょうか。少くとも僕は信ずることは出来ません。彼女達は男を馬としたり、組敷いたりして悪魔の愉悦にひたる事はしていないに相違ありません。映画にしても、わずかにディートリッヒの例と「十戒」の例(註2)とを見るに過ぎないではありませんか。然らば女性は「征服」を悦びませんか。女性は乗り敷く快感に憧れませんか。女性本然のその悦びに憧れを持たないのが、ノーマルでしょうか。女性が、「ディートリッヒ」を「十戒」を真似して見ないことと、その憧れを持っていない

こととは、同じではないと僕は思います。松原三千代は書いています。

……自分のふんどし姿を一人でも多くの人に、特に男の人たちに見てもらいたくて仕方がないのです。今までにも、思いがけない拍子に見られてしまったり、時にはそれとなく目につくように気を使って来ましたが。ふんどしは必ず毎日とりかえて、何時でも見られる用意だけはしているのです。私はこんな場面を想像してみることがあります。

私は三角ふんどしを着用して男の人の首か顔の上に馬乗りになって、ぐーっと押えつけてみたら、どんな気持だろうと考えて見るわけです。そうすれば男の人の目の前に私のふんどし姿を見せられることになるのです云々……(三十二年六月号百一頁「ふんどし幻想」)

三隅千恵子(23才純情なサラリーガール)は長瀬昭子への通信の中で書いています。

……そんな意地の悪いネチネチした争いをするよりも一そのこと、腕力と腕力でつかみ合ったら余程せいせいするでしょうけれど、それが出来ないのは恥しい、あられ

ないと思うからでしょう。それを貴女はすっかりかなぐり捨てて同じ女性を捻じ伏せ力ずくで組敷いておしまいになったのですから、私は貴女に心から拍手を送りたい気持ちで一ぱいですわ。女は誰でも同性に負かされる程つらいことはありません。まして同性に力ずくで捻じ倒され馬乗りに組敷かれ、いくらじたばたしても起き上れない場合の悲痛な気持はどんなでしょう。でも逆に馬乗りに跨がった側から見ますと丁度反対になります。負かした同性を苦しめれば苦しめる程、優越感、勝利感に満足出来るわけですから。相手の顔を押えつけること程効果百%の方法は他に見あたりません。こんなことを考えていますと同性をお尻の下じきになさる貴女がうらやましくてなりません。出来ることなら私も貴女の真似がして見たい気持で一ぱいです。(三十三年二月号百六十五頁読通)

そして長瀬昭子当人は書いています。

……私の理想は伊東絹子さんの様な美人中の美人と取組み合いの末、相手を馬乗りに組敷いて息の根がとまるまで残酷な責めを続けることなのです。例えば相手の目も

さめる程美しい顔を押えつけてしまったら何んなに素晴らしいでしょう。突きのけられでも押しつけられても、此の責めを何度でもくりかえし、遂には断末魔のうめき声をもらし乍らのびてしまふ光景を、私は秘かに空想して居ります。(三十年三月号三百四頁読通)

長瀬昭子も、三木恵子も、そういう、ジャング潰し、の夢を実現するまでは、「いざという時になりますと、いくら何でも」と「あまりひど過ぎる様な気がして」「気おくれがして」「未だに」「出来兼ね」でいたのです。

桑山洋子も「髪振り乱して顔を真赤に紅潮させて、しなやかな手脚をばたつかせながら跳ね起きようと必死に抵抗する女を、そうはさせじとむちりした脚をぐっとふんばって馬乗りに跨がった女が、満身の力をこめてぐいぐい押え込み乍ら喉を絞め上げる光景等、想像しただけでもたまりません。」(三十一年九月号百六十九頁読通)と書いているところから察すれば、その強い希いを持っているのでしよう。そしてわずかに絵を描いたり写真を撮したりして叶えられぬ慾望を紛らしてい

るのでしよう。

三木恵子は、更に「私は女ばかりでなく」「勿論、男の方なら尚よいのですが」「私より腕力の劣った男の方でなくてはいいやですから此れは無理でしょうね。」(三十一年九月号及び十月号読通)と、叶えられそうもない希いを述べています。

戸破貞子もやはり「男の方を捻じ伏せることが出来たらどんなに素晴らしいだろうなんて考えているのよ。誰か私の相手をして下さる男性の方ないか知ら。」と述べています。(三十年三月号三百三頁読通)。

こう云う女性の希いを、時子(註22)は、肉独楽で叶えました。肉独楽には何の気兼ねもいらなかったのです。『気兼ね!』女性をして行動に踏み切らしめるのを妨げている絆。先立つ、恥しさ、いくら何でもあまりひどすぎる様な気、気おくれ、ためらい、その様な障碍(註23)を克服し得た時、その様な障碍が無くなった時、女性は、平気で、遠慮なく、こよなき愉悦の旨密を吸い得るのです。

(十八) 伝統の影に

云って見れば、あられもない、かも知れないこの秘密の快楽を、悪魔の悦びを白昼公然と！みじんも臆するところなく！！衆目の面前で！！これ見よがしに演じて、はばからない女性。そう云う女性達の姿を我々はこの目で現実に見出すことが出来ます。彼女等は、本物の馬を用いているからです。もし、馬でないならば、かち得、なければならぬ平然さを、かち得るまでもなく初めから至極当然の事として、あの大きな生き物の背中に悠然と跨がり、その胴を脚でしめつけ、尻を鞭うち、拍車で蹴上げ、自己の意志の下に服従させると云うあの行動、を擅にしています。

もしも、騎馬と云う伝統が人類になかったとしたならば、彼女等と云えども恐らく今日あのように明からさまには、馬上の快楽をむさぼることはしないでしょう。

別段、何も、特に快楽が目的であったのではないところの騎馬なる伝統が、たまたま古来、人類にあったればこそ、今日我々の身近に馬が居るのです。それをよいことにして、その伝統のかげに隠れて彼女等は、己が満足の道具に馬を用いて恥じないのです。

この満足を、月の女神ダイアナは自ら語っ

てあますところがありません。いや、語らんとすれば、実感は、神すらすべてを尽し得ぬもどかしさに苦しむ（註24）ことでしょう。しかもなお、騎乗した女性なら、その快感を語らないでは居られないのでありましよう。

私は数年来、乗馬に熱中している二十九才の女性です。……お友達の話を経合しますと、乗馬愛好の女性は乗馬服と特に長靴に対する強い愛着、鞭と拍車の使用による優越感と支配感に満足を覚えます。それから長靴をはいて逞しい馬に跨がって男性を見下す気分はとていいものです。（大阪Y・S子）（三十年五月号三百十三頁続通）

その優越感によって既に恍惚と錯乱したS・Y子の精神の中では、馬鹿面をして見とれている男ども（註25）の顔も体も尽く彼女の足下に捻じ込まれてしまっているのでしょう。

「殊に若い美しい女性が乗馬姿もりりしく、颯爽と駿馬に跨がった姿を想像しますと思わず溜息をついてしまう程です」と馬場喬次氏は書きました（三十一年四月号五十二頁）あえぐ動物を思い切り責め嘖んでいる女性の乗

細姿こそ、正に征服を楽しむ女性の姿の極致でしょう。麻生保氏は、「僕にとって、鞭を鳴らし乍ら障礙とびをしている女性程、美しく崇高なものはこの世の中にあり得ない。（註26）のです」とも云っています（三十三年三月号百七十一頁）。沼氏は、アサヒグラフの表紙を飾った二人の女性騎手の写真を見て「……令嬢の乗馬服、長靴、拍車、鞭の颯爽とした姿に思わずその踏み開いた両脚の間に四つ這になつてはいりたい衝動を感じた」と書いています（三十年十一月号六十七頁）。

*That's a Fair thought to lie between
maid's legs.* —Hamlet III. ii. 125

暴虐のあらし吹きすさび、痺れんばかりの征服感に息も咽んで、今や優越の絶頂にはずむ彼女の喜悦を、自ら背中に感じたいと願うのは、ひとり譲治や沼氏に限る筈はないでしょう。背中ばかりではない、顔面にもそれを感じたくさなりました。もしも本当に感じ得たりとせば、その瞬間に圧死するとも悔はないのです。男児の本懐それに過ぎることがあります。艶然と笑みを浮べたプロテアの下に窒息し、悶絶するジャンゴは果して哀れであったでしょうか。

望む

について

郎

【註】

註20 私もマゾの空想の時、一番に人間馬にされてサド婦人に鞭打されて走り廻る光景を想像します。或る時、親しき女性に頼んだところ、好奇心もあったのか引受けてくれましたが、サジスチンでないので気分が合わず、それが因で疎遠になってしまいました。(三十二年十二月号百七十四頁飯島洋一読通)

註21 馬場なんかで長靴姿の娘達が柵に跨がっている光景が見られます。

註22 江戸川乱歩作「芋虫」の主人公

註23 山中湖畔にいたアマゾンが、馬子の肩に跨がる様な素振りをしかけたが、まわりの人の視線を感じてさすがに実行はしなかった。(三十二年十一月号八十頁山本

「イタ・セクシユアリス」)

註24 軟い馬腹に蹴込んだ時の心地よさは表現に苦しみます。(三十三年五月五百六十二頁「障碍への道」)と云う様なところが、例えばあります。

註25 大てい女性が乗馬していれば、気の抜けたような顔をして幾人かの男性がみているものです。(三十三年五月号六十三頁「障碍への道」)

「……中には十四、五才のお河童姿の少女もいた。無造作に跨がって手綱を引きしめる姿が何ともいえず、小学生の私は去りやらず眺め飽かしたものである。殊に脚がびったり馬腹をはさんでしめつけている所が目にとびりついた。」(三十二年七月号百

十六頁「イタ・セクシユアリス」)尚、最近出た尾崎宏次「日本のサーカス」(三芽書房)は参考となろう。

註26 「……一人になった時など大きい姿見の前で、細いブラジャーに短いパンティだけに、座ぶとんを二つ折にしたのを二枚重ねて、其の上に馬乗りになり、鏡にうつる自分の姿を、あかず眺めたりしました。そしてこれが座ぶとんでなくて純情可憐な女性だったら、どんなに素敵だろうと空想し乍ら、首を絞める真似をしたり、腕を捻じるポーズをしたりして一人楽しんでものです。その時、私は勿論、うぬぼれですけれど、一番美しいと思いました。(三十一年九月号百七十四頁三木恵子読通)

性に関する諸問題が云々されて久しくなるが、今日程、この問題が極度にクローズアップされたり、逆にマヒ状態に陥入ったりする現象を私は知らない。世はものすごいスピード時代化され、刹那的でもある。若き世代が強度のシゲキを求めるのも、常に原水爆の恐怖に無形の威圧を受け、それが瞬間主義化として現れているのではなからうか。結局は我が国の場合、戦争に敗れたことに起因するの

ではないかとも思うが、とにかくもっと開放的な、この種諸問題の根本的性知識を普及する必要があるのではないだろうか。生物である以上、無関心で過し得る事柄ではない筈である。しかし、まだまだ一がいに罪惡視する傾向の強い人の多い我が国では所詮無理かも知れないが、押えつけるから撥ね返り、罪惡視するからかえって変なものになるのではなからうか。

—— 編集部に

K誌の在り方

東

一

のが存在しているから云い得ることであって、なかったらそんなことは云えないのだ。否、云えないどころか、どこにハ、ケ、ロを求めたらよいのか判らなくなる。従って「K誌」が続刊していることだけでも、自分には慰めになるのではないか……と。

とは云っても、何かにつけて文句の一つもつけてみたくなるのが人情だ。そこで、「K誌」の今後のあり方に、私としての忌憚のない意見を出してみたいと思う。

ところで、本題の「K誌のあり方」であるが、実は私は最近の本誌の不調を歎いていた一人であった。四月号読通の東京、Aワン生氏と同意見で、ともかく、内容も挿絵も復刊当時のものと比較してすら、落ちる、と思っていたのである。表紙も余りにもお粗末な傾向だし事実一時のものと較べれば劣っていることは一目瞭然であろう。

しかし、私は考えてみた。そうはいったところで、兎にも角にも「K誌」というものが存在しているから云い得ることであって、なかったらそんなことは云えないのだ。否、云えないどころか、どこにハ、ケ、ロを求めたらよいのか判らなくなる。従って「K誌」が続刊していることだけでも、自分には慰めになるのではないか……と。

とは云っても、何かにつけて文句の一つもつけてみたくなるのが人情だ。そこで、「K誌」の今後のあり方に、私としての忌憚のない意見を出してみたいと思う。

本誌はアブマニアの専門誌であるから無理もないと思うが、とにかく本誌の難点は、毎号毎号同じような内容ばかりであるから読者が飽いてくるのであって、この際、徹底的に新人画家連を発掘して挿絵画法の変更を図り、内容読物も常に新風を追って変えて行くべきだと思う。しかしなんといっても、一番印象に残るのは挿絵であり、以前からの挿絵家連中のものはかりでは、又同じかと嘆きたくもなる。パラエティに富む為には色々の挿絵をふんだんに使用する必要があるだろうと思う。かといって、同じ変化を求めるにしても、六月号藤木氏の「悪魔の逆襲」のそれのようなのは、私は余り歓迎致し兼ねるので

ある。

真面目なこの種アブ雑誌が、休むことなく続刊されていることは驚異といって良からうと思う。一刻も早く昔日の如く店頭販売されることを願うものであるが、定価の高いということも最大の難点だと思う。

加えて表紙は毎号、新鮮味溢れるものを願いたい。表紙は雑誌の顔である。その良否で読者の受ける感じは大いに違ってくるものと思う。

内容についても、編集後記の復活、読者通信の拡大、等を希望したい。それに限定版特別号も、旧号同様本誌上に紹介して欲しいものだ。何か復刊当時と比較して、投げやりの感じが強く思われるのは、私のヒガ目なら幸いである。

その他にも細かい点で、望みたいことは山程もあるが、要は、「K誌」は常に読者と共に歩んでもらいたいということである。販売方法改善も、早急でなくとも、亀の子のヨチヨチ歩きでも結構だから、力強く一歩一歩着実に前進してもらうことを切に希うものである。

○八月号（復刊第三十一号）

俊平戯画二題……………南村俊平面

告白血潮の疼き……………馬場 好夫
菅 良太

三吉と女奇術師……………藤見
緊縛映画速報とその雑感……………藤木
仙治

○臨時増刊号 復刊第三十九号
悦庵小説と緊縛写真特集号
【定価三百円】

○三月号 (復刊第四十号)
【定価二百円】

口絵
縛り絵 お茶室
特写真 豆しほりと黒の下着
戯画傑作集
泣き笑い。そのボスターのよう
孝傑作集「ミンミン蟬」
豪士の娘の火焙り
縛り映画 五八年の回顧
随想 猿轡難考
懸賞入選「奈緒美」
告白 私のノロケ
創作 生体機断
告白 病に臥しつづ
私の切抜から
創作 異説大江山
幻想小説一家番人ヤブー
映画一花太郎呪文「穴」
愛好者の記録
今月の縛られ女優達
私のイメージ「悶える女」
乗馬ズボンシリース落穂集
マソヒズム百景
告白 赤い着物と白い縄
手記 女性のお腹に関して
現代マソヒズム芸術時評
体験記 逃亡密用工
創作 旅情
想い出の男優達
スクラップ・レボ
ある夢想家の手帖から
サツボーター随想
暗い部屋
手帖雑報欄
創作 スリルの報酬

滝れい子画
愛川悦子画
南川俊平画
四馬孝画
浜毅画
南方佳男画
磯野紀世画
田井礼画
植村奏画
柴崎黎子画
須藤律史画
三條卓三画
沼高正志画
とやま
大河原珠樹
近藤秀緒
藤山好男
馬場良美
桜井良栄
影浦忠正
原金二郎
真金鍛二
藤川力行
菅良太郎
菅木不雄
沼口幸一
山口佳男
沼正三
久留木栄

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

入選 乳房に火をつけるな 藤木 仙治
通信 特選後感 近藤 一
読者通信

○四月号 (復刊第四十一号)

【定価二百円】

口絵 責め絵 逆吊りの女 滝れい子画
緊縛ブレイの或る断面 春日・愛川
映画に於ける緊縛シーン 提供 増田
東映一さけぶ雷鳥 若水美子
戯画傑作集 南村俊平画
「新入荷番Y第31号」 孝画
文学に現れた女の腹裂き 多山 一
創作 オタリスク 近藤 浩
スクリーン 男性美 原 俊
創作 種殺人事件 橋村 幸
女奴隷の悲しみ 橋村 幸
乗馬スポンシリズ落穂集 橋村 幸
映画スナツプ「血文字船」 牧 山
マゾヒズム百景 馬場 好
幻想小説「家畜人ヤブー」 沼 三
正月映画「女優初縛り」 大 河
時代映画「忘れ得ぬ人々」 須 藤
現代映画「モラエス邸の夜会」 江 口
入選者「ナナ」の人々(七) 南 一
乗馬スポンシリズ落穂集 東 一
映画スナツプ「剣姫千人城」 沼 三
懸賞入選「悪徳教師考」 大 河
今月の縛られた女優達 大 河
魔教団NO8(その十三) 土 路
ある夢家の手帖から 沼 三
手帖雑報欄 沼 三
柳幸子の告白「飼育」 久留木 栄
読者通信

○臨時増刊 (復刊第四十二号)

SADO特集号・第二集

○五月号 (復刊第四十三号)

【定価三百五十円】

口絵 MERRY GO ROUND 滝れい子画
TOILET ROOM 絹川 文代
SIBARI PRELUDE 大塚 啓子
映画に於ける緊縛シーン 提供 田辺
東映映画「魔天楼の秘密」
大映映画「冥土の顔役」
東映映画「鉄塔の怪人」
孝傑作集美貌汚辱 南村俊平画
戯画一揆責め 久留木 栄
アイディアコンテスト 藤木 仙治
アブ・レボ新聞切抜帖 藤木 仙治
乳房に火をつけるな・第二回 藤木 仙治
「地獄の誘惑」 飛 鳥
通信 四馬・土路両氏へ 飛 鳥
乗馬スポンシリズ落穂集 飛 鳥
現代映画「総人歯の女」 原 俊
創作 総人歯の女 アラベスク 志 田
緊縛フォトアラベスク 志 田
愛好者の記録 志 田
創作 手錠と権 志 田
「沙樹と呼ばれる女」 志 田
日本調あふれる絵について 志 田
切腹研究夜話 志 田
小説「家畜人ヤブー」 須 藤
幻想小説「蛇性のマゾ女」 須 藤
創作 スナツプ「弁天小僧」 須 藤
映画スナツプ「弁天小僧」 須 藤
妊娠のヌード写真について 須 藤
ある夢家の手帖から 須 藤
マゾヒズム百景 須 藤
王宮の流湯室 須 藤
魔教団NO8(完結篇) 須 藤
告白 自分をハタカにする 須 藤
読者通信

○六月号 (復刊第四十四号)

【定価二百円】

口絵 結婚ブームに因んで滝れい子画
特写 椅子のある風景 愛川 悦子
映画に現れた緊縛シーン 提供 田辺
東映映画「黄金くも」
大映映画「空飛ぶ若武者」
四馬孝傑作集 四馬 孝画
「白蛇の通り道か？」
「嫌でも踊らせてやる！」
お仕置をめぐる一考察 近藤 浩
人形哀詩 お七の火あぶり 由 藤
懸賞入選 黄昏の牧神 香 椎
相模雑記(その二) 津 井
奇妙な事件 津 井
マゾヒズム百景 津 井
乗馬スポンシリズ落穂集 津 井
緊縛女優ベストテン 津 井
緊縛フォトアラベスク 津 井
私の見かた 津 井
アブ・レボ新聞切抜通信 津 井
幻想小説「家畜人ヤブー」 津 井
映画スナツプ「女肌地獄」 津 井
今月の縛られた女優達 津 井
創作 僧堂(前篇) 津 井
告白 自分をハタカにする 津 井
ある夢家の手帖から 津 井
「ナナ」の人々(八) 津 井
話の肩籠 津 井
サド特和装被縛美の所感 津 井
乳房に火をつけるな・第三回 津 井
「悪魔の逆襲」 津 井
第一回読者座談会 津 井
「女体緊縛美について」語る 津 井
読者通信

○臨時増刊 (復刊第四十五号)

悦・特第二集 【定価三百円】

○七月号 (復刊第四十六号)

【定価二百円】

口絵 傑作集 高層ビルの恐怖 四馬 孝画
特写 「雁字標目」 絹川 文代
「赤と白」 大塚 啓子
「ハイヒール」 絹川 文代
責絵 焼アイロン 北原純子画
映画に現れた緊縛シーン
大映映画「血文字船」
女性自身表紙紹介 沼 三
縛絵 新妻遊戯 滝れい子画
お仕置をめぐる一考察 近藤 浩
レボ 雑誌切抜帳 難 波
告白 自分をハタカにする 松 井
公開通信「土路草一氏へ」 千 草
創作 謎の緊縛フォト(一) 久留木 栄
映画 縛りシンの花盛り 嵯 峨
創作 僧堂(後篇) 須 藤
緊縛テレビ・スナツプ 須 藤
女性切腹と回想 須 藤
創作 湖岸の裸女 須 藤
話の肩籠 須 藤
愛好者の記録 須 藤
創作 満月の島 須 藤
ある夢家の手帖から 須 藤
映画スナツプ「剣姫千人城」 須 藤
婦人用下着愛好者の弁 須 藤
懸賞入選「市河家の人々」 須 藤
K・K五月号の感想 須 藤
告白 ある女のカルテ 須 藤
今月の縛られた女優達 須 藤
シナリオ「旗本退屈男」 須 藤
乳房に火をつけるな・第四回 須 藤
「恐怖の悪戯」 須 藤
馬化白書(KKスクラップ) 須 藤
読者通信



同封の告白「サドとマゾ」は十枚位にまとめてみました。誌上に発表されることを考えると、書けないで伏せたような部分も大分ありました。拙い作品ですが、此の程度の内容なら発表できるということでしたら宜敷お願いいたします。二年程前から「奇ク」を愛読してはいますが、妻も私も一緒に読みます。「夫婦生活」や「暮しの手帖」や「文芸春秋」も一緒に読みますから「奇ク」も生活の中に溶け込んでいるのです。私は職業柄女学生と接することも多いのですが、バレーやソフトボールの中

で、四月号の幹本完治氏のような体験をしたこともあります。しかし、公生活と私生活は区別されなくてはならないので、この辺が苦しい所です。今後は、これを機会に時々投稿させて頂きます。教える見と妻との間にあって、相互のサドに歓喜するマゾ教師など一寸しだテーマになりそうです。だんだん夏も近づいて暑くなります。御自愛下さい。(福岡 北上辰夫)

「悦特第二集」を拝見致しまして、又まずい文を書いて見ました。四馬氏の画集は実に良く実感が湧いて居りまして自分が女性を責めて居る様な気持ちになります。写真の方は絹川、愛川の両嬢に又新顔の平野、岩井の両嬢も加って今後が楽しみです。全員の姿態など一寸イカスと思います。「告白」の、凌辱の幻想と期待の古川裕子様の様な女性と一度会って話をしてみたいと思つて居ります。二十八年ではと残念でなりません。何度もうりかえしうりかえして読んで一人で空想して居ります。又「責苦」のスキの腹の大きくなった所の責は知らず知らずの中に体が熱くなりました。マゾの女性という人は実在するのでしょ

うか、一度でも会って御話がしたいというのが、只今の僕の願いです。最近僕が感激して読んだ一文を紹介しますと「事件の顔」(私は見た世界の冒険と女の秘境)のバリの巻というので、バリ郊外の一邸宅を根城した女性ばかりのプロレス結社である。趣味と実益を兼ねた興業も時にはモンマルトルのキャバレーでやるが、これは大体は趣味的なサド、マゾ、露出趣味の女子スポーツ選手などが利用する結社だ。プロレスとはいえず、いずれも氣にいらるまで死闘をつづける真剣勝負なのだから肋骨がポキンと折れる位は覚悟の上のことだ。正会員は女子に限り男性は賛助会員で結社の維持費を負担し、女子会員を精神的物質的に後援するパトロンである。

「正会員はエレガンスを守ること」「会員は肉体的美を自覚し魅力を発揮すること」「会員の勝負は真剣で決死的であること」「会員間の勝敗はレフリのドクターストップ以外にはKOまでつづけること」「会員の勝敗決定後の一切の交際には干渉せざることを」等々の規約が明確にしている。ボクシングなどと異なる点は体重の差の如何を問わぬ点で百キロの選手と六十キロの軽量が組合わされてもリングに登ることを拒否できないことになっている。選手の服装はトンパ式のパンツかキャツシニセックス・バタフライだけと限定してある。試合中にパンツ、バタフライが脱落しても、そのまま試合を継続すること、キヤッチのあらゆる手は当然許可されること。さてリングとはいえばマットも敷かぬ木製の床で一メートルの高さ。リングサイドも板敷のむき出しだから、まさに死闘の決戦場だ。そのリングサイド側の観客席は、これまたその正反対にフカフカした安楽椅子が真紅のぶ厚いタツビの上にアグラをかがいている。リングの照明は劇場用のスポットライト。天井から四面の壁は全部鏡張りになっていて、リング上の選手のあらゆる角度から鑑賞できる仕掛けとなつてい

◎写真特写引受◎

特別に交った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他に付いてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

る。レフリーは男性で特に希望の場合には賛助会員もリングに登れる。さて、私が招待された夜には丁度百二十キロの重量を誇る黒人の大女と六十キロの軽量のプラチナ染めの結髪のなよなよした白人の美女がチューセンの結果リングに呼び出された。こんな珍試合も拒否できないが、賛助会員席からはアンマリ惨酷だよとの非難の声も起きた。黒人の大女は色気の無い黒のスポートパンツ。その巨大な乳房は張りきってボールさながら、相手の白人の小女はストリッパのつけるバタフライ。銀の房がゆらめいて、淡紅色に染まっている真白な梨型の乳房が稍垂れ気味で乳首だけがビュッと上向いている。まるで大人と子供の試合だ。黒人女はあくどい紅唇に会心の笑を浮かべて小兵の相手を見下しているが、白人女の頬は試合開始前から紅潮して全身がブルブルと武者振いしている。ゴングの一打で試合開始、黒人は仁王立ちでギリギリと白人の小女に迫る。白人は捕まったら最後とリング一杯逃げ廻る。すでに彼女の息使いが乱れ小さな腹はベコンベコンと波打ちはじめ。肋骨が痛々しいほどよく見えている。

観客席の失笑を機会に大女はいきなり相手を抱えこんだ。と、忽ち小女の身体は手玉にとられ大女の肩にかつがれてしまった。両足をバタつかせていたが頭を下にズシンとリング目がけて叩きつけられる。ウーンと悲鳴を挙げた白人のバタフライに手がかかったかと思ふと、ボーンと観客席目がけて放りなげられる。あつげにとられた観客席からは、ビービーと口笛がやたらに吹かれる。と見ると、大女は相手の両脚をムンズをつかむと、クルクルとコマのように廻転しはじめた。弾みをつけてから、リングを越えてフロワーへ投げ出す。その勢いで白人の結髪はばらりと解けて、そのままウーンと悶絶してしまった。「ストッブ、ストッブ」観客席からの声に耳もかかず、大女はリングから弾ねとんで小女を抱えてリングに引きずり上げ、その頬を平手でビシャ、ビシャ張り出した。小女はこの強撃で完全にグロッキー。鼻からは真赤な血が噴き出す。女というよりクタクタのコンニャクそのままで仰向けにリングへのびてしまった。が、そんなこと位で止める相手ではない。再び白人の両脚を吊り上げてコマ廻しの曲芸、そして

頭へ差し上げるとリングの外へ投げ出した。とたん、半死半生の白人美女の身体が私の腰にぶち当たってきた。美女はもう全く自らの力では動けない位痛みつけられ、弱い両肩だけが喘ぐように苦しい息をついている。脂汗でべっとり濡れているヘソがベコンベコンと激しく波うっている。私は彼女を抱き起して、「ドクター・ストッ

新作『血紅使用切腹フオート』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 六枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 六枚一組 八百円

略号(によ2)

輝美切腹

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円
略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号(ほう)

「ブ」を叫んだ。そして隣席の紳士と二人で美女を仕度室へかつぎ込んだ。やがて息を吹きかえした彼女は、リングからの呼び声に起き上って自らの手でバタフライをつけてリングサイドへ戻った。彼女はポタポタと汗を落しながら大女に抱え上げられてリングへ登った。満場の拍手に苦しい微笑で応えて、再び仕度部屋へ戻っていつ

た。——これを読んで僕は非常に感銘をうけました。一度でいいから見たいものです。それからマゾの女性と文通を望みます。(岐阜 H・Y 関生)

○

走り書きにて失礼いたします。特集号、S 特一、二、悦特一、二と楽しく拝見、編集者の御努力並々ならぬものと深謝いたします。小生の緊縛フォトに対する夢を是非実現して頂きたいに期待しております。夢といえば小生の場合、女性のユニホーム、又第一装というものに大変魅力を感じおり

ます。裸体も結構であります。小生としては実現不可能のものを誌上に実現して頂いて喜びとしたいと考えておりますので、出来れば次回に型破りとして制服の縛り、又、第一装の衣服をつけた縛り等如何かと存じますので、夢の一端でも実現出来ます様期待致しております。例えば、次の様なものを作って頂けますれば幸甚と思えます。看護婦、セーラー服、巫女、スチユワーデス、デパートガール、イブニング、宝塚歌劇音楽学校生徒スタイル、花嫁姿(和洋共) ウェイトレス、カトリック

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号 しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号 しん2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号 しん3)

☆全裸縛り(略号 しん4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号 しん5)

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり(略号 しん6)

四枚一組 三〇〇円

◎女体切腹フォト◎

(略号こし)

「腰元自刃」

村井知可子嬢

大判判印画紙焼付
六枚一組 八百円

尼、尼、訪問着姿等、(大阪 K・K 生)

○

サド特集号第二集並に悦特第二集、厚かましいお願いにも拘らず早速お送り下さいまして有難うございました。ずっしりと手ごたえのある重量感、今まで抱いていました奇巧への信頼の念を更に増して参りました。息もつがせず一

○

(佐賀 S・T 生)

気に拝見。写真、絵、本文共々俗塵にまみれて活躍する私達に対して一ぶくの清涼剤としての効果を貴重な存在として受け入れられました。殊に他の夾雑物の混ってないのが、すっきりしていて、他の傾向の方々には大変お気の毒ですが、私達の縛りマニアにとってはこれ以上の贈り物はないと感謝感激でいっぱいです。今まで、S 特第一、第二、悦特第一、第二と集めました、このグラビア写真だけは切り抜いて大切に保存しておこうと思えます。何度眺めても、いつも新鮮な気持を抱かせられる変化のあるフォトは、何かしら温

私は復刊号になってから初めて貴誌の存在を知りましたので残念ながら以前の旧号は存じませんが六月号まで読んだ範囲では、今月号が一番充実していたように思いました。ずっと、毎月毎月欠かさず読んでいまして最初はじめて手にしたときのような強い感動が薄らいできたように思えていました。六月号で再び新しい感動が湧いてきました。特に座談会の記事は近來にない刺激で拝読しました。松井籟子さんの「自分をハダカにする」も第二回を迎えて、その誇張の少ない書きぶりが一層強い魅力を持って迫ってきます。外に

懸賞入選作品の中にも力強い作品が含まれていたことは嬉しく思いました。どうか今後とも今月号のようなダイナミックな編集ぶりを示して下さいよう御誌の定期的な読者としてお願い致します。

(広島 森 信)

○ 先般、上映された外国映画「アダムとイブ」では、アダムに薄い小さなパンティを穿かせながら、アングルで精一杯ゴマカしているのが目についた。筋書どうり、無花果の葉をつけたらば今度はその下に透明ビニール(といっても、カラーではグレイに映り、ウス汚い袋と相成った)製の薄衣をマツて、漸くアクション(主として屈伸)がスムーズとなった。スムーズ過ぎて、うす汚れたグレイの前袋の脇より、肉茶色が散見されてしまった。散見といえ、アダム誕生の全身描写の際、カメラ・ダウンが際どくストッパしたのはいいとして、腹部に頗る奇妙な遮蔽物が画面とスタイルを異にして

判然と現出したり、イチジクの紐がズリ下って、灰色袋の紐が映ったり(即ち、ヒモが二本並んで映った)する等、甚だ御愛嬌を振まき全然憎めない。可愛いメキシコ作品でした。これを真似て、日本国は小プロがヌードシネと盛んにタイアップしながら、製作したものがある。プロレスラーくずれの童顔、肥満体は、お世辞にもキレイとはいえなかつたけれど、木の葉の下に結えた真丸い純白の袋は、アチラ製のアダムに劣らず微笑ましく、クルクル寝転がったり、猿のように鬼ごっこをしたりしていた。古代希臘や、現代外国の一部では「一糸まとう」凛然たる英姿を誇りにしているものらしいが、我国では「帝国」を失ってからは、ガタリと名誉ある衣への単位を失ってしまった。戦後の榮養は有難いが、衣類は無条件に感謝致しかねる。色彩の豊富さは喜ばしいが、スタイルの一変は嘆かわしく、「一糸まとう」習慣の古老をして「政治が悪い」といわ

写真 碟

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

- | | | | |
|-----|-----------|------|-----------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | ES6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| ES2 | 三枚一組 二五〇円 | ES7 | 剥れたスロース |
| モデル | 全裸悦庵集 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| ES3 | 四枚一組 三〇〇円 | ES8 | 乙女のすべて |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| ES4 | 三枚一組 二五〇円 | ES9 | 女学生の縛り |
| モデル | 酒宴の弄者 | モデル | 須川 令子嬢 |
| ES5 | 二枚一組 二〇〇円 | ES10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 脱がされる娘 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| ES5 | 五枚一組 三五〇円 | | |

せしむる。これも政治のウチかどうかは知らないけれども、確かに職人気質というものも消えてしまった。かすかに面影を留めるは角刈ならぬシン太郎刈と、マンボズボンぐらゐのものであろう。政治が悪いといえ、大袈裟だし、それまでだが、戦後の精神教育が完璧な迄に消化されてしまっているのだから、どうする術もない。「流行は繰返えされる」そうだから、流行かどうか知らないが、海の彼方の多勢のカルダン先生に、美事なデザインでも頼むより方法はあるまい。もつとも現在の「稀少価値」にこそ特異性があるのか

も知れない。確かに、二十代でしかも東京に現存、実在しているのである。「一糸まとう」のスタイルが! 話が余談となるが美少年趣味濃厚と評された「惜春鳥」のセンチメンタルには困ったし、濃厚どころか津川と小坂が腹だけ出して語り合うなど、最も面白くないものである。それより「春鳥(里見淳の小説)」の方がぐつとイカス。「庄さん」なる若い庭造り師の気つぷと、言葉が全然イカス。これこそ「一糸まとうわぬ」である。(原俊行)

○ 六月号を拝見いたしました。今

回はラストページの入選作品である藤木仙治氏の「悪鬼の逆襲」がよく、ギャングたちと復讐の男。そして捕われて次々と辱しめを受ける三人の若き女性たち。氏のペンは、さすが面白く縛られた女を描き出して折り込んであり、正に活劇的連想するのに十分で、今後

の御活躍をお祈り申し上げます。次に辻村隆氏の「話の屑籠」で角田喜久雄氏に懇望して本誌に連載して貰えば愉しみが殖えるといっておられました。小生も大いに共鳴いたします。又、淹れい子氏の「花嫁御寮」は藤元が美しく頂けます。愛川悦子嬢の「椅子のあ

る風景」(二)は豊満な肉体で誌面を飾っており構成が非常に面白いと思ひました。ただ細のかけ方が少し氣にいらす、別々にかげずに、ぐるぐると巻きしめてほしかったと思つております。映画「女肌地獄」は小生も見ましたが、縛られた女を台の上に横にころがし

て蠟製人形にする場面は頂けました。ただ余り長い映写時間でなかったのが残念でした。最近、映画を余り見ていませんので他の作品は分りませんが新東宝のものが女の縛りを多く出している様です。最後に「座談会」は大変、興味深く拝読しました。小生も本意なが

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 種)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責	(萩千恵子)
R 11	股間しはり正面	(伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり	(須川令子)
R 13	尻立後手しはり	(萩千恵子)
R 14	開股しはり	(川辺紗登子)
R 15	猿ぐつわの魅力	(伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り	(須川令子)
R 17	立木野外しはり	(村田那美子)
R 18	緊縛横臥	(厚狭春江)
R 19	足湯椅子セメ	(伊吹真佐子)
R 20	いたぶり (春日ルミと伊吹)	(萩千恵子)
R 21	帆立しはり	(伊吹真佐子)
R 22	強烈な椅子セメ	(佐賀美智子)
R 23	梯子責め	(伊吹真佐子)
R 24	逆さ本吊りセメ	(伊吹真佐子)
R 25	後手吊りセメ	(同右)
R 26	股間しはり後手	(中塚文子)
R 27	逆さ本吊り	(伊吹真佐子)
R 28	高小手しはり	(加賀利江子)
R 29	変型足手しはり	(萩千恵子)
R 30	松樹後手しはり	(村田那美子)
R 31	くさりセメ	(伊吹真佐子)
R 32	薄羅の後手緊縛	(加賀利江子)

R 33	股間タテしはり	(中富綾子)
R 34	首縄股間しはり	(坂口利子)
R 35	手足逆吊り	(伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり	(藤田節子)
R 37	仰向全裸悦責	(川端多奈子)
R 38	後手首縄シメ	(加賀利江子)
R 39	乳房下しはり	(村田那美子)
R 40	肉体美への折檻	(伊吹真佐子)
R 41	お灸セメ (春日、伊吹二嬢)	(萩千恵子)
R 42	後手猿ぐつわ	(村田那美子)
R 43	松樹縛り晒責	(中塚文子)
R 44	コルセット縛り	(同右)
R 45	股間しはり	(萩千恵子)
R 46	手と足と緊縛	(加賀利江子)
R 47	後手しはり	(萩千恵子)
R 48	御開帳	(川端多奈子)
R 49	くさりセメ	(須川令子)
R 50	折檻の魅力	(愛川悦子)
R 51	全裸の股間しはり	(大塚啓子)
R 52	逆立の折檻	(花坂道子)
R 53	開股椅子セメ正面	(村井知可子)
R 54	振袖の緊縛	(愛川悦子)
R 55	腰元の吊り責	(田中芳代)
R 56	ヌードしはり	(愛川悦子)
R 57	本縄しはり	(萩千恵子)
R 58	股間しはり	(村田那美子)
R 59	落花狼藉の緊縛	(川辺紗登子)
R 60	樹間のハリツケ	(益田房子)
R 61	帆立舟のセメ	(同右)

R 62	逆さ本吊り	(愛川悦子)
R 63	変型全裸股間縛	(花坂道子)
R 64	ヌード縛り	(村田那美子)
R 65	全裸横臥緊縛	(萩千恵子)
R 66	ビクニツク	(須川令子)
R 67	ハイヒール	(同右)
R 68	湖畔の宿にて	(大塚啓子)
R 69	尻立逆しはり	(田中芳代)
R 70	下着の色模様	(愛川悦子)
R 71	目隠し開股縛り	(花坂道子)
R 72	後手高小手	(愛川悦子)
R 73	乳房しはり	(同右)
R 74	開股ベッド縛り	(愛川悦子)
R 75	全裸床柱縛り	(萩千恵子)
R 76	亀ノ甲縛り	(愛川悦子)
R 77	ヌード股間縛り	(大塚啓子)
R 78	全裸乱れ髪	(川辺紗登子)
R 79	ガンジガラメ	(愛川悦子)
R 80	臀部丸出し猿轡	(中塚文子)
R 81	破れたシユミーズ	(伊吹真佐子)
R 82	女学生しはり	(坂口利子)
R 83	仰向開股しはり	(萩千恵子)
R 84	乳房くさりセメ	(川辺紗登子)
R 85	野外バンド責め	(村田那美子)
R 86	トイレ正面排泄縛	(中塚文子)
R 87	開股正面しはり	(伊吹真佐子)
R 88	乳房搾りセメ	(佐賀美智子)

ら出席したいと思っていきましたが、選考に入らず残念でした。以上、六月号を見たまま読んだままペンをとりました。(名古屋 岩谷生)

○ 前略御免下さい。最近、K誌上に女性の切腹記事は毎号、藤山氏の一篇だけの淋しい状態ですが、実に心細い限りです。読者、寄稿家の中には、かなりの数の切腹マニヤがおられるようですが、どうしても寄稿されないのでしょうか。昨年でしたか切腹七部集という本が出る由の予告らしいものがありました。したが、どうなったのでしょうか。以前、切腹曼陀羅図絵でしたか素晴らしい記事がありました。最近、すっかり女性切腹記事の凋落が目につきます。又、挿画のことですが、藤山氏の文章の挿画を画いておられる方はどなたか存じませんが、今少し顔面に苦痛の表情をさせ、体の線にも苦痛にそりよじれるという趣をあらわして頂きたいと思えます。事実、切腹という絶大な苦痛を身に受けていながら、あの絵のようにしやんとした姿勢はとれぬと思いますが、如何でしょうか。以前、お知らせした女性切腹の他に夕刊フクニチ(若くは西日本新聞)紙上に次の

ような記事がありましたのでお知らせいたします。数年前、福岡地方に住む女性が黒人の兵士を愛人に持ちましたが、その兵隊が福岡で悪事を働き長崎に、その女性を連れて脱送しますが、しかしM・Pに逮捕され再び福岡に連行されました。その途中の汽車の中、黒人兵士の後を追って乗車した女が一言でよいから黒人兵士に言葉を交わさせてくれと頼んだが許されず遂に思いあまってM・Pの前で腹一文字に切つて自殺を図ったそうです。他に乗客もいる事ですので死に至ったかどうかは分かりません。彼女の健気な行為は当時、基地の評判になった由と記載してありました。(福岡 千原桐夫)

○ 貴社益々御清栄の御事と拝察お慶び申し上げます。私は、ふとした機会に本誌を知り私の目は「流腸」の文字に焼きつかれてしまいました。子供の頃から、しばしば流腸され、その恥しさは「責めに通ずる」との理論に同感であると同時に、私は「流腸」という言葉すら口に出せないのです。でも新聞で見るイチジク流腸の広告にさえ一人ひとりに胸をときめかせる私は、やはり一種のマニアなので

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶闇の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

しよるか。私は浣腸されるのは、ほんとに嫌ですし、浣腸をしてみたいとも思いません。しかし浣腸という文字を書き、それを想像するだけでも胸が躍るのです。最近の本誌には浣腸の記事が少くなりました。お便りも少いようですが、私のように浣腸という文字だけでも待ちのぞんでいる者のあることお忘れなく編集して下さい。

(菅 千代)

○ 便箋がない為此の様な紙にて失礼致します。小生は貴社発行の「奇ク」を何時も愛読する一人ですが、此の愛本の中に「鼻責」「乳房責」(サド特2)があるのが小生にとつてはたまらなく胸のうずく思いが致します。尚それにつけ加えて頂きたかつたのは耳責と申しますか、鼻を責めると同時に「耳を左右に何物かによつてひっぱって顔の自由を奪う」といった姿を見たいものです。又これは別の望みですが女装マニア(マニセンが)の小生ですが、小生は自分自身が女装するのではなく写真とか他の物で見るのが好きなんです。それで貴社に御願ひするので、男性から女性へ移り変わる

(お化粧をして)姿を一度だけ見たいと思ひますが貴社の御尽力で小生の望みをかなえてやって下さい。和装洋装両方共欲しいのですが、中々無理な注文と思ひますが何卒よろしく御願ひ致します。尚「奇ク」の中、もう二、三年前の愛読本の事ですが、女性ホルモンによつて男性の乳房もだんだん大きくなり全体的にも女性化して行く云々という文面を拝見致しましたが、此の様な一種変わったものを大いに奇クへ載せていただけたら結構ではないかと思ひます。

(久苗米 樟葉照男)

○ 皆さま御元気でですか、先頃は私のつたなき原稿を掲載していただき有難うございます。気候もよくなりますます折柄皆さま一層の御活躍を期待致します。ところで今回貴社より発刊されたSADO特集号第二集に掲載のグラビア写真について又潜越ながら私の感想をのべてさせていただきます。貴誌の写真は回を重ねるにつれてよくなつて行くように思ひます。お世辞ではなく殊に今回のはいままでに勝つてよく久方ぶりに堪納いたしました。が、一、二私のとくに気になつたことを申しあげてみたいと思ひま

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(みす)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第嚴重包装の上急送申し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

す。特別に参考になるようなことではなく単なるラク書き程度のもですが一応お目通し下されれば結構です。まずあの中で一番気に入つたのは最初の「仇姿黄八丈」です。今迄になかつたものであり、モデル及びポーズとも満足するに近いくところまで行っているように思ひました。この様な趣向でならば、もう少しモデルの肌を露出させたものもあつてよろしかつたと思ひます。このモデルの名

前は記されてありませんが、一体誰なのか、どうやら新しい人のようにも思ひます。既成のモデルの一人とすれば絹川文代嬢のようにも思ひますがサルクツワのためによく分らないが多分絹川嬢ではないのです。ただ私としても残念なのは、こんな時代劇映画のような題名をつけられた作品に、折角時代風の衣裳をつけながら日本髪をゆわなかつたことです。実際このような衣裳を着たら同時にかつ

らをつけなかつたら恰好にならない。舞台映画人の言葉を借りるならサマにならない。出かかった気分がひっこんでしまつて興乗らぬことおびただしい。まあ何とか我慢して私としては鑑賞したので、いやさせられてしまつたので真に時代物を愛するファンには、まことに不親切な次第のものです。どうにもかつらの都合がつかなくつたのなら、せめて髪の結い方でも変えて古い髪型にでもすれば、まだしもごまかせたろうに、こうただ垂らしただけでは正直なところどうしようもない。街を歩いていゝスラックス、セーター姿のいゝも現代的な少女を連想してしまいます。これ程の長い髪の毛だったら、まさか日本髪に結うことは技術的にも素人では不可能でしょうが、工夫すればモデル自身心得あるなら相当いろいろな形に持つてゆけます。ついでながら細い点というと黄八丈の着物はどうかやら舞台か映画用の衣裳を使用したらしいが、帯がどうやら同じ時代物に用いるのでも、少し貧弱のよう

だ。同じ友禅の腹合せでも九寸幅の鯨帯ではないようだ。そのせいかどうかしらないが、後姿の帯の結び方が常職の約束と違つてゐる。こういう場合関西ではどうか知らぬが(多分同じと思うが)九寸幅の裏朱子の帯を角出しと呼んでいる結び方にしなければならぬ。それにこのモデルは腰巻だけにつけてゐるようだが、襦袢らしきものがどうやらないようだ。これも省いてしまつたのでしようか。またこの着物はモデルには丈が短かかつたためなのか、或は着付の悪いせいなのか、よく見れば腰のおはしよりがない。こういう際の着付はやはりちゃんとしてもらいたいのものです。余計なことのようにだが「仇姿黄八丈」は「艶姿黄八丈」の間違いではないでしようか。外の写真で気に入つたのは「三面鏡」で鏡の使い方がよいと思います。私は愛川嬢というモデルは案外好きでして、その顔は美貌とはいいがたくても、その豊かな肉体と特にその乳房が好きでして、誰かが誌上で述べていたよう

代理部分護品総目録

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

新人モデル多数
新しく参加

に、この乳房を中心に持つて行つて派手な縛り方をすれば、その魅力は捨てがたいものを持つてゐると思う。どう考えても絹川嬢のあの笑い顔はいただけない。それも好みで、人によつてはチャーミングという者もあるかもしれないが私は好きではない。わざとらしくて味がない。だから彼女を使う場合は愛川嬢と同じく、もっと苦痛を味わせ苦痛の表情をさせた方がいい、その意味で「麗囚」は彼女の写真の中もっとも買えますし、もっともいいものではある。殊にサルグツワされたものは眼が非常に生かされてゐる。もっと大きな写真で出してもらいたかつたのは「細きばき」で、結構な作品ではある。惜しいことにあの大ききでは二人の表情がわかりにくい。出

来れば二人共全裸になつてゐるものが欲しいところですが。こういう新人は私の希望としては出来る限り、早く分護品に加えていただきたいです。こういう女同志のブレイでは本誌四月号所載の口絵「春日、愛川両嬢」によるものが大変よかつた。春日女史の熟れた肉体と、すばらしくサジスチックな表情と挑発的でセクシーな眼つきは男を完全に悩殺してしまふ。愛川嬢を縛り上げ、サルグツワをかませ存分にいたぶり責めてゆく姿態は、まことにサディストの女王としての貫録充分、その責めのプレイを男に見せてゐるシヨイとしての効果も十分に心得た心憎いばかりの演技で、まったく実物でその演技を拝見したくなる。実際この

甲斐仁参案
四馬孝画

「涙のダイヤモンド」

略号

(なみ)

大判印刷紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌

○ヒマシ油責

甲斐仁参案
四馬孝画

「涙のダイヤモンド」

略号
(かん)

大判印刷紙焼付 三枚一組 四百円

○伸し責

○苦悶のコルセット

○浣腸責

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 愛川悦子嬢

プレイをいつか実物で拝見できる機会を持ちたいものだが、現在の所どうにもならぬようです。ところで、これは私の希望ですが、これからの緊縛写真の一つのゆき方として、もう少し趣向の面白味を加えたものを、もっとドラマチックなもの、物語りの味を持ったものを多くしていただきたい。絵程自由な題材、空想的なものは扱えないとしても、もう少し背景や小道具や衣裳などで凝って、一つ具体的な気分を出して欲しい。そういうことは時代物をやるような場合、大切な要素となるわけで、何故なら時代物の場合、一つ一つ具体的なイメージを追って行くからですが、現代物でも例えば女学生の縛り写真なら傍らに投げだされた鞆からノートや教科書やら定規などが散乱していたり、緊縛プレイなら一人を女学生にして一人を女教師にしたとて、単に小道具などを絵画的構図で生かすのではなく、そういう風に具体的雰囲気を生かしてもらいたい。どう

せ、これはセクシアルなものに關連するのですから法に抵触しない程度に例え、縛りと同時にフェチシズムの要素を意識的に取り上げてみたり、マニヤックなものを多角的にとり入れて作ってもらいたい。そんな風なことを希望してみます。別にこれも私の考えですが、時代物の写真を撮るならば、春日女史はいいモデルになるのじやないか、彼女の顔は相当きつし個性的な表情ですが、かといってバタ臭いところはなく、何より面長ですから日本髪に結って合わないタイプではありません。従って女親分とか姐御とか或は濃艶な悪女だとか、そういう粋な色っぽくて鉄火な、男なら荒っぽいタイプの年増の感じに仕立てれば、びつたりくるのではないかと思う。或は村井嬢よりもよいかもしれない。それに花坂嬢などに、それこそ黄八丈などを着させて責められ役にすれば、いい写真ができるのじやないかと空想している次第です。一体、私はかねがね責めの小

説を書いて見ようかと思っているのですが、何しろ多忙な生活なので、なかなか思うようにいきません。それには挿絵も附して見ようと思っていたのですが、絵ならば小説よりも手つとり早いので、とりあえず絵を画いて見ようと思っ

「謎の緊縛フォト」は第一回からスリルとサスペンスに富み、挿絵もすばらしいので面白く読んだものです。が、欲をいえば39ページの和服での緊縛スタイルはむしろセーラー服の方が効果がある様に思われます。蒼野礼さんの「湖畔の裸女」も同性愛物としては案外清らかなストーリーですが、挿絵はあまりにもあつさりすぎたようです。しかし66ページの挿絵はちよつとよかったですね。チョット

KK七月号御惠送下さり有難うございました。表紙はまだまだ本調子とはいえないようです。どうも此処二、三号の表紙は低調気味ですね。今少し程度の高いもの？を御願いたいたいです。口絵に北原純子さんの久し振りの登場もなかなかいいものですが、北原さんの作品としては調子が出ています。方とはいえないのではないでしようか。本文に入って久留木栄氏の

「謎の緊縛フォト」は第一回からスリルとサスペンスに富み、挿絵もすばらしいので面白く読んだものです。が、欲をいえば39ページの和服での緊縛スタイルはむしろセーラー服の方が効果がある様に思われます。蒼野礼さんの「湖畔の裸女」も同性愛物としては案外清らかなストーリーですが、挿絵はあまりにもあつさりすぎたようです。しかし66ページの挿絵はちよつとよかったですね。チョット

臨時増刊号 青い廃院 定価 二百円

二大長篇サディズム小説

弓沢俊二郎作、四馬孝画

「青い廃院」

永山久美雄作、杉原虹児画

「与那国奇談」

巻頭豪華口絵

四馬孝画「青い廃院」画廊

緊縛フオト新作発表

大手札型印画紙 焼付
各組三一組 二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

△モデル 絹川文代

カーテンの翳

略号(けろ)

△モデル 大塚啓子

艶姿色模様

略号(けは)

△モデル 絹川文代

浴場の欲情

略号(けに)

△モデル 大塚啓子

いけにえ

略号(けほ)

△モデル 絹川文代

のぞき見

略号(けへ)

△モデル 絹川文代

開股三番勝負

略号(けと)

△モデル 大塚啓子

開股三番勝負

略号(けち)

△モデル 田原美佐子

開股三番勝負

略号(けり)

△モデル 愛川悦子

開股三番勝負

略号(けぬ)

△モデル 絹川文代

も文句ありません。137ページの挿絵も何んとも痛々しいものでありました。藤木仙治氏の「恐怖の悪戯」は案に読ませますが、この挿入写真の扱い方には今一息の工夫がありそうに思いますが如何でしょうか。(東 一郎)

僕は三十六才になる男性ですが同性のみに対する軽い程度のサドです。十七才より二十才位までの男子でマゾの方はおられませんか。僕の好みは頭を短く

刈りスポーツイナ服装をした青年で、ズボンは足にびったりとした細いもの、特にあの尻に喰い込むようにキツチリとしたGパン、マシボズボン等をはいた青年達です。僕は彼等を縄で後手に縛り処罰のため、いろいろとイジメる事を想像ばかりして居るのです。町中でそのような青年を見ると、その若い肉体にキツク細目をかけた姿を心の中に思い浮かべ胸をドキドキさせています。先日もある映画の中で、川地民夫の扮する若い

犯罪者が刑事に手錠をかけられたまま、長期間放置されてそのまま一晩を過ごし、翌朝も両手首に旋錠の不自由な手で食事を与えられてるシーンがありました。最近の映画では一番僕にピッタリする場面でした。欲を言えば、あれが細付の彼だったら最高によかったのになあと思いました。

(東京 田中一郎)

七月号を手にして真先に目に飛び込んで来たものは、雁字搦目にそれこそ皮肉にまでも喰い込んだ、あの絹川嬢の心にくいまで完全な縛られ女体でした。この口絵を見て貴誌はもう絶対に離すことの出来ないものになりました。この写真は本当に素晴らしい一語につきるものでした。大塚嬢のボリウムのある女体、これもよきものですが、欲を言えば、もう少し柔かさがほしいものです。今月号で愛川嬢の姿を見なかったのは淋しい。絹川、愛川、大塚、花坂というコンビでレスリングの場などはどうでしょう。次の企画を娛しみに待つことに致します。又読者通信に佐野雪夫さんのパンティマニヤ、小生もパンティには強い関心を持つ者ですが、悲しい事には、

あらゆる点で恵まれていないことです。東京の様な都会ではないので、田舎では思う様な物もなく又素晴らしい物もありません。同好の方々の通信を待つております。

(三重 月田茂一)

編集部並読者諸君に一言お願い致したく筆を取りました。この頃(特に三十四年度新年号と六月号)を見て浣腸に関する記事の少ないのは、一体どういう訳なのでしょう。浣腸マニアの存在を編集部では、一体何と見ているのでしょうか。確かに責マニア、緊縛マニアは、数多い事でしよう。しかしだからといって、サディズム関係の記事が本誌の頁数に比較して、少々多すぎはしないでしょうか。そういつた、サディズム関係の資料等は増刊号等で、十分マニアを満足させているのですから、せめて本誌ぐらゐは、毎月浣腸関係の記事の掲載を願う次第です。次に読者諸君並諸嬢に一言、本誌に浣腸記事の余りに少ないのは、君達にも多かれ、少かれ責任があるのではないでしようか。というの、君達が活発に投稿しないからではないでしようか。大いに浣腸関係の資料を研究して、どじど

し投稿しようではありませんか！
一言ものもうす次第です。

△横浜 一読者▽

○

「悦特第二集」を拝見しました。
この中で一番の進歩は何んといっ
てもグラビヤの「美囚第十四号」
です。以前からこの様な実物の手
錠を用いたものを御社の写真に要
求しつづけていたのですが、どう
いうものか実現しないので、あきら
めていたのですが、これを見て大
へんよろこばしく思っております。
す。しかし、この写真は一寸陰惨
な感じですので明るいアブノーマ
ルにふさわしい感じのもの、本当
のアブノーマルを満足させるアイ
デアを生かしていただきたいもの
です。それには次の様なものがあ
ります。一、足は拘束しない方が
よい。二、女が手錠をはめられる
順序、組写真、女の服装はブラウ
ス、ストラップスがよい。三、手
部分がもつと接写して手錠の構造
美をはつきりさせるもの（しかし
手の部分だけでは駄目）四、水着
姿の女性が立姿で手錠をかけられ
ている。五、各種コスチュームの
女性の手錠姿（或は和装を含む）
六、女性の手錠で引きまわされて
ゆくところ。この様に手錠特集を

作られたら、今迄になかった素晴
しいものになると思います。浜本
喜美、三木敬子の両嬢あたり、モ
デルとして中々よいですね。その
他絹川、益田嬢あたりもよろしい
です。この実現をおまちしていま
す。（福岡 博多生）

○

暫くK誌諸兄に御無沙汰してい
ますが、小生も同性のアクロバテ
イックなスタイル雰囲気をお好む一
読者です。七月号には意外に小生
と好みを同じくする通信に接する
ことが出来て嬉しく思いました。
殊に東京、柏山多津夫、水野、S
K、京都SD、以上四氏の御意見
大いに同感です。但し対象が異性
ではこの限りではありません。同
性のみのプレイでしたら絶対的
すし細身のデニムGパンを穿きそ
の下にキャルマタ若しくはサポー
ター着用の若者の肢体の持主とお
互いにアクロバティックなスタイ
ル、雰囲気の中でプレイが実現出
来たら之以上の喜びはないと考え
ています。舞台の華やかなそれと
異り稽古場にて着用し得るアクロ
バットには不可欠なキャルマタ、
タイツ等。性格的にも端正な人よ
り、くずれた職人風、いなせなや
くざ風な青年の純白の晒腹巻を胸

高にきりりと巻いた猿又姿等も素
晴しいと思います。

（八王子 柿沼吾郎）

○

いつもながら四馬孝先生の美し
い絵には感嘆し、その優美さを愛
しておりますが、今一つ先生にお
願ひ致したいのは、荒々しい感じ
の絵も描いていただきたいので

す。先生の素晴らしい空想力、創造力
をミックスさせて、ハツと息をの
む様な絵をお願いいたしたいので
す。そのためには先生好みの皮を
用いるものと共に、全裸、ふんど
し（無論女性にせよ）を被せての責め
絵です。などは如何でしょうか。又
辻村先生にも、先生のフアンと
して右のような美しい写真をお願

ニューモデル未発表新作緊縛フォト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みい)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 岩井知子
略号 (みは)

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みほ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みと)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 田原美佐子
略号 (みろ)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みに)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みへ)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みち)

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ 賞金 ☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りたいします。

い致します。ちよつと古くなりま
すが、「臨時増刊号一九五八、N
O・1」の中の「口説責」（正木
真龍先生）の様な内容のものを御
願ひしたいのです。これは僕にと
つて、何度読んでも素晴らしいもの
です。これには美しい絵になりそ
うな部分が非常に沢山あります。
四馬先生に、この小説の内容を始
めから順を追って終りまで美しく
描写していただけないでしょうか。
か。「泣きながらふんどしをして
いる」というような絵を楽しまた
いと思います。貴誌に過去に於て
掲載されたものの中僕が今尚、愛

読してやまないものは、「十三人
目の奴隷」「魔教団NO・8」「美
容病院」「ダイヤナ夫人」「あら
びやの奴隷市」「マリアンヌの手
記（痛められし桃の実）」「フラ
ソワの手記」「捕縛術入門」「寸
劇、南支那海の鬼」「愛憎裸女」
「妖婦の生贄」「オダリスタ」「モ
ラエス邸の夜会」「自分をハダカ
にする」それに「夜光る」臨時増刊
号の全内容などです。上記の様な
内容のものをどしどしお願い致し
ます。辻村隆先生、大分古い話で
すが、先生が一九五八年一月号に
お書きになった「夜光る」は、今

でも美しく新鮮な感じがして、時
々出して読んでいます。す、けれ
ど、その後、仁川有三氏は右近
か子嬢の後継者を得ているのでし
ょうか。本には仁川氏の住所がボ
カしてあるのですが、是非御教え
願ひたいのです。右近か子嬢は
今、どうしておられるのでしょうか。
か、僕は今まで彼女の美しさを想
像し、実際に彼女を知りたいと思
ってまいりました。ただ本だけで
味わって来た楽しさを実際に目で
楽しみたいのです。先生は住所を
知っていられると思います。もし
知っていられないでしたら仁川氏
におたずねしていただけないもの
でしょうか。僕の美しい夢を盛り
こんだ、このお願いに満足のいく
御回答をぶしつけながら切にお寄
せ下さる様祈っております。（尚
勝手ながら僕の名は秘密にしてお
いていただきたいのです。）先生、
更にもう一つお願い、一九五七年
十二月号の「真実は誰も知らない
い」の中の「浜田照子さん」はど
うしていられるのでしょうか。是非
住所もあわせてお教え願ひたいも
のです。甚だ勝手ですが、相手の
女性に僕の名を知らせるのではな
しに僕に相手の名を知らせていた
だきたいと思うんです。家族の社

会的地位も正直にいつて心配（皆
様はお笑いになるかもしれませんが
が）です。し、僕の噂もいやです。
然し僕は元来、孤独癖が強く、口
数も少く、したがって友人も少
く、人の秘密を口外する様な人間
ではありません。自分でいうのも
変ですが、これを御信用の上、以
上の外最少十名位の女性（奇巧を
購読なさっている方）をお知らせ
いただければ嬉しいんです。くだ
い様ですが僕を信用して御紹介し

花坂道子嬢

緊縛フオート分譲

大中判印画紙焼付(13×18種)

○全裸緊縛集

略号(はな1)

8枚1組 八〇〇円

○股間縛り集

略号(はな2)

8枚1組 八〇〇円

○ヌード縛り

略号(はな3)

2枚1組 三〇〇円

○股間縛り

略号(はな4)

2枚1組 三〇〇円

て下さい。(岩手県 新山生)

○

梅雨の候、皆様お元氣にて御活躍のことと思います。降つて僕も無事で毎日平凡ながら会社へ通っています。只今の僕にとって御誌は一つの活躍源として毎月楽しみに拝見しております。お送り願いましたフォト本日入手、本当にありがとうございました。中でも

「みと、みへ、けぬ」がすばらしく、僕のイメージにぴったりでした。僕の平常夢に描いているユー Tobia をこのような立派なフォトに完成して下さったことは感謝の外もありません。特に「みと」の股間しぼりのすばらしさ、「けぬ」の縄目のきびしさは筆舌につくせぬ位です。このようにすばらしいフォトなら、もっと沢山注文しておいたらよかつたと後悔している位です。本日は更に僕の夢にかな

ったフォトを期待して次のように御願います。尙、只今、時間の合間を見て、僕なりのアイデアをもとにした小文を書いていきますから、是非誌上に載せて貰つて多くの読者の方々の御批判を仰ぎたいと願つております。いづれ又その節よろしく。(広島 左海生)

○

暫く日本を離れていたが、日本に歸つて「奇タ」の着実な歩みを見、心強く又嬉しくも感じた、不在中の分を、どうやら取揃えることができ、喜んでゐる、沼氏の大作には今更乍ら畏敬の念を禁じ得ない。谷崎の乱菊物語にも比すべきこの大ロマンが、作者の意図のままに発展し、乱菊のように途中で中絶するような事のないよう、祈つて己まない、滞欧中色々な本屋も漁つたが、最近戦前に比べて我々の趣味のものが少くなつた

ような気がする、パリの本屋でも「セフィニ」(もうありませんね)

といわれて失望した事もあった。有名なマゾッホと同じ苗字、併し名がレオポルドでなく、アレクサンダー・ザッヘル、マゾッホという作家が今ドイツや特にオーストリアで売り出している、「失われた楽園」とか「観兵式」とか二、三見たが、いづれもリリックなローマン的なもので、有名な昔のマゾッホとは何の共通点も見出されない。最近の手帖欄で、沼氏は小生が可成り前に一寸書いた「赤い館」について言及されているので、もう少し書き足したい、前にも述べたように、自分が一九三一年ベルリンで求めたマゾッホの短篇集は三つ(「謎の女」「残酷な女」及び「悪魔とサイン」)でゲオルグ・Hウイガントをいう本屋から出されている、このライプチヒの本屋からはもう著者版権がないから、どこからでも出せるのか、或は初めからこの本屋から原本が出版されたのか自分には分らないが、有名な「毛皮のヴィナス」も「プラトの恋」もここから出ている、マゾッホのものとして出ているのは以上五冊だけである。前記「謎の女」は十三の短篇を納めた四六版二二

○頁位の本で「赤い館」は六番目にあり、一六頁ばかりの短いものである、ピアラゴラの村の丘の上にある赤い館に住む領主ボクナツキが、村の百姓娘マルブカを、館に引入れてちよう愛すると共に二人で、マルブカの元の恋人ゼルギ1を辱しめる、後に赤い館は村人たちの怨で焼き払われ、領主もマルブカも殺されるという落ちである。沼氏のようなない博な知識をもち、又丹念に研究をつづけられている方がこんな本をおもちにならぬ筈はないと思うけれ共、本当

【G】組 緊縛フォト

判紙焼付 一枚一組 一五〇円
中画焼付 五枚五組 六〇〇円
大印焼付 十枚十組 一〇〇〇円

G1 鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)
G2 股間縛り正面 (高瀬 忍)
G3 海老晒し (萩千恵子)
G4 羞紅の椅子 (菅澄紀子)
G5 量感の帯 (伊吹真佐子)
G6 アイデア (萩千恵子)
G7 叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8 全裸目隠し (村田那美子)
G9 優すがた (花坂道子)
G10 開股一番 (萩千恵子)

女体 『切腹風景十二態』

(9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

女体 『浣腸風景十二態』

(9×31cm) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

に持つておられないならば、いくらでもお目にかけたい気持ちである。沼氏の「ヤブー」は実に第一級の大作であり、通常の立場で読んでも、又近頃流行の「サイエンス、フィクション」的な読みものとしても、一寸類のない作品であり、高く評価されるべきものと思う。かかる大作が連載されつつあることは本誌にとっても大きな誇である。少し読みにくいという小さな難はあるが、確に後生に残るべき作品である事を疑わない。自分分は技術に関係しているものであるが、その立場からも実によくできていると思う。御健筆を折つてやまない。(東京 富岡陽夫)

○ ビールの季節になつては弱っています。ビアホールでビールを飲んでゐる若い女性を見ると、ぼくはむやみに飲みたくなるのです。生ビールを前に置いては洗面所のドアばかり気にしています。皆さん、ホットビールの味を知っていますか。毎秒、世界のいたる処で大量に生産されつつある醸造酒。世界の名酒スカッチもコニヤックもかかいますまい。その量に於ても質に於ても世界最高の甘美な神酒。ある人はブランドー

にたとえ、ある人はずばりネクター、イルと言つた。誰もが知らない酒、ダイアナの神酒。毎号「愛好者の記録」を楽しみにしていただきます。バックスと共に読んでいます。記録はぼくにとつては一片の詩であり、また酔うことのできる酒なのです。(東京 芳野眉美)

○ 私は小さい時分から流腸に興味を持ち一人でボツボツ軽便流腸や流腸に関する記事写真等を蒐集しているエネマ・マニアです。偶然古本屋で貴誌の三十年二月号を発見し、余りにも私の求めて居たものにピッタリだったので雀躍りして喜びました。それから、復刊号も毎月欠かさず買つておりました。私はエネマ以外には興味ありませんので既刊号全部を買ひ集める元氣もありませんが、少しでも流腸に関する記事の載つてゐる分は購入したいと思つておりました。七月号の様に在庫既刊号の内容を発表していただく目録で自分の欲しい号が解り感謝しておりました。お暇がありましたら流腸に関する記事の載つてゐる号数お知らせ願えません。それから、もう一つ七月号の読者通信を書いてゐる(関生)(東京佐藤生)と文通が致したく住所をお教え願えませんでしょうか。(流腸愛好生)

〔編集後記〕

○先頃、ある古書店の主人が訪ねてきて奇譚クラブの旧号が仲間うちの市で非常な高値をよんでいるので、少しいから分けてくれないかと言つたのである。発行所だから五部や十部は残つてゐるだろうと思つたのは当然かもしれないが、それが残つてゐない。私の方が欲しい位だと笑つたことがあるが、編集に必要なときは街で手垢だらけのものを定価の何倍かを出して買つてくる始末である。

○僅か数年足らずで、このような有様なのだから、十年も二十年も経つとどうなることやら、近い例では昨年の夏発行の「サド特集号」なんか、未だに無いが無いかと言つてゐるが勿論発行所には一冊だつて残つてゐない。街の古本屋を探してもないのでプレミアムをつけるから売つてくれというが、これはどうしようもない。結局、編集用にとつてある分までなんだかんだと言つて提供させられてしまつことになる。

○そつかといつて、大衆雑誌や映画歌謡曲雑誌、或は週刊誌の類ではないから絶対的な需要の多い筈はない。価値判断の相違というのか、干天の慈雨のように熱狂的に支持してくれる少数の人々もあるかわりに、排斥する人も多い。中には、わざわざ脅迫してくる人もある。いつも

言つよつに広い日本に一冊位この種の少数発行の雑誌があつたていいように思つたが、さりとて雨後の筍のように乱立することを望んでいるものではない。

○読者の中には極端に解放的な人と逆に非常に隠蔽的な人とがある。その人の性格と環境の相異によるものでしようが、別に肩をいかつたこともないし又過度の劣等感におひえる必要もない。政府の高官にしても政界の領袖にしても宗教団体の教祖、労組の幹部にしても、国民大衆の幸福を考えるよりも、自分達の権力争いや金儲けの方が大切で、その方が忙しくて仕方がない。いや、それが又当然な世の中だから、彼等を養つてゐる公僕的主人たる大衆は、何も卑下する必要なんかありはしない。

○さて、本号に移つて、沼正三氏の「家畜人ヤブー」は筆者の御都合によつて七月号より休載しています。これは筆者の都合つき次第、引続き連載の予定ですから御諒承下さい。そのかわり鞍馬良氏の「馬化白書」を連載しました。

○誌面の関係で、ここ数カ月見送つていました大作の連載及び告白特集など、秋を迎えて清新発刺たる編集ぶりにて御機嫌を伺いたいと思つておりますから、どんなものが飛び出するか、どうか刮目して御期待下さるようお願いいたします。